ば今少はハキ〳〵してもと思はるゝ程の性分で、何處までも正直な、同情の深さうな娘である。肉づきまでがふつくりして、温かさうに思はれたが、若し、僕に女房を世話して呉れる者があるなら彼樣のが欲いものだ。』

それならば大友はお正さんに戀ひ焦がれて居たかといふと、全然、左樣でない。たゞ大友が其時、一寸と左樣思つた丈けである。

四年前、やはり秋の初であつた、大友が此温泉場に來て大東館に宿つたのは。

避暑の客が大方歸つたので居殘の者は我儘方題、女中の手もすいたので或夕、大友は宿の娘のお正を占領して飲んで居たが、初は齒識のほれたはれた問題が、次第に本物になつて、大友は遂に其時から三年前の失戀談をはじめた。女中なら「御馳走樣」位でお止になるところが、お正は本氣で聞いて居る、大友は無論眞劍に話して居る。

『それほどまでに二人が艱難辛苦してやッと結婚して、一緒になつたかと思ふと間もなく、ポカンと僕を捨てゝ逃げ出して了つたのです。』

『まア痛いこと！　それで貴下は如何なさいました』とお正の眼は最早潤んで居る。

『女に捨てられる男は意久地なしだとの、今では、人の噂も耳會りますが、其時の僕は左まで世にすれて居なかつたのです。たゞ夢中です、身も世もあられぬ悲嘆さを堪へ忍びながら如何にもして前の通りに爲たいと、取も外聞もかまはず、出來るだけのことをしたものです。』

『それで駄目なんですか。』

『無論です。』

『まア』とお正は眼に涙を一ぱい含ませて居る。

『僕が夢中になる丈け、先方は益々冷えて了ふ。終ひには僕を見るもイヤだといふ風になつたのです。』そして大友は種々と詳細い談話をして、自分が如何ほど其女から侮辱せられたかを語つた。そして彼自身も今更想ひ起して感慨に堪へぬ樣であつた。

『さぞ憎らしかッたでせうねェ。』

『否、憎らしいと其時思ふことが出來るなら左まで苦しくは無いのです。たゞ悲嘆かつたのです。』

お正の兩頬には何時しか涙が靜かに流れて居る。

今は如何なに思つてお居でです』とお正は辭をふるはして聞いた。

『今ですか、今でも憎いとは思つて居ません。けれどもね、お正さん僕が若し彼樣な不幸に會なかつたら、今の僕では無かつたらうと思ふと、殘念で堪らないのです。今日が日まで三年ばかりの大事の月日が、殆ど煙のやうに過つて了ひました。僕の心は壞れて了つたのですからねェ』と大友は眼を瞬たいた。お正ははんけちを眼にあてゝ頭を垂れて了つた。

『まア可いサ、酒でも飲みませう』と大友は酌を促がして、默つて飲で居ると、隣室に居る川村といふ富豪の子息が、酔た勢で、散歩に出かけようと誘ふので、大友はお正を連れ、川村は女中三人ばかりを引率して宿を出た。川村の組は勝手にふざけ散らして先へ行く、大友とお正は相並で靜かに歩む、夜は冷々として既に肌寒く覺ゆる程の季節ゆゑ、溪流に沿ふ町はひつそりとして客らしき者の影さへ見えず、月は冴えに冴えて岩に激する流は雪のやうである。

大友とお正は何時か寄添うて歩みながらも言葉一ツ交さないで居たが、川村の連中が遠く離れて森の彼方で聲がする頃になると、

『眞實に貴下はお可哀さうですねェ』と、突然お正は頭を垂れたまゝ言つた。

『お正さん、お正さん？』

『ハイ』とお正は顔を上げた。双眼涙を含め

る蒼ざめた瓜を月はまともに照らす。

『僕はね、若し彼女がお正さんのやうな柔和い人であつたら、こんな不幸な男にはならなかつたと思ひます。』

『そんな事は』とお正はうつむいた、そして二人は人家から離れた、礫の多い凸凹道を、靜かに歩んで居る。

『否、僕は眞實に左樣思ひます、何故彼女がお正さんと同じ人で無かつたかと思ひます。』

お正は、そつと大友の瓜を見上げた。大友は月影に霞む流の末を見つめて居た。

それから二人は暫く無言で歩て居ると先へ行つた川村の連中が、がや〳〵と騒ぎながら歸つて來たので、一緒に連れ立つて宿に歸へつた。其後三四日大友は滯留して居たけれど、お正には最早、彼の事に就ては一言も言はず、お給仕ごとに樂しく四方山の話を爲て、大友は歸京したのである。

爾來、四年、大友の戀の傷は癒え、戀人の姿は心から消え去せて了つたけれども、お正には如何かして今一度、緣あらば會ひたいものだと願つて居たのである。

そして來て見ると、豈て期したる事とは言へ、さてお正は既に居ないので、大に失望した上に、お正の身の上の不幸を細根細工の居で聞かされたので、不快に堪へず、流を泝つて溪の奥まで一人で散歩して見たが少しも面白くない、氣は寒ぐ一方であるから、宿に歸つて、少し夕飯には時刻が早いが、酒を命じた。

《三》

大友は、『用があるなら呼ぶから』と女中をしりぞけて獨酌で種々の事を考へながら淋びしく飲んで居ると宿の娘が、これをお客樣が』と差出したのは封紙のない手紙である、大友は不審に思ひ、開き見ると、

前略我等兩人當所に於て君を待つこと久しとは申兼候へ共、本日御投宿と聞いて愉快に堪へず、女中に命じて膳部を祭室に御運搬の上、大に語り度く願候

神崎　朝田

とあるので、驚いた。何時ごろから來て居るのだと聞くと、娘は一週間ばかり前からと云ふ。直ぐ次の返事を書いて持たしてやつた。

お手紙を見て驚喜仕候、兩君の室は隣室の客を驚す恐あり、小生の室は御覽の如く獨立の離島に幹間、徹宵快談するもさまたげず、是非此方へ御出向下されたく願上候

すると二人が、やつて來た。

『君は何處を遍歴つて此處へ來た？』と朝田が座に着くや着かぬに聞く。

『イヤ、何處も遍歴らない、東京から直きに來た。』

『そこで此夏は？』

『東京に居た。』

『何をして？』

『遊んで。』

『そいつは下さらなかつたな。』

『全くサ、そして君等は如何だ。』

『伊豆の温泉めぐりを爲た。』

『面白ろい事が有つたか。』

『隨分有つた。然し同伴者が同伴者だからね』と神崎の方を向く。神崎はたゞ『フ、ン』と笑つたばかり、盃をあげて、ちよつと中の樓樣を見て、ぐびり飲んだ。朝田もお構なく、

『現に今日も、斯うだ、僕が緣とは何ぞやとの問に何と答へたものだらうと聞くと、先生、この圓と心得て』と盤の上に指先で○を書き、

『圓の定義を平氣で論証したものだ、君、新

ういふ先生と約一ケ月半も僕は膝を並て酒を呑だのだから堪ない。』

『それはお互サ』と神崎少しも驚かない。

『然し相かはらず議論は激しかつたらう』と大友はにこ〳〵して問うた。

『やつたとも』と朝田。

『朝田の説論は僕も少々聞き飽きた』と神崎の一言に朝田は『フヽン』と笑つたばかり。これだから二人が喧嘩を爲ないで一ケ月以上も旅行が出來たのだと大友は思つた。

三人とも愉快に談じ酒も相當に利いて十一時に及ぶと、朝田、神崎は自宅に引上げた、大友は頭を冷す積で外に出た。月は中天に昇つて居る。恰度前年お正と共に散歩した晩と同じである。然し前年の場所へ行くは却つて思出の種と避けて溪の上へのぼりながら、遠々、「緣」に就て朝田が說いた處を考へた、「緣」は實に哀」であると沁み〴〵感じた。

そして構造の大きな農家らしき家の前に來ると、庭先で『左樣なら』と挨拶して此方へ來る女がある、其聲が如何にもお正に似て居るやうに思はれ、つい立どまつて居ると、往來へ出て月の光を正面に向けた顏は確かにお正である。

『お正さん』と大友は思はず呼んだ。

『大友さんでせう』と意外にもお正は平氣で傍へ來たので、

『貴女は僕が來て居るのを知つて居たのですか』と驚いて問うた。

『も少し上の方へのぼりながらお話しませうか』とお正は小聲にて言ふ。

『貴女さへかまはなければ』

『私はちつとも、かまひませんの。』

それではと前年の如く寄添うて、溪をのぼる。

『眞實に妙な御緣なのですよ、私は今日、身の上に就て兄に相談があるので、突然に參りますと、姉が小聲で大友さんが來宿てるといふのでせう、……』

『それぢやア貴女は僕より一汽車後で來たのだ。』

『さうなの。それで今夜はごた〳〵して居るから明日お目にかゝる積で居ましたの。』

『貴下に會つたけれど、そして忘れ得ぬ前年の夜と全然く同じな景色に包まれて同じやうに寄添うて歩きながらも、別に言ふべき事がない。却てお正は種々の事を話しかける。

『貴下いつかの晩も此樣でしたねえ。』

『貴下彼晩のことを憶えて居らつして?』

『覺えて居ますとも。』

『私はね、何にもかも然憶えて居て、貴下の被仰つた事も皆な覺えて居ますの。』

『僕もさうです。そして今一度貴女に會ひたいとばかり思つて居ました。今度も實は其積で來たのです。無論何家へ嫁いて居て會へる望は無らうとは思ひましたが、それでも若しかと思ひましてね……』

『私も今一度で可いから是非お目にかゝりたいと思ひつゞけては、彼晩の事を思ひ出して何度泣いたか知れません、……ほんとにお嫁になど行かないで兄さんや姉さんを手傳つた方が如何なに可かつたか今では眞實に後悔して居ますのよ。』

大友は初めてお正が自分を戀ひして居たのを知つた、そして自分がお正に會ひたいと思ふのと、お正が自分に會ひたいと願ふのとは意味が違ふと感じた。自分はお正の戀人であるがお正は自分の戀人でない、たゞ自分の戀に深い同情を寄せて泣いて呉れた柔しサを戀ひしたのだ。そして自分は戀を戀する人に過ぎないと知つた。實に大友はお正の戀を知ると同時に、自分のお正に對する情の意味を初めて自覺したのである。

暫時無言で二人は歩いて居たが、大友は斯く感じると、言ひ難き哀情が胸を衝いて來る。

『然しね、お正さん、貴女も一旦嫁いだからには恋はないで一生を送つた方が可しいと僕は思ひます。凡て女の恋からいろんな混亂や悲哀が出て來るものです。現に僕の事でも彼女が恋うたからでせう……』

お正はうつ向いたまゝ無言。

『それで今夜は運よくお互に會ふことが出來ましたが、最早二度とは會へませんから言ひます、貴女も身體を大切にして幾久さしく無事でお暮になるやうに……』

お正は袖を眼に當て、

『何故會へないのでせうか。』

『會へないものと思つた方が可いだらうと思ひます。』

『それでは貴下は最早會ひたいとは思つては下さらないのですか。』

『決して其樣ことはありません。僕はこれまでも彼女に會ひたいなど夢にも思はなくなりましたが、貴女には會ひたいと思つて居ましたから……』

『それではお目にかゝる事が出來る樣を待ちませうね。』

『ほんとに、さうです。貴女も今言つたやうに、くよ〳〵爲ないで、身體を大切にお暮しなさい。』

『難有う御座います。』

夜の更くるを恐れて二人は後へ返し、溪流に渡せる小橋の袂まで歸つて來ると、橋の向から男女の述が來る。そして橋の中程ですれちがつた。男は三十五六の若紳士、女は庇髪の二十二三としか見えざる若づくり、大友は一日見て非常に驚いた。

足早に橋を渡つて、

『お正さん〳〵。彼れです。彼の女です!』

『まア、彼の人ですか!』とお正も吃驚して見詰る。

『如何して又、こんな處で會つたらう。彼女も必定僕と氣が着いたにちがひない。お正さん僕は明日朝出發ますよ。』

『まア、如何して?』

『若し彼女が大東館にでも宿泊つて居たら、僕と白晝出會はすかも知れない。僕は見るのも嫌です。往來で會ふかも知れません、如斯な狹い所ですから。』

『會つても知んぬ顏して居れば可いぢやア御座いませんか。』

『不愉快です。殊に今度貴女に會つた場合、猶ほ不快です。』

翌朝早く大友は大東館を立つた。大友ばかりでたく神崎も朝田も一緒である。見送り人の中にはお正も春子さんも居た。

(明治四十年一月)

竹の木戸

《上》

大庭貞藏といふ會社員は東京郊外に住んで京橋區邊の事務所に通つて居たが、電車の停留所まで半里以上もあるのを、毎朝缺かさずテク〳〵歩いて運動には恰度呼いと言つて居た。温厚しい性質だから會社でも受が可かつた。

家族は六十七八になる極く丈夫な老母、二十九になる細君、細君の妹のお清、七歳になる娘の綾ちやん、之れに五六年前から居るお徳といふ女中、以上五人に主人の貞藏を加へて都合六人であつた。

細君は病身であるから他り家事に關係しない。臺所元の事は重にお清とお徳が行つて居て、それを小まめな老母が手伝つて居たのである。

別けても女中のお徳は年こそ未だ二十三であるが私はお宅に一生奉公をしますといふ意氣込で稚力が伸々強い、老母すら時々此女中の言ふことを聞かなければならぬ事もあつた。我儘過ると お清から苦情の出る場合もあつたが、何しろお徳はお家大事と一生懸命なのだから、結極はお徳の勝利に歸するのであつた。

生垣一つ隔てゝ物置同然の小屋があつた。それに植木屋夫婦が暮して居る。亭主が二十七八で、女房はお徳と同年輩位、そして此隣交際の女性二人は互に負けず劣らず喋舌り合つて居た。

初め植木屋夫婦が引越して來た時、井戸がないので何卒か水を汲まして呉れと大庭家に依頼みに來た。大庭の家では其は道理なことだと承諾してやつた。それから彼是二月ばかり經つと、今度は生垣を三尺ばかり開放さして呉れろ、さうすれば一々御門へ迂廻らんでも濟むからと頼みに來た。これには大庭家でも大分苦情があつた、殊にお徳は盗棒の入口を造へるやうなものだと主張した。が、しかし主人貞藏の平常の優しい心から遂に之を許すことになつた。其方で木戸を丈夫に造り、開閉を嚴重にするといふ條件であつたが、植木屋は其處らの藪から青竹を切つて來て、これに杉の葉など交ぜ加へて無細工の木戸を造くつて了つた。出來上つたのを見てお徳は、

『これが木戸だらうか、掛金は何處に在るの。こんな木戸なんか有るも無いも同じことだ』と大聲で言つた。植木屋の女房のお源は、これを聞きつけ、

『それで深山だ、どうせ私共の力で大工さんの作るやうな立派な木戸が、來るものか。』

と井戸邊で釜の底を洗ひながら言つた。

『それぢやア大工さんを頼めば可い』とお徳はお源の言葉が癪に觸り、植木屋の貧乏なことを知りながら言つた。

『頼まれる位なら頼むサ』とお源は輕く言つた。

『頼むと來るよ』とお徳は猶一つ皮肉を言つた。

お源は負けぬ氣性だから、これにはむつとしたが、大庭家に於ける お徳の勢力を知つて居るから、逆らつては損と蟲を殺へて、

『まアそれで勘辨してお呉れよ。出入りするものは重に私ばかりだから私さへ開閉に氣を附けりやア大丈夫だよ。どうせ木式の盗棒なら垣根だつて御門だつて越すから木戸なんか何にもなりやア仕ないからね』と半分折れて出たので

お徳、

『さう言へばさうさ。だからお前さんさへ開閉を嚴重に仕てお呉れなら先ア安心だが、お前さんも知つてるだらう此里はコツ〳〵泥棒や屑屋の惡い奴が漂行するから油斷も間隙もなりや仕ない。そら近頃出來たパン屋の隣に河井樣て軍人さんがあるだらう。彼家ぢやア二三日前に買立の銅の大きな金盥をちよろりと盗られたさうだからねえ。』

『まア如何して』とお源は水を汲む手を一寸と休めて振り向いた。

『井戸邊に出て居たのを、女中が屋後に干物に往つたぽつちりの間に盗られたのだとサ。矢張木戸が少しばかし開いて居たのだとサ。』

『まア、眞實に油斷がならないね、大丈夫私は氣を附けるが、お徳さんも盗られさうなものは少時でも戸外に放棄つて置かんやうになさいよ。』

『私はまア其樣ことは仕ない積りだが、それでも、ツイ忘れることが有るからね、お前さんも屑屋なんかに氣を附けてお呉れよ。木戸から入るにや是非お前さん宅の前を通るのだからね。』

『えゝ氣を附けるともね。盗られる日にや薪一本だつて炭一片だつて馬鹿々々しいからね。』

『さうだとも。炭一片とお言ひだけれど、どうだらう此頃の炭の高價いことは。一俵八十五錢の佐倉が被だよ』とお徳は井戸から臺所口へ續く軒下に並べてある炭俵の一を指して、『幾千入てるものかね。ほんとに一片何錢に當くだらう。まるでお錢を瓦燈で燃して居るやうなものサ。土竈だつて堅炭だつて悉な去年の倍と言つても可い位だからね』とお徳は嘆息まじりに言つた。

『眞實にやりきれや仕ない。』

『それに御宅は御人數も多いんだから入用ことも入用サね。私のとこなんか二人限だから幾千も入用ア仕ない。それでも三錢五錢と計量炭を毎日のやうに買ふんだからね、全くやりきれや仕ない。』

『全く骨だね』とお徳は優しく言つた。

以上炭の噂まで來ると二人は最初の木戸の事は最早口に出さないで何時しか元のお徳お源に立還りべちやくちやと伸善く喋舌り合つて居たところは埒も無い。

十一月の末だから日は短い盛で、主人貞藏が會社から歸つたのは最早暮れがかりであつた。木戸が出來たと聞いて洋服のまゝ下駄を突掛け勝手元の庭へ廻はり、暫時は木戸を見てただ笑して居たが、お徳が傍から、

『且那樣大變な木戸で、御座いませう』と言つたので、

『これは植木屋さんが作らへたのか。』

『さうで御座います。』

『隨分妙な木戸だが、併し植木屋さんにしちやア能く出來てる』と手を掛けて搖振つて見て、

『案外丈夫さうだ。まアこれでも可い、無いよりか增だらう。其内大工を頼んで木當に作らすことに仕よう』と言つて『竹で作へても木戸は木戸だ、ハ、ハ、ヽヽ』と笑ひながら屋内へ入つた。

お源はこれを自分の宅で聞いて居て、くすくすと獨で笑ひながら、『眞實に能く物の解る且那だよ。第一彼樣心持の優い人つたらめつたに有りや仕ない。彼家ぢや奥樣も好い方だし御隱居樣も小まめにちよこまかなさるが人柄は極く好い方だし、お清樣は出戻りだけに何處か韓拗れてるが、然し氣質は優しい方だし』と思ひつゞけて來てハタとお徳の今日晝間の皮肉を回想して『水の世話にさへならなきや如殺奴に口なんか利かしや仕ないんだけど、房州の田舍者奴が、可愛がつて頂だきや可い氣になりやアがつて如何だらう彼の圖々しい噂振は』とお徳の先刻の言葉を思ひ出し、『大變な木戸でせうだつ

て、あれで離婚を附ける積りが合憎と旦那がお取上に相成らんから可い氣味だ。愚態ア見やアがれだ』と又つと氣を變へて『だけど感心と言へば感心だよ。容色も惡くはなし年だつて私と同じなら未だいくらだつて嫁にいかれるのに、彼樣やつて一生懸命に奉公してゐるんだからね。全く普通の女にや眞似が出來ないよ。それに恐しい正直者だから大庭樣でも彼女に任かして置きや間違はないサ……』

こんな事を思ひながらお源は洋燈を點火て、火鉢に炭を注がうとして炭が一片もないのに氣が着き、舌鼓をして古ぼけた藥鑵に手を觸つて見たが湯は冷めて居ないので安心して『お湯の熱い中に早く歸つて來れば可い。然し今日若か前借して來て呉れないと今夜も明日も火なしだ。火ぐらゐ木葉を拾つて來ても間に合ふが、明日食ふ米が有りや仕ない』と今度は舌鼓の代に力のない嘆息を洩した。頭髪を亂して、血の色のない顔をして、薄暗い洋燈の陰にしよんぼり坐つて居る此時のお源の姿は頗分憐な樣であつた。

其處へのつそり歸つて來たのが亭主の磯吉である。お源は單に前借の金のことを訊いた。磯は默つて腹掛から財布を出してお源に渡した。お源は中を在めて、

『たつた二圓。』

『あゝ。』

『二圓ばかし仕方が無いぢやアないか。どうせ前借するんだもの五圓も借りて來れば可いのに。』

『だつて貸さなきや仕方がない。』

『それや左樣だけど能く親方だつて五圓位貸して呉れさうなものだ。これを御覽』と お源は空虛の炭俵を見せて『炭だつてこれだらう。今夜お米を買つたら幾干も殘りや仕ない。……』

磯は默つて煙草をふかして居たが、煙管をポンと强く打いて、膳を引寄せ手盛で飯を食ひ初めた。たゞ白湯を打かけてザク〳〵流し込むのだが、それが如何にも美味さうであつた。

お源は亭主の此所爲に氣を呑れて默つて見て居たが山盛五六杯食つて、未だ止めさうもないので呆れもし、可笑くもなり、

『お前さん其樣にお腹が空いたの。』

磯は更に一椀盛けながら『俺は今日半食を食はないのだ。』

『何して。』

『今日朝時から往つたら親方が厭な顏をして此多忙しい中を何で遲く來ると小言を言つたから、實はこれ〳〵だつて木戸の一件を話すと、そんな事は手前の勝手だつて言やアがる、憤怒々敷いから其からダン〳〵仕事に掛つて二時過ぎになるとお茶飯が出たが、俺は見向も仕ないんだ。お女中が來て今日はお美味い海若だから早やく來て食べろと言つたが到當俺は往かないで仕事を仕續けてやつたのだ。そんなこんなで前借のこと親方に言ひ出すのは全く厭だつたけど、言はないぢや居られんから歸りがけに五圓貸して呉れろと言ふと、へん仕事は怠けて前借か、俺も手前の圖々しいのには顏はんよ。そら是で可からうつて二圓出して與こしたのだ。仕方が無いぢやアないか』と磯は腹の空いた譯と二圓外前借が出來なかつた理由を一遍に話して了つた。そして話し了つたころ漸と箸を置いた。

今體磯吉は無口な男で又た口の利きやうも下手だが如何かすると喫火交りで今のやうに威勢の可い物の言ひ振をすることもある、お源にはこれが頗る嬉しかつたのである。然しお源には連添てから足掛三年にもなるが未だ磯吉は意情者だか働人だか判斷が着かんのである。東京女の氣まぐれ者には其で濟んでゆくので、

三日も四日も仕事を休む、どうかすると十日も休む、けれどサアとなれば人三倍も働くのが宅の磯樣だと心得て居る、だからサアとなれば御入りや仕ないと信じて居る。然し何處まで行つたら其「サア」だか其樣ことはお源も考へたことはない。又たお源は磯さんはイザとなれば隨分人の出來ない思切た大膽なことをする男だと賴母がつて居る。けれど左樣ばかし思へんこともある。其實案外意久地のない男かしらと思ふ場合もあるが、それは一ぺんなしになつて困り拔た時などで、さう思ふと情なくなるから成るべく其は自分で打消して居たのである。

實際磯吉は所謂る「仰らん男」で、大庭の女連は何となく薄氣味惡く思つて居た。だからお德までが磯には憚る風がある。これがお源には言ふに言はれない得意なので、お德が此風を見せた時、お清が磯に丁寧な言葉を使つた時など嬉さが込上げて來るのであつた。

それで結構のべつ貧乏の仕他をして、働き盛りでありながら世帶らしい世帶も持たず、何時も物置か古屋の隅のやうな所ばかりに住んで居る、從つてお源も何時しか植木屋の女房連から仰らん女だ、つまり馬鹿だとせられて居たのだ。

磯吉の食事が濟むとお源は笊を持て駈出して出たが、やがて最炭を買て來て、火を起しながら今日お德と木戸のことで言ひあつたことと、旦那が木戸を見て言つた言葉などべら〳〵喋舌て聞かしたが、磯は『さうか』とも言はなかつた。

其うち磯が眠さうに大欠伸をしたので、お源は垢染た蒲團布團を一枚敷いて一枚被けて二人一緒に一個身體のやうになつて首を縮めて寢て了つた。壁の隙間や床下から寒い夜風が吹きこむので二人は手足を縮められるだけ縮めて居るが、それでも磯の背部は半分外に露出て居た。

《中》

十二月に入ると急に寒氣が增して霜柱は立つ、氷は張る、東京の郊外は突然に冬の特色を發揮して、流行の郊外生活にかぶれて初て郊外に住んだ連中を喫驚さした。然し大庭眞藏は慣れたもので、長靴を穿いて厚い外套を着て平氣で通勤して居たが、最初の日曜日は突晴々と晴れ、日が煌々と輝やいて、そよ吹く風もなく、小春日和が又立戻つたやうなので、眞藏とお清は留守居番、老母と細君はちやんとお德を連て下町に買物に出掛けた。

郊外から下町へ出るのは東京へ行くと稱して出慣れぬ女連は外出の支度に一騒するのである。それで老母を初め細君娘、お德までの着變やら何かに一しきり騒しかつたのが、出て去つた後は一時に森となつて家内は人氣が絶たやうになつた。

眞藏は銘仙の褞袍の上へ兵古帯を卷きつけたまゝ日射の可い自分の書齋に寢轉んで新聞を讀んで居たがお午時前になると退屈になり、書齋を出て緣邊をぶら〳〵歩いて居ると、

『兄樣』と障子越しにお清が聲をかけた。

『何です。』

『おホゝゝゝ「何です」だつて。お午食は何にも有りませんよ。』

『かしこ參りました。』

『おホゝゝゝ「かしこ參りました」だつて眞實に何にもないんですよ。』

其處で眞藏はお清の居る部屋の障子を開けると、内ではお清がせつせと針仕事をして居る。

『大變勉强だね。』

『穩ちやんの被布ですよ、良い柄でせう。』

眞藏はそれには應へず、其處邊を見廻はして居たが、

『最少し日射の好い部屋で縫つたら可ささうなものだな。そして火鉢もないぢやないか。』

『未だ手が凍結るほどでもありませんよ。それに此節は御倹約といふことに決定たのですから。』

『何の御倹約だらう。』

『炭です。』

『炭は成程高價なつたに違ないが宅で急に其を節約するほどのことはならうと。』

眞藏は衣食臺所元のことなど一切關係しないから何も知らないのである。

『如何して兄樣・十一月でさへ一月の炭の代がお米の代よりか餘程上なんですもの。これから十二、一、二と先づ三月が炭の要る盛ですから倹約出來るだけ仕ないと大變ですよ。お德が朝から晩まで炭が要る炭が高價いて泣言ばかり言ふのも無理はありませんわ。』

『だつて炭を倹約して風邪でも引ちゃ何もなりや仕ない。』

『まさか其樣ことは有りませんわ。』

『しかし今日は好い按排に暖かいね。母上でも今日は大丈夫だらう。』と兩手を伸して大欠伸をして、

『何時か知らん』

『最早直ぐ十二時でせうよ。お午食にしませうか。』

『イヤ未だ腹が一向空かん。會社だと午食の辨當が待遠いやうだけどなア』と言ひながら其處を出て勝手の座敷から女中部屋まで覗きこんだ。女中部屋など從來入つたことも無かつたのであるが、見ると高窓が二尺ばかり開け放しになつてるので、何心なく其處から首をひよいと出すと、直ぐ眼下に隣のお源が居て、お源が我知らず見上た顔とぴたり出會つた。お源はサと顔を眞赤にして狼狽切つた聲を瀬と出して、

『お宅では斯いふ上等の炭をお使ひなさるんですもの、堪りませんわね』と佐倉の切炭を手に持つて居たが、それを手玉に取りだした。窓の下は炭俵が口を開けたまゝ並べてある場處で、お源が木戸から井戸邊にゆくには是非この傍を通るのである。

眞藏も一寸狼狽いて、答に窮したが、

『炭のことは私共に解らんで……』と莞爾微笑て其まゝ首を引込めて了つた。

眞藏は直ぐ書斎に返つてお源の行爲に就て考がへたが判斷が容易に着ない。お源は炭を盛んで居る所であつたとは先づ最初に來る判斷だけれど、眞藏は其を其儘確信することが出來ないのである。實際たゞ炭を見て居たのかも知れない、通りがゝりだからツイ手に取つて見て居る所を不意に他人から蔑下されて理由もなく顔を赤らめたのかも知れない。まして自分が見たのだから狼狽へたのかも知れない。と考へれば考へられんこともないのである。眞藏は成るべく後の方に判斷したいので、遂にさう心で決定て兎も角何人にも此事は言はんことにした。

しかし萬一若し盗んで居たとすると放下つて置いては後が惡からうとも思つたが、一度見られたら、とても惡事を續けることは得爲まいと考へたから何ほ更ら此事は口外しない方が本當だと信じた。

どちらにしてもお德が言つた通り、被處へ竹の木戸を植木屋に作らしたのは策の得たるものでなかつたと思つた。

午後三時過ぎて下町行の一行はぞろ〳〵歸宅つて來た。一同が茶の間に集まつてがや〳〵と今日の見聞を今一度繰返して話合ふのであつた。お清は勿論、眞藏も引出されて相槌を打つて聞かなければならない。お源ちゃんが新橋の勸工場で大きな人形を強請つて困らしたの、電車の中に泥酔者が居て衆人を苦しめたの、眞

藏に向て細君が、所天は寒むがり坊だから大德で上等羽織切の舶來のシャツを買つて來たの、下町へ出ると如何しても思つたよりか餘計にお金を使ふだの、それからそれと留度がない、そして聞く者よりか喋舌て居る連中の方が餘程面白さうであつた。

先づ此がや〳〵が一頻止むとお德は急に何か思ひ出したやうに起て勝手口を出たが暫時して返つて來て、妙に眞面目な顔をして眼を圓くして、

『まア驚いた！』と低い聲で言つて、人々の顔をきよろ〳〵見廻はした。人々も何事が起つたかとお德の顔を見る。

『まア驚いた！』と今一度言つて、『お清樣は今日屋外の炭をお出しになりや仕ませんね？』と訊いた。

『否、私は炭籠の炭ほか使はないよ。』

『そうら解つた、私は去日から如何も炭の無くなりかたが變だ、如何炭屋が巧計をして底ばかし厚くするからつて斯うも急に無くなる筈がないと思つて居たので御座いますよ。それで私は想當つてる事があるから昨日お源さんの留守に障子の破目から内をちよいと覗いて見たので御座いますよ。さうすると如何でせう』と、一段聲を低めて『彼の礦火鉢に佐倉が二片ちやんと埋つて灰が被けて有るぢやア御座いませんか。それを見て、私は最早必定さうだと決定て御隱居樣に先づ申上げて見ようかと思ひましたが、一つ保證をかけて此方で驗めした上と考がへましたから今日行つて試たので御座いますよ』とお德はにやり笑つた。

『どんな保證をかけたのゝ？』とお清は心配さうに訊いた。

『今日出る前に上に並んだ炭に一々符號を附けて置いたので御座います。それが如何でせう、今見ると符號を附けた佐倉が四個そつくり無くなつて居るので御座います。そして土瓶は大きなのを二個上に出して符號を附けて置いたらも無いのです。』

『まア如何したと云ふのだらう』とお清は呆れて了つた。老母と細君は顔見合して默つて居る。眞藏は偖は愈々と思つたが今日見た事を打明けるだけは矢張見合はした。つまり眞藏には左樣までするに忍びなかつたのである。

『で御座いますから炭泥棒は何人だか最早解つてます。如何致しませう』とお德は人々が此大事件を喫驚して、〳〵わう〳〵と論評を初めて呉れるだらうと豫期してゐたのが、お清が座を出して呉れた外、且那を初め後の人は默つて居るので少し張合が抜けた調子で斯う問うた。暫時く誰も默つて居たが、

『如何するッて、如何するの？』とお清が問ひ返した、お德は少々焦燥たくなり、

『炭をですよ。炭を彼のまゝにして置けばこれから幾千でも取られます。』

『臺所の緣の下は如何だ』と眞藏は放擲つて置いてもお源が今後容易に盗み得ぬことを知つて居るけれど、其理由を打明けまいと決心てるから、仕樣事なしに斯う言つた。

『充滿で御座います』とお德は一言で拒絶した。

『さうか』と眞藏は默つて了ふ。

『それぢや斯うしたら如何だらう。お德の部屋の戸棚の下を明けて當分兎も角彼處へ炭を入れることにしたら。そしてお德の所有品は中の部屋の戸棚を整理けて入れたら』と細君が一案を出した。

『それぢやア左樣致しませう』とお德は直ぐ贊成した。

『お德には少し氣の毒だけれど』と細君は附加した。

『否、私は「中の部屋」のお戸棚へ衣類を入れ

さして置ければ尚ほ結構で御座います。』

『それぢゃ先あ左樣決定るとして、冬籠物餘を早く作れといふのに眞藏がぐづ〳〵して居るから斯ういふことになるのです。物置さへあれば何のこともないのに』と老母が濕と口を利たと思つたら物置の愚痴。眞藏は頭を掻いて笑つた。

『否、斯ういふことになつたのも、竹の木戸のお蔭で御座いますよ、ですから、私は彼處を開けさすのは泥棒の入口を作へるやうなものだと申したので御座います。今となれば泥棒が泥棒の出入口を作へたやうなものだ』とお德が思はず地聲の高い調子で言つたので老母は急に、

『靜に、靜に、そんな大きな聲をして聽れたら如何します。私も彼處を開けさすのは厭ぢやッたが開けて了つた今急に如何もならん。今急に彼處を塞げば角が立て面白くない。植木屋さんも何時まで彼樣物置小屋見たやうな所にも居られんで移轉なり如何なりするだらう。そしたら彼所を塞ぐことにして今は唯だ何にも言はんで知らん顔を仕てる、お德も決してお源さんに炭の話など仕ちやなりませんぞ。現に彼處の所を見たのではなし又高が少しばかしの炭を盜もれたからつて其樣を寃立てゝ彼へ者だちに怨恨れたら猶ほ損になりますぞ。眞實に』と老母は亦々だけの心配を諄々と說た。

『眞實に左樣よ。お德は如何かすると讒謗を言ひ兼ないがお源さんに其樣ことでもすると大變よ、反對に物言を附けられて如何な目に遇ふかも知れんよ、私は彼の亭主の磯が氣味が惡くつて虎らんのよ。變妙來な男ねえ。彼樣奴に限つて向う不見に人に喰つてかゝるよ』とお清も老母と同じ心配。老母も磯吉のことは口には出さなかつたが心には無論それが有たのである。

『何に彼男だつて唯の男サ』と前藏は立上がりながら『然ども先ア關係はんが可い。』

眞藏は自分の書齋に引込み、岩問題も一段落着いたので、お德とお清は大急ぎで夕御飯の仕度に取掛つた。

お德はお源が如何な顏をして現はれるかと內々待て居たが、平常も夕方には必然水を汲みに來るのが癖を見せないので不思議に思つて居た。

日が暮て一時間も經てから磯吉が水を汲みに來た。

《下》

お源は眞晩に見られても巧く誤魔化し得たと思つた。恰度眞藏が窓から見下した時は土瓶炭を袂に入れ佐倉炭を前掛に包んで左の手で脇へ、更に一個取らうとする處であつたが、元來炭質の良い邪推などの無い且那だから多分氣が附かなかつただらうと信じた。けれど夕方になつて如何しても水を汲みにゆく氣になれない。

そこで磯吉が仕事から歸る前に布團を被つて寢て了つた。寢たつて眠むられは仕ない。垢染た煎餅布團でも夜は磯吉と二人で寢るから互の體溫で寒氣も凌げるが一人では板のやうにしやちこ張つて身に着かないで起きて居るよりも一倍寒く感ずる。ぶる〳〵慄へさうになるので手足を縮められるだけ縮めて丸くなつた處を見ると人が寢てるとは承知ん位だ。

色々考へると厭な心地がして來た。貧乏には慣れてるがお源も未だ泥棒には慣れない。先日からちよく〳〵盜んだ炭の高こそ多くないが確的に人目を忍んで他の物を取つたのは今度が最初であるから一念其處へゆくと今までにない不安を覺えて來る。此不安の內には恐怖も羞恥も籠つて居た。

眼前にまざ〳〵と今日の事が浮んで來る、見下した且那の顏が判然出て來る、そしてテレ隱

しに炭を手玉に取つた時のことを思ふと瓶から火が出るやうに感じた。

『眞實に如何したんだらう』とお源は思はず叫んだ。そして徐々逆上氣味になつて來た。『若しか知れたら如何する。』

『知れるものか彼且那は性質が良いもの。』『性質の良いは當にならない。』『性質の善良のは魯鈍だ』と促急込んで獨問答をして居たが、

『魯鈍だ、魯鈍だ、大魯鈍だ』と思はず又叫んで了フン何が知れるものか』と添足した。そして布團から首を出して見ると日が暮れて入口の障子戶に月が射して居る。けれども起きて洋燈を點けようとも仕ないで、直ぐ首を引込て又た丸くなつて了つた。そこへ磯吉が歸つて來た。

頭が寒れるやうに痛むので寢たのだと聞いて磯は別に怒りもせず驚きもせず自分で燈を點け、寒纖が微溫湯だから火鉢に炭を足し、水も汲みに行つた。湯の沸騰るを待つ間は煙草をパク〳〵吹してゐたが、

『如何痛むんだ。』

返事がないので、磯は丸く凸起つた布團を少時く熟と視て居たが、

『オイ如何痛むんだイ。』

相變らず返事がないので磯は默つて了つた。其中湯が沸騰て來たから例の通り氷のやうに冷た彼へ白湯を注けて澤庵をバリ〳〵、特ち兼た風に食ひ初めた。

布團の中でお源が啜泣する聲が聞えたが磯には香物を噛む音と涙を流し込む音と、美味いので夢中になつて居るのとで聞えなかつた、そして飯を食ひ終つたころには啜泣の聲も止んだのである。

磯が火鉢の緣を忽々叩き初めるや布團がむく〳〵動いて居たが、やがてお源が半分布團に巻つて其處へ坐つた。前が開て膝頭が少し出て居ても合さうとも仕ない、見ると逆上せて頰を赤くして眼は涙に潤み、頻りに啜泣を爲て居る。

『如何したと云ふのだ、え？』と磯は問うたが、此男の持前として驚いて狼狽へた樣子は少しも見えない。

『磯さん私は最早つく〳〵厭になつた』と言ひ出してお源は涙聲になり、

『お前さんと同棲になつてから三年になるが、其間眞實に食ふや食はずで今日はと思つた日は一日だつて有りやしないよ。私だつて何も樂を仕樣とは思はんけれど、これぢや餘りだと思ふわ。お前さんこれぢや全食も同然ぢや無いか。お前さん左樣は思はないの？』

磯は默つて居る。

『これぢや唯だ食つて生きてるだけぢゃないか、饑死する者は世間に滅多にありや仕ないから、食つて生きてるだけなら誰だつてするよ。それぢや餘り情ないと私は思ふわ。』涙を袖で拭て『お前さんだつて立派な職人ぢやないか、それに唯た二人限の生活だよ。それが如何だらう、のべつ貧乏の仕通しで其貧乏も唯の貧乏ぢや無いよ。滿足な家には一度だつて住まないで何時でも斯樣物置か——』

『何を何時までべら〳〵喋舌てるんだい』と磯は矢張お源の方は向ないで、手荒く煙管を擊いて言つた。

『お前さん怒るなら何程でもお怒りの。今夜といふ今夜は私は如何あつても言ふだけ言ふよ』とお源は急促込んで言つた。

『貧乏が好きな者はないよ。』

『そんなら何故お前さん月の中十日は必然休むのッ　お前さんはお酒は呑ないし外に遊樂はなし滿足に仕事に出てさへお呉なら如斯貧乏は仕ないんだよ。——』

磯は火鉢の灰を見つめて默つて居る。

『だからお前さんが最少し稼出してお呉れなら

此節のやうに計量炭もろくに買ないやうな情ないこと』

お源は布團へ打伏して泣きだした。磯吉はふいと起つて土間に下りて廂裏を突掛けるや戸外へ飛び出した。戸外は月冴えて風はないが、骨身に徹へる寒さに磯は大急ぎで新開の通へ出て、七八丁もゆくと金次といふ仲間が居る、其家を訪れて、十時過まで金次と將棋を指して遊んだが歸掛に一寸一回食せと勧んだ。明日なら出来るが今夜は一文もないと謝絶られた。

歸路に炭屋がある。此店は酒も薪も量炭も賣り、大庭も此店から炭薪を取り、お源も此店へ炭を買ひに来るのである。新開地は店を早く終ふので此店も最早閉つて居た。磯は少時く此店の前を辻路々々して居たが急に店の軒下に積である炭俵の一個をひよいと肩に乗て直ぐ横の田圃道に外て了つた。

大急で歸宅つて土間にどしりと俵を下した音に、泣き寐入に寐入つて居たお源は眼を覺したが聲を出さなかつた。そして今のは何の響とも氣に留めなかつた。磯も其儘お源の後から布團の中に潜り込んだ。

朝になつてお源は炭俵に氣が着き、吃驚して、

『磯さん此は如何したの、此炭俵は？』

『買つて來たのサ』と磯は布團を被つてるまゝ答へた。朝飯が出來るまでは磯は床を出ないのである。

『何店で買つたの？』

『何處だつて可いぢやないか。』

『明いたつて可いぢやないか。』

『初公の近所の店だよ。』

『まア如何して其樣遠くで買つたの。……すヤお前さん今日お米を買ふお錢を預つて了やアしまいね。』

磯は起上つて『お前がやれ量炭も買へんだのツて八かましく言ふから昨夜金公の家へ往つて借りようとして無つてやがる。其れから直ぐ初公の家へ往つたのだ。炭を買ふから少許貸せといつたら一俵位なら俺家の酒屋で取つて往けと大なこと言ふから直ぐ其家で初公の名前で持て來たのだ。それだけあれば四五日は保るだらう。』

『まア左樣』と言つてお源はよろこんだ。直ぐ口を明けて見たかつたけれど、先ア後の事と、せつせと朝飯の仕度をしながら『え、四五日どころか自宅なら十日もあるよ。』

昨夜磯吉が飛出した後でお源は色々に思ひ惑んだ末が、亭主に精出せと勧める以上、自分も氣を厨らして寐て居ちや何もならない、又たお隣へも顔を出さんと却て疑がはれると斯う考へたのである。

其處で平常の通り辨當拵たせて磯吉を出してやり、自分も飯を食べて一通り片附たところでバケツを持つて木戸を開けた。

お清とお徳が外に出て居た。お清はお源を見て、

『お源さん大變顔色が惡いね、如何か仕たの。』

『昨日から少し風邪を引たもんですから……。』

『用心なさいよ、それは不可い。』

お徳は『お早う』と口早に挨拶した限り何も言はない、そしてお源が炭俵の並べてないのに氣が着き顔色を變へて眼をぎよろ〳〵さして居るのを見て、にやり笑つた。お源は又た早くも之を看取りお徳の顔を睨みつけた。お徳は斯う睨みつけられたとなると最喧嘩だ、何か蓋い皮肉を言ひたいがお清が傍に居るので辛棒して居ると十八九になる粉屋の御用聞が木戸の方から入て來た。粉屋とは昨夜磯吉が炭を盜んだ店である。

『粉屋お早う御座います』と挨拶するや、昨日まで戸外に並べてあつた炭俵が一個も見えない

ので『オヤ炭は何處へ片附けたのですか。』

お徳は笑つてたといふ調子で、『あア悉皆内へ入ちやつたよ。外へ置くと如何も物騒だからね。今の高價い炭を一片だつて盜られちや馬鹿々々しいやね』とお源を見る、お清はお徳を睨む、お源は水を汲んで二歩三歩歩るき出したところであつた。

『全く物騒ですよ、私の店では昨夜到當一俵盜すまれました。』

『如何して』とお清が問うた。

『戸外に積んだまゝ、平時放下つて置くからです。』

『何炭を盜られたの』とお徳は執着くお源を見ながら聞いた。

『上等の佐倉炭です。』

お源は此等の問答を聞きながら、齒を喰ひしばつて、踵踏めいて木戸の外に出た。

土間に入るやバケツを投るやうに置いて大急ぎで炭俵の口を開けて見た。

『まア佐倉炭だよ！』と思はず叫んだ。

* * *

お徳に老母からも細君からも、みつしり叱られた。お清は日の暮になつてもお源の姿が見えないので心配して御氣遣取りと風邪見舞とを兼ねてお源を訪ねた。内が餘り寂然して居るので『お源さん、お源さん』と呼んで見た。返事がないので可恐々々ながら障子戸を開けるとお源は俵を胴縮にしたらしく土間の真中の梁へ細帶をかけて死で居た。

二日經つて竹の木戸が破壊された。そして生垣が以前の樣に復歸つた。

それから二月經過て磯吉はお源と同年輩の女を女房に持つて、濱谷村に住んで居たが、ケ張豚小屋同然の住宅であつた。

（明治四十一年一月）

窮死

九段坂の最寄にけちなめし屋がある。春の末の夕暮に一人の男が大儀さうに敷居をまたげた。既に三人の客がある。まだ洋燈を點けないので薄暗い土間に居並ぶ人影も朧である。

先客の三人も今來た一人も皆な土方か立ん坊か位の極く下等な勞働者である。餘程都合の可い日でないと白馬も碌々は飲めない仲間らしい。けれども先の三人は、多少か好結果かつたと見えて思ひ〳〵に飲つて居た。

『文公、さうだ君の名は文さんとか言つたね。身體は如何だね』と角張つた顔の性質の良さうな四十を越した男が隅から聲をかけた。

『難有う、どうせ長くはあるまい』と今來た男は捨ばちに言つて、投げるやうに腰掛に身を下して、兩手で額を押へ、苦しい嘆息をした。年頃は三十前後である。

『さう氣を落すものぢやアない、しつかりなさい』と此店の亭主が言つた。それぎりで誰も何とも言はない。心のうちでは『長くあるまい』と言ふのに同意をして居るのである。

『六錢しか無い、これで何でも可いから……』と言ひさして、嘆息で食はして貰ひたいといふ言葉が出ない。文公は頭の髪を兩手で掻かんで悶いて居る。

めそ〳〵泣いてゐる赤兒を背負つたおかみさんは洋燈を點けながら、

『苦るしさうだ、水をあげようか』と振り向いた。文公は頭を横に振つた。

『水よりか此方が可い、これなら元氣がつく』と三人の一人の大男が言つた。此男は此店には馴染でないと見えて先刻から口をきかなかつたのである。突きだしたのが白馬の杯。文公は又も頭を横にふつた。

『一本つけよう。矢張これでないと元氣がつかない。代價は何時でも可いから飲つた方が可からう』と亭主は文公が何とも返事せぬ中に白馬一本つけた。すると角ばつた顔の男が、

『何に文公が拂へない時は自分が如何にでもする、えッ、文公、だから一ツ飲つて見な。』

それでも文公は頭を押へたまゝ默つて居ると、間もなく白馬一本と野菜の煮物を少ばかり載せた小皿一つが文公の前に置かれた。此時やつと頭を上げて、

『親方どうも濟まない』と弱い聲で言つて又も嘆息をしてホッと溜息を吐いた。長顔の痩こけた顔で、頭は五分刈がそのまゝ伸る丈のびて、もいくちやになつて小の光澤もなく、灰色がゝつて居る。

文公のお蔭で陰氣勝になるのも仕方がない、しかし誰もそれを不平に思ふ者はないらしい。文公は續けざまに三四杯ひつかけて又たも頭を押へたが、人々の親切を思はぬでもなく、又た深く思ふでもない。まるで別の世界から言葉をかけられたやうな氣持もするし、うれしいけれど、それがそれまでの事である事を知つて居るから『どうせ長くはない』との感を暫時の間でも可いから忘れたくても忘れる事が出來ないのである。

身體にも心にも呆然としたやうな絶望的無我が霧のやうに重く、あらゆる光を遮つて立ちこめて居る。

空腹に飲んだので、間もなく酔がまはり稍や元氣づいて來た。顔をあげて我知らずにやりと笑つた時は四角の顔が直ぐ、

『そら見ろ、氣持が直つたらう。飲れ飲れ、一本で足りなきやアもう一本飲れ、私が引受るから何でも元氣を加るにやアこれに限ッて事よ！』と御自身の方が大元氣になつて來たのである。

此時、外から二人の男が駈け込んで來た。何れも土方風の者である。

『とう〳〵降て來アがつた』と叫けんで思ひ思ひに席を取た。文公の來る前から西の空が眞赤に曇り、遠雷さへ轟きて只ならぬ氣勢であつたのである。

『何に、直ぐ晴ります。だけど今時分の驟雨なんて餘程氣まぐれだ』と亭主が言つた。

二人が飛込んでから急に驟うて來て、何時しか文公に氣をつける者も無くなつた。外はどしや降りである。二個の洋燈の光線は赤く微に、陰影は闇く遍く此煤けた土間を漂めて、荒くれ男の緒論だけが右に左に動いて居る。

文公は窶れた白馬一本をちび〳〵飲み了ると飯を拗た、これも赤兒を背負た女主人の親切で鰯腹喰つた。そして出掛ると急に亭主が此方を向いて、

『未だ降つてるだらう、止さから行きな。』

『たいしたことは有るまい。皆様どうも難有う』と穴だらけの外套を頭から被つて外へ出た。最早晴り際の小降である。兎も角も路地を辿つて通街へ出た。亭主は雨が止んでから行きなと言つたが、何處へ行く？　文公は路地口の軒下に身を寄せて往來の上下を見た。轎人車が威勢よく駈て居る。居々の灯火が道路に映つて居る。一二丁先の大通を電車が通る。さて文公は何處へ行く？

めし屋の連中も文公が何處へ行くか勿論知らないが併し何處へ行かうと、それは問題でない。何故なれば居殘つて居る者の中でも、今夜は何處へ宿るかを決定て居ないものがある。この人人は大抵、所謂る居所不明、若は不定な連中であるから文公の今夜の行先など氣にしないのも無理はない。然し彼の容態では遠らずまゐつて了ふだらうとは文公の去つた後での噂であつた。

『可哀さうに。養育院へでも入れば可い』と亭主が言つた。

『所が其養育院とかいふ奴は面倒臭くつてなか〳〵入られないといふ事だぜ。』と客の土方の一人がいふ。

『それぢやア行倒だ！』と一人がいふ。

『誰か引取人が無いものかナ。全體野郎は何國の者だ』と一人がいふ。

『自分でも知るまい。』

實際文公は自分が何處で生れたのか全く知ない、兩親も兄弟も有るのか無いのかすら知ない、文公といふ稱呼も誰いふとなく自然に出來たのである、十二歳頃の時、浮浪少年とのかどで、暫時監獄に飼れて居たが、色々の身の爲になるお話を聞された後、門から追ひ出された。それから三十幾歳になるまで種々な勞働に身を任して、やはり以前の浮浪生活を續けて來たのである。此冬に肺を患でから藥一滴飲むことすら出來ず、土方にせよ、立坊にせよ、それを休めば直ぐ食ふことが出來ないのであつた。

『最早だめだ』と十日位前から文公は思つてゐた。それでも稼げるだけは稼がなければならぬ。それで今日も朝五錢、午後に六錢だけ漸く稼いで、其六錢を今めし屋で費つて了つた。五錢は盡めしに成て居るから一文も殘らない。

さて文公は何處へ行く？　茫然軒下に立て眼前の此世の樣を涙と見て居る中に、

『アヽ、寧そ死で了ひたいなア』と思つた。此時、黙然が全身に行きわたつて、ぶる〳〵ッと慄へた。そして續けざまに苦るしい嘆息をして唱入つた。

ふと思ひ付いたのは今から二月前に日本橋の

或所で土方をした時知り合になつた辨公といふ若者が此近邊に住で居ることであつた。道路を七八丁飯田町の河岸の方へ歩いて間い狹い路地に入ると突當に鐵葉葺の棟の低い家がある。最早雨戸が引よせてある。

辨公、家か。

『誰だい』と内から直ぐ返事がした。

『文公だ。』

戸が開て『何の用だ。』

『一晩泊めて呉れ』と言はれて辨公直ぐ身を横に避けて、

『まアこれを見て呉れ何處へ寝られる？』

見れば成程三疊敷の一室は名ばかりの板間と、上口に漸く下駄を脱ぐだけの土間とがあるばかり、其三疊敷に寝床が二つ敷てあつて、豆洋燈が板間の箱の上に乗てある。其薄い光で一ッの寝床に寝て居る辨公の親父の頭が朧に見える。

文公の默つて居るのを見て、

『常例の婆々の宿へ何故で行かねえ？』

『文なしだ。』

『三晩や四晩借りたつて何だ。』

『ウンと借が出來て最早行ねえんだ』と言ひ様、嘆息をして苦しい息を内に引くや思ずホッと被れ果た嘆息を洩らした。

『身體も良く無いやうだナ』と辨公初て氣がつく。

『すつかり駄目になつちやつた。』

『そいつは氣の毒だなア』と内と外とで暫時無言で衝立て居る。すると未だ寝着れないで居た親父が頭を擡げて、

『辨公、泊めて遣れ、二人寝るのも三人寝るのも同じことだ。』

『同じことは一こつた。それぢやア足を洗ふんだ。この廢滅下駄を持て其處の水道で洗らつて來な』と辨公景氣よく言つて、土間を探り、下駄を拾つて渡した。

其處で文公は漸と宿を得て、二人の足の裾に丸くなつた。親父も辨公も書間の激しい勞働で熟睡したが文公は熱と嘔息とで終夜苦しめられ曉天近くなつて漸と寝入つた。

短夜の明け易く四時半には辨公引窓を明けて飯を焚きはじめた。親父も間もなく起きて身支度をする。

飯米が出來るや先づ辨公は其日の辨當、親父と自分との一度分を作へる。終つて二人は朝飯を食ひながら親父は低い聲で、

『此若者は餘程身體を痛めて居るやうだ。今日は一日そつとして腰いて仕事を休ます方が可からう。』

辨公は頬張て首を縦に二三度振る。

『そして出がけに、飯も煮いてあるから冷手に食べて一日休めと言へ。』

辨公はうなづいた、親父は一段聲を潜めて、

『他人事と思ふな、乃公なんぞ最一死なうと思つた時、仲間の者に助けられたなア一度や二度ぢやアない。助けて呉れるのは何時も仲間中だ、汝も此若者は仲間だ助けて置け。』

辨公は口をもご〳〵しながら親父の耳に口を寄せて、

『でも文公は永くないよ。』

親父は急に箸を立て、睨みつけて、

『だから猶ほ助けるのだ。』

辨公は又も從順にうなづいた。出がけに文公を揺り起して、

『オイ一寸と起ねえ、これから我等は仕事に出るが、兄公は一日休むが可い。飯も炊てあるからナア、イヽカ留守を頼んだよ。』

文公は不意に起されたので、驚いて起き上がりかけたのを辨公が止めたので、又た寝て、その言ふことを聞いて唯だうなづいた。

餘り當にならない留守番だから雨戸を引よせて親子は出て行つた。文公は留守居と言はれたので直ぐ起きて居たいと思つたが轉つて居るのが結構樂なので十時頃まで眼だけ覺めて起き上らうとも爲なかつたが、腹が空つたので苦しいながも起き直つて、飯を食つて又たごろりとして夢現、で正午近くなると又た腹が空る。それで又た食つてごろついた。

辨公親子は或親分に屬て市の埋立工事の土方を稼いで居たのである。辨公は塀を埋る組、親父は下水用の土管を埋る爲めの深い溝を掘る組。それで此日は親父は溝を掘て居ると午後三時頃、親父の跳上げた土が折しも通りかゝつた車夫の脚にぶつかつた。此車夫は車も衣裝も立派で乗せて居た客も紳士であつたが、突如人車を止めて、「何をしやアがるんだ』と言ひさま溝の中の親父に土の塊を投つけた。

『氣をつけろ、間抜め』といふのが捨毒詞で其儘行かうとすると、親父は承知しない。

『此野郎！』といひさま道路に這ひ上つて、今しも棍棒を上げかけて居る車夫に土を投つけた。

そして、

『土方だつて人間だぞ、馬鹿にしやアがんな』と叫けんだ。

車夫は取て返し、二人は掴合を初めたが、一方は血氣の若者ゆゑ、苦もなく親父を溝に突き落した。落ちかけた時調子の取りやうが惡かつたので棒が倒れるやうに深い溝に轉げ込んだ。その爲め後腦を甚く撃ち肋骨を折つて親父は閉絶した。

見る間に附近に散在して居た土方が集まつて來て、車夫は毆打られるだけ毆打られ其上交番に引ずつて行かれた。

蟲の呼吸の親父は戸板に乗せられて親方と仲間の土方二人と、氣拔のしたやうな辨公とに送られて家に歸つた。それが五時五分である。文公は此騒に喫驚して隅の方へ小さくなつて了つた。間もなく近所の醫師が來る事は來た。診察の製だけして『最早駄目がない』と言つたきり、そこ〳〵に去つて了つた。

『辨公毅然しな、俺が必然仇を取つてやるから』と親方は言ひながら財布から五十錢銀貨を三四枚取り出して『これで今夜は酒でも飲で通夜をするのだ、明日は早くから俺も來て始末をしてやる。』

親方の去つた後で今まで外に立て居た仲間の二人は兎も角内へ入つた。けれども坐る處がない。此時辨公は突然文公に、

『親父は車夫の野郎と喧嘩をして殺されたのだ。これを與るから木賃へ泊つて呉れ。今夜は仲間と通夜をするのだから』と貰つた銀貨一枚を出した。文公はそれを受取つて、

『それぢやア親父さんの顔を一度見せて呉れ。』

『見ろ』と言つて辨公は被せてあつたものを除たが、此時は最早薄闇いので、明白しない。それでも文公は熟と見た。

* * * * * *

飯田町の狹い路地から貧しい葬儀が出た日の翌日の朝の來である。新宿赤猴間の鐵道線路に一人の轢死者が發見つた。

轢死者は線路の傍に置かれたまゝ蓆が被けて有るが頭の一部と足の先だけは出て居た。手が一本ないやうである。頭は血にまみれて居た。

六人の人がこの周圍をウロ〳〵して居る。高い堤の上に兒守の小娘が二人と職人體の男が一人、無言で見物して居るばかり　四邊には人影がない。前夜の雨がカラリと霽つて若草若葉の野は光り輝いて居る。

六人の一人は巡査、一人は醫師、三人は人夫、そして中折帽を冠つて二子の羽織を着た男は村役場の者らしく線路に沿うて二三間の所を

往つ戻りつして居る。始終談笑して居るのが巡査と人夫で、醫者はこめかみの邊を兩手で押へて蹲居んで居る。蓋し棺桶の來るのを皆が待つて居るのである。

『二時の貨物車で轢かれたのでせう』と人夫の一人が言つた。

『その時は未だ降つて居たかね？』と巡査が煙草に火を點けながら問うた。

降つて居ましたとも。雨の上つたのは三時過ぎでした。』

『どうも病人らしい。ねえ大烏樣』と巡査は醫師の方を向いた、大烏醫師は巡査が煙草を吸つて居るのを見て、自身も煙草を出して巡査から火を借りながら、

『無論病人です』と言つて轢死者の方を一寸と見た。すると人夫が、

『昨日其處の原を徘徊いて居たのが此野郎に違ひありません。たしかに此の外套を着た野郎です、ひよろ〳〵歩いては木の蔭に休んで居ました。』

『さうすると何だナ、矢張死ぬ氣で來たことは來たが晝間は死ねないで夜行つたのだナ』と巡査は言ひながら疲勞れて上り下り兩線路の間に蹲んだ。

『奴さん彼の雨にどし〳〵降られたので如何にもかうにも忍耐きなくなつて其處の堤から轉り落ちて線路の上へ打倒れたのでせう』と人夫は見たやうに話す。

『何しろ憐れむ可き奴サ』と巡査が言つて何心なく堤を見ると見物人が殖えて學生らしいのも交つて居た。

此時赤羽行の汽車が朝暾を眞〻もに車窓に受けて威勢よく駛つて來た。そして火夫も運轉手も乘客も皆な身を乗出して蔦の被けてある一物を見た。

此一物は姓名も原籍も不明といふので例の通り假埋葬の處置を受けた。これが文公の最後であつた。

實に人夫が言つた通り文公は如何にも斯うにもやりきれなくつて倒れたのである。

（明治四十年七月）

疲勞

京橋區三十間堀に大米館といふ旅館がある、先づ上等の部類で客は皆な紳士紳商、電話は客用と店用と二種かけて居る位で、年中十二三人から三十人までの客が有るとの事。

或年の五月なかばごろである、帳場に坐つて居る番頭の一人が通りがゝりの女中を呼んで、

『お清さん、これを大森樣の所へ持つていつて、此方が先程來ましたがお不在だと言つて斷わりましたつて……』

と一枚の小形の名刺を渡した。お清はそれを受とつて梯子段を上つた。

午後二時頃で大概の客は實際不在であるから家内しんとして極めて靜かである。中庭の青桐の若葉の影が拭きぬいた廊下に映つてひかひか光つて居る。

北の八番の唐紙をすつと開けると内に二人。一人は主人の大森龜之助。一人は正午前から來て居る客である。大森は肌に向つて電報用紙に萬年筆で電文を認めて居るところ、客は上衣を脱いで胴衣一つになり頭に書類を調べて居るところ、煙草盆には埃及煙草の吸ひ殼がくしや〳〵に突込である。

大森は名刺を受とつてお清の口上を終局まで聽かず、

『オイ君、中西が來た！』

『そして如何した？』

『いま君が聽いた通りサ、不在だと言つて歸へしたのだ。』

『そいつは弱わつた。』

『彼奴一週間後でなければ上京られないと言つて來たから、帳場に彼奴のことを言つて置かなかつたのだ。まア可いサ、上京て來て吳れたに越したことはない。これから二人で出かけよう。』

頭髪の少し禿げた、でつぷり肥つた客は『ウン』と言つたぎり黄金縁眼鏡の中で細い眼をぱちつかして、鼻下の眞黑な髭を右手でひねくりながら考がへて居る。それを見て大森は煙草を取つて煙草盆をつゝきながら靜かに、

『それとも呼ばうか？』

『まア其方が可いな。此方が彼奴ばかりに依賴て居るやうに思はれるのは馬鹿げて居るからな。』

大森は『ちよッと』と言つて一口吸つた煙草を灰に突込み机に向つて急速いで電文を書き了り、今までぼんやり控へて居たお清にそれを渡して、

『直ぐ出さしてお吳れ。』

お清は座敷を出た。大森は又た煙草を取つて、

『それも左樣だ、彼の先生怜悧で居て馬鹿だから餘り此方で騒ぐと直ぐ高く止つて卒直に承知することも故意とぐづりたがるからね。』

『それで居て此方で少し大く出ると又直ぐ怒るのだ。始末にいけない』と客は言つて大欠伸を一ッして『兎に角呼ぶとしようぢやアないか。』

『何時呼ばう？』と言つてこれも貰ひ欠伸をした。

『今夜は如何だ。今呼んだつて彼奴旅宿に居やアしない。』

大森は机の上の黄金時計をのぞいて、

『二時四十分か。今は とても居ない。しかし』と又た時計をのぞいて、少し考へて『明日の朝早くしようぢやアないか。中西が來たとなれば僕はこれから駿河臺の大將に會つて置くはう

が可いと思ふ。」
『成程それは其方が可い。』
『それから今夜は澤田を呼んで見本の説明の順序を能く作つて置いて貰ふことにする。』
『成程そいつは猶ほ大切だ。我々だつて中西が對手なら結構説明位は出來るが、それは澤田に越した事はない。それぢやア左様決めた。これから手紙を持してやつて、電話ぢやア駄目だよ、そして明朝午前八時までに御來車を仰ぐとでもして置う。』
『よし手紙を直ぐ持たしてやらう』と大森は卷紙を執てすら〳〵と書き出した。其間に客は取散してあつた書類を丁寧に取りそろへて大な手革包に納めた。
『中西の旅宿は隨分むいつかれて居るが、彼奴よく辛抱して取換へないね』と大森は與筒へ宛名を書きながら言つた。
『常旅宿となると矢張居心地が可いからサ』と客は答へて上衣を引寄せ、片手を通しながら『君大將に會つたら僕の一件を何とか決定て貰はないと僕が非常に困ると言て呉れ給へ。大將は如何かして物にしてやらうと言ふめで手間取つて居るだらうがそれぢやア實際君の知つてる通り僕がやりきれない、故郷の奴等人に事を頼む時はわい〳〵言つて騒ぐ癖に、その事が甘くゆくと見向もしないんだ。人を馬鹿にしてやアがる。だから大將にどちらでも可いから駄目だとか出來るとか、明白に早く決定を與へて貰ひたいと言つて呉れ給へ、大將あれで馬鹿に人が善いから頼むと何でもかんでも左様してやらなければならんと心得てるから遣り切れない、仲に立てる者は難有迷惑だ』と言つてる中に上衣を着て了ふ、何時大森がベルを押したか、女中が入つて來た。
『これは奇妙不思議だ、中西へ手紙をやらうとすると、お蝶さんがやつて來る、爭そへんものだ』と大森が十七八の少女に手紙を渡す。
『アラ又あんな事をおッしゃる、中西さんなんか何でもないワ、眞實に私くやしいわ、掛なして郷愁ふんだもの』と手紙を奪取るやうに取つて『可いわ、そんな事をおッしゃるなら此のお手紙を何處へ打捨つてしまふから。』
『イヤ謝罪つた、それは大切の手紙だ、打捨られてたまるものか、直ぐ源公に持してやつておれ。お蝶さんは善い子だ。序でに人車を』と客が居住を直して合槌を打つた。
『蝶ちやんは善い子だ、』
『田浦樣、兎が自慢にやなりませんよ』と言ひ捨てゝ出て去つた。
間もなく車が來て田浦は去り、續いて大森も美麗な宿車で威勢よく出て去つた。
午後四時半頃になつて大森は外から歸つて來たが室に入るや、其五尺六寸といふ長身を座敷の眞中にごろりと横へて、大の字になつて暫時く天井を見つめて居た。四角な引しまつた顔には堪へ難い疲勞の色が見える。洋服を脱ぐのも面倒臭いらしい。
間もなくお清が入つて來て『江上樣から電話で御座います。』
大森は跳ね起きた。ふら〳〵と眼がくらみさうにしたのを、ウンと踏張つて突立つた時、彼の顔の色は土色をして居た。
けれども電話口では威勢の可い聲で談話をして『それでは直ぐ來て下さい』と答へた。
室にかへると又もごろりと横になつて眼を閉ぢて居たが、ふと右の手を擧げて指で數を讀んで何か考へて居るやうであつた。やがて其手がばたり疊に落たと思ふと大鼾をかいて其顔はさながら死人のやうであつた。

（前治四十年六月）

二　老人

《上》

秋は小春の頃、石井といふ老人が日比谷公園のベンチに腰を下して休息で居る。老人とは言ふものゝ漸と六十歳で、足腰も達者、至て壯健の方である。
日はやゝ西に傾いて赤蜻蛉の翼がきら〳〵と光り、風無きに風あるが如く浮々と飛んで居る、老人は眼を瞬たいて其を眺めて居る、看るともなしに看て居る。寂々寂々心中何等の思ふことも無い體。
老人の前を幾組かの人が通つた。老へるも若きも、病るも健かなるも。されど誰あつて此老人を氣に留める者も無く、老人も亦た人が通らうと犬が過ぎ行かうと一切お關ひなし、悠々行路の人、緣なくんば眼前千里、たゞ靜かな穏かな蒼天が何時も何時も平等に覆うて居るばかりである。
右の手を左の袂に入れてゴツ〳〵やつて居たが、やがて「朝日」を一本取出して口に啣へた。今度はマッチを出したが箱が半分壊れて中身は僅に五六本しか無い。生憎に二本摺り損なつて三本目で漸と火が點いた。
スパリ〳〵と如何にも旨さうである。青い煙、白い蝶眼の先に透明に光つて、渦を卷て消ゆく。
『オヤ、彼れは德ぢやないか。』
と石井は消えゆく煙の末に浮び出た洋服姿の年若い紳士を見て思つた。芝生を隔てゝ二十間ばかり先だから判然しない。判然しないが四て居る。背恰好から歩き風まで確に武だと思つたが、彼は足早に過ぎ去つて木蔭に隱れて了つた。
此妻のおかげで老人は空々寂々の境に何時までも居る譯にゆかなくなつた。
明の山上武は二三日前、石井翁を訪うて、口を極めて其無爲主義を攻撃したのである。武を石井老人は何時も德と呼ぶ、其は武の幼名を德助と稱てから、十二三の頃德の親父が當世流に武と改名さしたのだ。
德の妻を見ると二三日前の德の言葉を老人は思ひ出した。
德の説く所も萬更無理では無い。道理はあるが、彼の德の言草が本氣でない。眞實彼奴は左樣信じて言ふ譯ぢやない。あれは當世流の理窟で、何人も言うたと、言はゞ口前だ。德の本心は矢張私を引張出て五回でも十回でも稼がさうとするのだ、其證據には先達頃までは遊んで暮すのは無駄だ、足腰の達者な中は取れる金なら取るやうにするが得だ、叔父が出る氣さへあれば必然周旋する、如何せ隱居仕事の積だから十回だつて決して恥るに足らんと言つた癖に今度は如何だ。人間一生、いやしくも命のある間は遊んで暮らす法はない、病氣でない限り死ぬるまで仕事をするのが人間の義務だと言ふ。今然理窟の根本が違つて來たぢやないか、——矢張私を稼がす積りサ……とまで考へて來た時、老人は恰度一本の煙草を喫ひ切つた。
石井翁は一年前に或官職を停めて恩給三百圓を貰ふ身分になつた。月に割つて二拾五圓、一家は妻に二十になるお菊と十八になるお新の二人娘で都合四人生活、銀行に預げた貯金とても高が知れてるから先づ食つて行けないといふのが世間並である。けれども石井翁は少も苦にしない。

例を車夫や職工に取つて、食つて行けないはずは無いと主張するのである。無論食ふに食はれない理窟はない、家賃、米代以下お新の學校費まで計算して成程二十五圓で間に合さうと思へば間に合ふのである。

それで石井翁の主張は、間に合ひさへすれば、それで行つてゆく。今更私が隱居仕事で候のと言つて腰辨當で會社にせよ役所にせよ病院の會計にせよ、五圓十圓と稼いで見て如何する、私は永年のお務を終て、やれ〳〵御苦勞であつたと恩給を頂く身分になつたのだ。治まる聖代の難有さにこれぞといふ失策もせず、長病氣にも罹らず長官にも下僚にも憎まれも嫁がられもせず務め上げて來たのだ。最早斯うなれば私などは所謂る聖代の逸民だ。恩給だけで兎も角も暮せるなら、それを難有く頂戴して、すつかり慾から離れて其日々々を一家睦じく樂く暮すのが當然だ。よしんば二十五圓に十圓殖たら幾千の贅澤が出來る。――悉皆慾で慾には限がない。――役目となれば五圓が十圓でも、雨の日雪の日にも休む譯には往かない、矢張腰辨當で鼻水を垂らして若い者の中に交つてよぼ〳〵と通はなければならぬ。オ、嫁狀な事だ！

といふのである。だから役を退た時、知人や親族の者が、隱居仕事を勸め、中には先方に略交渉をつけて物にして來てまで勸めたが、悉く以上の理由で拒絶して了つたのである。細君は氣輕な人物で何事も斷念の可い性だから又何句はない。愚痴一つ言はない。お菊お新の二人も母を助けて飯米も焚けば八百屋へ使者にも行く。斯くてこそ石井翁の無爲主義も實行されて居るのである。

處が武の母は石井翁の細君の妹だけに、此無爲主義を危み、姉は盲從してこそ居れ、女は矢張り女、石井樣の隱居仕事で二十五圓の上に十圓殖るなら如何位樂と思ふか知れないと、武をして石井翁を說き落さす積で居るのである。

彼は變物だと最初世話を仕かけた者が手を退いた時分、或日曇日の午後二時頃、武は樓子を見る可く赤坂區南町の石井を訪ねた。俥の入らぬ路地の内で、三軒長屋の最端が其である。中古の建物だから、それほど見苦くは無い。上口の四疊半が玄關なり茶の間なり長火鉢これに伴なふ一式が列べてある。隣室が八疊、これが座敷、この以外には臺所の傍に薄暗い三疊があるばかり。南向の緣先一間半ばかりの細長がい庭には棚を造り翁の娯樂の鉢物が列てある。手狹であるが全體が能く整理されて亂雜な態は毛ほどもなく敷居も柱も緣も能く拭きこまれて、光つて居る。

『御免なさい』と武は上口の障子を開けたが茶の間に誰も居ない。

『武です』と追加へた。すると座敷で、

『武さんかえ、サアお上り』と言つたのが叔母である。

武は上つて襖を開けると座敷の眞中で叔父叔母差向ひの剛碁最中！　叔父は一寸武を見て、微笑つて眼で挨拶したばかり。叔母は、

『武さん少し待つてお呉れ。直き勝負が着くから』と一心不亂の體である。

『何卒か御ゆつくり』と武さんの武も此外に挨拶の仕樣がない。たゞ呆れ返つて、爲樣なしに盤面を看て居た。

『武さんは碁が打てたかね』と叔父は打ちながら問うた。

『全然で駄目です。』

『でも四日殺ぐらゐは出來るだらう。』

『五目並なら出來ます。』

『ハハ、、、、五目並ぢや仕方が無い。』

『叔母さんが碁をお打になることは僕些少も知りませんでした。』

『私ですか、私はこれで隨分古いのですよ』と叔母は言つたが振向きもしない。

『常住打つて居つつしやつたのですか。』

『否、やたらに打だしたのは此家へ引退んでからですよ。――鳥渡これを待つて頂戴。』

『成りません』と石井翁、一ぷく點けてスパリスパリと悠然たるものである。

『だつて此切斷は全く私の見落ですもの。』

『だから先刻から私は「待ませんよ」「待ませんよ」と二三度も警告を發して置いたぢやないか。』

『待ませんは貴方の口癖ですよ。』

『誰がそんな癖を付けました、私に。』

武は思はずクスリと笑つた。

『それぢや如何あつても待つて下さらんの。』

『マア待ますまい、癖に成るから。』

と言はれて叔母は艶面を見渡して暫く考へて居たが、

『それぢや投ませう。其處が切斷では碁に成ませんもの。』

『先づさう言つた樣な形だね。』

其處で叔母は投出した。此れから改つて挨拶が濟むと、雜談に移り武は叔父叔母差向で、大廟毎日碁を打つ事、娘兩人は今日上野公園に散歩に出掛た事など聞かされた。

右の次第で德さんの武も終に手を退いて半歲餘も經つと母親、矢張氣になると見えて如何にかして石井樣を引き落して呉れろと報む。其處で武も隱居仕事の五圓十圓說では到底夫婦差向ひの碁打を說落すことは出來ないと考へ、今度は遊食罪惡說を持出して滔々と筵席立てゝ見た。

石井翁は散々德さんの武に言はして置いた揚句、

『それぢや由に隱れて木の實を食ひ露を飲んで居る人は如何する。』

『あれは仙人です。』

『仙人たつて人だ。』

『それぢや叔父さんは仙人ですか。』

『市に隱れた仙人の積で居るのだ。』

これで武は又も撃退されて了つたのである。

《下》

さて石井翁は煙草一本喫了つた處でベンチを起うとしたが德の遊食罪惡說が鳥渡氣に抵りだしたので又一本取り出して喫ひ初めた。德の本心を看破て居る。そして仙人說で撃退は仕たものゝ、成程、未だぴんしやんして居るのに唯だ遊んで食つて居るといふのは衰たことでは無いやうに思はれる。それなら何をする。腰辨は眞平だ。田舍に往つて百姓でもするか。こいつは可いかも知れんが差當つて田地がない。翁は行寨つて了つたので、仙人主義を辯護する理窟に立返つて頻と考へ込んで居ると、どしりとばかり同じベンチに身を投げるやうに腰を下した者がある。振向て見るや、

『オヤ河田さんぢや無いか。』

先方は全く石井翁に氣が附かなかつたものと見えて、翁に聲を掛けらるゝと卒然飛起つて帽を脱り、

『コレは〳〵石井樣ですか、貴方とは全然氣が附かんで失禮しました』とぺこ〳〵お辭儀をする。そして顏を少し紅らめた樣子は餘程狼狽したらしい、矢張六十餘の老人である。

『まアお掛なさい。そして其後は如何しました。』

『イヤもうお話にも何もなりません』と腰を下しながら、

『相變らずで面目次第も無い譯です』と胡麻白の亂髮に骨太の指を熊手形に差込んで手荒く掻いた。

石井翁は袖服ながら小ザツパリした衣裝に引

更て此老人河田翁は柳原仕込の荒いスコッチの古洋服を着て、バクバク靴を穿いて居る。

『でも何か仕て居られるだらう』と石井翁はじろ〳〵河田翁の様子を見ながら聞いた。そして腹の中で、『成程相變らずだな』と思つた。

『イヤ兎てもお話にも何も……』と矢張頭を掻て居たがポケットから鹿皮の真黒になつた煙草入と扁曲た鉈豆煙管とみ取出た。ところが生憎と煙草は塵埃混合の粉末ばかり、其儘又たポケットに仕舞込んだのを見て石井翁は「朝日」を袋共出して、

『サアお喫ひなさい。』

『イヤこれは如何も』と河田翁は遠慮なく一本抽取つて、石井翁から火を借りた。

此二老人は三十歳前後の頃、或役所で一年餘同僚であつたばかりで無く、石井の親類が河田の親類とかで、石井一家では河田翁の噂は時折出て『今何を仕て居るだらう』『眞實に彼な氣の毒な人はない』など言はれて居たのである。

『然し遊んでも居なさらんだらうが』と石井翁は何處までも心配さうに聞く。

『イヤ兎てもお話にも何も……』

これが河田翁持前の一つで、人に對すると言ひ度いことも言へなくなり、つまらん所に自分を卑下して仕まふのである。

『貴方が私の家へ來てから最早五年になるなア』と石井翁は以前の事を思ひ出した。

『さうなりますかね、早いものだ……』

『彼の時、貴方が一杯機嫌で「雨の夜に日本近くねぼけて流れこむ」を唄つて踊つた時は面白かつたがね、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。』

『ハ、ハ、』と一緒に笑つたぎり河田翁は何も言はない。そして何となくそは〳〵して居る。

三十の年に愚人の無理强ひに屈して、養子に行き、養子先の娘の半狂氣に辛抱しきれず、遂に敬太郎といふ男の兒を連れて飛びだして了ひ、其兒は姉に預けて育てゝ貰ふ。其以後は決して寒帶せず、純然たる獨身者で到頭六十餘歳まで通して來たのが河田翁の一生である。

此獨身者が翁の不遇の原因をなしたのか、不遇が獨身者の原因であつたのか、これを判つことは出來ない。

義人で、酒も强ては飲まず、これといふ道樂もたく、出入交際の人々には義理を堅くして居て、そして遂に不遇で何時もまご〳〵して安定の所を得ず今日が日に及んだ翁の運命は不思議な事としか思へない。

其處で石井の人々初め翁を知て居る者は皆な『氣の毒な人だ』と言ひ又た不思議なことだと評して居る。しかし皆々言ひ合はしたやうに一致して居る「理由」が無いのでもない、第一、石井樣は意久地が無い。其證據には養子に行く前に深く言ひ交した女があつた、愈々養子に行くと定るや五圓で帶の片側を買つて、それを手切同樣に泣く〳〵別れた。第二に案外片意地で高慢な所があつて些細な事に腹を立て直ぐ御突して職業から離れて了ふ。第三に妙に遠慮深い處があること。

成程さう聞かされると翁の知人共の所謂る「理由」は多少の「理由」を成して居る。

けれど大なる理由が未だ無ければならぬ。人が若し壯年の時から老人の時まで、純然たる獨身生活、卽ち親子兄弟の關係からも離れて只だ一人、今の社會に住むなら並大抵の人は河田翁と同樣の運命に陷りはせまいか、老いて益々富み且つ榮えるものだらうか。

翁の兒敬太郎は翁と全然無關係で育ち且つ世に立た。そして二十五六の頃、八百屋を初めたが、間もなく止して、賣卜者になつた。且つ今は行方も知れない。そして見ると河田翁其人の眼底には「放浪」の血が流れて居るのではないか。それが敬太郎へも流込んだのではないか。

石井翁は無論斯ういふことを考へて研究もせず、たゞ氣の毒がる仲間の一人ゆゑ、何にかして今の境遇も聽いて見たいと思ひ、古い事まで話題にして見たが、河田翁は少しも引立ない。たゞそは〳〵して居る。

『何時でせうか』と河田翁は卒然聞いた。石井翁は帶の間から銀時計の大きいのを出して見て、

『三時半です。』

『イヤそれぢや最其行かなきやならん』と河田翁は口早に言つて、急に腰を浙め、四邊をきよろ〳〵見廻しながら、

『實は私此頃或婦人會の積金掛を爲て居るのですから、毎日々々東京中を遍回らされるので此歳では兎てもやり切れたくなりました、そこで最少し樂な仕事をと軽で歩きましたら、やつと旨い口が發見つたんです。それは食扶持一切先方持で月給が七圓だといふのです。それで身體を動かすことは餘り無いといふんですから早速それに決めたのです。ところが』と四邊を見廻はした上に更に延上がつて近所を見廻したが、一段聲を潜めて『私は大變なことを仕て居るんだ、兎角足らん〳〵で一圓二圓と費ひ込み到頭十五圓ほど會の集金を費ひ込で了つたのです。サアそれもチヤンと返して帳簿を整理して置かんと今の旨い口に行く事が出來ない。そこで此四、日其十五圓の御達に陥分駆廻りましたよ。やつと三十間堀の野口といふ舊友の幹が返濟の途さへ立てば貸してやらうといふ事になり、今日四時から五時までの間に先方で會ふことになつて居るのです。まアザッと斯んな苦しい譯で……けれど費込の一件は極く内密にお願ひします』と言つて起上り、石井翁が何も言ひ得ぬ中に河田翁は辭儀をペコ〳〵して去つて了つた。

石井翁は取殘されて茫然と河田翁の後姿を見送て居た。

河田翁が延び上がつて遠くまで見廻したのは巡査が可恐かつたのだ。そこで翁と巡査と揖遊つた時に河田翁は急に帽子に手をかけて禮をした。石井翁は見て居て其意味が解らなかつた。

（明治四十一年一月）

泣き笑ひ

時之助の母親は女中お光の歸るのを一刹千秋の思で待て居る。

『又た彼の魯鈍のことだから、のろくさ〳〵して居るのだらう、眞實に仕樣がないねえ』と大焦燥に焦燥て居る。

するとお光は果して顏る暢氣に、鼻歌でも唄はんばかりの樣子で歸つて來た、と母親には見受られたのである。いきなり、

『お光！　お光！　お前何をぐづ〳〵して居るのだねえ、眞實に！』

『へえ』と年は十七ばかりの、孤兒なるが故に可哀さうだと、東京から連れ歸つた女中が、眼をパチクリ〳〵、奥樣の顏を眺めて居る。

『「へえ」もないもんだ、それで片山の武さんは歸宅つて居ましたか。』

『へえ、片山の坊樣は歸宅つて居ました。』

『そんなら大村の坊樣は？』

『歸宅つて居ました。』

母親は急込んで、

『そんなら我家の坊樣は如何したか尋問ましたか。』

『へえ。』

『へえぢやアありません、眞實にお前のやうな大馬鹿がありますか、我家の坊樣の事を聞ないくらゐならお使に行つて何の役にたちます。』

『でも奥樣が只だ片山の坊樣と大村の坊樣が歸宅つたか聞て來いとお仰いましたから、それで……。』

『さう言ひましたとも、けれど何故我家の坊樣はと一言訊くことが出來ません』と白眼つけて、直ぐ奥に向て、

『眞實に貴方心配ですから、御自分で一寸と聞いて來て下さいませんか。』

夕闇海晴き緣側に涼んで居た休職判事の父親は又た悠然たるものである、團扇をバタリバタリ、

『まアお前のやうにワイ〳〵騒いだつて仕樣がないよ。必定寄道でもしたのだから、今に歸宅つて來るよ。』

『貴方もそんな暢氣な事ばかりおつしやつて萬一の事があつたら如何なさいます。』

『萬一の事とはどんな事だ。』

『萬一のことゝは萬一の事です。』

『我家の時が水へでも陷つたと言ふのだらう。』

『さうですとも。そんな事が無ともぎりません。連伴が少年のことですから驚いて逃て來て知らん顏をして居るなんて、よく東京でもあるぢやアありませんか。』

『そんな馬鹿々々しいことがあつてたまるものかね。第一お前は時等が釣魚に行く場處の模樣を知らないから、さういふこと言ふのだ、今日、時が釣に往つた處は平地で池の堤といふものがない、だから落ちやうがない。よしんば落ちたにしても足をのめりこます位のもので決して生命に被害はある筈がないのだ。必定、寄道を爲て居るのだよ』といはれて乙なことおつしやると言ひたさうな身構をして東京の奥樣。

『堤があるか無いか、昨年來たばかりの私にはお國の事は存んじませんが、もしか貴方が、斷て寄道を爲たのだとおぼしめすなら一寸と聞いて來て頂くわけに參りませんか知ら。片山の坊樣でも我家の時が寄道を爲たのか池に陷つたのか位は知て居なさる筈ですから』と東京式のせきこんだ調子で迫る。一方は平氣なもの、

『お前が心配するのだからお前が聞にゆけば可ぢやアないか。』

『行きますとも、そんなら私が行きます。』

『アレ奥樣、私が行ります。』

『いゝえ、私が行きます。お前などに報むと安心が出來ません。』

『いゝえ、私が參ります。』

『うるさいね。兩人で行つたら可いだらう』と父の一聲。

母親とお光は申しあはしたやうに沈默つて了つた。そして、こそ〳〵兩人は外方に出掛けた。

『お光や。お前は片山へ行つて聞いておいで。私は此處で待つて居るから。時は平時この道から歸るから。』

と言はれて家から四丁ばかりの淋しい辻に奥樣を殘してお光は再び片山の家へと急いだ。

夕月燈籠をこめて蓮池の香り高き處に母親は月に向つて立つて居た。暫時するとお光が歸つて來て、

『奥樣矢張坊ちやんは居殘りなんださうです。』

『一人でかえ。』

『へえ。』

『まア何といふ兒だらう、田舍道の一里上もある所へ遊びにゆきながら、日が暮れても歸つて來ないなんて……』

『今にお歸りになりますよ』とお光は奥樣の泣き出しさうな聲を聞て慰める。奥樣は無言で蓮池と屋敷との間を通ふ眞直な道を眺めて居たが、

『お前先へお歸り。そして風呂の下を見てお置き。私は少し此處で待つて見るから。』

『畏まりました』とお光の去つた後で、母親は「若しか」といふ場合を色々に想像して、胸の痛くなる程心配して待て居ると、間もなく蓮池の邊に小さな影が見えだした。だん〳〵近いて來るのを見ると、時之助らしい。けれども若しか又た他家の兒か、知ぬと心も空に見つめて居ると、釣竿を肩にして左手に魚籠を提げ、小聲で唱歌を歌ひながら來るのは正しく時之助である。

『時ぢやアありませんか』といふ一刹那、悲みを變じて喜びとなる。

『ヤア、母樣其處で何を爲て居るのです。』

『まア此兒は。何を爲て居る所ぢやありません。お前こそ斯んなに遲くまで何をして居たのです』といふ時、喜び變して怒となる。

『釣つて居ました。今日は澤山釣れましたよ。』

『最早これから決して釣魚にはやりません。』

『何故』

『何故もないもんです。さツさと、お歸りなさい。』

と母親は安心して先へ立ち歩めば時之助は平氣なもの、口笛を吹きながら續く。

流石に何程か心配になつてゐたと見えて父親は玄關先に立つて居たが二人の姿の門内に現るゝや、

『歸つた、歸つた！』と、にこ〳〵する。

『まア貴方如何でせう。居殘つて釣つて居たのですとサ、呆れた兒ぢやアありませんか。』

『時、お前が餘まり遲いので母樣大變心配しましたぞ』と父親から言はれても、それには答へず、

『今日は澤山釣れましたよ、今見せます』と言ひ捨てゝ裏へ廻はり、井戸邊で足を洗つて、魚籠を提げたまゝ座敷へ入ひり、洋燈の下で魚籠の蓋を取り、

『そら、こんなに釣れました。』

『どれ〳〵』と父親は覗込むで、

『成程これはお前にしては大漁だ』と感心する。

『隨分大きなの居ますよ。見せませう』と臺所へ飛んで行き、

『光、摺鉢をお呉れ。』

お光は摺鉢を渡しながら、

『大變遲うございましたことねえ。』

『默れ！』と摺鉢を奪取り、座敷に飛び歸つて、魚籠をあけると、大小四五十尾の鮎が銀光を放つて、ぞろ〳〵と出て來る。

『ねえ、父上此魚なぞ隨分大きいでせう。』

『なる程これは太い。』

『何になります。そんなものを十尾や五尾釣つて來て。眞實に人に心配ばかりかけて！』

と先程から父親が優しく言ふ程、劫腹がつて居た母親は我鳴りつける。

『ほゥだ』と時之助は喜しさうに鮎を眺めながらいふ。

『何が「ほゥ」です』と母親は睨みつける。

『だつて母上の國ぢやアこれが五尾か十尾でも、日本帝國は四十九尾ですからね。』

『百尾でも五尾でも其樣ものは同ことです、生意氣を言ふ。』

『でも此奴のやうな大きい鮎は母上見たことが無いでせう』と鮎の尾を摑んでぶらさけて見せる。

『何が大いものか。鼻へ捻り込めさうなものが何になります。』

『ほゥだ。』

『何が「ほゥ」です。』

『ほゥだ。』

『何が「ほゥ」です。』

『だつて母上の鼻の穴は隨分大い穴ですねえ。』

『何故です。』

『だつて此鮎が鼻へ捻り込れるのですもの。』

と平氣でいふのを聞いて父親は思ずくす〳〵と笑つた。

『まア此兒は、此兒は』と母親は口惜いので泣くのか、可笑いので笑ふのか、眼には涙、口元は笑味、呆れ返つて後の言葉が出ない。

（明治四十年三月）

都の友へ、B生より

（前略）

久しぶりで孤獨の生活を行つて居る、これも病氣のお藏かも知れない。色々なことを考へて久しぶりで自己の存在を自覺したやうな氣がする、これは全く孤獨のお藏だらうと思ふ。此溫泉が果して物質的に軀の健康に效能があるか無いか、そんな事は解らないが何しろ溫泉は惡くない。少くとも此處の、此家の溫泉は惡くない。

森閑とした浴室、長方形の浴槽、透明つて玉のやうな溫泉、これを午後二時頃獨占して居ると、くだらない實感からも、夢のやうな妄想からも脫却して了ふ。浴槽の一端へ後頭を乗て一端へ爪先を損て、ふはりと身を浮べて眼を閉る。時に薄目を開て天井際の光線窓を見る。碧に煌めく桐の葉の半分と、昔々無際限の大空が見える。老人なら南無阿彌陀佛〳〵と口の中で唱へる所だ。老人でなくとも此心持は同じである。

居室に歸つて見ると、ちやんと整頓て居る。出る時は書物やら反古やら風雜極まつて居たのが、物各々所を得て靜かに僕を待て居る。ごろりと轉げて大の字なり、座布團を引寄せて二つに折て枕にして又も手當次第の書を讀み初める。陶淵明の所謂る『不レ求二政僧一』位は未だ可いが時に一ページ讀むに一時間もかゝる事がある。何故なら全然で他の事を考へて居るからである。昨日も君の送つて呉れたチエホフの短篇集を讀んで居ると、ツイ何時の間にか「ボズ」さんの事を考へ出した。

ボズさんの本名は權十とか五郎兵衛とかいふのだらうけれど、此土地の者は唯だボズさんと呼び、本人も平氣で返事をして居た。

此以前僕が此處へ來た時の事である、或日の午後僕は澤流の下流で香魚釣を行つて居たと思ひ玉へ。其場所が全たく僕の氣に入つたのである、後背の涯からは劍木が枝を重ねて被かゝり、前は可り廣い澱が靜に渦を卷て流れて居る。足場はわざ〳〵作つた樣に思はれる程、具合が可い。此處を發見た時、僕は思つた、此處で釣るなら釣れないでも半日位は辛棒が出來ると思つた。處が僕が釣初めると間もなく後背から『釣れますか』と唐突に聲を掛けた者がある。

振り向くと、それがボズさんと後に知つた老爺であつた。七十近い、背は低いが骨太の老人で矢張釣竿を持て居る。

『今初めた計りです』と言ふ中、浮木がダイと沈んだから合すと、餌釣としては、中々大いのが上つた。

『此處は可なり釣れます』と老爺は僕に直ぐ傍に腰を下して煙草を喫ひだした。けれど一人が竿を出し得る丈の場處だからボズさんは唯見物をして居た。

間もなく又一尾上げるとボズさん、

『且那はお上手だ。』

『だめだよ。』

『イヤさうでない。』

『これでも上手の中かね。』

『此溫泉に來るお客さんの中ぢやア且那が一等だ』と大げさに讃めそやす。

『何しろ道具が可い』と言はれたので僕は思はず噴飯だし、

『それぢやア道具が釣るのだ、ハ、ハ、……』

ボズさん少しく狼狽いて、

『イヤ其は誰だつて道具に由ります。如何ら上手でも道具が悪いと十尾釣れるところは五尾も釣れません。』

それから二人種々の談話をして居る中に懇意になり、ボズさんが遠慮なく言ふ處によると僕の發見た場所はボズさんのあじろの一で、足場はボズさんが作つた事、東京の客が遠れて行けといふから一緒に出ると下手の瀞に釣れないと言つて怒つて直ぐ止す事、釣れないと言つて怒る奴が一番馬鹿だといふ事、温泉に來る東京の客には斯ういふ馬鹿が多い事、魚でも生命は惜いといふ事等であつた。

其日はそれで別れ、其後は互に誘ひ合つて釣に出掛て居たが、ボズさんの家は一室しかない古い茅屋で其處へ獨でわびしげに住んで居たのである。何でも無遠慮に話す老人、が身の上の事は成る可く避けて言はないやうにして居た。けれど遠まはしに聞き出した處によると、田之浦の者で倅夫婦は百姓をして可なりの生活をして居るが、其夫婦のしうちが氣に喰ぬと言つて十何年も前から一人で此處に住んで居るらしい、そして倅から食ふだけの仕送りを爲て貰つてる樣子である。成程さう言へば何處か固拗なところもあるが、僕の思ふには最初は頑固で行つたのながら後には却つて孤獨のわび住ひが氣樂になつて來たのではあるまいか。世を遁がれた人の趣があるのは其理由であらう。

其處で僕は昨日チエホフの「ブラックモンク」を讀さして思はずボズさんの事を考へ出し、其以前二人が溪流の處深く泝つて「やまめ」を釣つた事など、それからそれへと考へると堪らなくなつて來た。實は今度來て見ると、ボズさんが居ない。昨年田之浦の本家へ歸つて亡なつたとの事である。

事實、此世に亡い人かも知れないが、僕の眼にはあり〳〵と見える、菅笠を冠つた老爺のボズさんが細雨の中に立て居る。

『病氣に良くない』雨が降りさうですから』などと宿の者がとめるのも聞かず、僕は竿を持て出掛けた。人家を離れて四五丁も泝ると既に路もなければ畑もない。たゞ左右の蘆蒲と其間を迂回り流るゝ溪水ばかりである。瀾を辿つて奥へ奥へと泝るに連れて、此處彼處、舊遊の渡の小蔭にはボズさんの菅笠が見えるやうである。嘗てボズさんと鞭當を食べた事のある、平い岩まで來ると、流石に僕も疲れて了つた。元より釣る氣は少しもない。岩の上へ立てチツとして居ると寂しいこと、靜かなこと、深谷の氣が身に迫つて來る。

暫時くすると箱根へ越す峻嶺から雨を吹き下して來た、霧のやうな雨が斜に僕を掠めて飛ぶ。直ぐ頭の上の草山を灰色の雲が切れ〳〵になつて駈る。

『ボズさん！』と僕は思はず涙聲で呼んだ。君、狂氣の眞似をすると言ひ玉ふか、僕は實に滿眼の涙を落つるに任かした。

（明治四十年七月）

湯ヶ原ゆき

《一》

定めし今時分は閑散だらうと、其閑散を狙つて來て見ると案外さうでもなかつた。殊に自分の投宿した中西屋といふのは部屋數も三十近くあつて湯ヶ原温泉では第一といはれて居ながら而も空室はイクラもない程の繁盛であつた。少し當は違つたが先づ〳〵繁盛に越した事なしと斷念めて自分は豫想外の室に入つた。

元來自分は大の無性者にて思立た旅行もなか〳〵實行しないのが今度といふ今度は女人や家族の切なる勸告でヤッと出掛けることになつたのである。「其處に骨の人行く」といふ文句それ自身がふら〳〵と新宿の停車場に着いたのは六月二十日の午前何時であつたか忘れた。兎も角、一汽車乘り遲れたのである。

同伴者は親戚の伯母であつた。此人は途中萬事自分の世話を燒いて、病人なる自分を湯ヶ原まで送り屆ける役を持て居たのである。

『どうせ待つなら品川で待ちませうか、同じことでも前程へ行つて居る方が氣持が可いから。』

と自分がいふと、

『ハア、如何でも。』

其處で國府津までの切符を買ひ、品川まで行き、其プラットホームで一時間以上も待つこと丶なつた。十一時頃から熱が出て來たので自分はプラットホームの泥中に設けある四方硝子張の待合室に入つて小さくなつて居ると呑氣なる伯母はそんな事とは少しも御存知なく待合室を出て見たり入つて見たり、煙草を喫て見たり、自分が折り折り話しかけても只だ『ハア』『さう』と答へらるゝだけで、沈々默々、空々漠々、三日でも斯うして待ちますよといはぬ計り悠然、泰然、茫然、呆然たるものであつた。其中汽く神戸行が新橋から來た。特に國府津止の箱が三四輛連結してあるので紅帽の注意を幸にそれに乘り込むと果して同乘者は老人夫婦きりで頗る空て居た、待ち疲れたのと、熱の出たのとで少なからず弱て居る身體をドッかと投げ下すと眼がグラついて思はずのめりさうにした。

前夜の雨が晴て空は薄雲の隙間から日影が洩ては居るものゝ梅雨季は爭はれず、天際は重い雨雲が被ひ重なつて居た。汽車は御丁寧に各駅を拾つてゆく。

『伯母此處は梅で名高い蒲田ですね。』

『さう？』

『伯母田植が盛んですね。』

『さうね。』

『御覽なさい、眞白な帶を結めて居る娘も居ますよ。』

『さうね。』

『伯母川崎へ着きました。』

『さうね。』

『伯母お大師樣へ何度お參りになりました。』

『何度ですか。』

これでは何方が病人か分なくなつた。自分も斷念めて眼をふさいだ。

《二》

トロリとした間に鶴見も神奈川も過ぎて平沼で眼が覺めた。僅かの假寐ではあるが、それでも氣分がサッパリして多少か元氣が附いたので

慧ずまに伯母に、

『横濱に寄らないだけ未だ可う御座いますね。』

『ハア。』

是非もないことゝ自分も斷念めて喫煙には大敵と知りながら煙草を喫ひ初めた。老人夫婦は鎖りと話して居る。而もこれは婦の方から種の種の問題を持出して居るやうだ、そして多少か烟いといふ氣味で男はそれに說明を與へて居たが隨分丁寧な者で決して、

『ハア』『さう』の比ではない。

若し或人が伯母の背後から其背中をトンと叩いて『伯母！』と叫んだら『オヽ』と驚いて四邊をきよろ〳〵見廻して初めて自分が汽車の中に在ること、旅行しつゝあることに氣が附くだらう。全體旅をしながら何物も見ず、見ても何等の感興も起さず、起しても其を折角の同伴者と語り合て更に興を增すこともしないなら、初めから其人は旅の面白みを知らないのだ、など自分は獨り腹の中で憫笑つて居ると、

『あれは何でせう、そら彼の山の頂邊の三角の家のやうなもの。』

『どれだ。』

『そら彼の山の頂邊の、そら……。』

『どの山だ。』

『そら彼の山ですよ。』

『どれだよ。』

『まア貴下あれが見えないの。ア、最早見えなくなつた。』

と老婦人は殘念さうに舌打をした。伯母は一寸と其方を見たばかり、此時自分は思つた、伯母よりか老婦人の方が幸福だと。

そこで自分は「對話」といふことに就て考へ初めた、大袈裟に言へば「對話哲學」又たの名を「お喋舌哲學」に就て。

自分は先づ劈頭第一に『喋舌る事の出來ない者は大馬鹿である。』

《三》

『喋舌ることの出來ないのを稱して大馬鹿だといふは餘り殘酷いかも知れないが、少くとも喋舌らないことを以て甚く自分で豪らがる者は馬鹿者の骨頂と言つて可ろしい、而して此種の馬鹿者を今の世にチヨイ〳〵見受けるには情ない次第である。

『旅は道連、世は情といふが、世は情であらうと無からうと別問題として旅の道連は難有たい、マサカ獨りでは喋舌れないが二人なら對手が泥棒であつても喋舌りながら歩くことが出來る』

など、それからそれと考へて居るうち又眠くなつて來た。

睡眠は安息だ。自分は眠ることが何より好きである。けれど爲うことなしに眠るのはあたら一生涯の一部分をたゞで失くすやうな氣がして頗る不愉快に感ずる、處が今の場合、如何とも爲がたい、眼の閉るに任かして置いた。

幾分位眠つたか知らぬが夢現の中に次のやうな談話が途斷れ〳〵に耳に入る。

『貴方お腹が空きましたか。』

『……甚く空いた。』

『私も大變空きました。大船でお辯を買ひませう。』

成程こんな談を聞いて見ると腹が空いたやうである。まして沈默家の特長として伯母も必定さうだらうと、

『伯母お腹が空きましたらう。』

『イヽエ、さうでも有りませんよ。』

『大船へ着いたら何か食べませう。』

『今度が大船ですか。』

『私は眠て居たから能く分りませんが』と言ひながら外景を見ると戸山樹林の容樣が正にそれなので、

『エヽ、最早直ぐ大船です。』

『大變早いこと！』

《四》

大船に着くや老夫婦が邊早く押ずしと辨當を買ひこんだのを見て自分も其眞似をして同じ物を求めた。頸筋は豚に似て髭までが其らしい老人は辨當をむしやつき、少し上方辯を混ぜた五十幾歲位の老婦人はすしを頬張りはじめた。

自分は先づ押ずしなるものを一つ摘んで見たが酢が利き過ぎてとても喰へぬのでお止めにして更に辨當の一隅に箸を着けて見たがボロ〳〵飯で病人に大毒と悟り、これも御免を被り、元來小食の自分、別に苦にもならず總てを伯母にお任して茶ばかり飲んで內心一の慰を懷きながら老人夫婦をそれとなく觀察して居た。

『何故「ビールに正宗……」の其何れかを買ひ入れなかつたらう』といふが一の慰である。大船を發して了へば最早國府津へ着くのを待つ外、途中何も得る事は出來ないと思ふと、淺間しい事には猶ほ殘念で堪らない。

『酒を買へば可かつた。惜しいことを爲た。』

『ほんとに、さうでしたねえ』と誰か合槌を打て呉れた、と思ふと大邊の暮中、伯母は今しも下を向て蒲鉾を食ひ缺いて居らるゝ所であつた。

大磯近くなつて漸と諸君の晝飯が了り、自分は二個の空箱の一には笹葉が殘り一には煮有の汁の痕だけが殘つて居る奴をかたづけて腰掛の下に押込み、老婦人は三個の空箱を丁寧に重ねて、傍の風呂敷包を引寄せ其に包んで了つた。最も左樣する前に、老人と小聲で一すと相談があつたらしく、金貸らしい老人は『勿論のこと』と言ひたげな樣子を首の振り方で見せたのであつた。

此二の悲劇が終つて彼是する中、大磯へ着くと女中が三人ばかり老人夫婦を出迎に出て居て、其一人が窓から渡した包を大事さうに受取つた。其中には空虛の折箱も三ツ入つて居るのである。

汽車が大磯を出ると直ぐ（吾等二人ぎりになつたので）、

『伯母今の連中は何者でせう。』

『今のッて何に？』

『今大磯へ下りた二人です。』

『さうねえ。』

『必定金貸か何かですよ。』

『さうですかね。』

『でなくても左樣見えますね。』

『婆樣は上方者ですよ、ツルリンとした顏の何處に「間抜の狡猾」とでも言つたやうな所があつて、ペチヤクリ〳〵老爺の機嫌を取て居ましたね。』

『さうでしたか』

『妾の古手かも知れない。』

『貴君も隨分口が惡いね』とか何とか伯母が言つて呉れると、益々惡口雜言の眞價を發揮するのだけれども、自分のは合憎く甘い言をトントン拍子で言ひ合ふやうな對手でないから、間の抜けるのも是非がない。

《五》

箱根、伊豆の方面へ旅行する者は國府津まで來ると最早目的地の傍まで着いた氣がして心も勇むのが常であるが、自分等二人は全然そんな樣子もなかつた。不好な處へいや〳〵ながら出かけて行くのかと怪まるゝばかり不承無承にプラットホームを出て、紅軒に案內されて兎も角も茶屋に入つた。

伯母は兎につまゝられたやうな顏つきをして、自分は狼につまゝられたやうな顏をして（多分他から見ると其樣顏であつたらうと思ふ）

『やれ〳〵』とも『先づ〳〵』とも何とも言はず女

中のすゝめる椅子に腰を下した。

自分は伯母に『これから何處へ行くのです』と問ひたい位であつた。最早我慢が仕きれなくなつたので、伯母が一寸と立て用たしに行つた間に正宗を命じて、コップであふつた。伯母の來た時は最早コップも空壜も無い。

思ひきや此藝當を見ながら、

『ヤア、これは珍らしい處で』と景氣よく聲をかけて入つて來た者がある。

可哀さうに景氣のよい聲、肺臓から出る聲を聞いたのは十年ぶりのやうな氣がして、自分は思はず立上つた。見れば友人M君である。

『何處へ？』彼は問うた。

『湯ヶ原へ行く積りで出て來たのだ。』

『湯ヶ原か。湯ヶ原も可いが、此頃の天氣ぢやアうんざりするナア。』

『君は如何したのだ。』

『僕は四五日前から小田原の友人の宅へ遊びに行て居たのだが、雨ばかりで閉口したから、これから歸京らうと思ふんだ。』

『湯ヶ原へ行き玉へ。』

『御免、御免、最早飽き〳〵した。』

平凡な會話ぢやアないか。平常なら當然の挨拶だ。併し自分は友と別れて電車に乗つた後でも氣持がすが〳〵して清涼劑を飲んだやうな氣がした。おまけに先刻の手早き驚當が其效果を現はして來たので、自分は自分と腹が定まり車窓から雲霧に埋れた山々を眺め、

『走れ走れ電車。』

岡太郎馬車のやうに喇叭を吹いて異れると更に妙だと思つた。

《六》

小田原は街まで長い其入口まで來ると細雨が降りだしたが、それも降りみ降らずみたいした事もなく人車鐵道の發車點へ着いたのが午後の何時。半時間以上待たねば人車が出ないと聞いて茶屋へ上り今度は大びらで一本命じて空腹へ刺身を少ばかり入れて見たが、惡酒なるが故のみならず元來八度以上の熱ある病人、甘味からうら苦がない。悉くやめてごろり轉がるとがつかりして身體が解けるやうな氣がした。旅行して旅宿に着いて此がつかりする味は又特別なもので、「疲勞の美味」とでも言はうか、然し自分の場合はそんなどころではなく病が手傳つて居るのだから鼻から出る息の熱を今更の如く感じ、最早や身動きするのもいやになつた。

しかし時間が來れば動かぬわけにいかない、只だ人車鐵道さへ終れば最早着いたも同樣と其を力に箱に入ると中等は我等二人ぎり、廣いのは難有いが二時間半を無言の行は恐れ入ると思つて居ると、巡査が二人入つて來た。

一人は張飛の痩て弱くなつたやうな中老の人物。一人は關羽が鬚髯を剃り落して退隱したやうな中老以上の人物。

痩せた張飛は眞鶴駐在所に勤務すること既に七八年、齋藤巡査と稱し、退隱の關羽は鈴木巡査といつて湯ヶ原に勤務すること實に九年以上であるといふことは、後で解つたのである。

自分の註文通り、喇叭の聲で人車は小田原を出發た。

《七》

自分は如何いふものかガタ馬車の喇叭が好きだ。回想も聯想も快な面白い。春の野路をガタ馬車が走る、野は菜の花が咲き亂れて居る、フワリ〳〵と生溫い風が吹いて花の香が狹い窓から人の面を掠める、此時御者が陽氣な調子で喇叭を吹きたてる。如何やら嫁いびりの胡麻白爺さんでも此時だけはのんびりして幾干か寛心に立ちかへるだらうと思はれる。夏も可し、清明

の季節に高地の坦道を走る時など更に可し。

ところが小田原から熱海までの人車鐵道に此喇叭がある。不愉快千萬な此交通擾關に此鳴物が附いてる丈けで如何か興を助けて居るとは兼て自分の思つて居たところである。

先づ二臺の三等車、次に二等車が一臺、此三臺が一列になつてゴロ〳〵と停車場を出て、暫時くは小田原の場末の家並の間を上には人が押し下には車が走り、走る時は喇叭を吹いて進んだ。

愈々平地を離れて山路にかゝると、これからが初まりと言つた調子で張飛巡査は何處からか煙管と煙草入を出したがマッチがない。關羽も持て居ない。これを見た伯母は徐に袖から取出して、

『どうかお使ひ下さいまし。』

と丁寧に言つた。

『これは〳〵。如何もマッチを忘れたといふやつは始末にいかんものでの。』

と巡査は一ぷく點火てマッチを伯母に返すと伯母は生眞面目な顏をして、其を受取つて自身も煙草を喫ひはじめた。別に海洋の絶景を眺めようともせられない。

どんより曇つて折り〳〵小雨さへ降る天氣ではあるが、風が全く無いので、相模灣の波靜に太平洋の煙波夢のやうである。噴煙こそ見えないが大島の影も朦朧と浮かんで居る。

『伯母どうです、佳い景色ですね。』

『さうねえ。』

『向うに微に見えるのが大島ですよ。』

『さう？』

此時二人の巡査は新聞を讀んで居た。關羽巡査は眼鏡をかけて。人車は上だからゴロゴロと徐行して居た。

《八》

景色は大いに變化に乏しいから初めての人なら兎も角、自分は既に幾度か此海と此棧道に慣れて居るから强て眺めたくもない。伯母が定めし珍しがるだらうと思つて居たのが、例の如く簡單な御挨拶だけだから張合が拔けて了つた。新聞は今朝出る前に讀み盡して了つたし、本を讀む元氣もなし、眠くもなし、喋舌る對手もなし、あくびも出ないし、さて斯うなると空々然、漠々然、何時か伯母の氣が自分に乗り移つて血の流動が次第々々にのろくなつて行くやうな氣がした。

江の浦へ一時半の間は上であるが多少の高低はある。下りもある。喇叭も吹く、斯くて棧道にかゝつてから第一の停留所に着いた、所の名は忘れたが此處で熱海から來る人車と入りちがへるのである。

巡査は此處で初て新聞を手離した。自分はホッと呼吸をして我に返つた。伯母はウンともスンとも言はれない。別に我に返る必要もなく又た返るべき我も持て居られない。

『此處で又暫時く待たされるのか。』

と眞鶴の巡査、則ち張飛巡査が言つたので、

『いつも此處で待されるのですか。』

と自分は思はず問うた。

『さうとも限りませんが熱海が遲くなると五分や十分此處で待たされるのです。』

肥丁は車を離れて水を呑むもあり、皆掛茶屋の緣に集つて休んで居た。此處は谷間に據る一小村で急斜面に茅屋が段を作つて叢つて居るらしい、車を出て見ないから能くは解らないが漁村の小なる者、蜜柑が山の產物らしい。人車の軌道は村の上端を横つて居る。

雨がポッ〳〵降つて居る。自分は山の手の方をのみ見て居た。初めは何心なく見るともなしに見て居る内に、次第に今見て居る前面の光

景は一幅の俳畫となつて現はれて來た。

《九》

軌道と直角に細長い茅葺の農家が一軒ある、其の裏は直ぐ山の畑に續いて居るらしい。家の前は廣庭で麥などを乾す所だらう、廣庭の突きあたりに物置らしい屋根の低い茅屋がある。母家の入口はレールに近い方にあつて人車から見ると土間が半分ほどはすかひに見える。

入口の外の軒下に楕圓形の掘風呂があつて十二三の少年が入て居るのが最初自分の注意を惹いた。此少年は其の日に焼けた背中ばかり此方に向けて居て決して人車の方を見ない。立つたり、しやがんだりして居るばかりで、手拭も持て居ないらし、又た何時出る風も見えず、三時間でも五時間でも一日でも、あアやつて居るのだらうと自分には思はれた。廣庭に向た釜の口から青い煙が細々と立昇つて軒先を掠め、ポツポツ雨が其中を透して落ちて居る。半分見える土間では二十四五の女が手拭を姉様かぶりにして上りがまちに大盥程の桶を控へ何物かを飾にかけて專念一意の體、其桶の前に七ッ八ツの少女が坐りこんで見物して居るが、これは人形のやうに動かない、風呂の中の少年も同じくこれを見物して居るのだといふことが自分にやつと解つた。

入口の彼方は長い籬側で三人の少女が坐つて居て、其一人は此方を向き今しも十七八の姉様に髪を結つて貰ふ最中。前髪を切り下て可愛くも人形のやうに順しくして居る、廣庭では六十以上の両も何れも達者らしい婆さんが三人立て居て其一人の赤兒を背負て腰を曲げ居るのが何事か婆さん聲を張上げて喋舌つて居ると、他の二人の婆様は合槌を打つて居る。けれども三人とも手も足も動かさない。そして五六人の同じ年頃の子供がやはり身動きもしないで婆さん達の周圍を取り卷いて居るのである。

眞黒な艶の佳い洋犬が一匹、腮を地に着けて臥べつて、耳を垂れたまゝ是れ赤尾をすら動かさず、廣庭の伸間に加はつて居た。そして母屋の入口の軒蔭から燕が出たり入つたりして居る。

初めは俳畫のやうだと思つて見て居たが、これ實に畫でも何でもない。細雨に暮れなんとする山間村落の生活の最も靜かなる部分である。谷の奥には墓場もあるだらう、人生悠久の流が此處でも泡立ぬまでの渦を卷いて居るのである。

《十》

隨分長く待たされたと思つたが實際は十分ぐらゐで熱海からの人車が威勢能く喇叭を吹きたてゝ下つて來たので直ぐ入れちがつて我々は出立した。

雨が次第に強くなつたので外面の模様は陰鬱になるばかり、車内は退屈を增すばかり、眞鶴の巡査がとう〳〵、

『何處へ行しやいます』と口を切た。

『湯ヶ原へ行うと思つて居ます』と自分がこれに應じた。思つて居るどころか、今現に行きつゝあるのだ。けれど斯う言ふのが溫泉場へ行く人、海水浴場へ行く人乃至名所見物にでも出掛る人の洒落た口調である、キザな言葉たるを失はない。

『湯ヶ原は可い所です、初めてですか。』

『一二度行つた事があります。』

『宿は何方です。』

『中西屋です。』

『中西屋は結構です、近來益々可いやうです。さうだね君。』

と兎角言葉の少ない鈴木巡査に賛成を求めた。

『さうです。實際彼の家が今一番繁盛するでせう』と關羽の鈴木巡査が答へた。

先づこんな有りふれた問答から、だん〳〵談話に花がさいて東京博覽會の噂、眞鶴近海の魚漁談等で退屈を免れ、やつと江の浦に達した。

『サアこれから下りだ』と齋藤巡査が威勢をつけた。

『伯母これから下りですよ。』

『さう。』

『隨分亂暴だから用心せんと頭を打觸ますよ。』

『さうですか。』

* * * *

齋藤巡査が眞鶴で下車したので自分は談敵を失つたけれど、湯ヶ原の入口なる四川までは、退屈する程の隔離でもないので困らなかつた。

日は暮れかゝつて雨は益々强くなつた。山々は悉く雲に埋れて僅かに其麓を現すばかり。我々が四川で下りて、更に人力車に乘りかへ、湯ヶ原の溪谷に向つた時は、さながら雲深く分け入る思ひがあつた。

渚

K生が輪地先から親友のT君へ送つた手紙を集めて「渚」と題したのである。「渚」には種種のものが漂着するが、どうせろくな物は無い。加之に悉く斷片で滿足な代物は一個もないといふ意味である。輪地先が海岸だからでもある。

K生の病氣は呼吸器病だ。熱の有る時と無い時とある。手紙は無い時書くが熱が出て來ると中止して其まゝ封じて了ふ。だから愈々要領を得て居ない場合がある。

《一》 里芋

今日太陽が落ちかゝつてから散歩に出た。斷崖の上の孤屋を出ると野は淋しい。家の前の村道は人一人通らない。畑は此頃刈り盡されて眼界が俄に廣くなつた氣がする。廣い〳〵野原が秋の末寂寥しく天外の連山に接して居る。

生きるか死ぬるか解らない病人が一人ぶらぶらと此野末を歩いて居る。それが僕だ。可哀さうに蒼白い顔して深い喘息すらも得爲ないで、取留もない事を思ひながら歩いて居る。それが僕だ。

常信柱の尖頭しか見えなかつた驛道を忙急しさうに往來する人や車が小さく黑く見えるやうになつた。日暮だから其もちらりほらりだ。

三坪ばかりの里芋畑が路傍にあつた。周圍の隣稻や粟が刈り取られて、こればかりが黑い土から畑らしく殘つて居る。そよ吹く風もなく方幾里の野は森として居る中に、此畑の里芋の葉は、ふら〳〵と動いて居る、心臟形を引延したやうな廣い葉が相並んで左右に頭を振て居る樣は器械仕掛のやうだ。思ふに吹かじと見ゆる秋風は低く地に潜んで流れて居るのであらう。僕はちよつと佇立まつて之を見て居たが、

いやだ〳〵と畑の里芋は
かぶり振り〳〵子が出來る

といふ里歌を思ひ出した。何故そんないやな里歌を思ひだしたかと責めたつて仕方がない。其處に「畑の里芋」が歩いて來る。

十八九の娘が何か口の中で僕に挨拶して行き過ぎた、草履を背負つて古手拭を冠つて跣足である。丸顔で愛嬌はあるが並の田舍娘だ。

此「里芋」の身の上を僕の聞いて居る丈け話すと極めて簡單である。今年の春、此里から五六里離れた某村から二人の娘と、一人の若者が此里へ流れこんだ。

『何故又た其駈落ち者と一同になつて飛び出したのだらう。』

『何故ですか』と家の嫁は氣のない返事をする。

『二人で一人の男に惚て居たのぢやないか。』

『さうかも知れません。』

『それなら彼奴は捨てられたのだ。可哀さうに。』

『なアに平氣な者です。』

『まさか平氣でもあるまい。可哀さうに』と、僕は頻りと可哀さうがつても嫁やさんは澄したもので、

『だつて最早腹が膨れて來たぢやアありませんか』と言つた。

僕は此時初めて此娘が妊娠して居ることを知たのだ、その後氣をつけて見ると腹が膨くれて居るやうに見えるが、未だ眼に餘る程ではない。

要するに三人で駈落して、間もなく此娘だけ

此里に取殘され、今更我が村にも歸り惡いといふので僕が今住んで居る別莊の世話をして居る何屋に賴み屋人同樣に使はれて居るのである。そして何時の間にか妊んだ。そして其親芋は誰であるか僕は知らなかつた。

僕は散歩から歸つて嫁やさんに、

『ネ嫁やさん、そら何屋のこれサ』と腹の膨れて居る手眞似をして『あれは何と言つたけね、名は。』

『お菊やんですか、それが如何かしましたか』と笑ひながら尻上りの言葉で聞いた。

『今其處で逢つたが仲々愛嬌のある眼元をして居るね。』

『今夜お入浴を貰ひに來ましたら旦那樣がさう云つたと喜こばして遣りませう。』

それから僕は夕飯を食ひながらお菊の相手は如何な男だと聞くと、嫁やさんは初の中は笑つて言はなかつたが僕が『それぢやア僕が言つて見せようか、何屋のこれだらう』と親指を出したので喫驚して其を打消し、とう〳〵白狀して了つた。

無論判然したことは言へないがお菊やんの相手は二人あるらしい。其一人は漁船の若者で一人は或百姓の隱居だといふことである。

行末は如何なるだらう。斯ういふ女は其場に臨んで行案ると思ひ切つたことをするものである。若し二人の男に捨てられたら防波堤の鼻から飛び込み兼ねない、可哀さうに斯ういふ女は自殺の術を知つて居る獸だ。それも優しい小羊だから猫ほみいじめだ。——と僕は感ぜざるを得ない。

疲勞たから最早筆を擱めるが、今僕が書いて居る中に、そら、湯殿でお菊の聲が聞こえる。嫁の嫁やさんと何事か面白ろさうに土地訛で話して居る……。

《二》 單調

君の手紙を見ると色々な事が言ひたくなる。然し口から耳へでないから猶しく感ずるばかりだ。

此三四日晴天續きで病人には幸福である。日出るより日入るまで緣を廻つて日光が射込むから隨分溫暖である。溫暖は僕に取つて何よりの藥剤だ。但し東風が太平洋から頻りなしに吹きつけるから壯健者は兎も角僕は外出が困難である。海濱に居て風のない日を求めるのは求める方が無理かも知れない。

霧は絶無だ、空氣は澄みきつて居る。近郊には林を見受ない、たゞ見渡す限り平板な畑が際限なく連なつて居るばかり。斯くて海も單調、陸も單調、これが此地の特色とでも言はうか。とても南方の國の海岸のやうに參らない、伊豆半島の如く高嶺の半腹を無心の雲が悠々浮動するなど思ひも及ばぬことだ。さればとて又武藏野郊外の雜木林の風趣など藥に爲たくも無い。

單調又た單調！　森漫たる太平洋を眺め入れば實に單調北物である。其廣大なるだけ其れだけ單調の感が深い。そして更に單調なる大空が無際限の色を其上に乘て、水と空と相呼應して居るのを眺めては、遂には宇宙其物の單調を思はざるを得ない。

單調は「氷結せる永遠」の聲だ。單調は死滅だ。實に人をして消魂に堪へざらしむる。神秘！　神秘！　此に於て人が神秘に唯一の逃路を求めるのは是非もない事だと僕は思ふ。

《三》 田舍町

僕の家に黑瓦の深い寫眞箱がある。多分君も見たことがある筈だ。種々の寫眞が混雜に入てある。其中に田舍町らしい所を縱に撮つた寫眞がある。何時ごろから此寫眞が僕の——といふよりか家の寫眞箱に入つて居るのか知らない

が、僕が寫眞箱を引攫き廻す毎にちよい〳〵と澤山の寫眞の中から現はれて僕の眼に觸れる、僕は氣にも止めず、しみ〴〵手に取つて見たこともなかつた。

所が此處に轉地する前の晩、寫眞箱を持ち出して從來に遊んだことのある名所や溫泉や海岸などの寫眞を攫り出して見て居ると側の田舍町の寫眞が出て來た。

古いので多少か變色して居るが然し明亮して居る。初めて手に取つて能く見た。何處だか全然解らない。何しろ僕の知らない場所だ。家並は揃つて居ないが其でも町の姿は出來て居る。

この寫眞こそ今度僕が初めて來た此地の町であつたといふ譯ではない。さうではない。此寫眞を見た時の心持と昨日の夕暮に初めて此處の町を散歩した時の心持と同じであつたといふのである。

僕は寫眞を見て色々の感想に耽つた。間近の家の軒下に一人の男が立て居る。往來はさびれて人ッ子一人通つて居ない。既に寫眞である以上、天涯地角、何處かに此町が現存して居るに相違ない。併し僕とは何の緣もない。緣がないだけ、つく〴〵と眺め入れば入るほど言ひ知れぬ懷かしい心持が加はつて來る。寫眞を横にしても縱にしても、隱れた家の見える筈はないが而も僕は如何かして軒先しか見えない家を能く見た心地がした。冬ならば雪も降らう、雨の日は尙ほ淋びしからう、夜は軒先に燈火もちらつくだらう、彼の男は今も生きてるだらうか、など思ひつゞけた。

然るに僕が此地に來て一月以上にもなるが、昨日の夕暮、所謂るかはたれ時に初めて町を散歩して見た。褞袍の上に帶をしめたまゝで、別莊を出て暫時夕闇に立つて居たが、ふと坂を下る氣になつて今までは庭先から眼の下にのみ見て居た此處の町端れに出た。町とは名のみ凸凹した礫原道を挾んで家が並んで居るばかりである。道の兩側に小溝があつて家の前に人が通るだけの板が渡してある。僕は何思ふとなく此町の入口に立て居た。此時僕の心にしんみりと滲やかに流れこんだ心持は則ち彼の寫眞を見た時の心持と同じであつた。彼は寫眞、これは實物。而も僕か全然、この一圖の人寫に緣もゆかりもないことは同じである。これが過去千年の昔であらうと、將た渦卷き疊なる夏雲の谷間に眠る町であらうと同じである。時も場所も無關係である。たゞ此處に血あり肉あり、生あり死あり、戀あり恨あり嘆あり喜ある人の世が僕の前に横はつて居るのである。聊げて永劫の海に落ちゆく世々代々の人生の流の一支流が僕の前に横はつて居るのである。

僕はのそり〳〵と歩いた。寫眞でないから何の家でも見られる。軒先に立つて暮れゆく空を茫然と眺めて居る男も居た。

小さな石橋を渡ると右へ入る狹い横道がある。突然女の叫ぶ聲が其間から聞えた。聲を限りに罵り叫喚いて居るらしい。僕は思はず其横道に入つた。

此處まで書いて來たが、最早疲れ果てたから簡單にする。

年頃五十計の狂婦がたゞ一人叫ぶのであつた。

『畜生！　恩知らず、惡黨、馬鹿親爺！』これだけの事を繰返し〳〵怒鳴つて居たのである。

そして僕が別莊に歸つて見ると一人の老人が訪ねて來て居た。此老人が狂女の所謂る惡黨の恩知らずであつた。

詳しいことは次便に申上げる。風が出て海が鳴つて居る——。

（明治四十年十二月）

岡本の手帳

左は「牛肉と馬鈴薯」の主人公、岡本誠夫の手帳より拔き書きせしものなり、此主人公に同情ある人には多少の興味あるべし

○

わが願は世のつねの願にあらず。この願の叶ふ時はいつなるべきか、わが命の此世にある間、叶ふまじとも覺ゆる。もし然る時はわれ五十、七十、百歲の壽を保ち得んも、そは空しき夢の命のみ、われは此世の人の命をば夢の如きものと觀ずることなきにもあらねど、人生は眞面目たるもの在りといふがわれの信念ぞかし、然るにもし此願叶はずして在らば、わが命はまことに夢よりも空しきものならん。一生を夢と送る、これにも增して哀れのことやあるべき。この願とは何ぞや。げに世の常の願にはあらず。かゝる願を懷くもの今の世に多くありとしも覺えず、われはこれを悲むものなり、世の人は夢の如くに一生を送るなり、われはこれをあはれむ。この願いだかぬ人は影絵の如き人ぞかし。これ誇りたる言葉にあらず、われはかく信じて疑はざるなり。

わがこの願の叶ふと叶はざるとは偏に神のみ心にあることなれど、わがこの願を懷くことはまことに神のめぐみなり、われはかく信じて疑はず、わが幸をよろこぶものなり。この願を懷くわれをわれみづから幸なりと信ずるものなり。この願もしも叶はゞ神のみめぐみ幾千萬人のものにも增して此あはれなるわが上に厚きなり。幾千億の人々は此願を懷くことだにせずして其命を了りたり

全世界の人、悉くこの願を懷く能はずとも、われは此願を追ふべし。わが斯く言ふはすでに此願の幾分をとげ得たればならんと思はる。少しも見ることなくば、見んことを願はざる人も或る奇しき物の端をだに垣間見んか、かれの願ひはさらに能く見んことなるべし。このゆゑにわがこの願の叶はんことを切に願ふは、この願の少く叶ひ居ればなり。げに然り。げに然り。

この願とは何ぞや。如何なる願ぞや。

わが願は遂げ得て又破れたり。わが妻、これを捨てゝ走りぬ。このゆゑにわが肉と心とのなやみしこと幾何ぞや。今も今とてわが心はこの傷に苦みつゝあり、今もなほをり〳〵神に祈ることは彼人の心に眞の情の泉ふたゝび漏て流れ、わがこの傷を清め醫さんことなり。されどこれわが切なる「この願」に非ず。詩人たらんことにや、あらず、剛强正大の政府を樹立して今の吾國を救はんことにや、あらず、其督教を吾國民唯一の宗教となさんことにや、あらず、これらはわが空想のみ、夢想のみ、「この願」には非ず。愛と信と義とを完うせんことにや、あらず、君子たらんこと、聖人たらんこと、偉丈夫たらんこと、これ皆「この願」にはあらざるなり。

山林の自由の生涯にや、嗚呼われは實に山林の自由を希ふものなり、わが血はこのために躍るぞかし。山林に自由存す、われ此句を吟ずる時、わが筋肉の波立つを覺ゆ、言ふ可からざる誇、まなじりの光となる。されど、これ亦、わが切なる「この願」にはあらず。

嗚呼然らば、この願とは何ぞ。

父母いたく老い給へり、此世に在す命も長かるべしとも覺えず、一日も永く壯健に在さんこし。

とはわが願にぞある。されどこれとてもわが切なる「この願」にはあらず。

宇宙は不思議なり、人生は不思議なりと人も言ひ、われも言ふ。科學と哲學と宗教とは此不思議を滅さんと力む。わが願も亦、科學者として、哲學者として、宗教家として此不思議を開明せんことにや。あらず、あらず、これわが「この願」にはあらざるなり。

然らば何ぞや、わがこの願とは。

美と眞と善と、わが願はこれを求めんことに非ず。若しわが「この願」叶はずんば、美も善も眞も、空のみ、影のみ、まぼろしのみ、題目のみ、稱呼のみ。

カアライル曰く、

Awake, poor trembled sleeper:
Shake off thy torpid nightmare-dream.

わが切なるこの願とは。眠より醒めんことなり。夢を振ひおとさんことなり。

この不思議なる、美妙なる、無窮無邊なる宇宙と、此宇宙に於ける此人生とを直視せんことなり。われを此不思議なる宇宙の中に裸體のまま見出さんことなり。

不思議を知らんことに非ず、不思議を痛感せんことなり。死の祕密を悟らんことに非ず、死の事實を驚異せんことなり。

信仰を得んことに非ず、信仰なくんば片時たりとも安んずる能はざる程に此宇宙人生の有のまゝの恐ろしき事實を痛感せんことなり。

われはわが心の眼に厚き膜の覆ひ居ることを感じつゝあり。われは夢魔の支配のもとにあることを感じつゝあり。これを感じ得たるはまことに神のめぐみなり。今はこの膜の破れこと、夢魔を追ひ拂はんこと、を切に願ふにいたりぬ。

この宇宙ほど不思議なるはあらず、はてしなきの時間と、はてしなきの空間、凡百の運動、凡百の法則、生死、而て小さき星の一なる此地球に於ける人類、其歴史、げに此われの生命ほど不思議なるはなかるべし。これ誰も知る處なり、而て千百億人中、殆んど一人たりとも此不思議を痛感する能はざるなり。友人の死した る時など、獨り蒼天の星を仰ぎたる時など、時には驚異の念に打たるゝ事あるは人々の經驗する處なり。されどこはしばしの感情にして永續せず。わが願は絶えず此強き深き感情のうちにあらんことなり。

何故にわれは斯くも切にこの願を懷きつゝ、而も容易に此願を達する能はざるか、夢中にありと知りつゝ、何故に夢よりさむる能はざるか。

英語に Worldly てふ語あり、譯して世間的とでもいふべきか。人の一生は殆んど全く世間的なり。世間とは一人稱なる吾、二人稱なる爾、三人稱なる彼、此三者を以て成立せる場所をいふ。人、生れて此場所に生育し、其感情全く此場所の支配を受くるに至る。何時しか爾なく彼なきの此天地に獨り吾てふものゝ俯仰して立ちつゝあることを感ずる能はざるに至るなり。

蒼天も星宿も、太陽も、山河も悉く此世間を飾る裝飾品とのみ感ぜらるゝに至るなり。

それ世間ありて天地あるに非ず、天地ありて世間あるなり。此吾は先づ天地の見ならざる可からず。世間に立つの前、先づ天地に立たざる可からず。

何故にわれは斯くも切に「この願」を懷きつつ、なほ容易に達する能はざるか、曰く、吾は世間の見なれば也。吾が感情は凡て世間的なればなり。

心は熱くこの願を懷くと雖も、感情は絶えず間なく世間的に動き、世間的願望を追求し、「この願」を冷選すればなり。

怪しきまでに人は此天地の不思議に慣れて無感覺に安じ居るなり。墳墓の果々たるを見て平然たるなり。限りなき蒼穹を仰ぎ見て平然たるなり。

信仰と言ひ、悟道といひ、安心と云ふ。されど要するに心理的遊戯ならざるは稀なり。何となれば彼等は驚異の感に打たれて天地の間に俯仰介立し、求めざるを覺ずして神と道と安心とを求めたるに非ざればなり。われは已に此心理的遊戯に倦みたり。

余のこの願若し叶ふことなく、諸君も亦、かかる願だに有たずとせば、吾等の宗教は遊戯のみ。吾等はたゞ自個の尤もらしき感情を弄するに過ぎざる可し。吾等の所謂信仰なるものは前提をあやまりたる結論よりもはかなきものなるべし。

政治や美文と並稱せらるゝ限りは宗教も遂に睡眠中のぜいたくなり。

『神を信ずるもの、』彼等は自から斯く稱し居れり。然ば何故に彼等は世間的の煩に苦むこと多きや。何を着んと思ひわづらふ勿れと主は教へ玉へども彼等は是等を思煩ふのみに非ず如何に人に思はれん、如何に世の認めるならんなどをも思ひなやみ居るなり。是れ何故ぞや。彼等の神は天地の造りぬしならずして、世のものなればなり。彼等は神を稱して天地の造りぬし と讃ゆ。されど彼等は、此天地には極めて冷淡なり。余は今、彼等と言へり、されど此彼等の内には勿論余も加はり居るなり。

人々各道求願望するところあり、善を求め愛を求め義を求む、これ等を稱して理想を仰ぐと稱す。其れより下ては功名富貴、樣々なり。此等の願望のために人々焦心苦慮す。されどわが「この願」よりすれば悉く末葉なり。幻影を追へるなり、夢を追へるなり。

幻影よ、幻影よ。

人は悉く最大なる事實を見る能はずして幻影のみを見るなり。幻影を見るが故に事實を見る能はざるなり。幻影よ幻影よ消え失せよ。

吾等は最早太陽を見ざるなり、たゞ太陽の幻を見るのみ、月を見ることなし。眼底の幻影を見るのみ。

吾等は最早天地を見ることなし。瞳底の印象物を見るのみなり。

吾等は遂に事實を全く離れて、たゞ幻影のみを見るなり。吾等は死を見る能はず、たゞ死體を見るのみ。生を見ることなし、たゞ生體を見るのみ。故に生死の不思議に打たれずして生體の死體となりしを見るのみ。否、生體を見而して死體を見るのみ。

凡て人が事實を見ずして幻影を見るの尤も甚だしき例は死の場合なり。ルーテルは曾て其友人アレキスの電死を傍に見て、死の事實を見得たり。普通はたゞ幻を見るのみ。吾等の目さめし時と雖も、夢のうちに在る時と五十歩百歩の相違のみ。

明日も來るべく、今日は過ぎなんとし、昨日は逝きたり、日々同じ夢のみ繰り返へしつゝ過ぎゆく。實に憐れなるは、この天地を夢にてつつむことなり。

如何にすれば此の夢さむべきぞ、此方法もがな。利刃を以て肉皮をそぎ取るが如くに痛快に此心眼の被覆を去りたし。其方法もがな。

深夜、月に對して瞑想したり。薄暮、若王寺の丘上に立ちて大觀したり。されど僅かに心のをゝきしを感ぜしに過ぎず。忽然としてさめざるも。

われ何處より來り、何處にゆく。死せし彼は何處にゆきし。此等の問を此宇宙に向て心から發し得んことは難い哉。されど此問を發せんことを吾が願なり。

われは此願の叶ふまでは如何なる手段をも取ることを辭せざらんと欲す。

上加茂の丘に登り、松によぢ上りて四方を見渡しぬ。されどこわが見たる處は遂に幻影の外に出づる能はざりき。美はしき野邊の夕日影、大空をたゞよふ雲のむれ、はてしなき蒼穹、何れか「美」ならざらん。されどわれ遂に幻を見たるのみ。われの夢は少しもさめざる也。

たゞ世の卑しき空想のみに苦められき。

風みつ空、是れ又、幻影としてのみ見らる。われは遂に幻影の外に出づる能はざる乎。

此世の名利の念に苦む。肉の事をのみ思ひわづらふ。これ何故ぞや。神を知らざればなり。吾、世に住みてのみ居て、天地に住まざればなり。夢にのみ生き幻のみ描きて、此恐ろしき不思議なる宇宙に此身を見出すこと能はざればなり。

嗚呼吾は悲嘆めるものなる哉。朝な夕な、夕な朝な、たゞ〳〵世の事をのみ思ひわづらふ。徒らにもがき、苦しみ、あせり、いらだつなり。

思へ、思へ。伊武雄何處にある、古川駒造何處にある、山口行一何處にある、有光里子何處にある、藤形何處にある。願くは吾心さめよ、嗚呼希くば吾心めさめよ。

爾の今すむ處何處てや。これ昔き都に非ざるか。こゝには千年の歴史あり。されど平清盛何處にある。平敦盛何處にある。花の如き平家の公達今何處にある。

陰謀、企圖、叛亂の跡こゝにあり、其人等何處にかゆきし。足利義政何處にある、其銀閣寺は、十餘の見物料を徴して空しく明治の代の見世物となりぬ。豐臣秀吉何處にかある。維新の諸豪傑何處にある。

あゝわれこゝに在り。われ玆に立つ。有りしものなし。今あるものも又た無からん。吾何處より來り、吾遂に何處にかゆく。願くは吾心さめよ。希くは吾がにぶれたる此心めさめよ。

此世の夢よ、さめよ。わが願は宇宙の不思議を明にせんことに非ず、人生の秘密を明白に解せんことに非ず。

たゞめざめんことなり。「秘密」に戦慄せんことなり、「不思議」に驚魂怪魄せんことなり。知れざるものは如何にしても知れずと。こゝに於て賢明なる人々は人生問題や宇宙問題に從事することを以て閑人の閑事業と見做し給へり。

然り、然り、知れざるものは如何にしても知れざる也。これを知らんことをつとむるは實に閑人の事なるべし。されどこれを以て宗教の人を嘲るに足らざる也。宗教とは宇宙人生の不思議を解釋せんがために起りしにはあらず。不思議を不思議と怖恐して發起る處の信仰に由つて成るものなり。

有神無神の爭論に先だち人は先づめざめざる可からず。爾の宗教的信仰なきは、爾の心の麻痺を證明するなり。

神の人は言ふも畏し、ポーロやルーテルや、昔な「不思議」にめざめて此廣遠宏大なる宇宙に於ける人の命運につき心をのゝき感あふれしなり。其火の如き信仰は止むことを得ずして起りし結果なり。

多くの科學者は不思議を感ぜずして「不思議」に弄ばるゝ愚者なり。多くの哲學者は不思議を感ぜずして「不思議」を退治せんと欲する妄想家のみ。

（明治三十九年六月）

詩篇

告天子

身をば心に任せつゝ
心を天にまかせつゝ
花野のかげの塒をば
あけの眞珠の星に立つ。

大連灣

花々夢の如し憶ふ彼日
悠々日月轉ず憶ふ彼夜
大連灣今如何
旅順口頭猛鷲旗樹つ。

艦隊一條長く
指すや大連灣
秋光波に溶け
高し黄海の天。

陸兵背を衝く日
戰艦圍を抱するの約
海陸の計空しく
敵に勇卒無し。

見よや和尚島
閃翻たり日章旗
笑聲起る、敵を笑ふたなり
歓聲涌く、我を祝ふなり。

花々夢の如し、憶ふ彼日
悠々日月轉ず、憶ふ彼夜
大連灣今如何
和尚山頭猛鷲旗樹つ。

大同の江の夕まぐれ
花園口のあけの星
夕は燈火を滅し
曉に敵地を屍ふ。

明嘴上陸十三萬の軍
鉦光日に映ず遼東の野
風無し、波無し、敵影無し。

清風英をあつむ旅順口
想ふ黄海の殘艦潜むと
黄金山白煙咄として起る
艦側白浪聳つ
空に驚くの霹靂
艦上快哉を叫ぶ。

艦を旋らす大連灣
報あり、旅順落つと。

涙川

小川谷川末終に
大海原に注げども
人の情の涙川
湛へて汲まむ時ぞなき。

冬の山家

貧家焚く山家の民

芋ふかす夕の圍居
今宵またかの唄聞かん
いかなれば彼人遲き
待つ乙女待たるゝ人は
水清き村の若者。

「君と別れて松原ゆけば
松の露やら涙やら」
「咲いた櫻になぜ駒繋ぐ
駒がいさめば花が散る」
ありふれし唄のかず〳〵
盡きぬ間に夜は更けにけり。

月出でぬ東の小窓
松風を影にうつして
「歸りなん今夜は宿に」
「明日の夜も來りて唄へ」
家の者床に入りしも
少女のみ眠りがてにす。

山路ゆき月に浮かれて
若者の歌ふ聲冴ゆ。
かつ〳〵に遠ざかりゆく
彼人の聲絶え〳〵に。

ほゝゑみて少女眠りぬ
まどかなり今夜の夢も。

菫

春の霞に誘はれて
おぼつかなくも咲きいでし
菫の花よ心あらば
たゞよそながら告げよかし
汝がやさしき色めでゝ
摘みてかざして歸りにし
少女や今日も來りなば
「君をば戀ふる人あり」と。

高峰の雲よ

高峰の雲よ心あらば
乘せてもてゆき此われを
大海原のたゞ中の
人無き島に送れかし
斯くて此身は浮世より
消え失すとても此われは
天地ひろき間にて
人とし生きむ。しばしだに。

限なき空

限りなき空あふぎつゝ
とこしへの望かたらひし
君がまなざし忘れねば
物の思に堪へかねて
獨りながむる久方の
天のはる〳〵戀しけれ
間近に君はいませども。

驚異

ゆめと見る〳〵はかなくも
なほ驚かぬ此こゝろ
吹けや北風此ゆめを
うてやいかづち此こゝろ
をのゝき立ちてあめつちの
くすしき樣をそのまゝに
驚きさめて見ん時よ
其時あれともがくなり。

夏の夜

夏の夜はれて星みつ空
さびしき野邊をひとりたどる
仰げば高しいよゝ高し
嗚呼わが心天をゆびさす。

春來り冬ゆく

のぼる朝日を迎へては
春よ春よと叫ぶをば
梢の鳥も同じこゝろに聞とりて
ねをふりたてゝ囀りぬ
囀る聲をきゝてはわれも
春よ春よとまたよびぬ。

沈む夕日を見送りて
冬よ冬よと叫ぶ時
遠寺の鐘のおとも哀れに鳴りひびき
冬の心を弔ひぬ
きえゆく鐘をきゝてはわれも
冬よ冬よとまたよびぬ。

戀のきはみ

戀しき君よみそなはせ
苔むす古き此墓を
われらが若き戀の身も
樂しき今の此戀も
はかなく消ゆる其時の
時の羽風ぞ身にはしむ
あはれ戀しき此こゝろ
戀のきはみの涙かな。

戀しき君よ此涙
星にもにたる君が目に
露より清く浮ぶ時
限りなき空仰きつゝ
われは見るなりとことはに
君ともろとも住む國を
あはれうれしき此こゝろ
戀のきはみの望なれ。

森に入る

遠山雪をわれのぞみ
若き血しほぞわきにける
自由にこがれわれはしも
深き森にぞ入りにける。

あはれ乙女のこまねきて
戀しき君よと呼びければ
わかき心のうきたちて
何時しか森をわれ出でぬ。

森をば慕ふわれなれば
都のちまたに生ひたちし
乙女のこゝろあきたらで
戀を黃金に見かへしぬ。

あはれはかなきわが戀よ
若きこゝろもくだかれて
わかき血しほも氷りはて
をぐらき森にわけ入りぬ。

山林に自由存す

山林に自由存す
われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ
嗚呼山林に自由存す

いかなればわれ山林を見すてし。

あくがれて虚榮の途にのぼりしより
十年の月日塵のうちに過ぎぬ
ふりさけ見れば自由の里は
すでに雲山千里の外にある心地す。

背を決して天外をのぞめば
をちかたの高峰の雪の朝日影
嗚呼山林に自由存す
われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ。

なつかしきわが故郷は何處ぞや
彼處にわれは山林の見なりき
顧みれば千里江山
自由の郷は雲底に沒せんとす。

沖の小島

沖の小島に雲雀があがる
雲雀すむなら畑がある
畑があるなら人がすむ
人がすむなら戀がある。

故郷の翁に與ふ

翁よ今もすこやかに
丘の麓にくらすらん
丘の小松の夕日影
今も昔のまゝにして
戀しき翁今もなほ
松葉かきつゝうたふらん
うたふ其聲今もなほ
さびしき谷にひゞきつゝ
谷の小川の水せきて
夏の日ながく暮せしも
今は昔となりにけり
われは昔のわれならで。

あはれ翁よ此われを
今も昔のわらべぞと
昔のまゝにおぼすらん
翁は昔のまゝにして。

風の音

ふと小夜更けてめさむれば
のきばをさわぐ風のおと
春や來りし冬ゆきし。

枯野の小屋の夢あはく
遠ざかりゆく風のおと
冬やのがれし春やきし。

山の聲

峰より峰に風わたり
遠ざかり行く其聲を
聞きすます間に水のおと
溪より溪にひゞくなり
風聲遠く水近し。

水のおとにもあらぬ聲
風の聲にもあらざるは
月にうかれて山がつの
妹がりゆきつ歸るさの
山路こえつゝうたふなり。

あはれ其聲たえ〳〵に
風にまじりつ水おとに
絶えつきこえつ遠ざかり

末は嵐となりにけり
風聲遠く月さむし。

わがこゝろ

風をあらみ
浮世の波にさそはれて
うは濁りせるわがこゝろ
暫時は月よ居ずまひて
清きすがたを宿せかし。

水際のすみれ

曉やみの霧はれて
谷の清水の底清し
水際にさけるつぼすみれ
影をさやかにうつしけり
しばし汲む手もたゆたひつ
ゑみし少女や人なりし。

夏來りぬ

丘の白露ふみわけて
のぼる朝日をむかへなん
青葉かざして日の光
めくらむまでに仰ぎなん。

あだなる夢はさめはてぬ
わかき心は躍るなり
のぞみは高し天津空
思はひくしあゝわが戀。

そのうた

夕ぐれ時をかなしとて
泣きつるわれをわぎもこが
泣きて歌ひて慰めし
歌のかず〳〵忘れねば
一人うたひて一人ゆく
其歌かなしいかにせん

雲影

さゞなみ立たぬ湖は
雲の影こそ映るなれ
ものを思はぬわが心
天津御空ぞ映るなる

たき火

一

逗子の砂山草かれて
夕日さびしく殘るなり
沖の片帆の影ながく
小坪の浦はほどちかし。

箱根足柄、雪はれて
こがねの雲をいたゞきぬ
ゆふばえ映る汐ひがた
飛びかふ千鳥こゑさむし。

落葉たゞよふさとがはの
葦間にのこるうすこほり
ふみて碎きて飛び立ちぬ
羽音したかし、しぎ一羽。

小船こゞ手もたゆみたり
富士の高嶺を見かへりて
今日も暮れぬとふな人の
歌はきくべしたび人も。

二

濱べにつどふわらべあり
みるま忽ちおのがじゝ
水際あさりてゆきゝせり
拾ひし木々を積みあげぬ。

潮風さむし身に染めば
わらべは小枝をりそへて
たき火いそぎぬあやにくに
ひろひし木々はうるほへり。

かたみに吹けど煙たち
たばしる涙ふきあへず
かたみに笑ふ際くれて
かはたれ時となりにけり。

ゆふぞら晴れて星一つ
影をさやかに映すなり
干潟の千鳥みえわかず
相模の灘は暮れにけり。

三

節あり、あはれ歌のごと

童は水際に立ちならび
「伊豆の山人ふきおくれ
野火をいざなふ風あらば。」

鬼火か、あらず、いさり火か
伊豆の山こそやけそめぬ
冬のたび人ゆきくれて
のぞみて泣くはこの火なり。

わらべは指してうれしげに
もろ聲あはせうたひけり
「伊豆のやま人吹きおくれ
野火をいざなふ風あらば。」

かはたれ時の濱遠く
罪なき聲はたゞよひぬ
濱の女神はこたへせり
みちくる汐はさゝやきて。

四

童のかへり遲しとて
母なる一人よび立てぬ
「夕暮さむしいつまでか
淋しき濱にあそぶぞ」と。

稚き童げにもとて
砂山さしてかけゆきぬ
つゞく友どちそのまゝに
たき火を捨てゝはしりたり。

かしらの童ふりかへり
濱のこなたを見おろしぬ
風は炎をいざなひて
今しも荒く燃えたちぬ。

うれしとのみは思へども
童はそこに居ならびて
わが火もえぬと叫びつゝ
家路をさして驅せさりぬ。

五

海暮れ野くれ山くれて
冬のさびしき夜となりぬ
逗子の濱べは人げなく
あるじなき火の影あかし。

と見る、人あり近寄りぬ
足おと重したび人の

たき火影ふは袖ひぢて
かわかす間もなかりしか。

火影にうつる額くろく
額にきざむ皺ふかく
六十路にあまる髮枯れて
衣のすそはやぶれたり。

ふるさと遠くたびねして
ゆくへも知らずさすらふか
ゆめは枯野にさめやすく
草をまくらの老いの身か。

六

あはれ此火よたがわざぞ
かたじけなしとかざす手は
炎まぢかくふるひたり
まなざしにぶく見まはしぬ。

身うちの氷とけそめて
心ゆたかになりにけり
燃ゆる炎のかなたには
昔のわが身うかびたり。

渚ゆたかに滿ち來なる
汐はまさごとしたしみて
さゝやく音はおのづから
おきながなみだ誘ひけり。

仰ぐ大ぞら星さえて
霜をつゝめる天の河
伊豆の岬をゆびさしぬ
天のはるゝ人こひし。

七

ひぢし衣もかわきたり
殘りすくなに燃えつきぬ
たき火の炎かすかなり
おきな今はと、杖とりぬ。

小坪のかたは道くらし
ゆき去りかねしたび人は
あとふりかへりたゝずみつ
たき火のぬしをことぶきぬ。

有明ちかく月さえて
逗子のうら人夢ふかし
伊豆の孫山火は消えて
いさり火のみぞのこるなる。

わらべがたきし火ほ
さすらふ人の足跡は
とこしへの波おともなく
夜半のみちしほかき消しぬ。

鎌倉妙本寺懷古

夕日いざよふ妙本寺
法威のあとを弔へば
芙蓉の花の影さびて
我世の末をなげくかな。

法よおきてよ人の子よ
時の力をいかにせん
永劫の神またゝきて
金字玉殿いたづらに
懷古の客を誘ふかな。

楢の鳩のうたふらく
ありし昔も今も尚ほ
夕日いざよふ妙本寺
芙蓉の花は美なるかな。

小品、隨筆篇

無窮

御手紙面白く拜讀せり、例に由りて跪角萊の行列を見るにつけ、依然たる君が頑迷不靈のほど想ひやられて情なく候。先日の拙書中にて神の存在を說明する爲めテニソンの一節を引用したるに、其手紙をわざ〳〵松村へ持ち運び、宇宙現實の問題を論ずるに一詩人の空想を基礎とする大膽に感服せりと大口開いて笑ひ玉ひし由、君の書中には此事隱しあれど既に松村よりの報告書到來し、始終の樣子現はれたる以上は、ダム〳〵の一丸を覺悟し玉へ、十九世紀の科學といふ奴を盾にする野蠻人にも矢張ダム〳〵が相當と思はる。

日々氣象臺にて風伯雨師の行方のみ氣にし玉ふこと御役目とは申す條、近頃御苦勞の儀に御座候。然るに先日來いたづらなる鳥あり、君が雨量を測り玉ふ水盤にて恣に行水をつかひ其事すでに數度に及びしとか、其都度君は『又た行水されちやつたア』と鳥が飛び行く吹上御苑の杜を望んで口惜しさうに叫び玉ひしといふ、此事も君の手紙には隱蔽しあれど同く松村の報告にて承知せり、鳥の飛び去り際、心地よげに翼を振ひて何と鳴きしやら其處までは判然せず。

我家の小作に宇之助といふ醜面の男あり、午失能どことなく君に似たるやう思はるれど、但し宇之助の祖父は權兵衛と申せしや否やは余未だ確むる能はず。

『此 hima は 數の infinity といふことより來るものである、故に無窮無限といふことを說明するには勢數の連續を說くを要す、君等如き數理の思想なきものはとても駄目だ、併し試に次の式を見玉へ、解るまい。』

確に解りません、最早議論も斯うなつてはおしまひに候。實に何事も算數に限る！　余も歸京の節は遠州灘邊にて敵に腰かけ、數で△△式に出來上り居る大空の星を數へ、眞個樣に波の上に落ち『又た落つちやつたあ』とでも叫ばむ哉。

さて中央氣象臺に於ける君が近頃の日課、詳しく承るを得たれば、余の昨今の日課をも申上げん、第一、晝寢、たゞ夫れ晝寢のみ、毎日どろ〳〵して居るだらうとの御推察は當れり。由りて余は晝寢のことを御知らせするが最も妙なりと信ず。

余もまさかに朝からは寢ねず。左なきだに靜かなる山家晝飯を了ればこそりともせず、余は風通しよき奥の六疊を占領し、枕もとに紀行、航海、探檢類の雜書を積みて手當り次第に讀む、寧ろ眺める、心頭には一の煩惱なく心外には些の憂なし、たゞ直ぐ頭の上なる松林をわたる風の音の幽遠なる恰も絕海孤島の汀に韓がる浪の音を聞くが如きのみ。何時しか飄々たる我魂も亦た微茫煙浪の裡に消え行く。或時は一頭の駱駝に乘じて極目際なき曠原を横ぎり、無窮の路を辿りて古き昔の眠りの國に運び去らる。然るに昨日は讀みし書籍に空想を煽られ過ぎて眠さへ、遂に寢はぐれしかば獨り庭に下りて葡萄棚の下なる庭石に腰うちかけ、青葉の光を仰いで茫然たる折しも、決して晝寢せし事なき弟の文二、眞直なる櫻の杖と小刀とを手にして裏門より入り來り、『兄さん之れがステッキになりませうか。』『成るとも。』余の葡萄棚を仰げるを見て、『葡萄なら隣屋敷のが能く熟して居ます、摘みに行きませうか。』『行かう。』

裏門を出で笹藪の間を通ずる小路を行けば間もなく隣家敷なり。鼓は三方丘に圍まれし小き谷にて以前は井上といふ一家代々の住所なりしを十餘年前此一家こぞりて北海道に移住せしため、遂に我家の有となりつゝ今はたゞ家敷跡のみ殘れり。曾て瓜や茄子の花咲きし此の小さき谷も、我家の人手足らぬまゝ打捨てあれば、何時しか野原同樣となりはて、夏草生ひ茂り、小松すら之れに纏はりてなか〳〵に風情あり。流石に葡萄の古木はもとの儘に井戸の傍にのこり、半ば地に委し半ば其の蔓を昔なじみの老梅に託して紫の房ふさ〳〵と垂れたり。

二人は互に二房三房能熟したるを摘み弟は程よき小藤に陣取り葡萄を喰ひつゝステッキの細工を始めしが、狗頭を剖るとて器用に小刀を使ひ頻りに苦心する樣、よき雷迅なり。余は弟より二十歩許りを離れ、銀木の藤涼しき草の上に身を横へて、甘き葡萄を口にしつゝ靜かに四邊を眺め、折り〳〵弟の方を見やり、又遠く天外を望みて崩んとする雲の峰を見入りたり。

白雲一片悠々として漂ふ時、薄き影は森を越え丘を越えて來り、我小き谷も暫くは光を失ひしが、雲の磯け去ると共に影も亦た消えうせつ、人を醉はしむるやうなる夏草の香は鼻を打てり。草や木や花や葉や野や丘や凡て盛夏日中の光に醉ひ、眠り、磯け、而して滿足せり。天の瀨氣は地に下り地の精氣は天を衝けり。恍惚として之に對する余も亦た溶けんとす。嗚呼此時！　昨日なく今日なく又た明日なし、只だ此時則ち無窮なるを感じぬ。更に小蟬の吟聲の絕ゆるが如く絕えざるが如くして單調なるを聞けば、人をして日沒を想像せしむる能はず。長き此夏の日の此儘にてをやみなく續くかと覺えし。

ふと弟の方を見れば、彼は綠藤の涼しき影を全身にあびて、肩のあたりは青葉をもれし日影の斑點動搖せり。彼は一心を込めてステッキの細工をなしつゝ一向に他を顧みざるなり。十二歲の少年！　一日なほ五年十年の永きを覺ゆるは當に此時なるべし。かゝる時谷の西を圍める丘の小路を『童もいつかは翁なり』と節面白く歌ひつゝ姬小松の間を行く少年あり。弟は此の聲を聞くと等しくきつと彼方を見やり、『翁も昔は童なり』と高らかに歌ひし樣は、我此處にありとの相圖かと思はる。『太田。』弟は叫びて彼の少年を招きぬ。少年は頭をふりて弟を招き太きステッキを差し上げたり。彼等少年の仲間にステッキの流行ありと見ゆ。弟は余に頓着なく丘の方へと走り行きけり。見よ、彼等は暫く互のステッキを誇示する樣なりしが、忽ち相並んで身に不相應なる棒を打ち振りつゝ先の歌を聲合せてうたひ、小松の間を彼方へと行くなり。彼歌は小學校長が彼等のために作りしといふ勸學の歌なりとか。弟の之れを歌ひつゝ有ゆる惡戲に日を暮すを余は見たり。童が翁になる、之れ彼には全く無意味なり、否な全く無感覺なり、見よ彼等はたゞ之れを節面白く歌ひ其のリズムに自己の樂しき魂を浮べて終日野山を駈け回るなり。余は彼等の姿を目送して「無窮の生命」其の物を見るが如くに感じぬ。

これはしたり、折角の晝寢の報告が又もや「無窮」の題目となり了りぬ。しかし君御互は實際の處最早御しまひに候。たとひ君は數の連續とゝ△△式にて宇宙の廣さと生命とを測量するとも、余は詩の想にて力むとも、互に無窮々々とやかましく唱ふるに至りては最早有窮の窮、窮の又窮たるに過ぎざるなり。

（明治四十一年八月）

彼

一

二人は相ならびて歩みぬ。しばらくは言葉なかりき。彼は心に澱するところありけん肩に荷ひし杖をはづして強く地をうちたり。しかも打ちし彼はこれを知らざりき。傍に歩みし男は杖の音をきゝて窃にうなづきぬ。心に思ひ當る節やありし。

二

口にくはへし葉巻を右の手にうつして、何ごころなく窓より頭さしいだしぬ。月雲間より出で、大空瑠璃の如くに晴れて、澄みわたる光清く、其尊さに、彼は煙ふかして眺むることの濃すわざなるが如くに感じ、直に煙草を窓よりなげすてたり。

三

人生、到る處青山ありとは、彼が心に限りなきの自由と同情とを感ぜしむる詩想なりき。かれはこれを空想たるにとゞめずして、實行の上に示しぬ。彼が生涯は漂泊的のものなりし。日本國土、南は九州より、北は北海道に至るまで、到る處に彼の足跡あり。

四

精神的の情死を遂げたる男とは實に彼の事なり。彼が學校に在るや、能く論斷し、能く斷行し、甚だ敢爲の若者なりき。されど彼女と婚するや、其夢想は實際となり、其理想は死亡したり。彼の一生は妻と共に笑ひ、泣き、語り、食ふことにて了りぬ。友の一人は曰く、彼は幸福のものなりと。然り、彼は幸福ものゝみ。

五

田園の中央に一茅屋あり。防風林其地をかこみ、一流の清き小川の藪の右よりうねり出でゝ家の前を過ぎ、これに三枚の厚き板より成る橋をかけたり。冬は雪この家を閉し窓よりは燈の光もる。夏は牧牛十數頭、此家の近傍に徘徊す。これ彼が夢想の中の樂園にぞある。此夢想を趁うて彼は北に走りぬ。

六

左より光かすかなる燈、彼を照らし、右より清光流水の如き月、彼を照らしぬ。彼の眼は書の上にあり、其半面はやゝ紅く、其半面は蒼白なり。傍より此樣を見る時は、靈工は尊き美術品を得たりと言はん。されど彼が心には今しも恐ろしき戰ありて、彼の脣のかすかに動きつゝあるを誰か知り得ん。彼は人なり、美術品に非ず。

夜の更けゆくまゝに月は西に傾きて森のかなたにかくれ、蒼白く見えし彼の半面は暗くなれり。燈の油も盡きなんとす。彼は影の如く坐せり。されど一枚より一枚と、其書は讀まれ讀まれて次第にのこり少になりぬ。彼の眼の光はいよ〳〵鋭し。其心には戰絶えざる也。

七

此村は一目にて其貧しさと寂さとを誰も知り得ん。僅に十六七戸に足り足らぬ家數を一村に組み、人口九十と言へど老少三分の一を占め、のこりの數の半は婦人なり。家々の立つ處は山のかげならずは川岸なり。川には水少なく石多し。山は痩せたり。然るに此村にも一軒の校舎あり。朝な〳〵に集る小兒の數は十六名なり。

八

彼には人の生涯と云ものゝ、いよ〳〵不思議

にのみなりまさり行きぬ。おのが身の過ぎこし方を思ひ、この天地の間に於ける命運の怪しき力を感ずること、今年の夏の夕暮は去年の冬の夜半にもましたり。見る人、聞く人の上、怪しからぬはなし。友は逝きぬ、月はめぐりぬ、今日も昨日も時はをやみなく翔るなり。其羽音の耳邊を掠めゆく樣のものすごさよ。あゝ人の一生、これ何者ぞや。朝な〳〵起きいでゝ暮しつ。夜な〳〵夢に入りてまどろむ。彼もしかり。われも然り。あゝ人の生涯てふものほど不思議なるはあらじ。おそろしき事實なるかな。

九

此處にて彼女等と別れつ。

「戀愛」の夢を後にのこし、「自由」の夢を前に描きつゝ、悲哀と希望との感に充されて行くわが彼時の心をいつまでか忘れんや。とある崖の上に車とまりし時、眼下に潤けしは縹渺たる那須野ヶ原なり。雲霧くらく垂れて其天際を閉しぬ。まなじりを上げてこれを見わたせし時のわが心をいつまでか忘れんや。

懇しき少女を後にのこし、自由の地を前に夢みつゝ、われは悲み、訪り、眼を見張りて大空を見たり。蒸すが如き雲の間よりもるゝ、秋の初めの澄みに澄みし蒼天の尊さよ。あゝ彼處に自由の少女われを招くと詩めきたる句を小聲に獨語せし時、一滴の涙落ちたり。これ少壯の者ならでは知らざる涙なり。

十

『われは奈良へ行くべきか、湖水をめぐるべきか、北の方、山深くわけ入るべきか。また南に下りて須磨明石、水島なだをえらばんか。昔わがこゝろのまゝなり。いづれかわれを抱く自由の母の懷ならざるべき。』かく語りてかれが心に若き人の血をどりぬ。

十一

彼がこゝろには過ぎし日の彼處、此處、諸るが如くに浮びいでぬ。

歌志内、空知太、其浦岸、札幌、雛原、柳井、麻郷、佐[illegible]、船木、岩國、逗子、萩。

數千枚を盡してもこれらのうちにみちあふれ居るなり。

十二

かまど〳〵よりたちのぼる煙は何れも此美しき秋の大空に消えてあとなしといへど石狩の野に住む人の品ほど變れるは稀なり。自由を夢みて手づから鋤とる事をいなまぬ若き人、はでなる都の交際に加はり奉ねて世をこゝにのがれし哀れの族、狹き本道にすら身を立て兼ね、黄金の山を夢みて走込みしならずもの。

十三

わが家の後の丘に一本の松あり。枯野のなかに淋しく立ちて其影長く夕日に倒れしを見る時、わが心ひとしほの哀を覺ゆる。

わが友とては此松のみと歌ひし事もありき。風の音、梢に、遠き國の笛吹くをきゝては、其根に坐して物思ふわが眼、何時しか天外の雲に及ぶ。雲の彼方には少女住めり。

此少女より來りし玉章を讀むにふさはしきは此松の傍のみ。讀み了りて泣くも笑ふも此松のみぞ知る。われ屢々思ひき。今より幾年の後、此松の根に小き墓一つ立ち、其石に白き苔つきて半は土に埋れんとするを。百年の後、年若き詩人見當りて、松に向ひ、此墓に眠れるは如何なる人なりしぞと問はゞ、松如何に答へて語るべきぞと。心ある松は言ふならめ、御身の如き年わかき詩人にておはしき、三十に足らで死し、讀みし歌の數々、紙に誌されしを悉

くわが根にて燒き、其灰は木枯に吹かれて散る を詩人見やりて「永久の悲」てふ歌聲高く歌ひしが、二日計りにて身まかり、かしづきの翁、其かばねをわが根に埋めて去りぬと。嗚呼わが空想のあやしさよ。

吾が土曜日の夜

—廿七年四月十六日夜十時—

（上）

土曜日の夕暮は來りぬ。連日蕭々と降續ける春雨、此日猶霽れやらず、山々に漲る水蒸氣の彼方より、濕めやかに黄昏來りぬ。

小説「うきよの波」を讀み了りて、暫時頭をかゝへ、眼を閉ぢて哀想に耽り居たる余は、室内の暗くなりしにも氣付かざりしが、弟なる人入り來りて燈つけて參らせむと言へりしに驚き、振返り見れば、闇暗寂寥の氣何時の間にか吾が書齋に充ち居たりけり。

『さて今日も亦暮れしよ、吾、自ら黙けむ。』

『左樣！』と答へて弟は直に出で行きぬ。

されど余は猶燈點けむともせず、硝子越に外面の暮れ行く空に眼を放ちぬ。外面は流石に猶いと明るかりき。

『あゝ今日も暮れぬるか。』余は再び吹きぬ。

斯くて「うきよの波」中の一句を何心無く口のうちに繰返したる時、吾が心悲しき思に充たされぬ。見るや彼方の峯の上を、濃き雲の一團間と雨とを包みて颯々と掠め行く樣物凄し。又淋しくも哀れにも見ゆ。

『いかなれば此句は吾に斯く迄の哀を催すぞ、（——おん僧、酒は年經たる佛牙利酒なり、嗚呼味此句——さても氣の毒なるはエゝリヒなる苗、恐しきは、うきよの波、にぞある。』

立つて障子を開き、欄干に凭りて一向に暮れ行く寂しき風物に眺め入りぬ。戸數四五百に足り足らぬ小市街を見下して、遙に太平洋に續く日向灘を背負ひて聳ゆる元越山に向ひたるは吾が書齋なり。

緑の如く縫りそゝぐ雨に、薄青き煙を罩めて、重く市街の上を掩ふものは何ぞ。

『夕暮の影か、寂寞そのものか、哀思そのものか、そも亦平和と安眠と情話と歌とを和ぐる春の雨の魂か』など思ひ續く。

『サテも浮世の波の恐ろしさよ。』余が思は再び、エゝリヒの身の上の如何にも哀れなる物語のうちに入りぬ。笏太き手を折々戮刀の欄に掛くる獅ある三十三歳の若者『朝餘り早く出さぬやうに控ふる妻迎へむとはせずや』とセバスト和尚に言はれて顏赤めたる彼、其黑き瞳の稻妻のやうなる光、若しくは屋根の上を度る淋しき風の音を聞きながら、離れたる浮世の夢の幻を描きつゝある彼、宛ら生けるが如く吾が佛に立ちけり。

（中）

『さて哀れのものよ。』余は吹きぬ、一滴の涙を呑みぬ。

時に「清正公樣」の信徒たちが打つ太鼓の音、雨に濕りて重く響き來り、名を知らぬ小禽門前の柳の絶頂に止りて、雨と夕とを嬉しげに聲を立てゝ囀り、二羽の、之も我が知らぬ鳥、縺るゝ樣に並び、上に下に飛びて山の蔵に隱れ去り、暫時して柳なる鳥も何れにか去り、太鼓の音のみぞ愈よ重げに響きける。市街寂として人無きが如し。水田に鳴く蛙遠く又近し。

忽ち憶ひ起せるは舊き友の身の なり。忽ち憶ひ起せるは阿蘇山の美しき煙なり。忽ち憶ひ起せるは小兒の時の嬉しかりし事悲しかりし事なり。或は果てしなき時代の末々、或は限り知れたる吾身、命の行末。彼れより此れ此れより彼れ、吾が思ひは靜に、而かも後先な

き環の如く廻り〳〵て、夕暮の寂しき中に又言はれぬ樂しき心地を織り出し初めぬ。

計らず或る旅館の一室に出遇ひ、不思議にも十年心交の間の如く語り合ひたる人の、一夜を限りに西と東とに別れてその儘、互に音沙汰無くなりし事など憶ひ起したる時は、一向ら人間の逢別遇離の怪しき緣と、儚なき運命など思ひ續けぬ。

『大野太一、大野太一、嗚呼此人今如何になりしか、此人今何處にあるか。』

十一年の昔に別れ、其後は絶えて一度び相逢はざる、十三歳の時の同齡同窓の友の事、突然吾が哀想の環の一端に現はれ來りぬ。

『彼れ將た浮世の波に洗はれしか。

『大鳥げ彼の故郷なり、此鳥は布哇出稼の盛なる土地なるを思へば、若しや彼れ群島の一はしに他の同胞と圍坐して故郷懸しき歌唱ひ居らずとも言ひ難し。

『左る事もあらざるべし。

『然らば愈うき世の波に浮沈して、今はいと淺猿しき有樣に藻掻きつゝあるか。

『何ぞ知らん、嘗て彼の優かりし紅の頰は、今は日に焼けて海黑く染まり、彼の丸く太りて柔かなりし手は、骨太き逞しき腕と變り、家には二十に足らぬ若き妻に夕餉の烟を藁屋の頂より吐かせて、それを谷の藍より眺めつゝ、新月の光踏みて歸り來る若き農夫と生ひ立ちしやも。』

『嗚呼大野太一！』余は突然靜に呼びけり。更に思ひ續けぬ。

（下）

『何故吾は彼の時、返書の端書なりとも書せざりしか——何故又此友のみ、多くの小兒時代の舊友の中にも特別に思ひ出す事の悲哀なるか。思ひ起す毎に愛慕の情と懷舊の情とに充たさるゝか。

『それは彼の品性の美しかりしが故とぞ知らる』

斯くて吾が俤の中に一個の愛らしき少年立ちぬ。頰に溢るゝ無邪氣なる微笑の中には誠に優しき友愛の情を表すこと、昔ながらの彼の誠の俤なり。さて愈よ明かに此俤を描かむと試みれば、十一年の記憶は既に朧ろに霞みて更に確かなる畫線を與へず。徒に描かむと勉めて益々朧の中に消え行くのみなりき。却て吾が想像しける彼は二十三四の屈强の若者と現はれ、新月の光の下に鍬を擔ひて立ちけり。されど不思議にも彼の顏には無限の悲を包み居たりき。而して何となくエゝリヒと相似たるやうに思はれたり。

『左なり、左なり、エゝリヒの幼時は太一の如くなりしならむ、太一の如く美しく優しく親切に又賢く。

然らば大野太一の今の命運は又エゝリヒの如くなるかも。あゝ浮世の波に洗はれしか。』

此時余は一首の古歌を思ひ出だし、低き聲にて緩やかに口占みぬ。

『せきとむる柵もなき涙川
いかに流るゝうき身なるらむ』

二度三度此歌を繰返して吟じぬ。己の聲の調子の悠々哀々の波に乘せられて、吾心も更に悲しくなりぬ。此時又エゝリヒを思ひ、而して大野太一を懷ひ、而して又此歌を吟じけり。

頭を擧ぐれば、夜陰已に全く市街、山野、田園を包みて、雨のみぞ愈降り注ぎ、水田の水薄く光り、暗黑の中に又寺院の後ろの白壁朧ろに透かされ、耳を聲てゝ聽けば、雨の音に交りて老松の並木の馬場の方より遣瀨の如き響剛かに聞え、更に耳を澄ませば、何處よりか小兒の泣く聲聞えつゝ絶えつす。提灯一つ小路を横切りて忽ち闇の中に隱れぬ。

『嗚呼今日も愈〻暮れたるか。』

余は内に入り燈を點け、机に向ひて靜に紙を展べ、京なる友に書狀認め了り、更に父母の許に一通認め、又近來打絶え音づれなき友にも一通を書き、和歌など書き添へぬ。

斯くて夜の十時を過ぐる半ば、斯くして吾が土曜日は過ぎぬ。

沙漠の雨

駱駝あり。東の國より歸り來りぬ。沙漠に住める駱駝之れを迎へて、其群團に入れ、東方の奇事を問ふ。歸り來し駱駝答へて曰く、

『東の國は草木繁り、人多く住み、此地の如く淋しからず、且つ不思議なるは雨といふものあり。』

『雨とは如何なるものぞ。』

『雨とは天より落つる水なり。此水の落つるに先つて雲といふもの現はる。』

『雲とは如何なるものぞ。』

『あゝ雲か、雲か、口にて言ひ表はし難きものを雲といふ。』

群團の駱駝、起つあり、伏るあり、一齊に曰ふ。是非其雲なる者、雨なる者を見たし、之を我等の神に祈らんと。

玆に於て彼等は月の出づるを待ちぬ、月は彼等の神として崇め拜するものなり。東の空より月出でぬ。皎々として白沙萬里、さながら光の海に似たり。老いたる駱駝祈りて曰く、

『我等が尊み奉る美しき神よ。願くば雲なるもの、雨なるものを示し給へ。』

雲悠々と湧き出でぬ、雨蕭々と降り出でぬ。千里萬里、際限なき沙漠に、風なくして蕭々と降りしきる雨の光景の如何に寂寞たるよ。嗚呼如何に淋しくも亦た悲しげなる光景よ。

雨は三晝三夜、降りつゞけぬ。長天濛々、日の光を見ず、月の光を見ず。初めがほどは駱駝の群團も物珍しく眺め居りしが、遂に長れ悉ひ、聲を擧げて呼び出でぬ。

『神よ、光の神よ、雨なるもの雲なる者を收め給へ、我等をして永久に光の國に住ましめ給へ！』（我が一文詩の一節）

落日に對す

二十三日及び今日、日沒前に室を出で海濱にいたりて逍遙しけり。日將に箱根の山脈を越えて彼方に入らんとするを見、枯草の上に横臥してこれを目送せり。

余が願は天地の不思議を痛感せんこと也。

故に余は其心を以て此落日に對しぬ。相模灣をへだてゝ伊豆の連峰、箱根諸山、富士山に至るまで悉く眼前に横はる。

黄金色の雲、此等の山頂にかゝる。水光天色相映ず。眞紅の光線紫嵐を縫ふ。日近かには白浪白砂にころがる。仰げば底深き藍色の大空に淡然として月夢の如し。日は次第に山にかくれ初めぬ。眼を定め靜觀する時、日動く如くして動かず、地動かざる如くして動き、山を載せ海を載せて轉ずるを感ず。吾れ天地の色を見たり。又其の運動を見たり。自然の美と力とをかすかに感じ得たり。されど吾れ依然として煩惱と幻影との裡にあり。吾れを吐呑する天地不思議の中に在らず。

生とは何ぞ。死とは何ぞ。自然とは何ぞ。吾れとは何ぞ。人生の意義如何。との大疑問は依然として吾が感情の上に何の力もなし。されど自然已に吾れに近し。

鎌倉の裏山

田山花袋君の來遊に先だつて、或日余は原田

東風君と散歩に出で、近郊を經めぐつて面白い所を發見し、是非花袋君を此處にともなひたいなど語り合つたことがあつた。其面白い所といふは、大佛の左から藤澤道を行くこと七八町、又左へ折れる田圃路の田溝にかけし丸木橋を渡りなどして一へと登り、其丘の頂まで刈されし畑の間を峰づたひして極樂寺の谷に下る。此間約一里ばかりの散歩地であるが、ツマラぬ所と言へばそれまで、我等如き田舍に生れて田舍に育ち、今は都會に住まねばならぬ身には却つて斯ういふ所が嬉しいので、里は近いし、煙は立つし、麥畑の盡くる所は林、林の間から海が見える。海には帆かけ船、礦うつ浪の白い線が遙かに光つて居る。どうしても子供の時、絞びを切らして駈け廻つた所と變らない。おまけに三國一の富士は浮び、相模の大山は霞み、伊豆の天城は煙ぶつて居るといふ多少名所がゝつた圖もあるのである。

其處で手紙の序に此事を書いてやり、來遊を促すと旅行ずきの花袋君、早速やつて來たのは土曜日の午後、其日は朝から雨の氣もしからぬ天氣であつたのが、お晝時分から晴れそめて花袋君の着いた頃は淡々しい雨雲がふわ〳〵と沖なる空を漂ひ、夏の初めの霧かな月影やゝ西に傾いて鎌倉山の新綠を鮮かに照して居たのは我等に取りて何よりの喜びであつた。

さて翌日になると快晴、所謂あつらへむきの天氣、日曜日のことゆゑ、一日の閑遊と出かけた都會の紳士も少なからぬ樣子であつた。起きると先づ大佛の邊まで散歩を試み、十一時ごろ、三人連れ立つて例の散歩地へと出向うた。

大佛の門前より大佛坂の切通までは爪先上りの道、道幅二間位荷車の輾の痕深く土を掘りたる左右には柿山の繁えたる、其間には所謂猫の額ほどの畑の段をなして作られたる、『旅をするとこんな道に出遇ふものだ、向の山を一つ廻ると宿に出られるなど考へながら重い足を一ずつて日の暮れ方に歩いたものだ』と言つた東風君の言葉は此道の眞相を穿つて居る。大佛坂の切通しは鎌倉の地質にして初めて作り得るといふべきしろもの、左右の絶壁數十間、其頂から差出た若葉の色の鮮明なる、狹く長く限られた大空の、いや高く仰がれて、其色の初夏に似合しからず深碧なる、みな佳し。

切通を出ると下り坂、春ならば鶯がほがらかに鳴いて居さうな谷間に出たが、鶯は啼かず、蛬の聲ひときは騷がしく、頬白が遠くで囀つて居た、此道をだん〳〵下つて往くと瓦を燒いて居る家がある、この家を最初に、引續いてバラバラと田舍家の一村にかゝる、其中程に例の章魚をつるし、精進あげを並べ、こもかぶりが三樽ばかりの居酒屋、兼、村の若衆の合議場がある。

此茶店の前を過ぎて、程もなく左へ折れて田圃路に入り、田の畦のやうな道をゆくこと二丁ばかりで丘の麓に達した。さて此處で一言せざるを得ないことは、鎌倉のものは野蒜を食はないから野蒜は唯の雜草のやうに田圃に生えて居ることである、兼ねてこれを酒の肴に食ふ筈で味噌まで用意して來たので、田圃路にかゝるや吾々三人で探つた野蒜は都の酒客に見せたい程であつた、探つた野蒜を洗ふ一段になつて、更らに一言せざるを得ないことが出來る、鎌倉近在では娘が花嫁になると、盛裝して角隠をして親類緣者さては兼て嫁入り先きの家が往來して居る家に參上挨拶に及ばなければならぬ風俗、所が野蒜を洗ふべく百姓家の井戸を借りることに三人の相談が決定つた其時此花嫁が丘の麓を、一人の老婆一人の小娘に伴はれて、三人とも日傘を傾けてしな〳〵と歩いて來た樣子はまるで畫のやう、吾々は一興を催して見て

居ると花嫁は野蒜を洗はして貰ふ筈の百姓家に入つて了つた。あたりに家はなし、花嫁の居る時井戸を借して下さいと押入るわけにもゆかず、頗る當惑したが、東風君遂に野性を發揮して先導を爲し、三人ヅウ〳〵しく押入り兎も角もして野蒜を洗ひ得たが、花嫁は障子の蔭に坐つて居たので見えなかつた。

野蒜は採つたし花嫁は見たし、景氣好く我々は丘をのぼつた、初夏とは云ひながら、面上から直射する日光はぢり〳〵と背をやき、汗はだく〳〵流れる、若葉の林の蔭に腰を下ろし、懷を開いて風を入れた時の心地　あゝ愈々夏が來た、樂しい夏が來たと、思はず叫ばざるを得なかつた。

程なく頂に達する、山の低い割合に眺望が廣闊なので、田山君を驚かした。北の地平線は武藏野、極目さへぎるものがない、また大山よりかけて武藏の國境をめぐる連山！　箱根足柄の諸山よりかけ伊豆の岬角に連なる山脈！　此等の諸山を屏して立つ富士！　大磯小磯の濱づゝき、峰づたひに眺めつゝ、路、林に入れば蹤ひ、林を出づれば太洋！　水平線は思ひがけない所に高く一線を畫して居る、小坪、葉山の磯は指點すべく、三浦の岬は遠く水平線に沒して居る。

刈草を背負つた村娘にも出遇つた、夏ならば瓜や茄子の花盛りと唄はれさうな畑で一人の男が土を掘つて居る、鎌倉の歴史は古いが自然は常に新しい、我々は鎌倉のカの字も想ひ出さなかつた。

程よき松林を見立てゝ那坐し、包を開くと中から現はれたものが麵麭にバタ、鎌倉ハム、夏蜜柑、冷酒が一罎、いかに酒を飲まぬ人でも、今吾々が林の奥からそよ〳〵と吹く風に吹かれ、草木の高き香にうたれ、富士山と太平洋の水とを我物顔にして飲んだ一杯の冷酒の味を知らしたら堪るまい、野蒜はうまかつた、自然はターズタース一卷を懷にした謹厳な人ばかりに親切ではないらしい。感謝す、野よ山よ大空よ大海よ、どうか我々は林の中にあぐらをかいて、冷酒三杯に舌鼓を打つて、自然の賜を感謝する程の野性を何時までも失ひたくないものだ。

食つてしまへば用はない、歸らうといふのが我々の流儀で頗る殺風景であるが實際だから仕方がない、ほろ醉ひの心地たのしく又峰づたひ、眺望絶佳の處へ來て、此處でやれば可かつたと叫んでも手に殘るものは風呂敷ばかり。

大くたぶれに疲勞れて家に歸れば、二時、風呂が沸いて居た。

畫

畫を見るに其法ありや、若しあらば予實にこれを知らず、されど予敢て自ら言ふ畫は予が命なりと。命とは靈を此宇宙に繋ぐ金線を云ふなり。

小兒の好むものは繪なり、予が小兒の時赤然り、殊に然り、何を與へらるゝよりも、繪一枚は予が尤も滿足する處なりき。神社に參詣して眞先に予が眼を惹けるは繪馬なりき、馬は殊に予これを好みたり。

予は唯觀ることを好むのみに止まらず、自ら畫かざれば滿足せざりき。長じて小學より、中學に進むも、所謂畫學なるものは數學とベースボールと與に予が最好の課目なりき。其うち畫學に至りては、殊に甚しきものありたり。

曾て未だ小學校にあるや、予が友にて予より一級高き村田と呼べる少年、コロンブスを寫したる事あり。非常の上出來にて全校大評判となりぬ。校長はわざ〳〵額縁を造らせて、コロンブスは教員室の一隅、大時計と並べて高く

揭げられたり。

毎日其前に人山築かれぬ。予も亦村田に其大名譽を祝したり、村田の眉の動き方、異樣なりき。脣固く閉ぢ、一種の顫ひは、口の周圍より頰の肉に波動せり。予は彼の競爭者也。而して彼のコロンブスは全く彼の勝利となりぬ。

コロンブスは鼻の下に髭あり、頤も頰も鐵帽を以て覆はる、滿面毛の中に埋もるに似たり。故に之を畫く、其難きは實にひげなり。而して彼村田の技倆はひげに著はれぬ。校長が激賞して措かざるもひげなり。村田自身が得意も亦ひげにあり。予はたゞ如何にして村田が斯くまでに巧妙にひげを畫がき得しかを怪みて措かざりき。

その頃東京歸りの青年あり、大學豫備門にありしも故ありて歸國し、小學校の近傍に住めり、教員諸氏と來往し、村田も何時か彼と親みぬ。村田がコロンブスのひげは全く此豫備門先生より傳授したるなり。予は村田に就きて予にも亦、其祕法を傳へんことを求めたるなり。幾度か懇願に懇望せしも、彼は只だ微笑するのみ、決して予に教へざりき。予は殘念の事に思ひ、獨工夫を凝して、書きては破り、書きては裂き、ひげの練習に全力を注ぎしも、終に村田のコロンブス程に至る能はざりき。其後間もなく予は中學に入りぬ。

予が寄宿せる中學は父母の家を隔つる八里餘の都會にあり、夏期休暇に歸省し、冬期休暇に歸省す。八里の道程たゞ山のみ、急坂斜に山腹を辿ることあり、深谷を下瞰して泡立つ溪流、湛へし淵、綠の如く黛る潭を看て行くことあり、參差たる灌木の林に包まれて路傍に立つ茅屋を顧みることあり、鈴の音を山彦に聲かせて煙草スパ〳〵、放歌朗々、向の山かげを來る駄賃馬子に出遇ふことあり。颯々たる山谷の風を長へに吸て、百年の龍影を岩石の上に投ぐる老松の下に二三の小兒が蟬聲するを見ることあり。山鄙け　平野茫々たる處、夏日まさに天に冲して微風そよがず、蒸し暑き草の氣に打たれ嘴ぎ〳〵て歩む樵夫を見ることあり。歩むに連れて、山野溪流次第に其趣きを變ずるを眺めて逃むことあり。一種のチャームは恒に予を動かし、形、色、光、影は、意味深き謎語の如く予の眼に映じ、予は一心唯だ如何に畫かば此謎語を解き得るかと、其れのみに思を苦しめ、苦みながらも、夢みる如き愉快に耽りて、八里の難路も長きを覺えざりき。鳴呼當年のことは煙の如く消えぬ、眼目して眼底に描き得る者は、風呂敷包を負ひ、白のメリヤス股引を着け、草鞋曳東なく踏みたる少年が、みぞれ蕭々と降る寂寞の境を、茫然四顧して辿り行く光景なり。予は此想像畫に對する毎に怪しき暗愁の靈に幽かに泣く。

一昨年の春より　昨年の春にかけて、予は鄕里にあり、珍らしくも一秋を田舍に暮しぬ、予が樂は同じく畫なりき。

予に弟あり、畫に熱中すること或は予に愈る、予の東都に留るや、彼に畫帖を贈りしことあり。昨年予は彼と廣島市に旅行したり、二人の間に最多く購はれしものは畫なりき、二人は土產にまで畫を用ゐぬ。

予は彼と談じて各一枚の畫板を造り、二人遠行して山野を跋渉し、或は近郊を漫歩する毎に必ず之を携へ、感に觸るゝもの、直ちに鉛筆に上しぬ。田舍の秋は最も畫に適す、一日、待ち受けし日曜日は到りぬ。予等兄弟畫板を負うて家を飛び出で、箕山と呼ぶ近鄕第一の高山を攀づ、森、藪、藁屋、耕人、柿、楓、案山子幾枚の下畫、行く〳〵筆に上りぬ。

此山海に突出する岬の脚を爲す。頂平圓にして秋草遠く半腹を覆ふ。眺下せば周洋三十六灘の水脚下に開け、微茫頓浪、遙かに鎭西の

諸山を眉の如く引く。白帆、漁舟、長汀、曲浦、島嶼、岩礁、悉く畫ならざるはなきも、予等兄弟只だ斯る縹渺、空濶、雄大なる天然の前には、恍として自失するのみ。此日予は馬島、牛島、觀島を畫き、弟は佐伯島長島を畫き、予又上ノ關、室津間の海峽を畫きたり。畫き得たるもの固より見るに堪へず、兄弟相顧み互に嘲り笑ふと雖も、猶ほ筆を投ずる能はざる所以は何ぞや。筆とるものは揮き筆なれども、筆とらしむる者は自然なればなり。否、自然を恃ふる人間の癡なればなり。予自身其故を知らずと雖も、小兒の時、少年の時、馬の圖に對する毎に或る魔力に打たる。悲馬風に嘶く圖、長鬣を北風に波打たせて昂然として巖上に立つ馬をみる時は、わが心誇りて躍りぬ。花落ちて江堤、草煙の如き處、三歳の神駿跨を揚げて去るを見る時は吾が血湧きぬ。曾て父大阪に上り、土產とて一本の扇子たまはる、開きし見れば野馬數十を畫きあり、或者は馳せ、或は嘶き、或は二足立に跳る、予は小躍りして喜びしことありき。

船の圖は普通の趣味に適ふが如し。何れに行くも船は能く畫題となる。予も亦甚だ船の圖を愛したり。自分も好みて畫きぬ。暮潮夕陽に融けて金を流すが如く、大船錨を投じて岸として灣頭にかゝる、水天相接する處歸帆遲し、かかる圖に向ふ毎に腕白なる予れ、心も空となりぬ。

されど今や予が畫に對する感想の、大に變化したるを覺ゆ。哀しき變化は年月と共に來り、動もすれば紅潮の頬の肉の落つると共に、哀しき變化は寒霧の如く、畫に對する感想の上に掩ひ始めぬ。囊には予畫を一つみたり。されどそは自然なり。馬の圖、人物畫、山水畫、船舶の畫、茅屋の畫、破宮古跡の畫、薔薇花の畫、夕影の畫、水車の畫、之に對する予は自然なりき。形、色、光、影の巧みなる配合の前にはわが無邪氣なる心無邪氣に躍りしのみ、予はたゞ花に眠る胡蝶の如く、或る自然の馨ばしき香にうたれて醉て自ら知らず、夢みて自ら知らざりき。

されど嗟可憐なる少壯の者よ！ 予敢て自ら可憐と呼ぶ、渠生れて地に墜つ、年を閲する二十一年、樂き自然の夢全く破れぬ。畫に向つて輝きし渠の眼、今は畫を觀て暗涙を滴ふるに至れり。畫に對して叫びし渠、今は默して沈思するに至れり、畫を觀て樂しむは一なり、今も畫は渠の生命なり。唯囊には食物の如く然り、今は病者に於ける靈藥の如くなりぬ、此世界の重苦しき、薄暗き、殘忍なる鮮血濺ふ、迷路繁き人生の旅行は漸く渠の前に現はれ來り、滿眼四圍の光景事々物々悉く新らしき說明を渠に求め始めぬ、畫も亦新らしき異色を渠の前に呈し、深くして悲しき意味を渠に私語くに至れり、渠の靈は傷き渴きぬ、渠此私語を聞く時は、一掬の活泉を得たるが如し。

馬の圖、船の畫は、只だ夫れ馬の畫、船の圖にして止らず、茅屋、耕人、古跡、森林、小兒、長汀曲浦島嶼の畫、只だ夫れ茅屋、耕人、古跡、森林、小兒、長汀曲浦島嶼の畫にして止らず、孤兒が亡き親の畫像に對する如く、其うちに回顧、記念、想像、默示の深き悲き遠き幽なる音を聞くに至りぬ。

予此頃小川町の某畫師に一枚の畫を見出しぬ。そは椅子の上に二人の小兒、一個は四歳許りの女兒、一個は二歳許りの緣兒、相並んで眠り、母とも覺しき一婦人、椅子の陰に立ちて此なたを正視せる樣を畫けるなり。すや〳〵と眠る小兒、結ぶ何の夢ぞ。眠りの神、彼等の爲に謳ふ何の催眠歌ぞ。小兒、無心、眠、夢、知らず何の詩ぞ、然れども予は此畫に不滿あり、そは小兒の母小兒をみずして吾等を眺むることなし。予は此母が眠れる小兒を熟視して、其優しき眼の裡には處女も男子も決して想像し能はざる無限の哀思を包まんことを望む者なり。

ミカエルは ウォーズウォールスの傑作なり、予若し能ふ可くんば自ら之を畫かん事を思ひ立ちぬ。彼ミカエル、如何に畫かば、詩中のミカエルと等しく現はるべき。ミカエルの兒、群羊、牧草、溪流、連山重疊、蒼穹一點の蒼、如何に點出せば、予にヒュマニテーの幽音悲調を傳ふ可き、嗚呼予が手畫筆を捨てゝ已に幾年、肉硬くして再び畫くに由なけん。已んぬる哉、いさゝか筆を鉛筆に更へて幽懷をやる。

驟雨

一

本所からまだ汽車の出ぬ頃、自分は千葉で一泊し次の日は東金、健脚の人なら半日の行程を午後二時までかゝつて漸くに辿りつき、夏の日盛ではあり草鞋喰の癒み堪へ難く、何も急ぐ旅ではなし泊れと、町端れの旅人宿の砂埃で眞白な上框へ腰を下した。

足を洗つて二階へ通されて見ると、昨日からの疲勞が一時に出て、何時眠入つたとも知らぬ間にがたつく障子の響、眠い眼を微に開けて四邊を見廻はす時しも、居の時計が緩に五時を打つた。それにしても薄暗い、まだ太陽のある筈だがと起上つて欄干に凭けさうな身體を投げかけ外面を覗けば、空は一面の黑雲墨の如く、吹く風の的なく迷うて軒先の柳怪しく鳴り、驟雨襲ふべき光景である。

宿驛は田舍の都、東金も一筋町の中程迄來れば、可成綺麗な商店軒を並べて家並も揃うて居れど、打見たる此場末は黃白き瓦屋茅屋の高低定まらず、間口廣く老爺とも見ゆるが住む人はと問へば、六十の婆と孫の二人きりと云ふか も知れない。水を撒かぬ往來を夏の日の一日駄馬の蹄で蹴立てられては廂から店先き、物として灰を浴びざるはなく、眞向うは菓子屋、東京パンと障子の薄靄からして情なく、左が鍛冶屋右が紙屋で前に草鞋がぶら下げてある。痩狐一疋走りゆく後から汚物に群がる蝿が急に飛んで逐駈けゆく。以上見てこれぞと面白いもの、樂しいもの、晴々するもの唯一つでもあるか、驟雨、驟雨、この不快を一度に洗ひ流すものは！

下界を壓する空氣重く陰にこもつて打つ鳴神の攻太鼓轟きそむれば、先鋒の風伯は往來に散亂する斷切、紙屑の類を一つに纏めて虛空に捲上げ、忽ちフイと撒き散らしゆく。一粒二粒落ちて來た。暫は向ひの家並さへ見兼ねる程の激しい雨、斜に白く黑く縞を立てゝ降る勢すごく、煽られて舞込む雨霧冷やかにわが面を掠める心地よさ！ それも亦直ぐ止む驟雨と思へばこそ。

旅人に取りては晴れゆく雨の名殘を見送るほど胸のすくものはなく、それも亦この小氣味よい驟雨なればこそである。

西に天際から雲切れがすると瞬く間に大空扶ふが如く晴れわたり、傾く日の光の一際鮮やかなるに映じて萬生々として來る。子供は獸呼する。背戸の雞は羽搏をして時をつくる。飴賣の笛は高く響く。向の鍛冶屋の鐵砧勇ましく火花を散らす。羽蟻までが藁屋の前で輪を作つて舞ふ。

新調の番傘を日傘に、半ば身を隱くして頗はよく見えぬ村男の我宿の前に立佇つて主人と二語三語大聲に『結構な驟雨』を繰返す、其後からしよんぼりと店先に入つて來た一人の旅客、自分は其樣子を見て直ぐ我仲間と覺つた。果して『お合宿を願ひます』と下婢の挨拶の終らぬうち其處に現れたは渠『書生さん同士お合宿

り。予は此母が眠れる小兒を熟視して、其優しき眼の裡には處女も男子も決して想像し能はざる無限の哀思を包まんことを望む者なり。

ミカエルは ウォーズウォールスの傑作なり、予若し能ふ可くんば自ら之を畫かん事を思ひ立ちぬ。彼ミカエル、如何に畫かば、詩中のミカエルと等しく現はるべき。ミカエルの兒、群羊、牧草、溪流、連山重疊、蒼穹一點の蒼、如何に點出せば、予にヒュマニテーの幽音悲調を傳ふ可き、嗚呼予が手畫筆を捨てゝ已に幾年、肉硬くして再び畫くに由なけん。已んぬる哉、いさゝか筆を鉛筆に更へて幽懷をやる。

驟雨

一

本所からまだ汽車の出ぬ頃、自分は千葉で一泊し次の日は東金、健脚の人なら半日の行程を午後二時までかゝつて漸くに辿りつき、夏の日盛ではあり草鞋喰の癒み堪へ難く、何も急ぐ旅ではなし泊れと、町端れの旅人宿の砂埃で眞白な上框へ腰を下した。

足を洗つて二階へ通されて見ると、昨日からの疲勞が一時に出て、何時眠入つたとも知らぬ間にがたつく障子の響、眠い眼を微に開けて四邊を見廻はす時しも、居の時計が緩に五時を打つた。それにしても薄暗い、まだ太陽のある筈だがと起上つて欄干に凭けさうな身體を投げかけ外面を覗けば、空は一面の黑雲墨の如く、吹く風の的なく迷うて軒先の柳怪しく鳴り、驟雨襲ふべき光景である。

宿驛は田舍の都、東金も一筋町の中程迄來れば、可成綺麗な商店軒を並べて家並も揃うて居れど、打見たる此場末は黃白き瓦屋茅屋の高低定まらず、間口廣く老爺とも見ゆるが住む人はと問へば、六十の婆と孫の二人きりと云ふか も知れない。水を撒かぬ往來を夏の日の一日駄馬の蹄で蹴立てられては廂から店先き、物として灰を浴びざるはなく、眞向うは菓子屋、東京パンと障子の薄靄からして情なく、左が鍛冶屋右が紙屋で前に草鞋がぶら下げてある。痩狐一疋走りゆく後から汚物に群がる蝿が急に飛んで逐駈けゆく。以上見てこれぞと面白いもの、樂しいもの、晴々するもの唯一つでもあるか、驟雨、驟雨、この不快を一度に洗ひ流すものは！

下界を壓する空氣重く陰にこもつて打つ鳴神の攻太鼓轟きそむれば、先鋒の風伯は往來に散亂する斷切、紙屑の類を一つに纏めて虛空に捲上げ、忽ちフイと撒き散らしゆく。一粒二粒落ちて來た。暫は向ひの家並さへ見兼ねる程の激しい雨、斜に白く黑く縞を立てゝ降る勢すごく、煽られて舞込む雨霧冷やかにわが面を掠める心地よさ！ それも亦直ぐ止む驟雨と思へばこそ。

旅人に取りては晴れゆく雨の名殘を見送るほど胸のすくものはなく、それも亦この小氣味よい驟雨なればこそである。

西に天際から雲切れがすると瞬く間に大空扶ふが如く晴れわたり、傾く日の光の一際鮮やかなるに映じて萬生々として來る。子供は獸呼する。背戸の雞は羽搏をして時をつくる。飴賣の笛は高く響く。向の鍛冶屋の鐵砧勇ましく火花を散らす。羽蟻までが藁屋の前で輪を作つて舞ふ。

新調の番傘を日傘に、半ば身を隱くして頗はよく見えぬ村男の我宿の前に立佇つて主人と二語三語大聲に『結構な驟雨』を繰返す、其後からしよんぼりと店先に入つて來た一人の旅客、自分は其樣子を見て直ぐ我仲間と覺つた。果して『お合宿を願ひます』と下婢の挨拶の終らぬうち其處に現れたは渠『書生さん同士お合宿

は却つてお賑かで』と手前勝手な挨拶を受けて『何卒よろしく』と氣の毒さうな、どこか世慣れぬこなし。肉痩せ骨高く年齢は二十四か五か、荷物は風呂敷包一つ、別に肩から古鞄をさげて耳には鉛筆を挾んで居る。

二

其夜は淋かに語つて一時のうつを自分は聞いたが、其後は知らず、五時ごろ自分は目覺めて頭を上げて見ると渠は夢何ほ深く、さなきだに色艶惡しき顏の死人かと思はるゝまで蒼白きをつくづくと見入りて、今更彼が昨夜の告白を思ひ出し、冷かなる涙の我頰を傳ふを禁じ得なかつた。

東金から八日市場まで馬車、それから先は徒歩で二人は馬子とも話し道草も取つて而白く銚子まで歩み、『未だ日は高いが折角だから君も銚子で今夜は泊れ』と自分の勸めるのを彼は打消し、『イヤお別れとしよう、昨日の驟雨といひ、昨夜から今日へかけて偶然にも君に斯樣に親しく相知つた事と云ひ、僕は近年にない愉快であつた。又何時逢ふ事やら最早一度と逢はぬ事やら分明らないが悲しと思へば悲しいやうなものの、僕は時間の長短が人の交に關係すると

は信じない』と云ひさして暫時頭を傾しげ物思ふ體であつたが、淋しい笑を眼元に浮べ、『記念と云つては烏滸がましいけれど、此際別に思ひつきもないから、之を君にお渡しする、後で御覽ください、元來他人に見せる筈のものでないが、君にだけは何となく見て貰ひたい心持がするから』と一冊の手帳をわが前に出した。自分は强て止めるのも無益なりと思つて遂に手を分つ事として渠は直に常陸に渡り、自分は銚子に逗り其の夜かの手帳をくはしく見ると、其折折の隨筆で、要之渠が自敍傳には相違なきも一人稱を用ひないで、總て「渠」の三人稱を以て書き、我と我身を批評し賞讃し罵詈し冷笑し說明したものである。只一節一節少しも連續してゐないから何の事やら了解らないこともある。今其解り易いものを一二錄すれば、

左より燈光渠を照し右よりは清光流水の如き月渠を照らす、渠の眼は書上に注がる。半面はやゝ紅く半面は蒼白なり、彼にありて見る時は尊き美術品を畫工は得たりとせん。されど彼は人なり美術品にあらず、見よ、其唇は戰きつゝあり、夜の更けゆくまゝに月は西に傾きて森のかなたに隱れ蒼白なる渠の半面は暗くなれり、燈の油また盡きんとす、渠は影の如く坐せり。その書は一枚より一枚と讀まれ讀まれて殘り少なうなりぬ。渠の眼の光はいよ〳〵鋭し。其心には戰絕えざるなり。

又た、

渠の行末を思へば心痛の至りに堪へず、渠の特質は渠自身を呪ふが如く見ゆ。渠には野心あり、天才あり、されど足なきの野心翼なきの天才なり、進む能はず飛ぶ能はざるなり。常に其心を噴ひつゝ僅に其心の生命を繫ぎ居れり。我儘にして高慢なり、而して蟄せる怠惰の慢性病に罹り居れり、其生涯は目的なきの生涯なり、目的あるが如くにして實は一種の幻影を追ふの生涯なり。何事かをなさんと欲しつゝも遂に成就する能はざるの生涯なり。

今も昔のまゝなる渠は其後七年ぶり什麼して自分の住所を知つたか、突然書狀の文字すら彼手帳のまゝに、次の一節を手帳の末に書き添へ呉れよと申越した。

渠は空知川の澤に立てり、冬枯の寂寞たる森林渠を圍み、悠々たる蒼天渠を覆ふ、今や死は渠に取つての驟雨なり、渠は戰慄れ

し聲を振搾つて叫びぬ、驟雨！　驟雨！

想ふに渠は其反響の曳々として空林遠く消えゆくを耳聾てゝ聞いたであらう。

死し

此世を去りて冥界に下りし人の、『あゝ我曾て今日の死あるを思はざりき』と叫ばむか。其聲のいかばかり悲かるべき。渠は生て屢々死のことを耳にし、死の事を見これを語りて或は泣き或は笑ひたり。されど未だ曾ておのれ自から眞に死すべきを眞に感ずることなかりき。

戀の日記

一

波の前には書が開かれてある。併し少しも書物は見てゐない。恐らく彼は自分が机の前に坐して居ることも忘れて居るであらう。顏は言ふに言はれぬ喜びを湛へて、身を壁に寄せかけて何とも言へぬ心持のよさうな笑を口元と口の邊に浮べて、のどかに、ゆるやかに卷煙草をくゆらして居る。

秋の日脚が西に傾いて窓から夕日がさし込んで居る。なまぬるい夕日が――。外面は折々風はそよとも吹かぬ、夕日を眞ともに受けた庭木の絕頂の小枝が時々顫いて居るばかり。

『あゝうれしかつた、何處らまで歸つたらう。』

彼は思ひつゞけた。

世には戀に惱んで苦しむものもある、死ぬ程の悲しい思をするものもある。そんな悲しい心で見ると、靜かな秋の夕陽ほど心細い者はない、遠い〳〵昔の世の俤を面のあたり見る樣な心持がするものである。

彼も昨日はさうであつた。庭木の影がだんだん長くなつて石段を一つ〳〵と登つて來るのを見ては夢心地になつて、身も魂も消え入る樣に思つた。

すると、今日は待ち焦れてゐた少女が來て、何を話すともなく二時許を瞬間にうれしさに過して、之からは度々遇ふ事が出來る事に約束して、彼女はいそ〳〵と歸つて行つた。

二人の戀の底は涙である、しかし今はそれを彼も彼女も忘れて了つたのである。

夕日が次第に疊の上をはつて、投げ出した足から胸までを靜かに溫めた時、彼は身動きもし無いで身の溶けるのを待つて居るらしい。

二

『熱沙漠〳〵のサハラを旅する人も折々は甘き泉涌く涼しき木蔭青きオーシスに出遇ひて死ぬばかりなる疲を休むる由あれど人生れ落ちて死の墓に至るまでの旅路には唯一度戀てふ眞清水を掬み得て暫時は永久の天を夢むと雖も、忽ち醒めて又其淋しき行程に上らざるを得ず、斯くて墓の暗き内に達するまで第二のオーシスに出遇ふことなく、たゞ空しく地平線下に沈みうせぬる彼の眞清水を懷ふのみ、果敢なきものならずや。』

斯て渠は深き嘆息をつきぬ。

『戀の眞清水はいつも〳〵涌きて流れ疲れし人を恢てども、たゞこれを番する少女のみぞ幾度か〳〵變りゆくなる。少女も一度は年若き旅人を伴ひて此泉に掬めど、いつしか其の手を泉にさし入れてこれを濁し、若者をこゝより追ひやりて、おのれも亦たあへぎ〳〵其跡を遥ひ、苦しき熱き淋しき旅路にのぼる。』

この時渠は遠方の空を眺め入りつ。

『われ曾て沙漠の悲劇と題する畫を見たりしが、一疋の猛き獅子と畏ろしげなる長蛇と、茫茫限りなき沙漠の眞中にて苦鬪する樣を描ける

ものなり。これぞ此世の悲劇なるかも。』

渠は戀を思ひ人の世を思ひ、少女を思ひ、沙漠を想ひ、オーシスを想ひ、想を馳ね來りて深き悲へと沈み入りぬ。

三

『世の中がこんなに美しいものとは思はなかつた』と近眼鏡の上に更に他の近眼鏡を掛けて渠は嬉れしげに呼んだ。

四

「スモーク」の一册が机の上に置いてある。

今月今夜は十一月十一日の夜である。自分と彼女とが二年前の今月今夜は結婚した日である。

一昨夜は今井君と共に赤坂の或る料理屋で快く飲んで樂しく語つた、其夜今井君と別れて後、直に治子の家を訪うた。此日自分は治子の許へ「心の緒琴」一册を送つた處、直ぐ送り返してみた、祖母の名を以て。自分はどんなに苦しく、腹だゝしく悲しく思うたらう、醉にまかして不平をもらした。治子は泣いた。

昨夜治子から手紙が來た。あゝ憐れの少女よ、彼女はわが小説を讀んで其身を千葉宮子にひきくらべた。悲しい哀れな美しい手紙であつた。

自分は昨夜夜更けて、一昨夜治子の宅より歸て後、午前二時半ごろまで起て居て作つた新體詩を書きあらためて、手紙を書き添へて、其れを今日午後一時頃治子の宅へ持て行て「水沫集」の中に入れて密かに渡した。

治子は自分を見て絶えず涙ぐんで居た。

これが一昨日來の事柄のあらましである。若し詳しく書いたらなか〳〵一章ではすむまい。實に色々の事が雜つて居る。

今井君が自分のために「スモーク」の第八章を語てイリナがトイノフに送つた書狀を讀んだ時自分は涙が込みあげてきた。其の夜の酒がどんなに此の悲しい心に沁んだらう。其の夜の明月がどんなに此の悲しい心に映つたらう。

何事も神の御心にまかし奉る。自分は男らしく歩みたい。あゝ實に男らしく。

自分の前途は未だ甚だ望が多い。文學者としても政治家としても自分は未だ實に此腕を十分にためした事がないのである。

日本の今日の詩界も政治界も少壯有爲の人物をまちにまつて居る。自分は此の生涯を仇に過ごしてはならない。

戀は實に悲しい。然し悲んで壞りたくない。此悲に堪へてこそ此の情は益々高く高く清くなる。

今日の曇天が、どんなに自分には悲しかつたらう。

自分はどうしても日曜は教會に行かなければ此命がもてない。自分は神なくしては生き難い事をつく〳〵感ずる。

戀の悲が破れたる時に友愛の光がどんなに强い力を以て、自分の胸に沁んだらう。信子の時も實にさうであつた。

あゝ戀よ。何時までも自分を苦しめ弄するぞ。

自分の作つた「おとづれ」が國民の友に出た。これが第二の小説である。世間は冷やかに迎へても宜しい。治子は書き送つた、『此の「おとづれ」を讀み玉ひし人多き中に初めの一字より終りの一字まで涙と共にくり返し〳〵讀みたるは私一人ならん』と。自分は滿足である。悲しい滿足を感ずる。實は北海道の少女にも讀ましたい。

たとひ治子が自分を此後、永久に忘れてしまつても、彼女はとても一度深く刻まれた深い戀

の悲みの中にひそむ樂を忘れるわけにはゆかぬ。よろしい。利害得失のために、動き易いのは女の性である。他人が勝手に製造し想像する利害論は勝を占めてもかまはない、人情は最後の勝利者である。

遠からず治子から何か手紙をよこすであらう。若しよこさなかつたら、それはイリナの手紙と同じ心であるに極つたのだ。自分はリトイノフ程には泣くまい、靜かに天の命を受ける許りである。却つて治子の心は絶え間なき苦惱に破れるであらう。

自分は今、「スモーク」の八章及び九章を讀み了つた。八章に於てリトイノフはイリナと別れ深き絶望に陷り、幾年の日月を經て九章に於て再會した。

自分の前に小さな十字架が置いてある、紫水晶で作つて有つて金具は金らしい。これは昨日治子が送つてくれたのである。治子の手紙にこれを私の心と思うてくれろと書いてある。

治子は今日、自分の去つた後、祖母と共に叔父の處へ行つたとの事、今井氏が路であつたさうだ。自分は言ふに言はれぬ不安を感じて居る。丁度、イリナが舞踏會に望んだ後のリトイノフと同樣な感がする。自分はしかし、リトイノフのタティアナを持つて居ない。自分を愛した、少女は二人まで其の愛を破つてしまつた。治子は再び自分の愛に身を投じてきたが、何となく不安に思つて居る。

自分には殆んど今、光を見ない花の樣な極めて淋しい感がする、自分は決して幸福者ではない。

自分と治子との關係は如何したらよからう。決して戀の祕密は永く保たれるものではない。打ち明けて凡てを命に決し樣か。あくまで祕密にして命のくるを待たうか。如何なる命がきても之を甘受し樣か。自分には決し氣ねる。

夜は大分更けた。汽笛の響が遠くで聞える。彼は(こゝには彼と書く)、今更の樣に都會の生活に氣付いた。實に妙な所だ。何のために自分は此處に生活するのであらう。何のためにこゝで今の樣な生活をするのだらう。東京がなぜ自分にはいゝのだらうと渠は思ひつゞけた。

彼は叫んだ、『戀よ戀よ！　戀ほど時間を浪費するものあらんや。戀の最中に居ては何事をなすにもものぐさく、心は何時もまどろみ、戀の破れし後は何事をなさんとの氣力すら碎けて心は痛み苦む。戀よ戀よ。願くは少女を選擇して其の光をそゝげ』と。

五

『戀とは何ぞや。』かゝる問を自から發し、戀といふ事實に深き思を凝らしつゝ戀するものあり。渠の如きはその一人なり。

六

『戀の邪魔をせらるゝほど苦しい者はない、それも判然と異存でも言はれてゆく末の夢を破壞されるのなら、手術が亂暴なだけに或は痛苦が一時である。亦たその異議に向つて十二分の抵抗力も奮ひ起されて、此方の意地も我慢も元氣を出す、從つて强合があつて面白い事もあるが、それと違つて何とはなしに二人の中をせかれたり、それとなく惱まさるゝのは、二人に取つて之れほど苦しいものはない。いつも此の惨酷な仕うちを女の母がつとめるものである。戀はいつも母親が破るにきまつて居て、いつも又、その仕うちが女丈けに蛇の生殺と同じことである。自分の身の上からまづ一例を引いて見ようか』と或る四十男が圓居の若い者を相手に話しだした。

若い者には何よりの御馳走である。皆んな此の哲學者の戀の身の上ばなしを珍らしさに聞き込んだ。哲學者先生は顔るまじめに語り出した。

『そこで又、不思議な事は二人の仲だちをするものは何時でも大抵は母親にきまつて居るのさ。母が種を蒔て、芽をふかせて、それでやつと氣がつく、氣が付く事が則ち戀のためには殆ど日光のやうなものである。二人は次第に氣をもみだす、それ丈け情が深くなる、泣く、行末をはかなむ、それだけ戀しさが增す。戀の日光は祕密の暗のうちでこそいよ〳〵温かに照るものである。母親は此の樣に氣が付いて愈々眞綿を二人の首にまきつける。二人は苦しさに益々だきしめる。母親が無理に離した時は、生木を割くといふ比喩が最もよく穿つて居て、双方が枯れてしまふか、さなくば片輪者になつてしまふ。さうなると父親は流石に男だけとても離難いものと見て取つたらふイと氣をかへて二人の望みにまかせてしまつて、寧ろ二人が一ッになつた行末をかれこれと氣をつけて無事の發達と立派な實の成る日を待つことにする。母ばかりの娘と戀仲になつた若いものほど氣の毒なものはない。君だちも之れは氣を付け玉へ。僕の例もそれさ。』

と哲學者先生は言ひかけて一寸眼をそらして天井の隅を見た、昔の事を思ひだして其面い血の何處にかまだぬくもりが殘つて居るらしく、暫く無言であつた。

『と言つた所が、僕のは實はそれほどの事でないのさ。娘と言ふはその時二十三であつた。僕は二十八であつた。娘も僕も決して初戀ではないので。僕は一度死ぬほどの目にあつた後の事であるから、もうさまでは熱しなかつた。しかしその娘が自分のみに焦がれる樣のいかにも烈しいので遂には僕も心を動かしてしまつたのみならず、或晩、娘が身の上の恥を白狀して泣いてからは急に憐れになつて、自分の俠氣がむら〳〵と起きてきて、此娘の行末をおれの愛で守つてやらうと言ふ氣になつた。さうすると自分も可愛さといぢらしさとが增してきて、自分の以前の戀とは少し心持の違ふ一種の愛着の念が自分の沈んだ血をかき亂して來た。

『そこで母親は二人をどうしたどらう。變に邪魔をした。自分は變にといふ外に今でも母の仕打を形容する事が出來ない。

『自分は母親の邪魔を何と感じたどらう。そこで少し僕は僕のこの頃の人物を説明する必要がある。

『自分は自分で其頃常時も思つて居た、到底自分の如き人物は普通の母親に知られる筈はないと。なぜならば自分は丸で、普通の青年と其趣きを異にして居るからで。つまり詩や哲學や宗教の領地に籍を置いて居て、人生の事を問題にして居た、たゞそれを學問の机の上に乘せて置くのではなく、僕の感情といふものが丸で躍つて熱して或は狂つて此問題に左右さるるから、「立身」とか「出世」とかいふ標語は餘り自分の耳には勇ましく聞えなかつた。普通の母親が、どうしてそんな若い男を好まうぞ。氏無うして玉の輿に乘るといふが母親の娘に對する夢想である。「玉の輿」自分のやうな人間は冷笑したくなる。卑しみたくなる。その樣子が自分の擧動に出る、母親は益々自分をいやがる。

『自分は初戀の時も此流で母親の反對をうけたが其時は、自分も丸で戀の狂人であつたから、猛然として母親と戰つた。そして勝つた。そして遂にまけた。

『さて此度は最早やかゝる熱は起らない。自分はどこまでも冷笑したくなつた。母親がいやなら、おれも此戀はごめんだ、氣の毒ながらお前

の娘は捨てゝやる。そのかはり、娘の心がそのために死んでしまつても知らないぞ。と言ふ氣になつて來た。

『しかし娘はどこまでも自分にこがれ、自分を信じ、自分を命ともして居た。それは實をいふと娘は以前身に……有るとは云ふものゝ戀といふ戀は自分に向つて初めて起つたので、二十三にもなつてからの初戀であるから、丸で夢中なのである。又た二十三とはいふものゝ末子であるから心持が何處かに幼ない所がある丈けいぢらしい程、自分にこがれてしまつた。どうして自分に此娘が捨てられよう。そこで自分は初戀の時、狂氣のさまで母親と戰つた心持とは一種違つた反抗の念を起した。

『すべて此等の念が日々、三人の間の極めて微細の出來事の上にもほのめいて、莫ひつ詰りつ、何んでもない中にをり〳〵三人をなやまして居た。尤も苦んだのは娘である。それを見る自分は又たそれ丈け心をなやました。』

わが過去

彼は夜更けて獨り燈火に對し、默想すること多時。

彼が心は靜かなる事、山間一碧の潮の如し。彼は思へらく、『わが過去は熱情と理想と私慾との戰なりき。われは多く思ひ、多く感じたり。されど多くの勤勞を執らざりき。わが過去をわが經驗としてのみ視れば、實に價ある經驗と言はざる可からず、されど若し理性の示す所に照さんか、怠慢放逸の生活と言はざる可からず』と。

されど彼は尚ほ自ら言はんと欲して言ふ能はざる者を、其過去の經驗中に感ぜり。彼は其の過去の生活をよろこぶの情と悔ゆるの情との半々を感じぬ。

而も確として思へらく、『我が過去は過去として價あるものたらしめよ。されど躊躇して將來に於て斯る怠惰なる生活を許す可からず、若し我尙ほ斯る放逸なる生活を送りて改むる能はざらんか、我生涯は失敗なるべし、自殺なるべし』と。

彼は又た思へらく、『我は勞働勤勉の樂を知らざる乎』と。

若し人を二種に分てば、其手近にあることを爲して着々其歩を進め行く人と、常に鼻頭を去る幾尺の空間に或者を描きいだし、之れに被らしむるに黃金色の光澤を以てしてこれを望見て拱手自ら樂しむ人との二種なりとす。彼の如きは其の何れに屬すべき人乎。

趣味について

人の妻たり母たる人の責任の重なる者は家庭内の趣味として高潔温健和中ならしむるにあり。

人として趣味なきはなし、たゞ惡趣味たると好趣味たるとの差あるのみ。

「嗜好」と「趣味」とは混合すべからず。嗜好とは其人の樂みなり、趣味とは其人の道義的慾望なり。

例せば勞作の如き、これを苦痛と思ふ者には苦痛なるに相違なし。若し人ありて、此苦痛を忍んで勞作に從事するとせよ、忍耐の德は彼れにあり、されど以て彼れが感ずる苦痛の分量を減じたるには非ざる也。又た人あり、其勞作して成就する所の作物に對し深き興を覺えて、其勞作の苦を忘れりとせよ。斯る興味は彼れの求めに應じて如何なる場合にも彼を充滿さすべく生ずべきか、斯る興味は彼の欲するまゝに永續すべきか。今日までの美術家は皆なこれ

を否定せり、果して然らんには、興味は勞作の苦痛を或時の間忘却せしむるの力はあれど、其人の勞作其物に對する苦痛は消し得ざるなり。此時に當り彼の農夫等が習慣の力を藉りて勞作の苦痛を感ぜざるが如き、前の二者に比すれば其幸の大なる決して同日の談に非ざる也。されど若し玆に此等三者が勞作其者に就て深き趣味を感得せりと假定せば如何。勞作の苦をする實に消極的なりし者が却つて勞作の樂を覺ゆる當に積極的となるべき也。

趣味の教育の人生に如何ばかり大切なるかはこゝの事なり。若し教師ありて其子弟に教ふるに勞作の報酬の如何に大なるを以てせば如何、これ結果の大なるを示して勞作の苦を忍ぶ事の甚だ小なるを教ふるなり、これ亦可なり、されど更に進んで勞作其者の如何に尊きなるかを教へ、これに對する趣味を鼓吹すると孰れぞ。

しからば如何にして勞作の趣味を子弟に吹込むべきか、此問題を提起して遍ねく思起するは佛の巨匠ミレーが暮鐘の畫なり。夕暮の雲の色の金色なる、アベマリヤの鐘の音の響きそめたるかと思はるゝ寺院の高塔の遠林を出でたる、兩個の農夫彼等は夫妻なり。今しも一日の勞作を了りて、さて漸々歸路に就かんとする時靜かに野づらを渡りて響くはマリヤの鐘の音なり。二人はこれを聞て相對して首を低れ、慈愛の天火に向つて祈念をさゝげつゝあり。これ實に大なる意味を含める名畫に非ざるや。教師若し此圖をかゝげて子弟に對して告ぐるに勞作の事を以てせば如何。

青桐

予が窓外に一本の青桐あり、春の終りより、夏の終りに至る間の予の無二の愛友なり。朝光始めて明かなる時夕陽最後の光を投ぐる時、細雨蕭々の時、炎天風なき時、其色、其光、其音、實に予が無二の愛友なりき。さるを秋風至りて予の身に樣々の心配を送ると共に此愛友の身の上は尤も悲哀の有樣に立至りぬ。

嗚呼、愛に堪へたる夏の日は去りて搖落の時節は徐々に襲ひ來る。悲哉。

憐れなる兒

一昨日は日曜日なりき。其夜吾二階を下りて坂本老人と物語りす。座に嬢と敎二とあり、互に四方山の噂に笑聲相續ぐ。最も樂しき晩なりしなり。

佐伯の町に一個の小乞食あり。此乞食の身の上も亦た話の種となる、其不潔なること語られ、而して又其愚鈍なる事語られ互に哀れがりぬ。暫時にして主人の翁吾に向つて言はるゝ樣、さて先生吾家にも亦た一個の愚者あり、已に御存じの如し。其愚かなる事譬へがたなき程なり。如何にすれば宜しきか、殆んど當惑致し居る也。先生別に御工夫もなきものに候やと。

吾此語を聞き、直ちに翁の心を知り、半ば頷づき半ば笑うて、實は甚だ挨拶に困りぬ。然り御宅には馬鹿者ひとり御座りますとも言ひ難ければなり。

馬鹿者とは誰ぞ、愚者とは誰の事ぞ。可憐兒なり。

吾等兄弟はじめて此家に移るや、直ちに一個の小兒を見たり。年の頃十か十一なる可し。

これ坂本氏の子に非ず。坂本老人に妹あり、嫁して他に出づ。此子は則ち其孤兒の一人なり。母と一人の姉と共に、今は坂本氏に寄食し哀れなる身の上となりし也。

寡婦は已に五十の坂も越えたらん如く老ゆ。一見して其愚直なる、甚だ氣の毒なる人物なることを知らるべし。坂本家が如何に寡婦に取

りて實家なりといへ、兄の主人に對し、殊に意地惡からざるに非ざる家婦に對して、常に甚だ氣兼して住める樣子は、新參の吾等が眼にも、容易に看取せられたり。寡婦のみにあらず、此苦しき忍耐は其娘も亦分前せり。十八九の少女の優しき心情も此浮世の悲しき運命の爲にや、何となく已に畏縮けて見えたり。

聞け。綿繰る音の聞ゆなり。此れ彼の猶ほ雅き孤兒が、强ひられて採る夜なべの仕事する也。不思議なるは此小兒が學校にも通はざる事なり。吾等兄弟始めより是れを疑ひぬ。

孤兒、學校に通はず、朝起くる毎に命ぜられて爲す事は、家の周圍の掃除なり。朝な〳〵小さき箒もて庭先をチュ〳〵と掃く樣如何にも哀れに見ゆ。晝間は何事をなして日を送るか、吾未だよく知らず。と雖も、僅に見たる所によれば、只うろ〳〵と庭の内、家の内などうろつき居るものゝ如し。時々家婦などより仕事命ぜられて爲す、其度毎に常に叱咤らるゝ靡屢々吾等が耳に入りぬ。夜は多く綿繰を務め、十時を定めの時となし、鐘鳴るや、大に喜びて、夜具に駈け込むが如し。吾等暫時にして此小兒の決して世の常の者ならぬを知りたり。此事動、其言語、凡て遲鈍にして少しも少年の快氣なし。笑へども未だ近隣を驚かす如くに轉げて笑はざるなり。泣く時は僅かに悲鳴するのみ。吾が井戸先きに顏洗ふ毎に他より注意を受けて頭を垂れ一禮すれども、注意を受けぬ時は決して禮を爲さず。吾が顏を打ち守りて眼をしばたゝくのみ。微笑もせず、恥かしがりもせず。吾已に尋常ならぬを知りたりしなり。

哀れむ可し、此孤兒實に愚かなる子ならんとは。寡婦が心中果して如何ぞ、眞に哀れなる親子にてあるなり。

坂本の老人、語を續け吾に語るに次の事を以てす。

此可憐兒の上に兄あり、これ又愚にして殆んど處置に窮す。終に或る寺院に送る、寺院其教へ雜きを申し暫時にして送り還しぬ。然るに今は養願寺に在りて小僧となり、已に經文數卷習ひ得てやゝ元に勝るに至りたり。其上に猶ほ一兄ありき。此人は普通の兒なりき、されど不幸短命、今は在らず。

可憐兒さきに通學せしなり。されど他の小兒と共に學ぶ能はず、愚かにして何事も學ぶ能はず、終に止めぬ。偖來家にあり、何を教ふるも少しも學ぶ事出來ず・强ひて學ばしむれば泣き出すのみ。若し他の小兒より打たるゝ時は平然として受け、忍び難きに至れば自ら又自分の頭を打ちて泣くに至る、若し叱責せられ甚だしきに及べば、己れ自ら己の手の甲を噛んで悲鳴す。實に憐れむべき生れつきなり、或は言ふ、猶ほ甚だ稚けなき時高所より人知れず墜落して氣を失ひたるに非ざる乎と。老人眞面目に此『或は言ふ』を語れども、吾は之を信ぜず。原因は他にあるべしと思ひたり。

此事情を語り終りて老人又あらためて言ひぬ。今や殆んど處置の法を知らず、恐る、此兒終に普通の成長を遂ぐる能はず、終生獨立の生活を保つ能はず、愚に育ち愚に終る可きかを恐る。先生別に御工夫もなきものに候やと。

吾老人の心を察して甚だ氣の毒に思へども、實は甚だ答へに困りぬ。然れども亦自ら思ひぬ。此兒、愚は勿論相違なきも、自から見たる處、老人より聞きたる處、處々の點より之を何ぶに、何となく全くの愚者にもあらぬ樣に思はれ、一種の原因あるありて心性發達を觸せらるゝにあらざるか、若し能く之を導き心性本來の微なる處より藥を投ずるならば或は意外の變化起らざるべきか。吾かく思ひ、遂に試みに自分指導の任に當りて見んことを諾しぬ。

二十六日の夜は則ち日曜日の夜、吾可憐兒の教育を承諾したる夜なり。而して今は二十九日なり、二十七、二十八、及び今日と此三日の可憐兒に於ける觀察を略記すべし。

二十七日、寡婦なる可憐兒の母、事ありて二階に上りたる時、兒の教育を半ば恥ぢ半ば、喜びて頻みぬ。吾只何事をも言はず、宜しう御座いますとのみ答へ置きたり。

此朝吾顔洗つて歸る時、可憐兒已に庭先に例の如く箒と塵箕とを携へて立ちぬ。吾を見て例の如く默然として只だ瞬きせり。其時何事か問答したれども忘れたり。手に携ふる所の齒磨粉のぶりきくわんを示して其開閉の法を問ふ、しきりに眺め、手に取りてつまぐり居たれども終に開く能はず、吾之を教へぬ。兒見て笑へり。朝まだき散歩せんとて二階を下れば、兒猶ほ庭先にありて箒を弄び居たり。强ひて伴ひ行かんとすれども叱らるゝと稱して來らず。掃かぬ時は叱らると稱し、吾等が捕へたる手を振りきつて歸らんとす。敎二内に入り許可を得て來るを見て、始めて安んじて吾等と共に歩む。

此朝大に霜ふり田園皚白なり。吾指して問ふ、彼の白き者何ぞや。雪なりと答ふ、否霜なりと教ふれども雪なりと稱して承知せず。高等小學校の門前に伴ひ其石階を踏み登りて階數を答へしむ。一ツ、二ツ、三ツ、四ツ、五ツ、六ツ、七ツ、八ツと數へて登りぬ。吾問うて曰く幾段なりしや。十二なりと答へて平然たり。否八ツにあらずや。自ら八ツと數へ乍ら十二と言ふは可笑しといへども、彼少しも通ぜず。教へて曰く、高等小學校の石階は八ツなり、記憶せよ。と彼しばらくは八ツと答へて記憶したる如くなりしも、幾何もあらず問へば已に忘れて了りぬ。

此日午後と記憶す。二階に登り來る。余が前に坐し、默然として小さき手を疊につけ、茶色の頭髮をやゝ長く生したる頭をいと恭しく手の甲の上に置きぬ。而して平然として坐し默然と吾を眺め、口と眼とを妙に動かす。

以上の記は已に二十日前に記したる者に屬す。以來吾筆を投じて復書かざりしと雖も可憐兒は依然として可憐兒なり、然り彼は其不運なる天稟と其不幸なる境遇との爲に益〻可憐の者となりつゝあるなり。彼が悲鳴する聲、今二階の下に聞かる。嗚呼彼は何事を泣くぞ。

信仰

信ずる事、信ぜざる事てふ區別よりも人間は大なり。されど不思議にも大なる人間程愈々堅き信仰を有す。

書籍の知識より冷かに組み立つる信仰は要するにやむを得ざる信仰なり。信仰の光、心に燃ゆる、すべからく、春雨の潤くるが如く已に自ら知らず、黙いて自ら知らず、故に孜々一日も安んぜざるなり。力めて眞境に到らんとす、此の熱心は必ず酬いらるゝなり。故に眞人能く神祕縹渺の自然の境に到著してあらゆるミステリーを抱懷して、惑はず。ゲーテが所謂 Mysterious all, yet all is good の大信仰之れなり。余自らかくは推論直覺し能ふと雖も、只だ之れ思想に過ぎざるのみ。心耳を傾けて雄大高壯の天籟を聽く、未だまことに此境に到る能はざるを恥づ。

「獨歩吟」序

余も亦歐詩を羨みし者の一人なり。明治の世に人となり、例へばバイロンを讀み、テニソンを讀み、シルレルを讀める者にして、其情想、衷に激すれども、これを詠出するに自在の詩體吾國に無きを憾むる者世間必ず其人多かるべしと信ず、余も亦た其一人なりき。

新日本の建立するに當りて全く缺乏せる者は詩歌なりとす。開國以來海外の新思想は潮の如く侵入し來り、我國文明の性質著しく變化を被りしと雖も、遂に一詩歌現はれて此際の情想を詠じ以て、吾人の記憶に存せしめたる者なし。自由の議起り、憲法制定となり、議會開設となり、其間志士苦難の狀況は却て詩歌其者の如くなりしと雖も而も一篇の詩現はれて當時火の如かりし自由の理想を詠出し、永く民心の琴線に觸れしめたる者あらず。「自由」は歐洲に在りて詩人の熱血なりき。日本に移植されては唯だ劇場に於ける壯士演說となり得しのみ。斯くて自由黨は其血を枯らし、其心を失ひ、今や議會に在りてすら清歌高明なる自由の理想は見る能はざるなり。

基督教を始め、歐洲の人心を鼓舞奮興しつゝある雄大の理想、早く已に吾國に入り來りて而も日本には、これが熱情を享け得る程の詩歌を缺きしため我國の新文明は物質的偏長の弊に陷り、世を靡けて唯物主義の淺海固陋に走り、宗教は卑下せられ、徒に電燈のみ輝きて國民靈性の神殿は暗夜の如し。日本に詩歌の發達せる形迹なかりしは、新日本の文明を跛足ならしめし大原因の一なりと余は信ず。

斯る時、井上外山兩博士等の主唱編輯にかかる、新體詩抄」出づ。嘲笑は四方より起りき。而も匹夫束なき小冊子は草間をくゞりて流るゝ水の如く、何時の間にか山村の校舍にまで普及しつゝあり。「われは官軍わが敵は賊なり」てふ沒趣味の軍歌すら到る處の小學校生徒をして足並み揃へて高唱せしめき。又は其のグレーの「チャーチヤード」の輓歌の如きは日本に珍らしき清爽高潔なる情想を以てして幾多の少年に吹き込みたり。斯くて文界の長老等が思ひもかけぬ感化を此小冊子が全國の少年に及ぼしたる事は、當事一少年なりし余の如き者ならでは知り難き現象なりとす。夫れ斯の如くなりしと雖も爾來文學界は新體詩なる者を決して歇迎せざりき。こは皆な世人の知る處。文界今尙ほ新體詩を眼中に入れざる輩少からざるを以て知るべし。

されど時は來れり。西南の亂を寢物語に聞きし小兒も今は堂々たる丈夫となり、其衣兜の右にミルトンあり、左に杜甫あり、懷に西行を入れて、秋高き日、父が上下着て登城したる封建の城、今は蔦蘿繁れる廢墟の間を徘徊する又た珍しからぬ事となりぬ。而して冷評されつゝも今日まで雜誌類に現はれし新體詩は、何時しか世人の眼に慣れて其詩形も最早奇異ならぬ者となりぬ。

斯くて時は來れり。新體詩は兎にも角にも新日本の青年輩が其燃ゆる如き情想を洩らすに唯一の詩體として用ゐらるる可き時は徐ろに熟したり。乃ち「青年文」てふ雜誌に新體詩の特に盛んなるは敢て不思議の事にもあらず。

是に於てか余は新體詩が今後我國の文學に及ぼす結果の豫想外に絕大なるべきを信ず。日本の精神的文明の上に著しき影響を與ふるものは今後必ず新體詩なるべきを信ず。此詩體未だ甚だ幼稚なりと雖も新日本はこれに由りて始めて其詩歌を得べくなりぬ。其結果は如何。遺傳に於て吾等は天保老人の血を體中に流し、東洋的情想を胸底に燃やす。學文に於て吾等は歐洲の洗禮を受けたり。吾等が小さき胸には東西の情想、遺傳と教育とに由りて激しく戰ひつゝあり。朝虹を望んではヲーズヲースを高吟すれども、暮鐘を聞きては西行を哀唱す。神を仰ぎて悶悲に沈む。今や吾等は新體詩

を得ていさゝか此鬱懷をのぶるに足りつゝあり。吾等をして縱横に歌はしめよ。斯くて其結果は如何。

あはれ此混沌たる時代と、此煩悶せる青年輩と、此新生の詩體とは相關係して何等の果をも結ばずして止むべきか。

されど此等、凡て年若き者の果敢なき夢想なりとせんか、或は然らん。而も余の如きものゝ腦には此新體詩の上にかゝる夢想を描き又た描きつゝある事實を如何せん。誰れか此夢想の他日、日本の文明史上に大なる現實となる可きを否定し得るものぞ。

顧て余は新體詩の主唱者及び今日まで冷評されつゝも堪へ忍びて此詩體を愛育したる諸君に向つて感謝の意を表する者なり。

余は作詩の上に於て極めて後進なるが故に今日まで成就したる作とても甚だ少く、甚だ少なき中より撰びて茲に掲げ得しは僅に二十篇餘に過ぎざるを遺憾とす。しかも唱するに足るものなきを愧づ、たゞこれを以て新體詩そのものを罪するなくんば幸なり。

詩體につきては余は其だ自由なる說を有す。七五、五七の調を可、漢詩直譯體も可、俗歌體も可、漢語を用ゆるの範圍は廣きを主張す。枕詞を用ゆる、場合に由りて大に可、たゞ人をして歌はざるを得ざる情熱に驅られて歌はしめよ。此の如くなれば、其外形は散文らしく見ゆるも、瞑々の中必ず節あり、調あり、詠嘆ありて自から詩的發言を成し、而も七五の平板調の及び難き迫勁を得る。余は此確信によりて「山林に自由存す」を歌ひぬ。

吾國には漢詩を直譯的に朗吟する習慣あり。七五、五七の流麗なる調の外、自ら吾人の口頭に一種の調を成し居れり。余は此習慣を新體詩の上に利用し發達せしめんことを希望するの也。此意を以て余は「獨坐」を作りぬ。

新體詩を以て敍事詩を作ることは必ず失敗すべきを信ず。此說に付きては坪內君已に言へり。故に初より覺悟して抒情詩の上にのみ十分の發達を遂げしむるに若かずと信ず。されど彼の敍事的抒情詩の如きは尤も新體詩に適するもの、如し。湖處子君の「雲雀」は人をして瞑想せしめ、太田君の「宇之が舟」は泫然として泣かしむ。たゞ余は七五調のみを以て此等の長篇を行る事の或は平板に流れ易きを恐る。此故に井上博士の「比叡山」を成功最東なきものと余は思ふ。

繼するものをして自由に歌はしめよ。歌うて初めて爾の懷は高品のものとならん。悲懷の士よ。歌へよ。爾の歌こそ尤も悲しかるべし。神を仰ぐものよ。歌へよ。爾の信仰火の如くんば、何ぞ、默して坐し、坐して散文をならぶることを得ん。疑ふものよ。爾の懷疑の炉悶を歌へよ。冷やかに眠る勿れ。貧者よ、爾の詩を以て爾の不平をもらせ。自由に焦るゝ者よ、高歌して憚る勿れ。仵議士よ。爾の演說に於ける引證を統計年鑑より採る事をのみ苦心するなく、時には詩歌を用ゐて爾の語らんとする眞理を飾れ。

嗚呼詩歌なき國民は必ず寂寞す。其血は腐り其涙は渴らん。歌へよ、吾國民、新體詩は爾のものとなれり。今や余は必ずしも歐詩を羨まず。

明治三十年二月　　著者

予の作物と人氣

——「獨歩集」の序——

予と雖も予の作物が今の讀書界に於て人氣の多からんことを願ふものなり。

人氣役者となりて不愉快を感ずる者あるな

し、若しありとすれば、そはヒネクレ者ならざるべからず。予は幸にして未だ斯る不具者たらず。

而も不幸なる哉、予の作物は今日までの經過に依れば、人氣なる者なし。今の人氣作者に比ぶれば、只だ僅に文壇の片隅に籍を加へ居るが如き觀あり、これ其だ面白からぬ事と謂ふべし。

斯くて思へらく、予の作惡しきかと、有體に言へば、予は否と答へんと欲す。當然の事なるべし、誰しも自ら惡しゝと思ふ作を世に出す筈なければなり、若しありとすれば、文學者として大なる無責任者ならざるべからず、予は斯る文壇の不德兒たるを願はず。

既に自ら惡からずと信ずる作物が、尙且つ今の人氣に投ぜずとすれば、是予に取りての大打擊なり、大痛棒なり、大閉口なり。

何とか一思案なかるべからず、されど名案の有るべき筈なし。要するに人氣を迎へて作る者は人氣を得、人氣に頓着なくして作る者は時として、人氣を得ることもあり、得ざる事もあり、逆うて作る者は遂に得ることなし、予は其第二に屬する者にして、得ざる事もある部類なるが如し。

先づ之にてやゝ安心なり。矢張り今日までの流儀にて根氣よく作る中には、人氣を得ることもあるべし、たゞ詩人の本分としては人氣に頓着する能はず、此の一小册を世に出すも我本分を盡さんと欲するのみなり。

明治三十八年七月十二日朝
近事畫報社編輯局にて認む

獨歩生

「欺かざる記」の緒言

イパミノンダス、ペロピダス、メルロー、リユウクトラ、シーブス、アデン、スパルタの名をして一時わが讀書社會に喧傳せしめたる小說の著者を、其赤坂なる邸宅に訪ひし一人の青年あり。明治——年九月二十日の夜の事なりき。

此名高き小說の著者其人の事はいまさら玆に說くの要なし、青年の名を佐藤武二といふ。

著者は此時すでに四十餘歲、長者の風を以て青年に對し、青年は未だ二十を幾何も越えず、後進の禮を持してこれに應へぬ。此夜雨しめやかに降り屋外寂寥、談話は此長者が鄕里豐後の佐伯の事に初まり、文學に及び政治に及び、長者が多事なりし過去の經歷など細かに語り、教育の事地方少年の氣風の事など、彼れより之れとはてしなかりき。青年の情は火の如くに燃え、長者の心は家外の雨の如くに靜かに、遂に夜の十時に及びて青年は辭して歸りぬ。

其の翌日午後九時五十分新橋發の夜汽車に乘りて佐藤武二は東京を去り、東海道を午ば夢のうちに過ぎ、彥根に下りて其友を尋ね、彥根城に登りて雲霧夕陽に燃ゆる琵琶湖を見下ろし、其夜は友と燈下に行末を語り、再會を東京に約して別れ、大阪より汽船に乘り換へ、道々數日を費して佐伯に着したるは、三十日の正午なりき。此等の事は凡て其日記に詳はしく誌されてあり。

佐藤武二は佐伯少年の敎育を託されしなり。もと都會の人に非ず、海濱に生れて山林に生ひ立ち、十七歲にして東京に留學せり。チエルシーの豫言者は彼れの思想を根柢より顚倒して彼れに天火の洗禮を施し、ライダル山の詩人は其情を溫ためて靜かに彼れを自然の懷に導きぬ。十字架は寧ろ高く雲間に仰ぐ彼れの理想なりし、而も彼れ未だ容易に其野性を捨つる能はず、日夜の苦悶は僅かにもれて其の奔逸なる筆端に

溢れぬ。「欺かざる記」は則ちこれなり。

されど此小册子に敎むる處は唯彼れが佐伯に於ける一年間の其に過ぎず、而も他人が讀んで趣味あるを覺ゆるは恐らく亦これに過ぎざるなり。其故は、今彼れが前後數年の間に誌したる「欺かざる記」を通讀するに、佐伯に於ける一年間のものは他と大に趣を異にするが如し。思ふに彼れは始めより特に覺悟する處ありて佐伯に入り、特に意を用ひて其の日記を勉めしならん。彼れが赤坂の長者を訪ひし夜、歸宅の後認めたる「欺かざる記」中に左の言あり。

これ余が生涯の一轉歩に非ざるか。言ひ換ゆれば余は更に新生涯の一歩を始めつゝあるに非ざるか。然らば其覺悟なかる可からず。來る可き百般の事數倍の精勵を以て詳記す可し、唯一の慰樂は是れなり。

と、故に讀者は一部の小說として讀み得るなり。趣味あるは蓋しこれのみ。

惜しむ可きは小說的一貫なき事なり、傳奇的事實なき事なり。されど不思議にも聯絡はあり、照應はあり、支離滅裂に似て實は然らず、佐藤武二は到底佐藤武二たらざるを得ず、佐伯の山も河も海も灣も谷も街も、城山の古跡も、村落の砲煙も、農夫の生活も山間の悲歌も野花も明月も、凡て彼れの燃ゆる如き胸間の坩堝に投げ込まれて、相融化せられたるの觀あり。

彼もと世に示すの意なくして記したるなれば、其の長所は眞切なるにあれど、其の短所は餘りに露骨なるに在り。余は彼れの爲めに所々註解を加へ以て讀者の便を計りぬ。又た捨つ可きは、遠慮なく切り捨てたり。

已に彼れ自ら題して「欺かざる記」といふ。熱罵あり、冷笑あり、同情の涙あり、事實あり、空想あり、詩りあり、恥辱あり、懺悔の血涙あり。而して註し來れば彼れは遂に世の常の青年に非ず、明治以前に此類の青年、日本に出でし事なし、これ確かに日本歷史の一頁を占む可き事實なり。

秋の入日

—「海軍」の序—

要するに悉、逝けるなり！

在らず、彼等は在らず。

秋の入日あか〳〵と田面にのこり

野分はげしく颯々と柿を拂ふ

うらがなし、あゝうらがなし。

水とすむ大空かぎりなく

夢のごと淡き山々遠く

かくて日は、あゝ斯くてこの日は

古も暮れゆきしか、今も又！

哀し、哀し、我こゝろ哀し。

以て自序となす

獨歩吟客

海軍從軍記

年少士官

世にも哀れなるは年少士官の戰死及び負傷にぞある。彼等多年の苦學を以て、前途燃ゆる如き希望を以て、其の抑ゆ可からざる血氣を以て或は後顧の老父母を以て、或は新婚の夢猶ほ温かなる少妻を後に遺して、或は戰死し或は大傷す。彼等もとより覺悟の前とは云ひ乍ら、覺悟の前なるが故に更に、同情の涙なからんと欲するも得ず。

人は思ふ、少將大佐の命こそ惜けれ、少尉中尉の戰死は左程にもあらずと。吾に在りては然らず、甚だ然らず。同じく捨つる命！ されど彼等年少士官は同時に前途の希望を捨つるなり、未來の夢を殺す也。天縱の約束を拋つなり。嗚呼息天！ 吾等國民をして願くば彼等の熱血を重ぜしめよ。吾が政治家をして願くば彼等の心血を記憶せしめよ。若し夫れ不景氣の空嘆に驚かされて吾が義戰の大猛氣を消磨するが如き或は仲裁の姑息說に迷うて、大河の決するを塞がんとするが如きあらば是れ彼等年少士官の鮮血を刺して、空しく異境の土神の渴に供したるもの也。

今朝起き國民新聞を見れば、將校以下傷者の姓名を列記す、其の最後に揭げて曰く「國弘榮一」と、これ吾が少年の友に非ずや。嘗て同じく中學校の校舍に寢食を共にし、或は冬の休、夏の休に、七里の山路を相携へて往復したることあり。宿舍十傑の投票のうち、奇才子の撰を得たるは君なりき。士官學校より拔擢せられ陸軍大學に入りたりと聞きしに今や平壤の大戰に奮鬪突擊して終に負傷のうちに加はらんとは。

されど吾、遙かに彼に向つて叫ぶ、萬歲！ 君は義務のために戰ひ、義務のために傷きぬ。吾れ今筆を執て天下に立ちつゝ窃かに勇士戰場に赴くの覺悟を期す、君が一滴の血、必ず値ひあらしむべし。言論若し力あらば、嗚呼言論若し世を動かすを得ば。

艦上の勸工場

（西京丸にて）

▽何等の奇異なる光景ぞ。

士官吾を顧みて曰く『見られよ勸工場を。』

砲座の下、マストの傍、陳列の品は何々。十五歲許の少年の前に列べたるは狀袋、楊枝、手帳、ボタン、鉛筆、書翰紙、其傍に柿の一籠。少年の横に五十歲許りの男、シャツ、ズボン下なんどひさぐ。彼れに到し三十歲許の景氣よき男赤少年と同じ樣なる品を賣る。四十歲許の婦人あり、柿と栗とを列べたり。

花主のお客樣は誰れぞ。白ろき衣鼠色と化けたるは水夫。砲座に立ちたるは某々の陸軍將校。立つものあり、腰かくるものあり、他の肩にもたるゝものあり、笑ふもの、どなるもの、ひやかすもの、鏡を懷中より取出すもの、品物をひねくるもの、顏ぶるまち〳〵なり。

『これはいくら。』『百枚が二十五錢。』

『ブル〳〵〳〵〳〵。馬鹿を言ふな。』

『オイ〳〵〳〵まけろ。貴樣達も大に盡すべきは今ぞ。』『四十錢？』

『イヤ七十錢で御座ります。』

『何だ七十錢？ ホー歸れ〳〵！』『これはいくらだ、十錢？ 八錢にせえ！ 八錢に！ ならん？ ふん！ ヨシ〳〵十錢きばる、そのかはり此の手紙をポストに。』

波濤

余に一個の弟あり。今まだ亦た國民新聞社に勤む。去んぬる十三日、相携へて京橋なる新聞社に出勤せり。弟余を顧みて曰く、秀吉の時代、義經の時、或は亦た明治の初年に逢遇せざりしを恨みしは一、二年前の事なりしも今にしては實に當代現今に生れたりしを喜ぶ、後世の少年吾等を羨むこと幾許ぞと。余、甚だ然りと答へ、ともに奮勵して大に爲すあらんことを誓ひき。其日電報廣島より來り、其夜急に東京を發し、弟と新橋停車場に別れたり。爾來日をふる七日。夜更けて玄海の月に對するの時、或は朝まだき、西に○州を煙波のうちに望みて心を躍らすの時、或は○○○○○沖を經過して、義の假根據地の風景の奇異なるに驚き、鉛筆を採て實寫を試み、終に能はずして止むの際、懷ふは唯だ吾が一弟なりき。山を賞し、海を語り、軍艦の壯を羨み、月の夜に、星の夜に、詩情に、慷慨に、談論に、愉舊談に、將來談に、笑に、田舍の山路に、都會の客舍に、凡

て共にしたるは實に吾が一弟にして、彼れの趣味は吾が趣味、吾が聞かんことを欲し見んことを願ふ事は彼に於て亦實に然りし也。

○○日、○○丸の喫煙室に、某少佐と語り、東方の形勢を論ずる際、吾が眼端なく窓外千里の波濤に轉じて、水天一髮の光に注ぎたる剎那、こみあげ來るは悵慨の涙と、吾が同胞四千萬よと叫ぶ、天外遊士の懷郷の涙なりき。○○日の夜、やゝ更けて獨り甲板の上に登りぬ、○○江口の夜晴れて滿天の星彩きらめき渡り、○○の大艦大艇悉く燈光を滅して、寂として令、嚴に、北風右舷の方より吹き來りて堅氷の時節愈々近づきぬるを覺え、俯仰感懷に堪へざりし時、本艦の水夫も亦た登り來りぬ。共に左舷の鐵欄に倚りて語る。旅順口占領の期も遠きに非るべきを談じ、談じては默し、默しては談じ、吾が感情次第に昂揚して、偏へに吾が國民を思ふの念に堪へずなりぬ。

見るに付け聞くにつけても一弟を思ふ吾は、聞くにつけ見るにつけても亦實に諸君を思ふの吾に外ならず。

通信とは何ぞ。しかつめらしく取調委員が報告するかの如く、通信すべきか。

通信する對手は誰ぞ。吾れ何の心を以て、誰れに語るべき。長官にか、所謂「讀者」なるものにか。

凡て此の如きは、余の斷して能せざる處、又た堪ゆる能はざる所。余は自由に語らんことを欲す。愉快に談ぜんことを欲す。自由に談じ、愉快に語りてこそ、始めて余が意に適するの通信をなし得ることを信ず。

余に冷靜なる觀察者を以て望むなく、余をして報告者として筆を執らしむるなく、余をして全く自由に、愉快に友愛の自然の情を以て語らしめよ。

余は之れを欲す。諸君も亦之れを許すに於ては余已に「如何に通信すべき」の自問に就て、自答を得たり。今後余の通信は凡て、「余が一弟に與ふるの書狀」なるべし。

諸君も亦諸君の弟若くは兄よりの書狀を讀むの心を以て讀まれんことを。希ふ。文に拙なるも、一家内の者に示すに何かあらん。これ余が憚むべき勇氣なり。

明治二十七年○月○○日日曜日午後三時
於千代田艦　國木田哲夫

主張、感想篇

ワーヅワースの自然主義と余

余の如き實に言ふに足らず、余の如きが自然主義者であらうが、あるまいが、問題にもならないことでそれを自から彼是れと言ひ出すのは烏滸がましき至りなるが、本誌(?)の新年號に於て島村抱月氏の一文藝上の自然主義」てふ有益なる論文中、『主義と名のつかぬ自然主義は早くイギリスのワーヅワースに端を發し』とありて、余をしてさてはと思はしむる所あり、從て本誌上に於て二言三言述べて見たくなつた次第である。一つには亦、昨年の秋「日本新聞」紙上に於て余と自然主義に關して多少自から說く所があつた其行がゝりからでもある。

一日本新聞紙上に於ての余の所說を一括して言へば、『余は評壇から自然主義者なりと目せられて居るけれど、余自身從來の作物は、自然主義なる者の如何も知らずして只だ余の見る所、信ずる所に依りて製作せる者である』との意に過ぎない。

余は同紙上に於て、これより以上の事は何も言はなかつた。則ち『余の見る所、信ずる所』の其本源に就ては何も言はなかつた。

しかし德川文學の感化も受けず、紅露二氏の影響も受けず、從來の我文壇とは殆ど全く沒關係の着想、取扱、作風を以て余が製作を初めた事に就ては必ず其本源がなくてはならぬ。其本源は何であるかと自問して、余はワーヅワースに想到したのである。然も尙ほ余はワーヅワースが果して文學史上、自然主義と何程の關係を有し居るかなどの攻究はしなかつた所が、本紙上に於て計らずも島村氏の、先に引いた言說を見て、さては余も遂にライダルの谷間から流れ出た自然主義の流を掬んだのかとうなづいた次第である。

余が初て短篇小說を書いたのは今より十年以前である。それより更に五六年前余は覺束なき英語教師として豐後國佐伯町に一年間滯在して居たが當時余は最も熱心なるワーヅワース信者で、而してワーヅワース信者に取りては佐伯町は實に滿目悉くワーヅワースの詩篇其物の感があつたのである。山に富み溪流に富み、溪谷の奥に小村落あり、村落老て物語多く、實にワーヅワース信者をして「マイケル」の一三は此處彼處にがつて居さらに思はしめた位である。斯る場所に在て日夕ワーヅワースの詩篇に夢中になつて居た余が如何程までワーヅワースの感化を受けたかは當時の余の「日記」が說明して居る。今其の二三條を引く。

人若し我に向て汝が文學者詩人としての目的は何ぞやと問はゞ我れ答ふるに窮せざる也。

曰く此獨立の靈が知り能ふ丈け、觀得る丈け、感じ得る丈けをありのまゝに筆にのぼすにあるのみ。

然り余は獨立にして自由なる一個の靈なり常に自由に觀、自由に感じ、自由に現すべし。

□

事實ありて意味あり、空想は意味に非ず、人生の意味は人生の事實の語る所なり、事實によりて意味を直覺する是れ巧妙なる

人間の靈の妙機に非ずや、詩人是也。

□

多く見たり、多く聞きたり、思へば此等の事實、悉く深き意味ある哉。

東氏の雇人爲（人名）の兄なる藏は盜みて獄に入りぬ。石田氏にごろつき居たる德は盜みて獄に入りぬ。

○○○、○○○○、○○○、○○○、（悉く人名なれど生存者なる故に秘す）其人物其經過、其經歷。

□

一個人を深く能く觀ることは、あらゆる歷史を見る事也、あらゆる宗教を見る事也、あらゆる詩歌を見る事也。

以上は明治二十六年十二月二十日より末日までの日記中より拔いた者であるが其後一年餘り過ぎて余は、自から何を書かんと試みに題材を撰み記したる者を見ると

◎芳島と女島との間の渡守り。

◎女島にて見たる水門を下せし若者。

◎船頭町より木立村の間を渡す舟子。

◎十二段（山名）の山腹にて逢ひし老樵夫。

◎こゞき灣州人名。

而て「日記」の一節に曰く『余は此の一個の人間を思ふ時は同情に堪へぬなり』と。以て如何に深く余がライダルの詩人に動かされて居たかが解るだらうと思ふ。

既にワーヅワース信者である限り、余は自然を離れてたゞ世間の人間を思ふことは出來なかつた。人間と相呼應する此神秘にして美妙なる自然界に於ける人間なればこそ、平凡境に於ける平凡人の一生は極めて大なる事實として余に現はれたのである。

其處で爾後に殫在後五六年の後余は初めて源叔父なる小說を作り其主人公の一人は乞食兒紀州であつたのである。

無論余は後年ツルゲネーフも讀み、トルストイも讀みモーパッサンも嚙りて其感化を受けたには相違ないが、以上の所說に依りて余は遂にワーヅワースの流を掬んで、それを信じて、それに依て立つた一人なることを證明して餘あると思ふ。

然し今日我文壇に於て說かれて居る自然主義及び所謂る自然派の作家が其作物に依りて示しつゝある自然主義と、ワーヅワースの自然主義とは餘程相違があるやうである。少くともワーヅワースは人と自然とを離して見ることは出來なかつた。此不可思議なる大自然と人生とを別々にしては考へなかつた。然し今の我國の自然主義者には人あり人生あり、これ迄世間則ち社會の裡に觀ることはしても、人間に取りては最も大なる事實なる自然の懷に觀ることは爲ないやうである。

余は此點に於て今も昔の如く、而して今後益益ワーヅワースの一句

On man, on nature, and on human life Musing in solitude,——

から離れたくないと願ふ。

悠久にして不可思議なる、生死を吐呑する、此大宇宙、爾が如何にもがきて飛び出さんとするも能はざる此大自然、事實中の大事實當面の眞現象に就ては何等の感想をも懷かない文人如何に巧に人間の事實を直寫したからとてそれは一藝當たるに過ぎない。埒くて文藝何の値ぞ、所謂る自然主義何の値ぞ。

奈何にして小說家となりし乎

自分が小說家であるか、無いかが先づ第一の問題です。世間が自分を小說家であると、決めて居るなら其も致し方がありません、喧嘩にも

成りません。元來自分は小說を書いて其で一身を立てようなどとは、少年の時も青年の時も夢にも思つたことが無いので、其で小說家と若し世間がみとめて居るなら、其は自分が取るにもたらぬ、三つ四つの短い物語りを書いた結果でありませう。其れならば自分に對する問題の適切なる意義は『我は如何にして二三の小說を書きしか』と、言ふ事に成るだらうと思ひます。

さうです、「家」であるか「家」で無いかは問題の外と致しまして、兎も角も如何にして二三の物語りを書きしか、而して、世間から小說家であるとみとめらるゝ男と成りしか』といふ問で答へる事に致しませう。

全體自分は、功名心が猛烈な少年で在りまして、少年の時は賢相名將とも成り、名を千歲に殘すといふのが一心で、ナポレオン、豐太公の如き大人物が自分より以前の世にあつて、後世を壓倒し我々を眼下に見て居るのが、殘念でたまらないので半夜密かに、如何にして我れは世界第一の大人と成るべきやと言ふ問題に觸れつてぼろ〳〵涙をこぼした事さへ有るのです。けれども今から思ふと世間の少年は十の八九、昔かくの如き取り止のない、馬鹿々々しい、比較根性から出た妄想で、つまりは、坊の蜜柑の方が小さいとか、大きいとか言つて泣いたり、わめいたりする動物體の發作に、過ぎぬのでありませうが、何でも彼でも兎も角も、其の發作で心を動かして居たのですから、物語りを作つて一生を送るなど言ふ事は夢にも思はず、思はないばかりではなく寧ろ男子の恥辱と思つただらうと思ひます。（實際、其處まで思つたか思はないかすら、記憶に無いのです。）つまり文章家、小說家など言ふものは、絕對に眼中に無かつたのです。處が、自分の精神上に一大革命が起りました。即ち、人生の問題に觸れたので有ります。謂ゆる『我は何處より來りし、何處に行く』我とは何んぞや（What am I?）との問題に觸れたので有ります、其で如何にしてかゝる問題に觸れたかと言ふ事は、此處で申上る場合では有りませんから止しますが、何しろ結果は卽ち精神上の大革命でありまして、今迄の大望が、がらり破れて仕舞つたのです。ナポレオンも秀吉もいつかう豪く無くなつて了つたので有ります。若し豪いならば其豪いと言ふ意義がまるで違つて來て比較根性から出た意義、功名、利達の意義に成つて仕舞つたので有ります。

當然自分の對手が以前と全で異つて來ました。以前は自分と世間とが常に相對して居たのが、今度は自分と此人生、自分と此自然とが相對して來て、自分の心は全く其方に取られて了ひました。そこで讀む書が以前とは異つて來る、以前は憲法論を讀み經濟書を讀み、グラッドストンの演說集を讀み、バーレーの英國史を讀んだ自分は、知らず知らず此等を捨てゝカーライルのサルト・レザルタスを讀み、ヲーズヲースの詩集にあこがれ、ゲーテを覗き見するといふ始末に立到りました。斯うなると、自分は哲學と宗教との緣を離るゝ事が出來なくなり、基督教にて示された宇宙觀、人生觀などが寢ても覺めても自分を或は惱まし或は慰め、それに心を奪はれて實際の事は殆ど手にもつかぬ場合もありましたし、自然、自分は宗教家にならうかと思つた事もありました。

斯ういふ境遇に陷つた青年は當時、自分ばかりでなく、外に幾人もあります。自分の友達の中にもあります。そして終極皆な如何なつたかと申しますと、遂に宗教家になつたものもあり、哲學か倫理の教師になつたものもあり、そして文章か書くのが本職になつたものもあり、先づ此の三類の一に大概は落着て了つたのです。或は未だ何れにも落着かないものもあ

ります。そして自分は文章に緣多き方に來て了つたのです。又教師を爲た事もあります。要之、煩悶ばかりして居る譯に行かなくなり、パンを口に入れる道を急ぐ場合となれば、先づ其時分の自分の如き種類の青年は、教師にでもなるか、宗教家を本職とする外には使ひ道がないのでありました。

所が哲學とか宗教とかを、ひねくつて居ると、自然文藝に緣が付いて來るもので、カーライルの如きも同じ道行で終に文學者になつて了ひましたから、自分も我知らず何時の間にか、書いて見るやうになつて、從つてそれが、身を助ける藝となり、パンを得る唯一の手段となつて了つたのです。

親父の脛を噛りながら二十一、二歳まで東京で煩悶を行つて居ましたが、それも出來なくなりまして遂に矢野龍溪先生の推薦で先生の鄕里、豐後の佐伯で英語の教師をやつて一年計り居ました。此間なる一年間に自分は全く自然の愛好者となり、崇拜者となり、ヲーズヲース信者となり、明けても暮れても溪流、山岳、村落、漁村を巡り歩き、溪を横ぎる雲に想を馳せ、森に囀く小鳥の聲に心を奪はれ、そして同時に、「牛肉と馬鈴薯」(自分の書いた小說)の主人公、岡本誠夫の煩悶と同じ煩悶を續けて居まつたのです。其當時です、德富蘇峰先生に書狀を出して自分は最早、政治には少しも趣味を有たなくなつたと言ひ送りましたら、先生から教訓の意味の返事が來た事がありました。實際、それほどまでに自分の心が現代の問題から離れて了つたのです。そこで一年ばかり教師を爲て居る中に、生れついた藝術の念が抑へきれず、遂に又た東京に飛出して來て、入社したのでもなく、只だ蘇峰先生の愛顧に附込んで民友社にもぐり込みました(もぐり込むと言へば變ですが、當時の民友社の同人は大概もぐり込んだので、今、唯今より入社、月給は幾十などいふ手續きは無いやうでした)。民友社といへば、當時文藝の本場で、「國民之友」は文壇の最高位を占めて居たといつても宜しい位、その社へ自分が入つたのが卽ち自分と文藝との緣を確實に結びつけた源因であります。

その後の自分の經歷に隨分波瀾がありましたが、つまり「國民之友」といふ當時文壇第一の雜誌に隨意に書けるといふ特別の事情で、自然筆も達者になり、卽ち藝が上達する、從つて面白味も出て來る、遂には此藝の外、何一ツ飯を喰ふ藝がなくなつて、從つて喰へなくなると直ぐ此藝を出して來ました。

誤解されては困ります。自分は今日まで衣食を得る方法として文章を書いたといふ丈けの事で、卽ち自分の實際を申上げたので、『文藝は衣食を得る藝當に過ぎず』などとは夢にも思ひません。文藝それ自身の目的の高尙なる事は承知して居ます。又た自分の作物は自分が心眞に感得し得たるを正直に書いたもので、それが文藝の光輝を幾分か發揮し得て居るといふ自信及び滿足も持つて居ます。

どうか自分も今後益々奮つて我が製作を世に出さうと思つて居ります。若し自分が小說家ならば、今後益々小說家の本分を盡さうと思つて居ます。

たゞ自分は、人生問題に煩悶した當時の我から全く離れて、たゞ文藝の爲めに文藝に埋れ度くありません。『人生の研究の結果の報告』といふ覺悟は何處までも持つて居たいのです。

予が作品と事實

一

余が今日まで書いた小說は最近の數篇を除けば「武藏野」「獨步集」「運命」「濤聲」の四册に網羅してある。これを分類すると、第一、全く空想から人物も事件も出來上れる者。第二、實際の人物若しくは事件にヒントを得た者。第三、事實の人物と事件が其小說の主要部を成せる者。第四、實際の人物及び事件を其儘描寫した者。先づ此四種の外に出でない。若し人物と事件を別々にして分類すれば更に細に類別し得られるが、煩はしいから大體右の四種にして置く。併し此四種は覺たい余のみならず、大概の作者は皆同樣であらうと思ふ。

二

余は今日まで所謂短篇小說ばかり書いて來たが、短篇の中にも長短あり、其長短數十篇の中にも第一に屬する者は極めて僅である。第二第三が最も多數。第四も亦甚だ少ない。

其處で今思ひついた作物に就て簡單に說明すると、處女作の「源叉」は『武藏野』は源叉叔父其人も、「紀州」と稱する乞食の少年も實在の人物で、余が豐後の佐伯町に居た時分、常に接近したばかりでなく、其の身の上に就いて深く同情を寄せたことのある人物である。而して此一篇中に記述した此兩人それ〴〵の身の上の事も事實である。けれども此兩人を結びつけたのは余の想で、これを結びつけて初めて此一篇が作品となつたのだ。

「運命」中の「酒中日記」はチョッとしたヒントが基となつた作物で、此一篇に記述した事は、悉く余の拵へた事である。主人公の小學校々長に似た實在人物及び小學校新築といふ事實に觸れてそれが基となり、余の想が出來たので、實際の小學校々長は今も健在である、校舍は早く落成して今は多數の兒童を收容して居る。

「富岡先生」(『獨步集』)は、長州で有名な富永有隣翁である。翁は最早死んだ。余が周防熊毛郡に居る時分、此翁は田圃の中の一軒屋に孤獨の生活を送つて三四の少年に漢學を授けて居つた。余の描いた富岡先生の性格は此有隣翁をモデルにしたので、鄕里出身の榮達者に對しての態度などは有隣翁の逸話を基にしたのである。けれども、複子と云ふ娘は實際有つたのではなく、從つて一篇に記述した事件のある筈はない。

「春の鳥」(『獨步集』)の主人公、白痴の少年は余が豐後佐伯町に居つた時親しく接近した實在人物で、其身の上話は皆事實である。只城山で悲慘な最後を遂げたと云ふ事だけは余の想である。余は此少年を非常に氣の毒に思ひ、自から進んで其教育に從事して見た事もある。數の觀念が全く缺けて居るので、如何にもして此缺陷の幾分なりとも補ひくれようと種々の手段を採つた事もあるが、恐く徒勞に歸した。そこで余は當時白痴者に就いて深い同情と興味とを持つて、人間と鳥獸の差別、生物と宇宙の關係など、隨分城山の上で空想に耽つたものだ。そして此一篇は七八年の後に出來たのである。

「巡査」(『運命』)は全くの寫生である。本名は高野氏。余が西園寺侯の家に寄食してゐた時、侯は總理大臣代理であつて三四人の護衛巡査が居た。其一人が高野氏で、何時しか余と別懇になり余は氏の經歷及び人物を知るに從ひ頗る興味を持つて來た。そこで氏が頻りに勸めるので、或日氏の寓居を訪うた。余は初めから寫生して見る積りで訪問したのだから、寓居の樣樣、居室の體裁は勿論、氏の一擧一動を十分注意して觀た。そして氏が机の抽出から自作の「警察論」の一篇を出しかけて引込め、見せたくもあり見せたくもなき樣子を余は看取して氏をそゝのかしてやらうといふ一心からこれを朗吟した。そして一寸とそれを拜借と輕く所望して、此等の原稿を持ち歸り、以て此一篇を書いたのである。若し此等の原稿を材料としない

で此一篇を書いたら骨抜き同様であらう。

寫生文なんて、くだらないものだ。どうかすると新聞屋の探訪だ。けれども余の此一篇が氣に入つたと云ふ知名の作家もあるやうに聞いたが、世は様々だ。七八年の後、初めて作品になる者もある。手帳さへあれば直ぐにでも出來る作品もある。余が此一篇も直ぐ書いて大阪の或雜誌に載せ、それを高野氏に見せたら『とうとう種にしましたな』と笑つてゐた。

此巡査如きが若しお望みなら手帳を與へよ。きよろ〳〵せしめよ。記憶に止め難き故事來歴、手紙の文句など是非必要ならば、一寸拝借とでも言ふべし。本願寺の瓦の大サが解らずば梯子をかけて上るべし。實にくだらないことだ。

寫生文など言はずに、手帳文と言つた方が直截のやうな氣がする。

「第三者」(『獨歩集』)は似寄りの事實があつて余は第三者の心胸をさせられた。けれども此篇に表はれた男女兩主人公の性格と實際の人物とは決して同じでない。たゞ幾分か似通うて居るといふに過ぎない。殊に男主人公の云爲の中には余自身の閃爍すら雜つて居る。

そして此一篇は二個の主人公があるやうに見えるが、女主人公の方が重なので、男の許から逃げ出した當世娘を書くことに力めたのである。されば男主人公よりも、より多く女主人公は實在人物に近いのである。余は此篇で逃げた人を書いた。此次には逃げられた人を書いて見たいと思つて居る。女に逃げられた男、弟子に逃げられた先生、いろ〳〵意味の深い事實がある。

「空知川の岸邊」(『運命』)は小説とは言ひ難いかも知れぬが、さりとて紀行文の積りで書いたものではない。けれどもトルストイ翁のコーカサスの囚人を説説と言ひ得るなら、これも小説と云つてよいだらう。

此篇の主人公は余自身で其事件は皆事實である。主人公の感想は余の感想であることは云ふまでもない。

「あの時分」(『濤聲』)は、全く余が早稲田に在つた頃を思ひ出し、なつかしさに堪へないで書いたもので、事實が八分ならば多少の附加が二分。しかし心持は少しも變へてない。

「私」は則ち余自身。

同じく「『濤聲』中の『帽子』は夢を書いたのである。帽子の主人公は一夜余の夢を襲ひ、夢さめて後、余をして震慄せしめた人物で其夢中の事實は心理狀態として余に多大の興味を持たしめたのである。余は夢を見て直ぐ北夢を面白しとして書いたのではない、余は數ヶ月の間、此夢を忘るゝ事が出來ず考へ考へた果てが遂に此一篇に成つたのだ。

この篇は第一第二第三第四の何れに入れて可なるやを知らず。

「獨歩集」中の「牛肉と馬鈴薯」の主人公岡本誠夫の性格は余が好むまゝに描いたものだが、彼の演説は余の演説である。而して北海道熱は余自身の實歴で、「空知川の岸邊」は此實歴の實證である。又此篇に現はれた四五の紳士は皆な實在の人物を借り來つて多少とも其傳を寫したのである。則ち「竹内」は竹越三叉君。「綿貫」は渡邊勘十郎君。「井出」は井上敬二郎君。「松木」は松本君平君。而して此等の諸氏は實際櫻田本郷町の河岸にあつた倶樂部で常に氣焔を吐いてゐたものだ。

「上村」と「近藤」は余の趣味を表はした想像人物である。

三

要するに余の經驗に依ると、實在の人物、實際の事件は如何に面白く思はれても、之れを直

ちに筆に上すは眞の詩を得る道ではない。必ずこれを心底最も深き處に藏して其醸酵を待たなければならぬ、然からざれば、其詳細の事實は忘却し易いから、寫生文とは緣が益々遠くなるかも知れぬが、人生の眞に觸れた詩を得ることに於て途は此外にあるまいと思ふ。

然らば余の長短數十篇は悉く然るかといふに決してさうでない。大多數は事情に迫られ、時を限られ、不滿で書き上げて、先づ〳〵此場合、此丈けの辛苦ならば、此位の作が相當であらうと自ら理窟をつけた者ばかりと云つてよい位ゐだ。

製作上の理想は美であるが、實際は遠く及ばない事が作詩の上にも在るとは情ない次第である。

机は部屋の置物

◎私は机に向ふことがメッタにない、机は只だ私の部屋の置物たるに過ぎぬ。

◎そんなら小説などを書く時は如何するかとの疑問も起るだらうが、私は今日までそんなに深く山小説も其他の文章も書いては居らぬ。私がこれまで書いた物の分量を十年の歳月に割り當てゝ見ると實に僅少な者で恐らく一日三行にも當るまいと思ふ。

◎そんなら讀書は如何するかとの疑問が次に起るだらう。所が讀書と來ては尚更ら机と緣が薄い。元來私は讀書なる者をしない方で、田山花袋君の百分の一も本は讀んで居らぬ。其他の友人と比較しても其十分の一、五十分の一も六つかしからう。たまに讀むことがあると、多くは柱に寄りかゝつて讀むか、床の中で讀むか、寢そべつて讀むか兎に角極めて不規則で、正坐机に對して讀書するなどと云ふことは、昔ピアノルを稽朝讀んだ時の外にはない。

◎であるから「机に向ふ時の心持」といふやうな經驗が極めて少ない。其机に向ふ時は必ずのッぴきならぬ場合に限るから、愉快も不愉快もない。そして書いて居る中にイヤになつたら直ぐ止して了つて座敷の内をごろ〳〵して居るかだ。其中又興居るか、庭をうろ〳〵して居るかだ。其中又興が來ると直ぐ書きつゞけるので、其間自分の書いて居るものの事ばかり考へて居るから「机に向ふ」といふ特種の感じの起らう筈がない。尤も日課のやうにして書き續けて居る人なら、毎日、サアこれから書くのだと机に向ふから、其日毎に感じも違ふだらう。私にはそれがない。

◎私も「明治淨机」といふやうな趣味を實現し得るなら結構であるが、習慣と生來のだらしないさとで、左樣いふお人柄の好いことの出來ぬのは眞實、幸福とは申されない。

◎が之は「机に向ふ時の感」であつて「机に向つて居る時の感」ではない。私とても机に向つて居る時の心持の實驗談なら、多少か持て居る、何故なら机に向ふ時の感は刹那の感であるが、對つて居る時の感は時間が長いからだ。

雑談

一體僕は大の無性者で、平生から讀書なんか餘りしない方だが、先づ僕の好きな作家を云へば「ツルゲーネフ」だらう。さう、「ツルゲーネフ」の如何云ふ處が好きだと云つて迚ても言葉ぢや云ひ顯はせん。憑つか如何のかうのと言葉に云ひ顯すと一種の型に入つたものになつて、眞に僕の感じてる其のまゝのもので無くなつて仕舞ふ。まあ好きだから好きと云ふ譯なんだ。

「ツルゲーネフ」の何の作が好きだと云つて別に取り出でて其と云ふ譯に往かん。どの作にも、其れ相應の面白味がある。手取早く云つて見れい。

ば「ツルゲーネフ」の作はどれもこれも好きと云ふ譯なんだ。

先刻好きだから好きと云つたが、强ひて云へば「ツルゲーネフ」のやうな自然人生の觀方、描寫の方法が氣に入つてるんだ。それに「ツルゲーネフ」の作にはバックに深い悲哀が横はつてるやうに思はれる。――これは僕一人に然う感じられるのかも知れんが――此の點が誰よりも「ツルゲーネフ」の好きな所以だ。と云つて那樣に澤山讀んで居ないが、兎に角非讀書子なる僕の好きな作家を擧げれば「ツルゲーネフ」以外には無いのだ。

それはさうと玆に一つ近來の珍談がある。いつか「日本」へ「湯ヶ原ゆき」を載せたとき、あのうちに義母のことを『悠然茫然奉然呆然』と書いたが、まさか分る氣遣ひもあるまいと、知らん顏で濟してると、惡事千里、何時の間にか、義母の親戚や知人の間に知れて『悠然茫然奉然呆然』が、義母の通り名になつて了つた。するといつの間にか義母の耳へ入つたとも知らず、此の間妻を里へやると、散々の御不興で、顏を見ると突然こづき廻さん計りの見幕に、何も惡氣があつてやつた譯では無いから、後で良人をお詫びによこしますと云ふと、妾の前へでも來ようものなら、横腹を蹴り飛ばしてやるからと、大に鼻息が荒かつたさうだ。今ではもう何でも無くなつたけれども、折う云ふ話しをまた小說にでも作つて母に見せたら、何と云ふだらう。一寸面白いだらうと思ふ。

何日か「早稻田誌」に書いた「B生より」あれは那樣短かいもので世間の受けも賛譽相半ばすると云ふ有樣だつたが、あれで非常に骨折つたものなんだ。何しろ身體が惡くて、長いものを書く精力は、到底無い。其に原稿の締切期日は疾に過ぎてると云ふ次第で、優に百頁以上もある非常に長い豐富な材料を僅か四頁足らずのうちに纏めたのだ。主人公のおやぢの會話や、魚釣場の光景など、筆を執ると歷々として眼前に浮んで來る。あれを書き終つたときは實際二百頁位のものを書き上げた位の氣持がした。

さう、正味あれの爲めに費した時間は二日だが、他の人ならあの位の長さのものなら、二時間もあれば出來るだらうと思ふ。

何も自慢するぢやないが、兎に角あれ丈のことを、あれ丈けのうちに書き顯はすには隨分苦心したものだ。

其につけて思ひ出すのは、今の若手作家の傾向だ。何と云ふだらしの無い書き方だらう。愚にもつかんことを、だら〳〵と繰り返し捲き返し書きのばす。一體如何云ふ積りだらう。之では世間のものが當てられるのも無理は無い。もう些と簡潔な引き緊まつた書方が出來ぬものだらうか。

驚異

火の熱きものなることを知ると其熱きことを感ずるとは同じからず。

宇宙、人生の問題に幾千かの興味を有し、これを研究し、これを知得することは、宇宙に於ける此生の現象に驚異すると同じからず。

學術と社會と、此二者は個性の發生する前に、この地上に在りて待ち居たり。

人の感情は慣るゝ可く造られたり。

眞の宗教は驚異より發せり。

驚異は宗教となり詩となりぬ。總ての詩は驚異の結果に非ず。

驚異の結果必ずしも巧妙なる詩に非ず、又深遠なる學文に非ず。

驚異に始まらざる研究は空なり。

人の他動物に比して異なる點は習慣を拔脫して裸々然天地に對することを得る一事なり。

科學は決して驚異を減ぜず。

人生何をか求むる

空想を追求する心は終に疲勞す、これ自個の影を逐ふに等しきなり。何時しか張りつめし氣もゆるみ、はては此生のあぢきなさを哀感するに至らずんば止まざるなり。廿前後より三十前後までの壯年が、しば〳〵半夜燈前一室のうち、或は薄暮散歩の途上、忽然として襲はるゝ陰愁の魔はげにこれに非ざるなきか。此時彼は少年の時の如何に自由にして自然なりしかを回想し來るなり。現在わが追ふ夢の如何にはかなきかを感ずるなり。此世てふ者の如何にも單調なるを感ずるなり。わが生のゆく〳〵老滅しつつあるを感ずるなり、人生畢竟何をか求むるてふ浩嘆、やゝもすれば一滴の冷やかなる淚と共にこみ上げ來らんとす。かゝる時、彼若し善性美質の人ならんには、本然の人情油然として胸底深き處より涌きいで、獨語せしめて曰く、噫人生終に何をか求むる、止めよ止めよ、凡てこれ空なり、われ已に欺かるゝこと久し、爾空想の鬼を去れ、將來てふ魔を去れ、吾をして今の今、親子相愛せしめよ、兄弟相愛せしめよ、夫婦相和樂せしめよ、朋友相親愛せしめよ。凡て子として斯の時ほど親のなつかしきを感ずる時はあらざる可く、親として此時ほど愛兒の可愛ゆき時はなかる可く、兄は弟を親み、弟は兄を慕ふ、此時にまさるはなく、夫婦互に相倚り、妻は身を夫の懷に投じ、夫はしみ〴〵と妻を慰しく思ふ事、げに此時ほど深きはあるまじ。遠にある友をなつかしく思ふも實に此時に非ざるか。彼は獨語を續けて言ふなるべし、『吾をしてたゞ人情の道をあゆましめよ、心ばかりの眞心を親子夫婦兄弟朋友の間につくさしめよ、たゞ一歩、吾が足を此處に堅く立てゝ、又自己の影を將來に追はしむる勿れ』と。一室の中ならんには此時、彼は遠き友に向て書狀を認むるなるべし。此書狀には例の大言壯語なき替りに、慇懃に其安否を問ふなるべく、わが日常の無事を報じ、或は何時又相遇ふ事の出來るやなどの文字に眞心あらはるべし。認め了りて後、何時になき平和と自由とを感じ、其夜の夢は春の海の如くにもならんか。

然るに若し、彼にして、或は、親子夫婦兄弟朋友の間、深き懼ろしき波瀾ありて存し、いたく彼の心を傷け居らんには、世に彼ほど不幸なるものなからん。彼、獨語して曰はん、『噫、人生遂に何をか求むる、たゞ吾をして人情の道を歩ましめよ、されど、されど……』然り、されど彼は人情の世界にすら不具者なることを反省し來る時、如何に胸も張りさくばかりに感ずるぞ。

凡人の傳

余は思へり。吾等の趣味を惹くもの、豈に啻に英雄、仁人、君子、烈女、節婦の傳記のみならんや。ニュートンの生時、功業、逸話のみならんや。ルーテルは如何なる生活をとりし、如何なる經驗を經たる、而して如何にして其大業を建てたる。此等の問のみが此等の趣味を惹くのみならん。此等の列傳はたゞプルタークの列傳のみならんや。

此川岸に立つ茅屋の一家族の歷史は如何。其老夫が傳記は如何。彼一個の石、これ人情の記念にあらざるか、これ都會に立つ大記念碑よりも意味深きものならざるか。少くとも多くの淚を含むものならざるか。彼の一村落は夕陽に眠れり。永久の平和！　これには日本外史あらざる也。されどこゝには自然と人情と神の書かれたる記錄存す。こゝには無數の人、男女、

心靈の生滅ありし。こゝには紙鳶空に舞ひぬ、こゝには祭禮の旗朝風にひるがへりぬ、こゝには月親しく照り、見るともなしに見られ、こゝには朝な〳〵日おだやかに昇りたり。嗚呼これ詩人の空想か。否、事實なり。

シーザルの傳を知ることは、外部より其人物を觀察するのみに非ず、吾等亦シーザル其人の內に入りて此世界をシーザル的に見ることなり。然らば一農夫の彼を知ることも亦た然らずや。吾等は智識の子なり。此農夫は山林原野の見なり。此農夫には過去の歷史もあるなく、功名の舞臺もあるなし。吾々市民農夫の內に入りて此世界を見んことを願ふ。此農夫其者とならんことにはあらず。吾等は此農夫に溫かなる同情を寄する時に、少くとも吾等が心胸に天空しく地潤き自由の感を叫び來たすぞ不思議なる。

空想

『空想を捨て絕望を刈る』とはゲーテの語なりと憶ゆ。げにも然り、人はみな、夢の如き將來を描きつゝ、今日を送るものなり。其夢は醒むる時なし、夢み〳〵て一生を送るなり。夢ひとたび醒めし時は絕望の時なり。足のもとに忽然と大穴現はれ、彼は思きつゝこの中に墜るぞ憐れなる。これ其最後なり。かくて彼は一生を暗き蔭に潛ふが如くして過ぎゆく。これはむかしより數しれぬ男女がくり返し〳〵たる哀れの歷史なり。人の墓は、悉くこれ空想の墓にあらずや。

人は多く己れの立てしもくろみに躓くものなり。計企は多く空想なり。空想は時間が人を欺く方法なり。時間、人を欺くに非ず。神の御手にあるべき時間を、吾もの顏に橫領せんとて、おのが影を逐ふ者こそ人なれ。時間は人を欺くにあらず。數千年の昔ダビデ呼びて曰はく、『吾時はすべてなんぢのみにて在り』と。かく曰ひ得るものはげに千百年に一人あるのみ。

蝶

花に狂ふ蝶の羽風のたよりにも
君がことづて聞く由ぞなき

秋風戀

朝な夕な身にしみまさる秋風の
悲しき戀を今ぞ昔に泣く

かりがね

鳴きつれてゆくかりがねの行方さへ
知らではかなき戀に朽ちぬる

夢

こしかたの夢に焦るゝ現世の
戀てふものは夢にぞありける

頭巾二つ

吾が艦隊、黃海の最北にかゝりて、第二軍の上陸を護衛しつゝある時、たま〳〵千代田艦長內田正敏君の夫人より一個の荷物、良人のもとに到着したり。青木と稱する艦長ボーイ、艦長室にて艦長の目前に此の荷物をときぬ。吾傍に在りて之を見たり。防寒用の頭巾一個荷物のうちより出でぬ。已にして又た一個出でぬ。一個は夫人特に艦長ボーイに贈られたる也。艦長ボーイ年の頃は十五六、常にまめまめ敷艦長に仕ふ。吾れひそかに夫人の優しき心をくみて此の歌を作る。

吾が夫は　　ゆきゝして、
遠き波路を、　　もろともに、
勇者どもと、　　かしらして、
勇者どもの、　　はげみます、
御國のためと、

懷ふや遠き、　　夫の身の上。

北の海　　潮風を、
吹きすさぶなる、　　しのぎ給ふらむ
如何にわが夫、　　すきまもる
思へばいとゞ、　　身にぞしむ。
都の風も

いくさ人とは、　　言ひながら、
さぞや不自由に、　　いますらん。
遠きうみ山。　　へだつれば、
朝な夕なの　　かしづきも
思ふにまかせぬ、　　女子の身、
たのむは夫の　　傍らに
はべると聞きし　　童のみ

生くるも夫と　　もろともに、
死するも同じ、　　波のそこ、
哀れの童、　　なつかしや。

夫思ふ
吾れさへあるに、　　いかならむ、
童が母の、　　心根は、
ともに女子の、　　身にしあれば、
思ふこゝろの　　變らめや。
妻の心の、　　深ければ
母の心ぞ　　いや深き。

此の頭巾、　　其のつてに、
夫に送らん　　今一つ、
童のためと、　　封じたり。
同じ包みに、

たまを霰の、　　艦のうへ。
霰をたまの、　　北のうみ。
氷るしぶきの、　　そのなかに、
夫も童も、　　もろともに、
たゞ安かれと　　祈るなり。

（於千代田艦）

友愛

愚かなる人は、決して友を得ざるなり。蓋し其の愚なるを厭ひて他人之に近かざるが故に

非ずして、其の人自から友なるものゝ何たるを會せざればなり。

自然は之れを愛する者に負かず。人情とても然り。人情とは人のうちにある情なれども、人自から之れを解することをつとむる時は、無窮に達する神の聖なる力となりて、彼れを祝福する者なり。人は常に肅みて吾が胸に奪く人情の聞音に耳を傾くることをつとめざる可からざる也。

然るに友情の如きは人情の尤も高尚なるものゝ一なり。たゞ之れを「交際」てふ冷やかなる文字のまゝに解しおくと、之れを深く自から省みて其の眞消息に達せんことをつとむるとは、其の差豈にたゞに愚者と賢者との區別のみならんや。

一人あり、若し友愛の情を終生解し得ずして了はらんか、其の人は不幸此の上もなき者の一人なり。

何故に不幸なるか。余は願ふ、人の親たるもの此の如き疑問を其の愛する子女に向て試みんことを願ふ。若し敏捷なる子女にして『友達なき時は淋しくして遊ぶ能はざるが故なり』と答へんか。之れ眞理なり。これ已に人情自然の答にぞある。之れ小兒にして始めて答へ得る意味深き答にてある也。

友なき時に於て實際吾等は淋しきなり。小兒の時のみ然るに非ず、一生の間友なくんば一生の間淋びしきなり。ベーコンといへる學者の名言に曰く、眞の友なきこそ眞の寂寞なれ、これなくば此世は荒野に過ぎずと。

一生の間、荒野をたどる如くにして此世を暮らす者を吾等は幸福なりと云ふ可きか。

小兒の答へは眞なり。孤獨は不幸なり。されど小兒の答ふる能はざる不幸あり。此時父母は子女に向て教へざる可からず、『友情を解し得ずして一生を了はる者、必ず其の品性に缺所ある事を證するなり』と。之れ更らに不幸の事に非ずや。

友愛を感ぜずして一生を送る程の人は、己れ自から寂寞を感ずる者に非ず。若し果して寂寞を感ぜんか、必ず友を求めて友ある可きなり。已に寂寞を感ぜず、之れ則ち其の心癲癇をなり、いかでか人情の深き解を聞くことを得ん。

憐れむ可きは此の種の人なり。人の性を殺ろして、獸の性を養ふたるものなり。

故に吾等は友義の重んず可きを知り、友愛の情を感ずることを務めざる可からず。以て眞の友を得ざる可からず、以て人情を完くせざる可からず。

つとむるといふこと之れ主眼なり。『一見舊知の如し』とは必ず友情發露の第一義にあらず。此のうちに非常なる高尚の人性を示せども、其の裏面は不健全なり、曰く『可愛さ餘りて憎さ百倍』と。凡て是れ一時の情に騙られたるに過ぎず。人情は深し、一時の感情は其底見ゆる也。

吾等はつとめて友愛の情を耕さゞる可からず、培はざる可からず。故に忍びもせざる可からず。其のうち已に友愛あるなり、人情ある也。

愚かなる者は友を得ず、友情を耕やすことを知らざればなり。我儘なる者は友を得ず、友情を培ふことをつとめざればなり

知らしめよ、つとめしめよ。余が子女を有する世の親たるものに向て、注意を促がすことは是なり。

吾が海軍水兵の歌

左に掲ぐるは、吾が國海軍の水兵等が好んで歌ふ離別の悲歌なり。

今度此のたび　國のために
遠くへだてゝ　西にゆく
國の爲なら　是非もない
主としばらく　袖わかつ
主も其身を　大切に
又たの逢瀬を　待つ計り
黑き煙を　あとにして
波をけたてゝ　出てゆく
空にそびゆる　富士の山も
消えてあとなき　千里海
四面の眺めも　絶えはてゝ
羅針盤一つを　たよりゆく

此の歌をたゞ此のまゝに素讀せんか、何の面白味なきに似たれども、これをかのロングサインの調に高唱し來る時は、壯士腸を斷つの思をなす。

ロングサインとは英國水兵が古來より愛唱する離別の歌なり。其の調實に悲壯を極む。吾國海軍の樂隊も亦た此の調を用ひて離別の際に之れを奏す。則ち右の歌は此の調に合はして作りたるものなり。

去年七月の下旬、我國の艦隊愈と勢揃ひして黃海向て乘出すの際、佐世保軍港に奪き渡りたる樂は、進軍の調及び、此のロングサインなりしなり。

大山第二軍々司令が威海衛攻撃の大任を帶びて廣島を出立したる時、宇品港に奪き渡りたるは又た此のロングサインなりき。

多年の苦學こゝに目出度く終はり、愈々江田島を出で、待ちに待ちたる遠洋航海の途に上ぼらんとする彼の年少有爲の士官候補生が、今更ら大洋を望んで斷腸の思をなすもの、又た此のロングサインなり。止まる益荒男、行く武夫、共に手をもて相抱きて叫ぶも亦た此のロングサインなり。

而して之れ各國の海軍々人皆な然るなり。彼の歌の文句少しく野卑なるが如く思はるれども、若し此の調を以て歌ふ時は、海上生活の兩面を詠じ得て悲壯此の上もなし。「悲壯」則ち海上生活の眞面目なり。一方懷鄕の哀情悲しく、一方萬里の波濤を開拓するの壯心動く。若し夫れ、

空にそびゆる　富士の山も
消えてあとなき　千里海

と歌ふ時は、水夫甲板に立ちて、『嗚呼終に富岳見えずなりぬ。懷かしき富岳いざ去らば』と叫ぶの時なり。

更らに進んで

四面の眺めも　たえはてゝ
羅針盤一つを　たよりゆく

と歌ふに至りては、悲壯の極、調子沈みて又た上り哀情激して希望生ず、漫々たる大海已に眼にさへぎるものなし、いざ然ば羅針盤一つをたよりとして千里萬里波の限ぎりに走らんかなど海人得意の絶頂。

此の頃小學校生徒が歌ふ唱歌のうちに

富士のすそ野に　降る雪は
孝子ふたりの　袖ぬらす

、、、、、、

といふがあり。ロングサインの調は此の歌の調と同じ調なるが如し。

想出るまゝ

五個月の間、艦隊に從軍中、見聞の事まことに多き其の中に、必ずしも新聞紙に報道する程の目ざましき事のみに非ずして、つまらなき事の中、却て面白味ある話も多かり。いま想ひ出すまゝに其一二を書き並べ見んと欲す。

(一) 誕生日

今日は某少尉の誕生日なれば來れとのボーイ

の傳言ありければ、何事のあるやと士官次室に至り見るに、時は十二時に近かければ、已に午食に間もあらず、卓子の上には様々の馳走山をなし、ほや〳〵と煙たつは長崎より新たに雇ひたるコック御自慢の菓子なり。其菓子の名は知らねども、煙たつ有様、卵色の材料に濃き牛乳のどろ〳〵したるを流しかけたる、一日に喉の鳴る心地す。其の外の馳走は一々あげがたし、蜜柑もあり、パインアップルの罐詰もあり。

さて座定まるや、先づ食卓長の士官起立して杯を擧ぐ、之れにならひて他の人々皆な杯を擧ぐ、食卓長忍みを含みて、

『今日は某士官の誕生日で御座ります、由て、聊か祝意を表するため此宴を開きました。御見かけの通り何の御馳走も有ませんが(ノー〳〵)、御遠慮なく十分平らげて戴きたう御座います。』

と更らに一段聲をあげ杯を高くさゝげ、

『某少尉の武運長久を祈る!』

一同之れに和して聲高く、

『某少尉萬歳!』

其のあとは所謂御遠慮なく平らぐる一段にて別に珍らしき事なけれど、飯の咽身の木片の如く氷りたる、大根おろしの水分の雪となりて口に入るればざく〳〵する、皆をかし。大鯛の丸ゑは食卓長萬歳と叫ばしめたり。煙たつ菓子も忽ち盡くれば、あとは雑談半日、艦内暦日なし。

(二) 死の蔭

或夜ことの外さむく、風さへ起りて何となく物淋びしければ士官室の諸士みな早やく私室に退き、常には似ず其夜は、十時ごろ已に人氣なく、余ひとり倚子に身を投げて、煖爐の前に茫然と坐し、色々のこと思ひ讀けて夜のさらに更くるをも知らず。

ふと心づき衣兜より一通の書狀とり出して、讀みて次の句に至る。

『僕已に斯病に罹り斯境に處る離眼以て思ふも何の益かあらん粉々たる世事僕に於て固より顧みざる處今や生死途に撰ぶなきを悟りぬ此故に僕皮下注射の療治ありながら之を施すの資なき悲運を悲しまず同窓の諸子連りに氣餒を吐くをも羨まず靜かに心を行雲流水に任して農翁菊童を友とし悠に病軀を養はんとす一朝假令死の命に接するも何をか憾みん。』

これ余が友、伴武雄の書狀なり。氏は余より一年若く、前途望み多き青年なりしが、東都留學中肺を病みて故郷に歸り、一人の母の膝下に保養する身となりつ。余はその途に赴かるまじきを獲知し、軍艦よりも屢々書を送りて言葉の及ぶ丈け慰めたり。氏も亦た病をつとめて其病狀を報じ且つ余が遠征を問ひぬ。此句は其一ッの中に在り、

讀みて此句に至りし時、余が兩の頬に冷やかなる涙のつたふるを禁ず能はざりき。火消えなんとす。室内の空氣次第に冷ゆくを覺えぬ。あゝ余も年若し、前途の夢を歌ふ仲間なり。前途! 前途! 之れを逐ふことの暮なしとは知りつゝ、年少氣鋭のわれ等が夢は竟に此外に出でず。されど哀れの青年! 彼れは心ならずも此句を吐くに至りぬ。これ彼れが病のために肉より吐く血に比して更らに無惨なる、心より吐く失望の鮮血に非ずや。

火は愈々消えんとす、寒氣益々加はるを覺えぬ。則ち石炭のかたまり五六個取りくべつ、火の燃え上るを待ちて背を火に向け、倚子に馬乗りす。思は何時しか郷里の空に飛び、友の倚ざめたる顔、それよりも更らに蒼き母の顔、目前に浮び來る。八個の蠟燭、今は僅かに其三個を餘すのみ、それすら光薄く、室の隅々暗くなりゆき、ペンキ塗りの板に赤き炎の影うつり、卓子の足、倚子の足などにもうつりて物すごし。

煖爐のうちより甲板をわたる風の音きこゆ。

余は武雄君を見舞はんとて其宅を訪ひし去年の夏のことを想ひ起しぬ。彼は余が來訪を喜び、萩餅の馳走すべしとて、豪所の方に忙しき時、余と武雄君とは、客間の簾先に坐して田舍生活のことなど語る。庭に柿の大木あり、葉いやが上に茂りて、庭一面に黒き影涼しく、葉のすきまより日光もれて黄金の如くに散り、垣根に葉鶏頭の真紅に染りたるが風にゆらぐもあり、余が眼底には此等のもの鮮やかに描かれつ。何心なく武雄君の顔を見れば、其の背きこと已に此世の人に非ず、あゝ今此の如く余と相對して語る此の人、實に此の人、血あり肉あり、情あり涙あり、物いふ此の人遠からずして一片の土と化することよと思ひし一刹那の寒心、再び今の事の如く想ひ起しつ。更らに其母の、絶望のうち僅かに親の愛に希望を夢むる其の愛苦の顔、あり〳〵と眼想のうちに浮びつ。余はケビン番兵が突然尻をひらき、内をのぞきし物音に驚くまではわが身軍艦に乗りこみ遠く大遠洋に在ることを忘れ居たり。

くべし石炭も燃え盡きぬ。煖爐はたゞ一個を餘すのみ。飲まんに湯なく、語るに人なく、眠らんと思へど心たゞ冴えゆくのみ。室を出で て甲板に登りぬ。

余は今まで煖爐の前に在りたれば外套を着ず、忽ち外氣にふれたれば全身一時に氷るかと覺えたり。兩腕に力を入れて振ること數十度、强て首をあげ、潤歩して階を登り、一段高きブーブデゥキの上に出でぬ。後部縦回砲の傍に立つ黒き影は哨兵にぞある。

仰げば冬の夜の星みつ空深く澄み、北に滿洲の大荒に垂れ、東に郷國の天に接す。風やゝ落ちたれど猶ほ檣、繩梶、煙筒、綱などを打つ音ものすごく、警戒嚴に、燈火一點もれず、數十の巨艦何處にある。間近きもの兩三艘星光にすかして朦ろに見ゆれど、たゞ見る、眠るが如く、待つ處あるが如く、息を凝すが如く、又た氷久に休むが如し。

氷りしデッキの上を强く蹈む靴の音、コツコツと聞ゆ、これ哨兵歩を移すなり。艦橋の方に當り此音規則正しくきこゆ。これ當直士官が寒を凌ぐ唯一の手段として、艦橋の上を右舷より左舷に、左舷より右舷に、四五間計りの處を、往復する、靴の音なり。

數百度となく、往復する、靴の音なり。

余艦橋の下に至りし時、上より誰れぞやと問ひぬ。余なりと答へて、階子を足早やに登りぬ。君なるか、まだ眠らずして何をかなすといふは

余が最も親しく語らふ某少尉の聲なり。

余『今夜の寒き事よ。』

少尉『非常に寒し。氷點以下十度なり。』

余は小尉と並びて歩をそろへ、例の往復を始めたり。

少尉『君の相變らず夜ふかしすることよ。』

余『妄想は持前なり。朝寢は特權なり。』

少尉『その特權こそ羨ましけれ。』

余『妄想も亦御互若きものの特權に非ずや。當直して獨り此の如く、夜更けて二時間も四時間も同じ處を動物園の虎の如くに歩まば、君とても妄想に耽ることならん。』

少尉『其の妄想の御蔭にて、氷點以下の寒氣も多少忘れらるゝを想へば成程これは、御互の特權なり。』

余『君の妄想は何事ぞや。若き軍人の夢こそ聞きたけれ。』

少尉答へず。余は其の肩に手をかけて、

余『美しき妻にや。』

少尉『否、否、海軍の軍人には妻ほど無用のものはあらず。今日は東、明日は西、命を波の上に託するものに妻ありて何かせん。妻は陸に、夫は海に、數年の間相會する僅かに週を以て數ふるのみ。實に馬鹿ものなり。』

余「立派に言ふもの哉。實際を見よ。士官室に來る書狀は何處よりするが、尤も多きぞ。殘夜の細君寫眞遞會は何事ぞ。」

少尉『そは亦た何事ぞや。』

余『先夜の事なりき、某大尉が細君の寫眞をその私室より持ち來るや、彼方よりも此方よりも續々細君の寫眞現はれ、忽ち一種の面白ろき光景を呈しぬ。君とても大尉の夢に伴ふもの、美しき妻に非ずして何ぞ。』

少尉は笑ひつゝ

少尉『彼等は老人なり、余は少年なり。たれか老人のまねをする者ぞ。他の人は知らず、余には其妄想なし。』

余『嘗て書生の時、江田島は君の夢なりき、已に江田島に入るや、遠洋航海、シドニー、布哇は幾度か君の夢に入りしぞ。已にこれも過ぎぬ。然らば海軍少尉の今の夢は如何。釣床に問ふべきか。』

少尉『夜更けて獨枝に立てば、拳を握りつむることも少なからず。されど其は君の推測にまかす。』

かくて吾等は默したるまゝ、歩をそろへて往復すること二三度、余が思は忽ち又た伴武雄氏の上にかへりぬ。

余『余が友の一人に、肺病を得て死に近きつつあるもの有り。余は今まで士官室にて其人の上を思ひ居たり。』

少尉『そは氣の毒なり、されど吾等とても死には緣の遠き方に非ず。敵若し簡略だに在らば、水雷艘艘十、西口角を掠めて侵入し來り、不意に吾れを襲はゞ、味方の運命如何がある可き。魚形水雷一個、飛び來りて此千代田の中央に中りたりとせよ、死は吾等に緣遠きとも言ひ難し。』

と笑ひぬ。余は足を止め、

余『よし、然らば其の見識を君に御親み申す、成るべくは緣遠き方に親み度し。さらば！ 余は之れより眠らん。』

と言ひ捨て、いそがしく階を下り、更らに一階を下りて上甲板に至り、余が寢室に歸れば室内幽闇死の藤壽の如し。

武雄君は今年六月二十三日午前三時に永眠せり。彼の書狀を認めて以來半年にして遂に逝きぬ。

(三) なまり

わが海軍にては、艦内の物名を英語にて呼ぶこと自から慣習となり來りて、今日にても、多くは洋名を呼び日本語に改めず、其のため隨分抱腹すべきことあり。卓子の被布を英語にてカバア(cover)といふ、此のエ(アール)を響かして士官は適常カバルといふ。然るに水兵之れを聞き誤りてカバラといひ、掃事の時などボーイ長が他の水兵に向て、『オイ、カバラを持て來い、早くカバラを』など怒鳴るを傍に聞く士官は又た之れに聞きなれて別に正さんともせず。

ミルク(milk. 牛乳)を聞き誤りてミルコと呼び、更らに甚だしきは、某少尉の實話に、或水兵に向てギューニュー(牛乳)を持ち來れと命ぜしに、其水兵通ぜざる風なれば『早くミルクを持ち來れ』といひあらためしに、水兵はじめて氣の付し如く、『ミルコの事に候や、ギューニューなど云ふ英語はドーも今まで聞かざりし樣なりしがサテはミルコに候か』と走り行きたりとぞ。

又た、或水兵見物人を案内し乍ら、プロテクチーブデッキ(protective deck 防禦甲板)の處に至り、いとも跛爪らしく、『これこそはプロチク。チクデッキと申すものなり』と口早やにごまかしたりとなん。

余が士官室に在りて士官諸氏と雜談して在

りし時、兵曹の一人、入り來りて副長に向ひ『恭しく、言ふを聞けば、『只今メートルに御願申せし處』云々。甲板士官のことを英語にてメート(mate)と稱す。之れを聞き誤りて米突と同音に用ひしこと、兵曹が去りし後、士官諸氏の笑となり、メートルと信じて平然たる處愛らしと評し合ひぬ。

其他これに類したるなまり一々數へ難しとぞ。

(四) 頓首三度

大連灣に碇泊中、或日所用ありて艦長室に入りけるに、此れは又た何事ぞ、二人の支那人、敷物の上にあぐらをかき、前に小札を置きて其上には食用ビスケット及び白砂糖置かれたり。余が入り來るを見て、之れ見よがしにビスケットの上に砂糖を載せ滿面如何にも喜れし氣なる樣子たて、ばり〳〵とかじる有樣、余はたゞ呆るゝのみ。艦長は傍の倚子に腰打ちかけて二人が馬の如く食ふ樣を、笑ひつゝ眺め居たり。一人の支那人は四十前後と思はれ、他の一人は少しく若かきが如く、兩人共骨突出して體格偉大、粗末なる綿入れ着たるを見れば大連灣沿岸の農夫なるべしとは一見して見分け易かり。余艦長に問うて曰く、彼等は何者にやと、艦長答へて言ひけるには、昨日本艦のゼハヤ(小蒸滊の一種)にて鴨打ちに出かけし處、水兵の不注意より、とある淺瀬に乘せ上げ、其のうちに潮退き愈〻困難を極め、余は遂に上陸して支那人を探しジャンクにて本艦まで送らしめんと決心し、漸くの事に上陸はしたれど日已に暮れて時もやゝ立ち、四圍暗黑にして不知案内の地なんど窮し、傍かに一軒の家を見出しければ手眞似にて意を通じたるに其家の翁快く承諾して直ちに此二人を周旋せり。此二人はジャンクを用意し、二哩計りの海上を此寒氣に何の苦もなく送り呉れたるなり。今其の好意に酬いんため、聊かビスケットの御馳走を致す處なりと。

支那人は艦長が以上の事實を余に語る樣を傍より猜して自分等が譽められ居ることを早やくも見て取り、ウン〳〵と余の酒を見て言ふ其の意味は、實に然り〳〵と自慢するものゝ如し。

吾等が僅かに一個を食ひ得る程のビスケット、二人は各三個計り忽ちに食し了はりて平然と立ち去りぬ。

其後數日艦長は鴨打ちかた〳〵先日の支那人に禮のため出かけんと思ふが間違せずやとの事に、余は上陸ならば何時にても好むところ。小蒸滊にて諸共に艦長がゼハヤを乘せ上げたる沿岸の方を指して出發したり。行く先きは黃山砲臺の西一哩計りの淋びしき村落なりける。

遠淺にして小蒸滊さへ着け難きを、岸邊に鰯漁り居たる支那人の小舟を呼び寄せて之れに乘移り、漸くにして礁岩に靴を着るを得たり。艦長いふ、先達は暗夜に上陸したるなり、其困難を推察せよと。

潮引き去りたるあとの、泥砂藻草の上を靴爪立てゝ歩み、兎も角もして村の端に達しぬ。さて如何に探せども、先夜艦長が入りたる家らしきもの見當らず。これなるべしと其門の形にて推測し、艦長はじめ、其他同伴の面々、水兵に至るまで七八人、どや〳〵と入り込みぬ。家のものは食事の最中なりしと見え、室の中央に飯櫃め蓋ありて其上に茶碗を載せ、茶碗の中には粟と玉蜀黍と混ぜたる如き飯あり。傍の皿には大連灣の名物、大口魚の煮たるが盛られたり。家の者等は俄かに多人數押しかけたるため非常に驚き、悉く外に逃げ出でたり。主人の翁を見て艦長はこれなり、此人なりと叫び

ぬ。余いふ、否、此老人は先日軍艦に來りたるものと異る。艦長の曰く、否、否、此翁が先達の兩人を世話し奥れたるなり。余は此翁に禮せんとて來りたるなりと、余は始めて其事情を知るを得たり。

されど翁は艦長を見知らず、艦長が與へんとて差出すビスケット及び砂糖の鑵を押返して何事か頻りに囁き、頓首して詫入ものゝ如し。吾等見て驚駭退するものとなし、顔を和らげ、日本語にて遠慮には及ばぬ、これは先夜の御禮だから取て置けと言へど、勿論日本語の通ずべき樣なく、彼は益〻頓首して大閉口の體なり。余いふ、思ふに此翁早やくも艦長を忘れ、吾等を以て、微發に來りしものと認め、此品の如きものを與へよと命ずるなりと誤解したるに非る乎。艦長或は然らんと此度は更らに語を和らげ、いや、これは御前にやるのだよ、といへど通ぜず、通ぜずとは知りつゝも此の如き場合には屢々日本語を用ひたり。これ餘りのもどかしさに自然と發するなり。

困じ果てし時一人の若者の字を解するものを連れ來り、漢字にて、來意を書示したるに、若者は直ちに其旨を翁に告げぬ。翁の此時の驚き如何。艦長の顔を今更らの如くに眺め、奇聲を發して叫び、歡喜の色を滿面に表し、艦長の差出す鑵を受取りて押戴き、大地にひれ伏して頓首すること先きの頓首に倍す。

吾等去らんとする時翁をはじめ一家の者悉く門に送りぬ。門を出づる時、艦長ポッケットより蜜柑一個取り出して、翁の傍に立つ十歳計りの愛らしき小兒に與へしを、小兒は恥かし氣に受取り、家のものは一同聲をあげて謝し、翁の手小兒の頭上に置かれしと思ふや、小兒は大地に坐し、頭を土につけ、斬首すること三度、これ支那人の家庭教育なり。

《五》 二月七日の朝

夜は明けんとす！　戰は始まらんとす！

と扉敲きて起こさるゝに岸破とはね起き、手早やく衣着更る時の心地！　何時までか忘らる可き。甲板に躍り出づれば、夜は明けんとす！　成程夜は明けんとす！　東の空を見よ。被のしのゝめを見よ。曉星を見よ。嗚呼麗はしき曉天！

曉霧に眠る劉公島！　朧朧として水平線上に浮ぶ劉公島！　そよ〳〵と吹き送る朝風！肉も骨も緊る。眞先きに進む、滝艦「松島」は朝の衣を着、殿艦「浪速」は未だ夜の幕のうちに在り。見よ！　戰闘旗、旗艦の檣上にのぼりぬ！

過文四篇のうち、「頭巾つゝこ」は「家庭雜誌」第四十二號に、「お愛」は同誌第五十四號に、「墨出るまゝ」は同誌第六十五號に、「日記」は同誌第五十五號附錄に掲載されたものである。

日記、書翰篇

日記

明治廿四年一月

沈靜一　卿毅二　勤勉三　力行四　活智五　電眼六

木　明治二十四年一月一日、午前外出せず。午後國元及び諸友より送り越したる舊書を驗し之れを分類す。夜、佐藤毅氏を訪ふ、快談數時、夜深して風生ぜしを以て氏の宅に一宿。天氣快晴なりし。

金二日　午前佐藤氏の宅より氏を伴うて歸宅す。午後三上に行く。夜引頭氏(百太)と共に寄席(岩國亭)に至る。快晴。

土曜三日　午前水谷眞熊君と共に川上信元氏を本郷に訪ふ。氏の宅にて晝飯を馳走になり、三人共に上野可然氏の病狀をたづぬ。歸路水谷氏と別れ麹町の田村君を訪ふ、不在、直に大久保氏を訪ふ、不在。今井氏に到る、談話數時、共に九段靖國社内邊を散歩す。午後五時頃歸宅す。宮崎氏來れるあり。

日曜四日　午前教會に行く、受洗す。歸りがけ大久保氏に至る。午後五時頃歸宅す。三上信之氏あり。夜川上氏長谷部繁三郎氏水谷氏と談話を開く、川上氏とまる。

月曜五日　午前川上氏水谷氏と共に川上氏に到る。會する者七名、かるたを遊ぶ。午後五時過ぎ歸宅す。夜菊地虎太郎氏來り、かるたを遊び潮氏あはせを弄す。

火六日　午前在宅、國民之友新年附錄等を讀みて半日を暮す。午後神田英語學校内にて開きたる文壇社講話會に出席す。井上通泰氏の講話あり、本邦和歌之 development に付て長々とやられたり。夜は談話を以て終りたり。晴。

水七日　午前在宅、午後同じ。作文す(二十三年)。夜新禱會に出席す。歸りがけ大久保余所五郎氏を訪ふ。晴。

木八日　午前午後夜悉在宅。作文す。夜は剛室文稿を讀む。

金九日　午前剛室文稿を讀む。午後太田雪松君水谷君と共に引頭氏に至り留守なりしかば共に太田氏に至る。夜剛室文稿及好色五人女を讀む。早く床に就く。

土曜十日　午前大久保余所五郎小野房太兩氏來る。午後津田鑑雄菊地謙讓兩氏又來る。種々之遊戲を以て日を暮す。夜早臥す。

日曜十一日　午前教會に至る。午後文壇社之集會に出席す。夜矢來町教會に聖教學校青年會新禱會を開く。歸りがけ梶原保人氏に至り、歌がるたを遊ぶ。

明治廿四年二月

水十一日紀元節　天氣清朗、又二十二年の憲法發布日の如くならず。午前、永野氏一寸來る。作文を試みる、成らず。午後、横田氏來る。談話數時、梶原保人氏來會、余は獨り小野房太氏に至る。水口氏あり、大久保氏已にあらず。永野氏來る。蓋し永野氏は青年會大演說會の辯士金森押川の兩氏を訪ひ、之れを乞ひしも兩氏不在。夕方頃、横田氏又來る。蓋し德富氏に至らんが爲なり。水谷氏と共に出づ。余は今夜別に最急の事務ありしを以て行かず。夜、早稲田評論論說を書く。成る。經濟原論を讀む。安井横田氏は元と同志

社の人なり、卒業し吾校に來り余と同級なり。此の日より同志社の事を聞く。

木十二日　午前、課業はありたれども青年會大演說會の辯士を託する事に盡力したるを以て出校する能はず。午後、早稻田評論の論文を清書す。夜、小野氏に至り、論說を持行く。午前辯士を託しに行きし人々は押川正義金森通倫植村正久の三君あり。押川氏は辭せらる。

金十三日　午前登校、改革案に付き邦政三年生の請求に由り委員三名を出す、大議論あり。委員は横田大久保小野三名選擧せらる。大久保氏非常に辭して僕に託するを以て引受く。午後、寄宿舍なる中村德助氏に至る。蓋し講義錄賣却一件なり。中村氏の處にて利國新誌を借り來る。其督大演說會の廣告をなす。其の前に齋宮シゲ氏來る。夜、永野氏に至る。小野氏も亦あり。永野氏より江澤誠一氏を紹介せらる。歸宅後頻りに地租輕減說を作らんと思へども疑問百出。

土十四日　午前經濟原論を讀む。登校す。午後源氏之講師落合先生來らず。歸り、此夜の討論題地租輕減に付き草稿す。夜、學校に至る。第一教場に英語政治會を開きしを以て出席せるなり。來會者少きを以て二三人の演說者ありしのみにて閉會す。夫れより政治三年生發起之學校挽回會に吾級の委員となりて出席す。朝枝佐織君及び香川秀次郎兩氏より、明日再び來り難き由申送らる。蓋し樋口左文氏來臨の約束なれば兩氏をも誘ひしなり。

日十五日　樋口左文氏來る可しと待つ。經濟雜誌を讀む。終に來らず。午後、青年文學會に出席す。途に芳賀守之助氏を訪ふ。伊田學海君來らるゝ。管の所來らざりしを以て會員殆んど失望す。幸に椿花道人、抱一庵主人等來る。賑かに談話して散ぜり。歸宅し見れば樋口氏より來り難き由之手紙來り居たり。文學會の歸りに、矢來町教會にて祈禱會の例會に出席す。

月十六日　午前、昨日芳賀守之助君より借りし新著百種第十二號文つかひを讀む。午後オセロに出席す。夜專門學校校場に於て基督教演說會を開く。金森倫植村正久兩氏の演說あり。金森氏の演題は「賀か哲か」、植村氏は「人類の嘆聲」。

火十七日　風邪、おそく起く。午前、小說を讀む。午後、登校す。夜スケッチブック及びマクベスを讀む。眼藥して寢に就く。

水十八日　午前登校、十時より大久保氏と共に學校より直に小野房太君を訪ね、氏の宅にて晝飯を馳走になり、三人伴うて余が宅に來り、暫くして三人又伴うて麴町なる大久保氏の宅に集り、談話數時、相携へて招魂社内を漫歩す。田村三治氏に出遇ふ。四人伴うて神田邊に散歩し、九段迄立戻り、余は樂と分れて一番町なる朝枝佐織君香川常三郎氏を訪ふ。岩國の事を談じ快を極めて歸る。余が少時竹馬の友今日四方に分散し、少女の友亦多くは嫁す。錦帶橋の老朽往來止めとなりしを聞き今昔の感深し。

木十九日　午前登校。午後經濟原論を讀む。小野房太氏永野靜夫氏來る。水谷君今朝より頭痛の由にて伏す。夕方余も亦風邪の氣味ありしを以て神樂坂に買藥す。歸りがけ久保田富次郎君を訪ふ、四方山の話、シヤベリ散らして歸る。

金二十日　午前登校。來週内ストライキ愈々執行に一決す。午後吉田友吉氏と共に家永講師を訪ひストライキの由を告げ、其れより坪内氏に至りたれども留守なりしを以て伴うて麴町なる大久保氏を訪ふ。談話數時、靖國社

内を散歩して、直ちに伴うて神田邊をぶらつく。來る二十二日午前より井伊直弼の墓及び吉田松陰の墓を訪ふに決す。蓋し好時期に乘じて遠遊を試みんと決するなり。月を蹈んで歸宅す。

土曜二十一日　午前吉田友吉氏と共に坪内雄藏君を訪ひ、ストライキを執行せし由を告げて歸る。歸りがけ氏と共に郊外を散歩す。此の日天氣晴朗、途に寄宿舍に立寄り、横田氏に明日遠歩を試みん事を約し、佐藤毅氏を訪ひ歸宅す。夜番町教會に青年會の演說會を開きしに望む、家永豐吉君のチュルゴーと題する演說あり。演說風は規則的器械にして一口以て評すれば演說で御座ると云ひたくなりさうなり。次に德富猪一郎君の演說あり。歷史上の評論なり。氏は一種まはらぬ樣な辯で而も巧に談ず（演說すとは云ひ難し、滑稽三分議論四分事實三分位の取合せ、先づ〳〵無難の演說ならん。聞く者の多くは拍手し喜笑すれども、凡て此れ凡骨輩のみ。直に氏が議論を味ひ得しものは十中二三と放言して可なり。教會中深水未君に遇ふ。演說終りし後中桐確太郎君と共に大久保氏を訪ひ、夜十一時前歸宅。

日曜二十二日　午前、此日天氣晴朗氣候春暖風無く塵起らず、前日來約束し置きたる遠遊には實に好期日なりし。此の日の同行者は凡て八人、大久保氏中桐氏相原氏吉田氏横田氏津田氏板橋氏と余。豪德寺なる遠城謙道伯を訪ひ、松陰神社にまうづ。歸りがけ井伊家の別莊に立寄り園中を見る。銀世界十二社等に立寄る。日暮る、月雲間に在り（午後は少少曇る）。歸宅し見れば深水未氏あり、余を待つ。此の日の紀行は別に認む。

月曜二十三日　午前在宅、午後引頭氏を訪ひ、齋宮に立寄る。夜、德富猪一郎君を訪ふ。同行者は水谷津田の兩氏なり。歸途、余と水谷は津田氏と別れ、三田より深水未氏に到る。氏が宅に一宿す。

火二十四日　午前深水氏の宅に在り。午後、歸路につく。東京府勸行場を一覽す。夜未氣八百吉氏を訪ふ。

水二十五日　午前遠征之紀行文を作る。午後、遊ぶ。小野房太君を訪ふ。夜作文す。

木二十六日　午後剛室文稿三卷讀み終る。午後大久保氏來る。共に小野氏に至る。三時去て大久保氏と共に我が宅に至る。身上の事に付て色々談ずる所あり。大久保氏より僕に對して大に忠告する所ありたり。松平慶永氏の編述せられし遠事史補を借用し歸る。夜、此の書半分讀む。

金二十七日　午前遠事史補讀み終る。午後紀行文を校正改竄す。爲替來りしを以て受取りに行く。夕、國民の友舊號を高讀す。夜、一口鋼を作り、清書す。

土二十八日　午前午後春草記を清書す。夕方寄宿舍に至り横田氏より新高詩一の寫眞を送らる。

明治廿四年六月

木曜二十五日　午前近代史を讀む。午後新聞を讀む　經濟雜誌を屋後の松林に携へ行き、綠蔭の下之を讀む。夜、香川朝枝、大島の三氏に與ふ可き書狀を認む。此日朝早く高岬山に登る、雲霧漠々、滿野緑花、山岳皆浮鳥の如し、仰げば天日赫々、光景極めて絶奇。

土曜二十七日　美日、午前近代史を讀む。午後、國民之友第二十二號、史海第二卷、國民新聞來り、之れ等を讀む。宮崎晋一氏より立寄る可き旨を申し來らる。

日曜二十八日　美日、午前屋後の松丘に登り、謡美歌を唱す。狸を探したれども見當ら

ず。蓋し近時往々吾庭前に出没すればなり。終日外出せず。何となれば雨初共に用事あり柳井津に行き留守番をしたればなり。

月曜二十九日　午前平生村に出で水谷氏に送金す。蓋し宮崎晋一氏省歸之節立寄らるゝ由なれば其の便にマコーレー英國史等を持て歸てもらひ度く、其の買求めの儀を水谷氏に託したるを以てなり。午、雨來る、寂寞たる書窓の下、バイロンを繙きマンフレッドを唱す。此日晝食の後、細雨油の如き中を突て小丘に登り、四方寂然たる中に立ち熱涙天父を祈る。蓋し近時信仰非常に冷やかになり全心治んど汚れ腐れたる折柄、一事あり、飄然として大悟せしめたればなり。夜は弟敬治に鬼界島てふ詩を讀み聞かす。

火曜三十日　午前より降雨漠々。此日敬治試驗後の休日なるを以て校に登らず。爲めに吾亦遊戯談話のみ。爲す事なくして空費す。

明治廿六年二月

マ切治二十六年の一月も飛ぶが如くに去れり。回顧して思ふに、果して悲しむ可き乎。吾の決して喜ぶ能はざるは明らか也。然れども果して悲しむ可き乎。吾れは悲しみたり、何となれば事多くは心と差がひたれば也。然れども亦た此の一ケ月の吾に教ふる所決して少なからざりしを思へば、慰むる所なきにしもあらず。

マ二月三日は吾に取りて極めて大なる謎語なりしを記憶し置かん。早朝吾は宿を立ち出でたり。其は轉宿の意切なりしかば、麹町區に其の恰好の宿所を捜索せん爲めなり。吾は成る可く下等の宿所を欲したり。何となれば切りに自ら思へらく、故郷の父母吾の爲めに其の酒を節し、其の費を縮めて吾に送るに當り、吾其の旅宿を撰んで卑汚薄弱なるを感じた能はざるは、心痛の卑汚賤食に甘ずる其の一なり。又た自ら思ふ、吾は終に世に好遇せらるゝの人に非ず、而も奮て理想の事業に當らんと欲せば貧賤に安じ水火を避けざるの決心なかる可からざるを信じ、之れが決心を固うするには平生の用意修養の大切なるを知りたればなり、之れ其の二。又た自から計るに、少しにても儉約を積んで多少の餘裕を造り教會に到する義務を全うし、必要の書籍を購讀せんと欲したればなり、之れ其の三。求めて其の家を得ざりき。而て吾は意を飄へして轉居の期を延すに決心したり。其は一つは自由社入社一件の成否定まりて後にする方の利を思ひ、一は「青年文學」十六號の編輯を終りて後にすべきは、「青年文學」に到する事務上の義務なりと信じたればなり。路を轉じて今井兄を訪ひ、數分の談話を試みたり。丁吉治氏の宅に立ち寄る。謎語は來れり。丁氏吾に自由社長金森通倫氏の意を通ず。金森の意は其の黨の爲めに盡すよりすれば應に然る可き思付きなりしなり。

曰く自由黨に新聞事業の發達し居らぬは極めて不用意千萬なるをもて、行く〳〵は大に之れが擴張に盡さんと欲す。曰く、かるが故に新に入社せんと欲する者は、決して一時のやりくりたるを許さず　已に入社したる以上は此末全く身を新聞事業に投じ、又た自由黨の爲めに盡すの覚悟なかる可からず。故に丁氏は吾に問ふに、果して此條件を以てするも入社を望む乎。と、斷乎たる決心を促がしぬ。兎も角も決心せり。『以て入社す可し』と、何に故に。

吾は吾に問ふ。第一、稱は職業を新聞事業と定むるの決心ある乎。と、吾は色々に苦心せり、様々に考へたり。

「職業」「職業」此の文字は今更らの如く其

の解釋を吾に求めたり。然れども終に吾が最初の信仰（最初の信仰とは平生の信仰の意なり）は最後の答なりき。『人間は職業の如何に由て其の眞價値を定むる者に非ず、北海の漁夫を見ずや、山間の樵夫を見ずや、神の眼は平等至公なり』と、之れ第一思想なり。而して、吾が教育、吾が境遇、吾が技倆、吾が志望（の幾分）は吾が新聞事業を否とするの理由を與へざりし也。吾は今更らの如く、決心せり。『吾は新聞記者の職につくを適當なりと信ず』と。

吾は已に此の答を得たり。他は元より易々たりし也。自由黨の爲めに盡すの決心ある乎てふ第二の問は鐵斧の青竹を破るが如くに痛切に明瞭に、即座に決答せられぬ。曰く「自由黨が其の天職を忘れざる以上は、自由黨が其の精神を殺ろさゞる以上は、吾は元より心血を盡し、熱涙を仰けて其の隆盛の爲めに盡す處ある可し」と。人間感情の變轉も不思議なる者なる哉。かく決心し、かく確信し來るや、吾の思想は急轉激揚して百尺竿頭更らに一歩を進むるの看ありき。自ら思へり、眉を揚げ、瞻を張て思へり、自由黨の天職は吾が國政の大革新に在り、自由黨の精神は自由平等に在り。已に然り、之れ自由黨なり。若し或は自由黨にして此の天職を忘れ、此の精神を失はん乎、之れ黨員の腐敗のみ、黨員の墮落のみ、吾は寧ろ其黨員を改むる可し。其の黨員を責む可し。之れ自由黨の精神を活かして其の肉を破くなり。又た、丈夫腕を振ふに足るの事業にあらずとせんやと、ア、急々化々、想像は想像を追ひ、空想は空想を生めり。心潮聲あり、停止せよと。暗愁は襲來せり、妄想は破れぬ。勇ましき決心は何時の間にや、重荷の如く吾が心臓を壓せり。壓せられ乍らも又た其の決心を纖す能はず。只だ暗愁は慘澹の色を帶びて吾を朦朧たる不安の室に導きぬ。此夜深更、將に、三時に垂んたる時、孤燈の下に紙をのべて書して曰く、

『幽に悲みて、强く楽しみ、冗く行ひ、休まず勉め、徐かに急ぎ以て天命を終らんか。靈の人なり、義の人なり、而して成効の人なり、明日を計る可からず。吾は生く可き乎、須からく永久に生く可し。』

明朝は早々、丁吉治氏を訪ふ可し、決心を語る可しとて、鶏鳴の曉近きを報ずる時、孤枕を抱て寒夢に入りぬ。ア、謎語果して解かれたる乎、吾之れを知らず、乞ふ一年の後を見よ、十年の後を見よ、百年の後を見よ。ア、後悔を以て解かる可き乎、血涙を以て解かるべきか、安心を以て解かるべき乎、神は知るも吾は知ること能はず、然れども吾は信ず、神は自から解く者の爲めに解き、自ら助くる者の爲めに助くるを。

四日、土曜日　夜祈禱會に出席す。此の夜は吾も祈禱する所あらんとて出席したり。植村正久氏の感話あり、重に共勵會の事なり。此頃教會奮興の氣運少しく起り、殊に植村氏は大に熱する所あるが如し。吾も亦私かに教會に盡すあらんと決心して一月三十日の夜は植村、多田素の兩氏を訪ひ、色々と感ずる所を陳述し、意見のある所を尋ねたり。吾が教會に到する唯一の希望は乃ち教會員の懇情を盛にするに在り。吾は其爲めに教會の分治法を編出し植村、多田兩氏にもたゞしたり、兩氏とも賛成なり、只だ其の實行の如何を危ぶめり。さて植村氏の感話は終り、多田氏は續て云ふ、諸君將に教會奮興の事に付て、感ずる所あらば今夜の如き、懇談すべきの好期ゆゑ、敢て隔てなく語り出でられよ、と。二三の人々は語り、或人は祈れ

り。而して吾は一語を漏す能はず、一句を新る能はずして了はれり。吾は大に反省する所ありたり。吾の性情、特殊を更むるなくんば、吾は遂に自ら企てたる事の實行者たる能はざることを深く感じたり。吾は今日より此の點に付ては大に修養練磨する所なかる可からずと信じぬ。

吾は將に自ら計畫企圖する以上は、之れを實行するに十分の勇氣と自信と用意と、誠意と熱心の缺く可からざるを知りたり。

若し然かする能はずんば吾は終に自ら熱するも人を温むる能はず、自ら企て、自ら實行する能はざる不成功無責任の人として終る可きを懼れたり。

五日、日曜日　午後、委員會に傍聽す。委員會に向て言はんとて欲する事を考へ行き乍ら、機を得る能はずして言はず止みぬ。機を得ざるに非ず。自ら直截ならず、勇氣に乏く、機を捉ふる能ざりしなり。

▽教會の運動は歩武を確かにし、漸を以てすべしと決せり。之れ精密なる用意と、拔くべからざる自信とを得んゝ爲めなり。果して能く成功するや否や、記して後日を期せん。

六日、七日、八日、九日　四個の二十四時間は經過せり。吾に重要の時日にてありし乎、吾之れを知らず、後日を以て判斷するの外なければなり。然りと雖も吾は一時間たりとも重要ならぬ時間を此の短生命の中に有する能はざるなり、吾は五十年に足るか、足らぬ乎の月日を此の花たる宇宙、此の淵たる社會に宿す、其の理想に由て事を成さんと欲す、決して一時たりとも無意味に費す能はざる筈也。思ふに此の四日間、吾には必ずや意味なかる可からず。

國木田哲夫と稱する一個の青年は、日本國と稱する國に、天の下に地の上に　明治二十六年二月六日、七日、八日、九日を如何に費せしか。巢の生命は夢なりしか、四日間の生命は何を意味するか、巢は如何に宇宙に繫がりしか、如何に社會に繫がりし乎、如何に歴史に繫がりし乎。

▽六日の朝、巢は金森通倫氏を訪へり。自由社に入社するに就て、金森に直接の談判を試みんと欲せしも也。金森は不在なりし、金森は外泊したる也。巢それを知らざりし也。

▽六日、七日、八日、九日の四日間の事を記さんとて筆執りしも前章を以て止め、九日の夜は眠に入れり、今は十日の半夜なり。

▽事實の詳細なる點は必ずしも記憶せず、只だ筆にまかせて、此の一個の青年が過ぐる五日間に於ける事實の大要、思想の根本、感情の焰、いさゝか左に記し置かん。

▽明日を以て愈々轉居するに決心せり「青年文學」大半かたづき、自由社入社も今の分にては何時の事か知れざればなり。然らば何故に急ぐか、曰く靜思默讀の場所を得んが爲めなり。

▽七日は午前外出、金森氏を訪はんとて路に丁吉治氏に立寄る、丁の云ふ、已に遲し、今より行くも金森或は外出幾ならん、吾由て止む。

▽八日の午後今井氏と上野公園を散策し大に談論す、自戒となり、奬勵となり、懺悔となる。

▽九日、早朝金森氏を麻布の宅に訪ふ、家に病人ありて取り込み中ゆゑ面會する能はずとて謝絶す。

▽同日、午後早々京橋印刷會社に行く、「青年文學」の印刷を依頼せんが爲めなり。約成りて歸る。歸宅後直ちに多田素氏を訪ふ、不在。夜、京橋印刷會社林某來り談判破れ、直ちに水谷氏と神田の東京印刷

所とか稱する印刷屋に行いて依頼す。謝絶せらる。熊田活版所に至り約成る。

▽十日、午前熊田活版所來り約破る、午後京橋自由新聞社に行く、丁吉治氏及金森通倫氏に遇はんとてなり、詔勅下り新聞屋多忙、丁不在、止むを得ず歸宅す。

午後、西村もと氏に依頼して質屋に衣類を典し五圓を得。之れ明日の神居に充る爲めなり。

▽然れども之れ只だ表面に浮べる、極めて粗雜なる事實のみ。

此の五日間に一個の青年は如何なる周圍と、如何なる思想感情に取りまかれしか。

▽七日は則ち議會と内閣が大衝突の結果なる十五日の休會終へて再び開會し、彈劾的上奏案を通過し、自ら休會したるの日なり。

▽十日(則ち今日)は、天皇より内閣大臣及び帝國議員に詔勅の下りし日也。

政界の雲行夫れ此の如く急なり。而して吾は一本の指すら此の大歴史の上に染むる能はず、否吾自ら歴史外に立てる心地せられたり、時は此等の大事實を只だ吾が眼前をかすめて過去に逝りやりぬ、吾は默々としてそを見送るのみ。

▽社會生活の門は吾が爲めに開くが如くして開かず、吾を非運の戲に供せんとす。吾には理想と希望の火焔々として燃ゆる也、而も社會生活の門番は吾を弄す。吾は思へらく、吾に今少し自省の修養なき時は吾は、天を恨みざるも、人を咎めざるも、必ず社會を憤恨せしなるべしと、何となれば巢は社會の極めて不公平、亂雜、腐敗、僞善なるを知ればなり。

▽吾が上におごそかなる天の淵、深く且つ遠し。吾の過去には吾の過去住ひ、吾の未來には吾の希望住む。吾が父母は其の天地間の餘命を吾が行末の爲めに困苦す。吾の信仰理想は吾を結びて宇宙の大精神に繫ぎ、吾の生活の必要は吾の前に社會の不調、亂雜の幕を掲ぐ。我が政事上の大變亂は新聞の號外となりて、吾が机上に飛び來る。吾が書架にはエメルソン、カーライル、ユーゴー、聖書、ウオーヴウォルス、バーンス、ゲーテ、說話、王陽明、莊子、英國史、列を連ねて吾を壓下す。

▽嗚呼襲撃、筆を投じて止まん……。

十一日　吾は麴町區五番町十八番地堀コト方に轉居せり。井田は八圓五十錢、堀は六圓八十錢なり。巢は九段を荷車の後に隨いて上れり。

此の夜は暗澹たる夜なりき。天雲澹々、風蕭颯、寒氣の甚だしき事此頃にもめづらしかりき。

十二日　不幸なる巢

巢は天地何となく寂寞たるを感ぜり、巢は如何に繫がり居るかを自ら知る能はず、巢は自ら哀れむ可き青年を小說中に見出す如く、己れを此の天地の間に、此の社會の裡に見出すなり、巢は其の不快なる念を去る能はず。

然れども見よ、巢は必ず奮然たる可し、巢は神を愛す、今の天氣は巢を毒殺するに似たり。

巢は悲しき書狀を父母に送れり、社會生活の荒らき風浪は、巢をして此の悲しき書狀を書かしめたり。

▽寒雲天に寒がりて薄暮もの寂びしく、吾心憂ひて樂しからざる時、丁吉治氏來る。快談時の移るを忘れ　心の憂り一掃し盡せり。

十三日　早朝金森通倫氏を訪ふ、在り、入社の事

を語る。渠れ、吾をして卽席に文章を作らしむ、吾れ應じて三四文を作りて歸宅す。午後直ちに引頭百太、水谷眞熊を訪ふ、夜十時歸る。歸路仰ぎて天を視る、天空の蒼々たるを感じ、列星の燦然たるを嘆ず、二個の自誡を得たり。左に、

マ凡そ至誠と云ひ、寛容と云ひ、理想の實行と云ひ、正を踏んで恐れずと言ふ、言ふは易きも行ふ者果して幾人ぞ。吾思ふ、かかる大精神を實行に見る、微々たる修練の能くす可きにあらず、すべからく聖賢の書に對して高遠幽深の大思想、大感情を味ひ、別に天地、邈々齷齪たる人間の居に非らざる境界を知らざる可からず。

マ凡そ克己修養は其の用意漫然たる可からず、必ず着々、一より、二、三より四、養うて到り、修めて達するの覺悟なかる可からず。吾に幾多の禁點あらんか、又た幾多の過失あらんか、宜しく先づ其の最たる者、易なる者より次第に之れ除くを努む可きなり。

乃ち吾は先づ直截を學ぶ可きなり。之れ嘗て、德富氏が吾れに戒めたるの誡なり　吾今にして其の氏が吾を見るの明に服す、吾は實に直截ならざるなり、故に思ふ所、信ずる所、之れ容易に人に語る、人と論ずる能はず、爲めに折角の考案も實行を見る能はざりし事少しとせず、且つ人をして僉議なくも隔意あらしむるに至る。

實は吾自ら今日迄直截なるを自任したるなり、蓋し其の然らざりしを悟りたり。

吾、今日迄直截なりしと思ひしは、之れ一個の意地我慢の發して他を他とも思はざりし也。

直截なる者決して然からず、思ふに左の資格を有するなくんば決して直截なる能はざるなり。

第一、自信。自ら信ずる所、確乎たるあらば、口、何を憚て言ふ可からざらん。

第二、膽勇。眼中、信仰あるのみ、理想あるのみ、目的あるのみ、正義、至誠あるのみ、何ぞ區々爭、己れの赤心を他の腹中に置く能はざるの理あらんや。

第三、淡泊。自ら怪しき我意を作り、之れに閉ぢ籠りて他を疑ひ、好んで沈默を固守するは決して淡泊の人に非ず、斷じて直截を望むべからず。

直截なると、否らざるとは人物をして殆んど風高下せしむ。直截なる人、必ず成功の人なり、德望の人なり、敬愛せらるゝの人なり。然れども吾は直截を修養するに、必ず一方に忘る可からざるの資格を要するを注意せざる可からず。

第一、企圖、發言を輕々しくせず、之れ直截の變じて輕忽に陷るを懼るればなり。

第二、企圖、發言せし事は必ず遂んで責任を負ふ可き事。

吾は直截を學ぶ可きなり、輕忽を懼る可きなり。

十四日　吾は斷乎として言ふ可し、「吾」と「吾が周圍に起り來る境遇」、吾が「前程」に涌き來る事務、係累、連繫」とに就て必ず根柢微微の變化動搖を看破深察せざる可からず、然らざれば吾が命運の冥々の中に決し行くを心付かざる可く、吾が理想、眞正の希望の暗暗の裡に破滅し去るを知らざるに至る事明白なり。

今日吾に如何なる連繫の來り纏はりしか、其の爲め吾に如何なる喜悅と如何なる恐懼とを與へしか。

十四日　右の一條を記し了はりて筆を擱めたり、今は十六日の朝なり、また〻く間に二日

を經過し去りぬ。

＊　＊　＊

今は十六日午後二時前となりぬ。上野圖書館より歸り來りて今机に向つて靜かに筆を下すなり。過ぐる二日は吾に取りては重要の時間と言はざる可からず、吾が此の天地の間に來りたる誕生日と共に記憶し置く可きの日なりとす。十四日を以て吾愈々自由社に入る事に決しぬ。十六日始めて自由社に出づ。社會生活の事務、始めて吾が前に置かれたり。多くの心配は襲來せり、諸〻の悶着は掩來せり、雜多の事實は經驗されたり。

十四日午前早々家を出で金森通倫氏を訪ふ、不在。書生云ふ、近所に行きしなれば直ちに歸宅せんと。吾はムッとせり、又た不在か。吾は直ちに、歸宅せんとせり、然れども、一考したり、爰ぞ「社會」爰ぞ「實際」と。直ちに路を轉じて德富猪一郎氏の病を見舞ふ。

再び金森氏を訪ふ、在宅！

（吾は謬れり、笑ふ可し。笑ふ可し、十四日……以下之れ十三日の事實なり。吾は已に忘却したるなり、十三日の記にはかゝる事を省略し居るなり。抹殺せざるべし。）

マ十四日又金森氏を訪ふ、前日歸宅に際し約し置きたればなり、在宅。書生は吾を客室に導きぬ、室に入る。金森は机にかゝり新聞を讀み居たり、吾をして對坐せしむ、吾も亦た机に向て坐す。默々たり、輕くあいさつを終つて後は、互に一語を吐かず、渠は新聞を讀み讀く、吾も新聞を取りて讀む。默々たり。不快！　不快！と名づく可き一種の惡感情は吾を打てり。

金森、自由新聞を吾に渡して云ふ、此の論說文を讀んで、斧正を試みよ、と。吾は「妙」に感じたり、さり乍ら新聞を受取りたり。讀み下したり。二三字を加へ、一二三行を抹殺せり。突如として申心さゝやいて云ふ、吾は「文章家」に非ずと、申止せり。金森に返して曰ふ、家に非ずと、申止せり。金森は吾が試元より斧正の限りに非ず、と。

みたる二三の斧正を見たり、吾は金森の決して文章を作くる人に非らざるを前以て聞きたるなり。吾は心中不可言の感あり。

兩々相對して默して語らず、金森云ふ、新聞を見られよ、吾は儀式的に三四の新聞をひるがへしたり。投げやりたり。突如として曰く、他の新聞を見て材料を取るが如きは他の新聞に劣る所以也と。金森は應へ云ふ。元よりなり、然かれどもかゝる事はなさず、只だ能く他の新聞を見ざる時は、他の說及び世の形勢を知り難しと、吾は心中冷笑をもらせり。

ア、此の人亦た遂に共に爲すに足らざる乎、去らん去らん。吾は心中、金森に向て云ふ。君、君の助手を得んと思はゞ他に求めよ、文章の器械を得んと思はゞ吾には少しく出來かぬるなりと、吾は云ひ放たんとせり。

金森は立ちて隣室に出たり、吾は決心する所ありたり。金森かへり來るや吾は直ちに渠に向て毅然と問へり。君、『吾を用ゆる乎』と。渠の顏色は極めて曖昧なりき。而も彼の言語は云ふ、君にして入社せんとならば、以上の條件を以てせられよ、余は不同意なりと、卽ち吾をして文章家たらしむるなり。

談話は始まりぬ、一歩より一歩、感情は解かれたり、吾は新聞に對し吾が思ふ所をありのまゝに語り出でぬ。吾の文章家以外の精神、思想は渠少しく了解したりしが如し。大に打ちとけて語り始めぬ。愈々入社に決したり。

共に大に「自由新聞」を新聞として發達せしめ、成長せしめんことを約しぬ。

談一轉して渠の宗教談となりたり、之れ吾が何故に君は宗教界を去りて政治界に入りし

かの問を以て始まりぬ。
渠は全然、政治家風となりぬ、渠は政治家的口調を以て宗教を談ぜり、渠は餘りに宗教を特別視せざるなり。
基督教も佛教も神道も一視同等なりと言へり。
自らの天職は政治界に在りと信ず と言へり。
政治界には單騎獨行の覺悟なかる可からずと言へり、此の時渠は意氣昂然として語りぬ。
大言に似たれども、己れ單騎獨行なん以上は、迚んでは已れ獨り天下の大政を握る位の覺悟なかる可からずと言へり。渠は野心充滿す、渠の眼中今や恐らくは星亭なく、板垣伯なく、河野なかる可し、吾は渠の意氣を愛すると共に、政地界未だ容易に新島先生の求め難きを嘆じたり。
吾今にして思ふ、渠は德の人に非ず、さりとて智の人にも非ず、渠は意氣の人なり、渠は卒直なり、渠は自由黨的也、自由黨は人を得たり、而して遂に人を得ず。
茶菓出でぬ。談愈〻面白くなれり 然かれども吾卒然已に返る、獨語中心、曰く「寄生蟲！」寄生蟲たる勿れ！

▽凡て青年に限らず「社會生活」のたゞ中に立つ者、殆んど寄生蟲ならぬはなし、社會は特色異采を惡み、之れを食ひ去る、之に處する者何時の間にか寄生蟲となり了はる。
凡そ寄生蟲となると、全く社會と苦戰して斃るゝと、其の間には極めて大なる天地のあれども、世界滔々の人、十に八九は寄生蟲となり、まれには社會を憤慨して、反て己を焦く者あり。
大悟徹底、能くかの天地に逍遙する者に至りては少なし、ア、果して彼の天地に逍遙し得べき乎、未だ容易に能はざるなり、而も猛省自誡、務め勉めて止まずんば豈に天眞と理想とを殺し、希望と平和とを失はんや、天眞、理想、希望、平和、吾れ之れに由つて生き、吾れ之に由つて樂しむ。

海外月報の事を語り出づ、渠大に贊成し、色々考案を回らす、兎も角も近日丁氏等と相集りて相談するに決す。明日より出社する事に極め歸宅したり。今井氏在り。
夜丁氏來る、「自由」の發行停止を報ず！ 何等の不運！

十五日 朝、丁氏より書來る、曰く金森より今日自由社に出席ありたき旨報じ來りたり、十時頃より同道す可しと。
十五日。十時。
勿て吾れ自由社に出席す、元より停止中故社員の來り居る可き筈なし。

今は詳細に事實を記載せざる可し、只だ愈〻海外評論を出す事に決す。其の爲め金森は吾に明日上野圖書館に行く可きを託す。
十六日 今朝今井氏來る、共に上野に行く。

▽社會は忍耐を要す。
▽社會は已に吾を擒にしたる心地す。
▽吾は眞面目に仕事を勉む可し、社會事務と雖も決して遊戯に非ず、社會の事務と雖も「時間」を費すなり。
▽吾は昨日吾を嘲笑せり、然かれども嘲笑は僅全の德に非ず、堅く希望に立つ人の爲さゞる所なるを知りたり。
▽「時」は生命なりとの感情は吾より消え去りたり。「時」は最早吾に取りて智慧の支配に屬しぬ。天來のインスピレーションたりし時は經過し去りぬ、之を思ふ時は心靈

の寒きを感じ、社會の魔力の戰慄すべきを知り、讀書の一時も廢す可からざるを悟るなり。
▽人生、宇宙、人類、働、義務、存亡、自然、美、永遠の生命、是等は凡て吾が感情より消え去りて、新聞、雜誌、應接、金錢、……此等の者は稍〻口頭に上り、多く智慧と感情を支配する樣になりぬ。
▽社會の魔力若し吾を擒にし了はるを悟らば斷然、一卷を懷ろにして、七週日の旅行に上る可しと考へぬ。
▽然かれども擒へられたる者は悟る事なし、ア、悲しい哉。

＊　＊　＊　＊

▽吾の行爲、思想、感情は注意して研究せざる可からず、之れ一個のソールが其の特別なる傳記を作りつゝある者なればなり、汝は詩人のドラマを讀むか、小說を讀むか、傳記を讀むか、汝は汝のドラマ、汝自身の傳記を讀まざる乎。
汝若し心を平にし、情を高くし、眼を明らかにし、以て汝の日々の變化を研究せば、汝は大なる讀書を爲したる也。
エマーソン曰く、渠は渠れ自らの思想には、不注意無頓着なり、何となれば渠れの思想なればなりと。
吾は人間なり。
此の人間が過去には、過去の教育、情實、境遇、經驗を有し、未來には未來の希望、一弦一弛、一退一減、忽ちにして俗骨となる、其外部の事實、內部の事實、如何に大なる詩ぞ！

＊　＊　＊　＊

已に吾れ自由社に入る以上は、政黨員と知らざる可からず、紛々の輩と伴はざる可からず、吾れ人を化するか、人吾を化するか、人は人、吾は吾乎。
三者必ず其の一たる可し、吾半ば人を化し、人半は吾を化す、吾死したるなり。吾の人に全く同化せらるゝに至りては、之れ眞理の大罪人なり、之れ理想の大罪人なり。
吾、人を化す乎、神の助けを求め、自信に由り、エマーソン、カーライル、ゲーテ、ウォールズウ、ルス、孔、王等の諸賢の助けに由り、斷乎、昂乎、堂々焉、正々焉、以て彼等を征服し盡す可きなり、討死す可きなり。
せめては、吾、吾の生命あらしめよ。

吾、事務、事業、政策の爲めに、策を立つる應に堂々、正々たる可し。

＊　＊　＊　＊

十七日 靜に机に對して書を繙かんとす。不思議なる哉、一種の壓力は何處よりか、侵し來りて吾を壓するが如し。吾が心落付く能はず、吾が情は悠靜なる能はず、曾て食を忘れて愛讀し、涙を呑んで愛讀したる聖經も、只だ吾が眼前に其の文字を羅列するに止まり、冷やかなる意義は只だ吾が心の表面をかすりて空々の中に同去るなり。ア、之れ何故ぞや、吾を壓する力ありとせば何者ぞや、吾は靜に考究せり。
蓋し吾が爲す可しとて約束を重ねたる社會の事務、吾が心に企て置ける計畫、一反び打たれたる社會生活の魔力。
此等の者は吾が精神の上に懸りて容易に之れを掃ふ能はず、忘れしが如く、忘る能はざるが如く、掃ひしが如く、掃ふ能はざるが如く、吾を不安、不快の境に陷れ、苦るしき牢獄の中に在るの思あらしむるに至る。
王陽明、詩あり。久落二混途一惹二世情一紫龍丹竈是平生、と。ア、社會々々、一に吾をし

て蹴ら渉し蒙り朝夕の中に達はしむるなり。

十八　事頭蛇尾に一に自滅す。

吾れに自信あらば、吾に宜しき機、克己の堅志、冷靜なる意志、迅往勇行の氣なからむや。

此等の者なくして自信ありとなすは自ら欺くの者也。自ら知らざる者也。吾は自然の兒なり。

吾に理想信仰あり。

吾に事業あり。

吾は一個人間なり。

エメルソンの自信論の初めに一詩を引く、左の如し、

Man is his own star; and the soul that can

Render an honest and a perfect man

Commands all light, all influence, all fate;

Nothing to him falls early or too late.

吾が自信は將に此の如くならず、故に若し向後吾れに怠惰の行あり、吾れに寛容の態度なく、吾れに克己の念薄く、吾れに冷靜の意忘なく、事業に常なり、目的に常なり、事務に常なりて、敵に行

（298）

動、往事に氣を缺かば、之れ吾れ自ら吾れの理想信仰をなみしたるなり、吾れは社会の罪人たるなり、人間の靈を殺したる也、一言以て言へば自殺したるなり。

* * *

電報来る。

自由社より、日は「カイテイスグコイ」（後に直ぐ来い）

十九日　十七、十八怒濤に經過し、十九日も今は早や十時の深夜なり。いでやこの三日間に於ける吾が生命の權利記事を評定し、十七日午前減晋す。久しぶりにて減晋す、悲い、歎は吾れは我れに解せられず、時間のみ無駄過して何事も得る能はざりしことを殘念なれ、エファーソンの「自信論」を少しく讀む。終する所あり、午後小雨來る、雨を突いて神戸田なる引頭百太氏を訪ふ、瀧尾氏、水谷氏來る、伴うて無名氏と稱する客船に乗り、女義太夫を聽く。船客甚しきを以て引頭氏に稱す、引頭氏と新嘗の感して夜の更くるを忘れる。

十八日午後引頭氏に、水谷氏來る。今、井氏、敗北二、三人兵に來り、性減す、正午今、井氏、敗北二、三人を伴うて歸宅す。

實驗飯を了へ將に所、神戸田に行く、水谷を引頭氏に紹介す、引頭氏

（299）

氏等を助けて一番年少女優十六歳後を正しを試み、みんとし出でんとするに際し、自由社より電信来り、自由社に付て至急出社せよ、直ちに出社す。社長は諸氏に紹介せらる。女子等も一盞を作り、別に丁氏を訪ふ。

路に就く、路に堺港男女を訪ひ、快談數時にして歸る、歸れは將に十一時を過ぐ。

今朝令井氏来る、酒を少す、午後、親戚を誘む。

記し来りて自らの表面的馬鹿げたる事に驚く、ア、吾れは實に明瞭に内なる吾れの生命を記する能はざる也。

ア、可憐の肚裏何ぞ徒らに憂ひまこひて踏躇すること、何ぞ直後に解を新の事を振はざる。吾が生命が或る心一つの掃きめて悲壮なる靡あり。曰く、御元は或る治的になりしか、と、

ア、吾れ誠に此の問を解する能はざる也、しかも何ぞ所あり か、此の問は吾が心を打ち來るなり、或る治的、或る治的、此れ何の意ぞ、吾れは明らかに或る界に向て其の來の生命を保へんとするの決心なら ずや、果して然るか、果してて然るか、然り然り元より然りと吾れは或る治的とし、（ア、果して然るか）然らば或る治的とな元より可ならずや。斷じて然らず。吾は宇宙的、吾は理想的なり、吾は宇宙的理想的、吾は宇宙的理想的、

（298）

に由て或る界に立たんと欲す、我國政たるに自由なる政治たらしめ我國民をして眞に理想に由て立つの國民たらしめんとするに在り、吾が政治界に立つ之れに由るなり、決して政治的、即ち野心的、名利的、肉慾的ならざる也。

然れど吾の精神は且つ安ずる能はざるを感ずる。吾は、吾の進に後者たらんとする希望と衝突せんことなり。

吾れは斷じて傳道者たる文学者の上に、大に新文管に行者たる政治家たるの希望を抱き、大に希へばなり。

（299）

希、決は宇宙、眞、美、妙、人生、生命、存在等に、吾が思想の繁から んことを希ひ、一に、吾は、管、決、吾が、此生命の進歩に益あらんことを希へばなり。

己れの命運の非なるを悔んとす、吾は而も引き讀は燈れむ可き男なり、吾れ吾を思ふ毎に同の、情の念禁ずる能はず、吾に父母なし、吾に妻子なし、吾に親戚あらず、吾は社会に、一変し能はざる感情を有す、吾は社会を根本みんとす、吾は而も

（298）

の、もし、親戚あらず、吾は社会に、一変し能はざる感情を有す、吾は社会を根本みんとす、吾は而も

（299）

に由て政界に立たんと欲す、吾れの事業は革命新政治の國政たるに在るなり、我國政たるに自由なる政治たらしめ我國民をして眞に理想に由て立つの國民たらしめ、我國運をして世界人類の進歩の魁たらしめんとするに在り、吾が政治界に立つ之れに由るなり、決して政治的、即ち野心的、名利的、肉慾的ならざる也。

吾は、吾の進に後者たらんとする希望と衝突せんことなり。

管に吾れは斷じて傳道者たる文学者の上に、大に新文管に行者たる政治家たるの希望を抱き、大に希へばなり。ア、吾れ、之れ非望なるか、而しかも之れ希望なり、宇宙、眞、美、妙、人生、生命、存在等に、決、吾が思想の繁からんことを希ひ、一に、吾は、管、行者として此生命の進歩に益あらんことを希へばなり。

引頭氏は燈れむ可き男なり、吾れ吾を思ふ毎に同の、情の念禁ずる能はず、吾に父母なし、吾に妻子なし、吾に親戚あらず、吾は社会に、一変し能はざる感情を有す、吾は社会を根本みんとす、吾は而も己れの命運の非なるを悔んとす、吾は而も

（298）

に吾れ新政治家の責任の一として一忍耐を加へたる而も實際に、吾れ今にして始めて凝峰兄が少年時代の實を在た中をきとれり。凝峰は理想の人なり、而も實際

（299）

に在るなり、我國政たるに自由なる政治たらしめ我國民をして眞に理想に由て立つの國民たらしめ、我國運をして世界人類の進歩の魁たらしめんとするに在り、吾が政治界に立つ之れに由るなり、決して政治的、即ち野心的、名利的、肉慾的ならざる也。

吾は、吾の進に後者たらんとする希望と衝突せんことなり。

管に吾れは斷じて傳道者たる文学者の上に、大に新文管に行者たる政治家たるの希望を抱き、大に希へばなり。ア、吾れ、之れ非望なるか、而しかも之れ

（299）

極めて正なり、吾れは愛を極み、之れをたすけざる可からず。

金を森はず、人、然と吾れを自由社員に紹介せり。吾れは或ちに看破せり、愛は自由社に就いて今權を行すと稱すと雖も、一個の吾れを入るゝにかく迂闊に紹介するを見れば、由、黨の如何に情實多きかを知るなり、吾れは自由黨たらざる者の、年少有爲の政治家を出す能はざるを知るなり。

吾れは急進黨、理想的新黨の起らざる以上は、現今の政黨、黨も此のまゝにては遂に吾が國を知りたるを知りたり、彼れ等政黨員の間には我れ自信、倫理本位國民が有せざるべからざる道德、即ち自信、倫理の道德を信じ、約束、勞働、實行、而して自信の道德を信じざるに、愛等が政治的目的を開拓する能はざるなり、

一新した面目を開拓する能はざるなり。

自由黨者の自由黨が極めて從順なる如く、自由黨なる政黨たるを知らず、ミルトンを知らず、ルソーを讀まず、ニーゴーを讀まずして社會問題を解かんとするの愚なり、故に

（298）

己れの命運の非なるを悔んとす、吾は而も

（299）

民を只だ法律權利法に由て取り扱ふの他を知らざるなり。愛等はそれにてもよし、終はれど も自に本位國民は今一層深き何ぞ大の政治家を望まざる可からず。

愛等の愛國は愛國を愛國するなり、愛等は民を只だ法律權利法に由て取り扱ふの他を知らざるなり。愛等はそれにてもよし、終はれど

（298）

他に罪なかる可し、決して激情以て誤る勿れ。

* * *

政黨重なる人物相手五の國家は如何。

政黨的力の質と相手は如何。

政黨員等の質と價値、質と感情、質と面目は如何。

現今政黨の質と相手は遂に如何。

* * *

其れが如何にあるとも吾れの愛、正、善の事あらんや、吾れは斷じ手が理想に由て行くのみ。

* * *

何ぞ

（299）

人民未來黨員等とは成る可く交を絶ち、罪を刀直入、首領先生を突く可し。今より數ヶ月は極め て忍耐を主とし、冷靜なる、眞、誠を試みるの外に以て誤る勿れ。

* * *

の人なり、吾も亦理想の人なり、而して始めて實際に入り少しく實際を知りたり、茲に於て始めて忍耐の必要なるを知り、革新の事業は時を以て收穫すべきを知りたり、決して息む可からず、決して疲るべからず、決して失望すべからず、斃れて後ち止むの覺悟あらば可なり。

昨夜、終日の奔走に疲れ、自由社より歸り、半夜机に倚て冥想沈思す。

四隣寂々、夜靜に沈々、忽ち暗香の鼻を打つあり、頭を擡ぐれば水入れに挿むに梅枝の一小枝を以てす、一輪の開花あり、之れ乃ち今朝今井氏が持參しくれたるなり、清香馥郁、吾心恍惚、俗情の一時に洗滌せられて直ちに自然幽靜の境に到るの思ありたり、吾今迄で梅香を嗅ぐ元より數ふるに遑あらず、然れども未だ嘗てかく迄に微妙なる清香を知らざりし也。ア、多謝す、吾猶ほ死せず一片の梅輪、一抹の清香、人間の道遙す可き大天地を抱藏するを覺ゆ。

二十日は過ぎぬ。今や二十一日午前一時前なり、吾今日、一日の事を回顧研究す可し。朝起き出でゝ金森酒倫を麻布に訪ふ。渠と懇談するは此度を以て三回とす。

種々の談話は試みられたり。自由黨の性質論となれり。吾は其の黨弊の多きを說き、今のまゝにて推し進まば自由黨の發達す可からざるを說けり。渠は贊成せり。然れども言ふ。自由黨國より寡弊、情實ありと雖も、他の黨派より言ふ時は寧ろ少なしと。其より人物論となれり、星亨を以て渠は有望の政治家と言へり。

色々議論は上下されぬ。

歸宅して晝飯を了へ、直ちに自由社に出社す。只だ二三の文章を作りしのみ。碌々なすなく午日を經過しぬ。日暮れて歸路に就く。阿部充家氏を訪ふ、不在。神田にめぐり、引頭氏を訪ふ。蓋し「青年文學」第十六號の本日發兌せられたるを以て、一見の情切なりしを以てなり。已に横澤源三郎其他一名客あり。不知の客と吾との間に、一場の議論は起れり。これ「亞細亞」と「國民之友」とのよし惡し、すき、きらひの論なりし也。引頭は之れを止めたり。乃ち又た吾と引頭との間に爭論始まりたり。十二時過ぎ歸宅して、以上直ちに事實を並ぶ。

吾。何となく悲痛の感あり。讀書の時間なければなり、以て高想崗情の日に消滅するが如きを覺ゆればなり。然るに是か非か、此の悲痛を苦もなく打消して、意志の酩烈たるに至りしを覺ゆるなり。

マアいい此の青年の命運。日月は用捨なく最後に伴ひ行く此の青年。渠の命運は遂に如何。

ア、吾今にして大八の安心の容易に窺ひ一世を推倒するは則ちよし。輕がるしく爭氣ある可からず。謹じて注意せよ。言ふ可しと信じたる時は堂々言ふ可し。但し成る可く默す可し。談ず可し、爭議す可からず。

談話。則ち未知の社會先達を訪うて談話す。吾れ其の利益を思はざりしに非ず。此の頃始めて殊に其の利益の非常なるを悟りたり。社會則ち、エマーソンが所謂ゆる青年の目前には、謎語の如く見え、岩石の如く見ゆる社會運行の、暗運默移する處を知るを得るなり。何となれば、彼等は社會運行の中心なればなり。

鄙きを知りたり。吾等も嘗ては青年なりしも也。大望燃ゆるが如かりし也、而も後遂に只だ天職に殉じて滿足するの消息を知り得たり。

漫りに悲むは止めよ。斷々乎たるべし。斃れて後止む可き也。革新的大精神、理想信仰を失うて尙生んことを望むの吾に非ざる也。

眠らねばならぬ乎。眠むるは暫時死するなり。死乎々々吾一時も休息を欲せずと雖も、遂に幾時かの眠を取らねばならぬ乎。疲たり、疲たり。

マ猶哭々も記し置かん。經驗は之を明證す。讀書を廢す之れ自殺する也。

二十一日　午前八時に目醒む。今井氏來る。理髮す。半日は忽然として過ぐ。時間は空過せり。然れども吾思ふ、人間が生活する時間に二樣あり。則ち外面の時間及び內部の時間なり。若し夫れ徒らに道を行く、馬鹿氣たる如きも、之れ外面なり。其の思想若し有益有用に働かば、其の時間は必ずしも空過にあらず。ゆゑに時間を惜しむと云ふ事は、馬鹿げたる事を思はざることゝ知るべし。

吾は人間修養の極めて難きを知りたり。何となれば、今日かくせざる可からざるを考へし事と、昨日かくなす可しと思ひし事と、容易に調和する能はず。所謂大人聖者英傑なる者は、此の調和の圓滿なるを謂ふには非ざらんや。一世を推倒する慨なかる可からずと信ずるの傍、輕忽爭氣なる可からずと言はざる可からず。徒らに憂愁に陷る勿れと自誡するの傍、決して俗化する勿れと誡めざる可からず。修養も亦た難い哉。

午、從半日を新聞社の樓上に經過す。一文を草せずして歸宅。然らば何を爾はなしたる乎。まさか無益に費さゞりしなる可し。

「知る」知ると云ふ事は尤も注意深くして獲敏なる人にあらずんば能はず、「知る」人は卓絕の人なり。思想の人には不用なる如きも然らず。圓滿なる思想家は、其の頭腦に尤も多くの事實を蓄ふ。渠は只だ能く之を消化し了るのみ、格に新聞記者を識とする人には「知る」正確「知る」明了に知る」詳細に知る」等の資格は、最大の資格なる事明也。「知る」何んでもなきが如きも、なか〳〵「知る」人は少なし。

* * *

「新聞記者を職とする人」此等の文字が何の苦痛もなく、吾が議上に記せらるゝに至りては、吾が內部の變化を見るに足るなり。渠は「職業」てふ事を思うて自由社に入る事を決心せりと二月五日の記には記すれども、尙渠は「非社會的生活」の情に充たされし也。

不思議なる哉。渠が二十日に足らぬ、「實際」は何時の間にやら感情までも「新聞記者たる職業」を是認するに至りぬ。是れ渠の進歩か、墮落か。進歩と云ふ勿れ。墮落とも云ふ勿れ。渠は決して「絕對の自由」を有せざるなり。渠が四五ケ月以前に、一度び熱歸せる大インスピレーションは、固より非常なる「結果」を渠の精神生命の上に及ぼしぬ。今去、ア、今日は渠の胸裡已に當時の猛火なし。只だ猛火に由て根本の汚穢をやき捨てられたる渠の醇良敢爲の精神をあますのみ。然れども見よ、渠若し讀書沈思を廢して、多時を此の紛々の社會に染まりなば、渠は忽然「尤も窮」の渠よりも腐敗すべきを、吾明記し置かん。吾明記し置かん。渠が此の記を讀んで冷

笑する時は、腐敗の極自ら悟らざる程に至りし也。

* * * *

絶對の自由を有せず。社會及び境遇は渠を記者とならしめぬ。

「行」吾は色々の事を企圖し、思ひ付くと雖も實行せざる也。實行しもせぬくせに、自ら安じ居るに似たり。實行せざる黒付きは空想と稱し、又た妄想と稱す。若し空想妄想の中に生活して自ら知らずんば、意外の失望苦痛を來たさん。故に能く「實行」と「思付」との境界を立て置き、時々點檢す可し。思付くのみにて實行なくんば、思付かぬ方却て健全的なり。其は失望の苦痛なければなり。右の故を以て吾は「思付き、及び企圖」てふ帳簿を作り置き、書き止め置きて、着々其實行をば一より二と期成し進むことゝなしたり。之れ亦た、思付き、必ず實行せよ。實行し能はずんば、已に何事も實行は出來ぬ者と斷定して可なり。

一には天下の形勢を知る爲め、二には新聞記者として必要なる資格を作らん爲め「世事記」を作る、則ち出社中、時間のひまを以て各新聞を讀了し重なる記事を「記憶消化」せしむる爲め批評論評するなり。今日より實行す。

「買求志」買求志とは、自ら買求せんと欲する物多くあれども、金錢の不自由なる爲め、其の思付きたる節直ちに買求する能はざるが故に一の帳簿を作り置き、此の物は是非買たしと思ひたる時は、其の名と代價とを書き付け置き、金錢の融通の付きたる節漸次に其の最急なる者より求むるなり。一には遺忘せざる爲めに、二には貯蓄心の起る爲め。

吾、しば〳〵苦みたる末、終にこれを思ひ付く。想ふに、金錢を節用し、細濟の事に注意を增さしめ、品物享有の幸福を完うする等には必ず效ある可し。人々に勸むる考なり。

吾の企圖記念少なきに非らざるも、實行の完全なる者は未だ容易に見ざるなり。吾のみならず、世の人々多くは然らん。依つて吾れ企圖書中より、先づ最急の者二三を定め、實行と成功を期し、滿足を見たる上にて他に進む可し。

二十二日。

悲哉。吾と理想との聯絡は絶えたり。吾が理想々々と呼ぶ間に、理想は何處にか消え去れり。

嗚呼是れ何等の言ぞ。咄々！　咄！　爾自ら俗情を動かし、俗念に耽り乍ら、窃かに慨む處あるは何等の俗物！　ア、爾は俗物なるぞ。俗物！　俗物！　渠の意志なき也。爾には已れなきなり。爾には信仰なきなり。爾には理想なきなり。爾には斷じて自信なきなり。若し果して自信あり堅固なる理想信仰ありとせば、何んぞ意志の力の弱きぞ。

ア、廳に斷々乎たる可し。女々しかる勿れ。讀む可しと爲せし時は、一心不亂に讀む可し。爲す可しと爲す時は、正々堂々たる可し。意志々々々々、爾には堅猛の意志なし。故に動もすれば、自ら悲み自ら悶がく。爾は自ら言はずや『剛かに悲み、强く樂しみ、因く行ひ、休まず勉め徐かに急ぎ、以て天命を信ず』と、ア、忘たるか、忘たるか。（二十三日午前）

二十三日、

吾の外部の傳記には、異なれる事少しもなし。午後自由社に出席して、各新聞を精讀し

「世事記」を作り、薄暮新月を仰いでしを〳〵と歸宅せしのみ。

乍去、黒想の上には大に注意す可き波動ありたり。左に錄して後日の自誡となし、猛省の資となさん。

吾が實際社會に入りし以來日數は幾何も經ざれども心を苦めし事は蓋し非常なり、何故に苦心せし乎、吾は何時の間にか一の病にかゝり居りし也、則ちエゴイズムの之れなり、吾は理想々々と呼びしも其の實エゴイズムの絶頂なりし也。理想則ち吾にあらずして、「我」は其の「我」を裝ふに理想の口實を以てしたる也。然り公平に評する時は、其の餘りに社會を慣れたるが爲めに醇・良・温・雅の情は社會に對する猜疑の執念にかき破られたり、已に醇良温雅の情に乏し、何とて健全なる理想の大信仰ある可き、玆に於てか、「我」と「他」との外に人間道義の眞善美の天地あるを忘るゝに到りし也。

われは是より益々此病を慣れざる可からず、若し吾此の病に罹りて自ら苦死せんか、之れ社會を慣れて社會に捕られたる也。

理想――成程吾には理想あるなり、此の世は實の世にして決して夢の世に非ず、神は存在す、、、、、、、、、、、、、、、、今書かずもよし、兎も角も、理想の人間、理想の國家、理想の社會、これ等の事を十分考究して記憶し居る可し。

然る時は、反省するに惑ふ事少ならん。

決して悲哀寂寞の思ひ有る可からず。吾卒然、寂寞の感に堪へぬ事あり、天地殆んど吾に取りて氷洲の如き感あり。

今日も亦た、獨り自由社の一室に沈思に陷りて、屋外は所謂、銀座街頭、吾が居る處は新聞社なりしにもかゝはらず、實に天地の寂寞、吾の孤獨なる感に打たれたり。然る時、忽然、故郷の父母を思ひ起したり、殊に母の顔容のあり〳〵と目前に浮び出でたり、オ、哀れの母よ！　慕はしき母！　故郷に母あり秋風の涙の句、悠然として現はれ來たり、つぐに一滴の暗涙を以てせり。吾れの凍れる胸は急に愛の微光をしたゝめぬ。母愛すべく、父愛すべく、弟愛すべく、友愛すべく、人々皆愛す可く、天地山川皆愛す可き感情は泉の如く涌き來たれり、吾は吾の全く非なるを悔りたり。此世は愛なり、愛は溫なり、エゴイズムは猜疑なり、煩悶なり、寂寞なり。

右の如き感情は以前には吾が胸に燃えたりし也、只だ、近日、之を失ひたる也、而て今日之れを復活せしめたる也。

愛なる哉、愛なる哉、ア、愛なる哉、一語の加ふ可きなし、悠々千古の心、默、默、嘿、嘿、無かる可し。

マ老子、孔子に謂て曰く子の驕氣と多慾と態色と淫志とを去れと、ア、自ら已に「公共」の事務に當るを決心しながら、克己の念弱く驕氣と多慾と態色と淫志とを去る能はず、堅く人間たる理想の上に立つ能はずんば何を以て公共に盡さん、知らずや公共に盡す所以は吾が理想を世に行ひ世を救はん爲なるを、然るに自ら理想に立つ能はず何を以て世を導かん。何を以て人を救はん、勉めよや勵めよや、決して惰氣ある可からず。

吾、夜深うして蘇峰君の「快樂」を讀む、曰く、

意志一たび定まれば、千萬丈の波濤も撼かす

能はず、分に應じて、祿に隨ひ、物として適意ならざるはなし。云々。曰く、心、主動的となれば、物に於て役せらるゝ所なし、富貴壽夭我に於て何かあらん、云々。曰く、

故に君子は己を修むるに孜々たり。

* * * * * * *

吾未だ能く右の如くなる能はずと雖も、近日の苦心は全く此の修養を逢げん爲めに外ならず、故に今此等の語を讀んで一しほの眞味を覺ゆ、ア、蘇峰氏は吾師友なる哉。

* * * * * * *

社會事務を盡すに當りて、亂雜、不規則、怠惰、臆病なる可からず、若し然らば汝の理想も何の用あらんや。

「社會事務」は自信を以て爲さる可き者なり、勞作を以て爲さる可き者也。

吾は先づ一個の人間たる可きなり、常に人間たる可し。

吾の心裡に一の聲あり曰く、汝の修養はよし。意志を固くし、悲悶を排ひ、悠々乎優々乎、理想の上に立たんと欲するはよし、然かれども其の悲哀を排はんと欲するの極、涙なく情なく只だ社會的意志のみの人と化し了するの懼なき乎と。——答て曰はん、然らず然らず、決して懼る勿れ、夫れ悲哀に二ツあり、一は「我」より出で一は「神」より來る、「我」より出づる者之れ毒梟なり、飲む者は悶死し、「神」より來る者はウォルズウォルスの所謂ゆる The still, sad music of humanity にして其の音や、清く、高く、遠く、幽靜なり、心の清き者に非らざれば聞く能はず、能く之れを聞く者は理想の人たり——則ち愛と誠と勞作の人たり、已に然り豈に煩悶あらんや、天命を信じて事業に驀る。クリストの如き之れなり、ウォルズウォルスの如き、皆然り、固より涙あり、情あるなり、同胞人間の爲めに、神の爲めに心の最底より涌き來るなり、「我」より出づる悲悶は神の罰也。

二十四日。

凡そ事漫然、漠然たる可からず、必ず明晰なる智識を組織し、貫きて其の範圍分量を判然せしめざる可からず、然らざる時は不意の失敗をとる事あるべし、何となれば、己れ自ら眞實に己を知らざるの誤あればなり。

二十五日　筆を執る、時將に午前十一時半。二十四日の事實を記さん、午後新聞社に出席す、社用を帶びて車を馳はして赤坂なる德富猪一郎兄を訪ふ。護し、山田武甫氏死去に付て、其の傳記を自由紙上に掲載せんとて、氏が詠歌の德富氏のもとに集り居るを知り、吾之れを寫し取らんとてなり。元とより猪一郎氏の病床に在るを知るがゆゑに氏に面會するの意はなかりし也、然かれども計らず其の病床に近くを得て親しく談ずるを得たる吾に取りて如何許りかうれしかりしぞ、前夜は氏の「快樂」を讀み、大に感得する處ありたる事なれば、吾に取りて氏は其だなつかしかりし也、左の四首を寫し取りて歸社す。

人力車
乘るも人ひくも人なりうき世をばめぐる車にうへしたはなし

庭櫻
玉はゝき手にもつからにいかにせむ庭の櫻のちりはじめては

題なし
こゝろのみいそぎけるかな花見んと乘りし車は行としもなし

德富君の東京に居をうつさるゝとて籏の内てふ梅の鉢植を送られたれば
あらはれぬふかきこゝろぞしられたるみすのなかなる梅のにほひに

衰弱せる德富君が其の細き〳〵聲を以て山

田翁の事を語り聞かす、吾に取りて如何に悲哀の感深かりしぞ。

此の夜左の文を綴り以て自誡となす。題して自動的、受動的と云ふ。自動的なると受動的なるとは極めて微妙なる心理作用に由りて分かるゝと雖も、已に分かるゝ以上は其の差は又た非常なり、蘇峰云ふ、心、自動的となるときは物に沒せらるゝ事なしと。

然かれども自動的なる決して容易の事に非ず、意志、堅猛ならずんば心必ず受動的に働く、心一度び受動的に働く、則ち齷齪、促々、勃々、徒らに自ら苦しんで而も道に於て得る所なく、其の事を爲すは砂上に家を建つるが如し。

其の飛ぶや急激なる如く、其の走るや常る可からざる如くなるも、疲る、倒る、否な時としては以前よりも幾倍の勢を以て彈ね反る。

自信ある者は決して受動的ならず、信仰ある者は決して受動的ならず、天職を知り天命を知る者は決して受動的ならず、自動的の人は餘裕あり、寛容あり、緩しむ可く、侮す可く、信ず可く、任ず可き男子なり。自動的の人は積極的に事を務め、受動的の人は消極的に事に當る。

徳を建て、事を成す者、必ず自動的なり。

自動的の人は天に對し責任を信ず、其信ずるや必ず强く且つ固し。自動的の人は其事業職分の前には水火を厭れざる也、白刃を蹈む も忌避する所なし、鬱れて後ち止むは實に自動的の人にして始めて之を見る。一言以て之を盡せば自動的の人は、自ら務め自ら進んで天來のインスピレーションを感得するの人なり、一度び感得して失はざるの人也。

二十六日　日曜日。

自ら信じ自ら悟り自ら、猶ほ堅く意志の力に據る能はず、强く理想の上に立つ能はざるを見る時は、人間の實に弱き者なることを知り聖賢の決して及び易からず、德の容易に建て難く事業の輕がろしく成り難きを感ぜずんばあらず、吾想うて玆に至る無限の憤涙に堪へぬなり、ア、吾遂に完全圓滿なる人間となり能はざるか、思ふに決して然らず、孜々として已を修め、盡きざる熱心を以て精神を鍛練して一日片時も或はおこたるなくんば、蝸牛遂に富士山頂に達するの日なしとせんや、否、否、其の日必ずしも前程に求む可けんや、只だ吾の一日を能く堅志硬行に費すを得て、仰で天に怍ぢず、俯して地に愧ぢず、顧て神明に對し、分に應ずるの嘉賞を感得し得れば卽ち足れり。

ア、妄想に走る勿れ、空望に焦がるゝ勿れ、只だ只だ、愛の人たり、誠の人たり、勞作の人たり、以て其の職分を盡すを思へ、吾の强めて熄なきを求むる只だ堅志硬行のみ、ア、堅志硬行のみ。

昨日如何に苦しかりしぞ、之れ只だ薄志弱行の報酬のみ、嗚、薄志弱行を感ずる時は決して自ら自暴自棄の悲傷に陷る勿れ、之れ則ち薄志弱行の最なる者なるぞ、かゝる時は意志の力も强し、空想を去り、空望を去り、飄然天眞にかへり、深く自ら悔ゆべし。

空想、空望、虛望、虛想、誠む可し誠む可し。

ア、一個、なすなきの青年、其の十年の後は如何、二十年の後は如何、百年の後は如何、人間の意味遂に此の青年には解すべからざる

か、否！　否！　否、十年の後を見よ、百年の後を見よ、千年の後を見よ。

今朝聖書を讀む。句あり、

なんぢ我より學びしところ聞きしところ見しところを皆おこなへ、然らば平安の神爾曹と偕ならん。（腓立比第四章九）

われ貧賤に居るの道を知りまた富厚に居るの道をしり、飽ことも飢うることも豫ことも歉ことも諸〻の一事に於て我之を熟練せり。我は我に力を與ふるキリストに因て諸の事を爲し得るなり。同十二、十三）

▽おこなへば則ち平安の神われと共にあり、心境、心術、心氣、皆な熟練を以てなし得べく、事を爲すの力をキリストより受くるの信仰あり、ポーロのポーロなる處、ポーロの教、ポーロの精神、大に學ぶ可く大に味ふ可し。

殊に熟練の文字大に味あり、固疾の膏肓に入るや容易に拔く可からず、容易に拔く可からずと雖も堅志硬行、孤めて熄むなくんば自然に道に合ふの時なからんや、熟練の文字大に味あり、堅志硬行ん乎して始めて其が眞味を知るを得んか。

昨朝今井兄より晩餐の案内狀來る、蓋し、今井兄この度び日出度く代言人試驗に及第して愈〻代言人となるを祝さるゝなり、兄の師なる井上正一博士主人となりて祝宴を開かるるなり。

今午後六時頃より井上博士今井兄を主人として客は吾、水谷兄松崎兄其他二名都合七名、西洋料理に至る。

松崎氏は舊山口中學校以來の朋友なり、昨年帝國大學に來る、今夜始めて再會せし也。

▽天は勉强する人には、勉强せざる人の到底想像だにもなし能はざる利益と、快樂と嘉賞を與ふ。

▽人は境遇と交友とに由りて、知らずとも よき事まで知り、感得す可からざる事までも感得す、大に慣む所なかる可からず。

二十七日。

時〻刻〻、何を思ひ、何を考ふるか、内なる我、眞實の吾は之れに由て判ずるを得べし、公平に反省し來れ果して内なる闇、眞實の闇は闇の理想に過ふや否や、――ア、思うて玆に至る大人聖者の益々企て離きを知るなり。

明治廿六年三月

▽今は三月一日の朝也、昨日來の吾は如何なりしぞ、思うて玆に至る憤涙に堪へず、ア、殆んど吾が心裡の形容に苦しむなり。

忽にして不平、忽にして慚愧、忽にして怨恨、忽にして痛嘆――ア、社會は吾を毒殺せり、一に何ぞ吾の衰ふる斯く迄でに甚だしきぞ。社會は人間を化して「我」とならしむるなり、天來の青年を捕へて氣衰へ神餒ゑ、靈の生命死して、肉情俗念の中に投ずる也。

ア、然かれども然れども靜に顧みて、偏に吾が刻苦勵精の乏しきを悟る。

堅く理想に立つの意志眞とに薄弱なるを知り、實に古の聖賢に對し、自然の宇宙に對し眞理に對し上帝に對し、慚愧赤面に堪へざる也。

今夜自由社より直ちに我が所謂會に出席し、祈りて曰く、社會生活の魔力より救ひ給へ、根本に歸りて念々神を忘れざる樣守ら

せ給へ、兄弟姉妹赤たしかあらせ給へ、天になる御心を地にならしむる事に付て、少しにても力を盡す事を得さしめ給へ、アーメン。

社會生活の魔力に打たれ榮辱得喪の餌食となりたらんか、已に靈の眼閉ぢたる也。事物に接して皮相の外、見る能はず、自然に到して最早や其の深底の美も、眞も看得する能はざるに至る、悲まざる可けんや。人が最も誤まるものは、「社會生活」に對し知らず知らず墮落し行く也。終に一生を棄げて榮辱得喪の餌食となり了るにあり。得意の前には腐敗し、不如意の前に世を恨み人を怨らむ、殊に青年の誡む可き事なり。

「佛國革命史」を七十五錢に、「高杉東行詩文集」を十六錢に購求す。

吾は深く自らの空々無々なりしを悟る。豫言する、何を豫言する。働く、何を働く。造僞する、何を造僞する。――爾に告ぐ、先づ自ら造れ、建てんと欲せば、先づ自らを建てよ。

二日　夜。深更謹で左の記を作る。

吾れ希くば誤を再びせざらんことを、吾れ誤てり。吾は女々敵も哀み泣けり。得喪の餌となりたり。數日前家大人より來たりし書狀の中に言へり。彼は此度び吾の自由社に入りし事に付て非常に喜び、神佛におみきを上ぐるやら赤飯を炊くやら以て吾を祝し吾を祈れりと。此の事の如何に予を鬱ましめたるぞ、金森氏は吾に極めて冷淡なり、彼は吾をして何の務にも就かしめず、給料も與へず、何事も語らず、吾は終に巢と共に爲す能はざるやを危ぶむに至れり。

然るに反みて吾に何等の資格あり。社會生活の道を得て父母を安ずるを得たるかと考へず、少しは思想もあれども理想には社會パンを與ふるに過ぎず、文章あれども只だ用を辨ずるに足るのみ、華文として買はるゝ品にあらず、吾は日下の處決して社會生活の十分なる資本を有せず。

此如事條は糾うて吾を苦しめ、吾を泣かしめたり。

然かれども女々しきかな。書くも愧かしき至りなり。

五日　三日、四日は經過し五日も今は薄暮ものなり。

寂しき時とはなりぬ。

三日の朝より五日の今にいたる迄で、時間は萬人に等しく經過しぬ、世界はそれ丈け老いぬ、人間の歴史はそれ丈け書かれたり、而て吾は何事をか爲せる、何事をか成したる、何事をか學べる。大人英雄、遠く望めば偉大なる如くなれども、其の偉大なる所以を細かに察する時は、一日の爲せし所、一日中に思考せし思想、集まりて一年の事業となり、十年の事業となり、一生の事業となるのみ。故に一日の經過は決して輕視す可からず、思ふに一日の經過を能く考究し察する者は必ず大人英雄なるべし。何となれば彼は多くを知ればなり。

二日の夜、ふしどに入る前に、明日は何を爲す可きかを定めたり。明日は朝起き出でゝ聖經を讀む可し、次に德富氏に與ふ可き書狀を認むべしと定め、次に終日カーライル「英雄論」を讀んで、精に讀み終る可しと定めたり。而して三日は來れり、三日は如何に經過されしか。聖經は讀まれざりき新聞紙は讀まれたり。德富氏に與ふ可き書は其の草稿を認められたり。其事了ふるや書飯となりぬ。

食後渠は外出したり。筆を求めんとて外出したり。之恐らくは口實ならん。口實ならざるも餘り必要なる外出にてはあらざりしならん。渠は實、思慮散漫し、感情靜穩ならざりし也。――渠は前日に覚めたり、本日は自由社に出勤せざる可しと。此の事實は渠の感情の靜穩ならぬ所以を示す者也。

渠はわざ〳〵神田迄で出掛けて筆を求めたり。

此の日は天氣極めて晴朗にして近來にまれなる日和なりき。渠は筆を求めて直に歸宅せざりし、渠は引頭氏を訪へり、引頭氏不在。渠は水谷氏を訪へり、不在。渠は遂に牛込へとめぐれり、中桐氏を訪ふ、不在、三上を訪ひ、伴氏を訪ひ、吉田友吉、桐原の兩氏を訪ひ、終に、半日を過しぬ。元とより久しく無音せる友人を訪ひし也。然かれども半ば偶然に。

夜、吉田氏を伴うて出で、誘うて寓居に歸る。途に津田穀雄氏に遇ひ彼をも誘ひ來れり、十時頃彼等去る。德富氏に與ふる可き書狀を清書し了はり、「國民の友」を讀む。リンコルンの逸事は如何にかれを動かし、櫛痴居士の「懐往事談」は何を教へたる。

「懐往事談」中に左の一節。

『當時余は譯官の末班に在りて、横濱に駐役したるを以て親しく其衝に當りたるにも非ずと云はゞ關係尤も薄き方なり、加ふるに書生より役人になりたる迄にて、內治外交大小の政務には一言たりとも喙を入れ得べきに非ず、又その實五里霧中に在るが如くなりければ何處を風が吹廻はすかと云ふ風にて勤向後生大事と勉强したる分の事なりき。』

一個人と社會事務の關係、社會事務と年少後進者との關係を知る可き一事實ならずとせんや。

「高杉東行詩文集」を讀む、維新革命の精神を知らんとて。

高杉晋作、彼何人ぞ。只だ彼、然れども其の詩文よりして彼が社會事務に繫がる眞相眞狀を看察し能はずとせんや。

夜は更けたり、二時を聞き三時も近けり。つかれはてゝふしどに入りぬ。

四日は極て事繁き日なりし。朝食後直ちに丁吉治氏を訪ふ。近來自由社に對する不平をもらす、金森氏の精神の批評となる、曰く渠或は吾等を愚にも祕書官的に用ひんとする考へならん、兎も角も今暫らく看察す可しと云ふ事となる。丁氏を去りて引頭氏に歸り、「東萊博義」を借る。直に出社す、雨降る。歸路今井忠治氏を鈴屋町小林方に訪ふ、一泊す。

五日は日曜日、好天氣。今井氏と外出、晝飯前歸ケす、午後田村三治、伴武雄の兩氏來る、委員會に出席す。

六日。午前金森通倫氏を訪ふ二言三言、彼の意の在る所を探ぐる、彼は目下の處ごまかし居るなり。午後出席す、歸路塚越芳太郎を訪ふ。夜、「家庭雜誌」の寄附文を作る、七日夜、詳細に記し置かんと思ふ間に、今は七日の夜となりぬ。

昨日大久保氏より書來る、嘗て吾、職を求めんとて奔走する由を申遣りたるに答へて、成る可くならば未だ世間に出づるは早きゆゑに、潛養を望むと。潛養なる哉、潛養なる哉、吾近來炭々手世に突出せんず熱心燃ゆるが如し、然かれども顧みて汝の實力を思へ、理想は則ち之れあり、大根本の主義精神は則ち之れあり、然れども果して之を傳道し、之を宣言し、之れを實行する程實力あるか危

かな危かな。血氣に奔る勿れ、すべからく極力以て修養蓄積す可し。

吾には萬物、悉く新奇に視ゆ。社會に於し、國家に對し、人類に對し、宗教に對し、政治家に對し、文學者に對し、悉く新奇の感念のわき出づるなり。吾が眼には悉く新奇に映ず、然り吾は自然の兒ならざる可からず、理想の兒ならざる可からず。

一言一句、一擧一動、悉く傳道的なる可し、傳道的とは外飾的の謂ならず、僞善的の謂に非ず、自動的なり、理想的なり、眞面目的なり。彼の忽ち理想の爲に泣き、而て忽ち放球自暴するが如きは軟骨、薄志、俗腸、弱行、實に言ふに忍びざる醜態なる事を記憶せよ。

人と語る、其人の全體と其人の社會地位とを思ひ忘る可からず、然らざれば意外の過失あらん。

社會の眞相に通じて而して社會弊害の上に出で、理想の足場に立つ可し。然らば社會の眞相は如何。吾近來少しく看破したる處を記し置かん。エメルソン曰く、社會は少壯者の眼前には迷語なり、彼の前に社會は嚴然固定確立せるが如く視ゆ、或る名詞、或る人々、或る制度に由りて、中心に深く槲の樹の如く根を有し、其の中心を回りて各凡ての者其處を得てある如く視ゆ。然れども老成治家は社會の環流性なるを知る、其處には根なく中心なし、如何なる者と雖も俄然運轉の中心となり、全組織をして其を回ぐるべく强行す、傑猛の意志の人、則ち或時に向て、ビルストラタスの如き、クロムウエルの如き眞理の人、則ち永久に向て、プラトーの如きポールの如き之れなり、云々。吾此の言を疑はず。吾は吾が看る所を言はん。

社會は大環流の中に幾多の小環流を有す、小環流は互に相關すと雖も亦た、個々獨立の形狀を有す。人は多くは小環流の中に生死す。大環流の變化は時間の多を要す、小環流に至りては變化消滅必ずしも長時間を要せず。

人多くは默々冥々の裡に轉々推移す。

政界は小環流なり。商界は小環流なり。

己れを圍む所の社會の眞相に通ずる時は推して以て全世界人事の變轉消長の消息に通ず可く、未來人事の眞狀を爲すに難からず。社會の眞相、人事の眞機、冥漠、暗澹、容易に知るべけんや、榮辱得喪の爲めに靈の眼をくらまさゞれば可なり。

八日。寢に就かんとする前に此の記を作る。

午前バイブルを讀み、「東萊博義」を讀む。午後丁氏來り自由社出席を誘ふ、俱に連れ立ちて出勤す。吾は何事もなさず、三時半歸路に就く。「東萊博義」を讀む、新聞會に出席す、歸てカーライルを出す、出すのみ讀まず。「改造論及自由論」を思ひ立ち沈思又た冥想。

吾切に感じ釋然心悟したり。吾實に功名に急なりし也。功名、今更ら不思議に感ず、固より吾は理想に立つの外欲に又た功名を望まんや、而も炭々、遑々、恆に安んずる能はざるが如きは何ぞ、ア、吾れ之を得たり、吾は己れの力を知らざりき、しかも事業運動に急なりき。ア、吾之を得たり、反省せよ反省せよ。眞に理想の上に立ち、理想的事業を爲さんと欲せばすべからく一生を期す可

し、力を養ふべし、資格を作る可し、靜に潛養せよ、決していらだつ勿れ、冷靜、剛刻、理想に立て、獨の讀書と獨の看察とを忘る勿れ、決して早まる勿れ、必ず悔あらん、必ず悔あらん。

自ら宇宙神明に對し、直ちに理想に繫がると自稱する者、何故にわれの思想感情を明言明記し能はざるぞ、社會を恐るゝか、人面を恐るゝか。

十日。昨日午後水谷眞亟氏を神田駿河臺の寓所に訪ふ、近來多くは出遇はず、快談時の移るを知らず、夜伴うて小川町なる川竹亭と稱する寄席に義太夫綾之助を聞く。

本日午前バイブルを讀む、讀むも只だ讀みしのみ、其の證據には現に今は何を讀みしか何事も記憶し居らぬなり、是れ何等の死ぞや、何等の結果ぞや。「第二の維新」を讀了す、塚越氏より「家庭小話」の讀稿投寄を催促し來る、直ちに筆を把て一文を草し了り、自由社に出席す、途に塚越氏を訪ひ草稿を與へて出づ、自由社に在りては雜報一個を草せしのみ、別に是と云ふ程の事も爲さず、歸路に今井忠治氏を鈴屋町の小林方に訪ふ、同宿の阿部充家氏を二階に訪ひ談話。寄席、義太夫、大隅太夫に誘はれ、栗原、山川其他熊本人にして吾未だ知らざる青年及び今井氏と都合六人出掛けし所少しく前に出火ありしゆゑ寄席は休みなりしを以て、再び小林方に歸り雜談數時、終に暗黑と疾風と煙とを突て歸す。アゝ紛々、紛々、反省回顧せよ、生命を値ひせしかを。

昨夜寄席を出で水谷氏と別れ、歸宅後机に向ひ、さて何にか書を讀まんと欲すれども心緒亂れて思想書に向はず、紛々情緒、殆んど收むる可からず。アゝ、切に意志の弱きを知る也。ア、吾力志硬行の容易ならざるを知る也。ア、吾力足らざるか、吾が希望は畢竟空想に過ぎざるか、吾れ之を信ずる能はず、何となれば、吾は吾の力の足らざると言はんよりも吾の時間を利用して刻苦勵精する事の寧ろ足らざるを覺ゆればなり。已に然らば吾が希望は決して空想に止まらざるを知るなり、要は只だ念念刻々、理想と希望と大責任とを忘ることなく、紛々たる社會俗人に投じて何時の間にか、粗雜、放肆怠惰に陷らざるに在り。

吾れ一昨夜來「自由黨及び改進黨」てふ一著述を思ひ立ちたり、直ちに着手せんと欲するなり、一には吾の能力を試驗し、二には、徒らに遠大をのみ虛想せんよりも先づ此邊より事業に着手して、次第に高きに進むの正當なる順次なるべきを考へたれば也。之れに由て吾が思想感情の上に、如何なる影響の來る可き乎は、乞ふ兩三月後を待て回顧せしめよ。

此頃「少壯」てふ事に付て多少の思想を得たり、大に考究を積んで見んと欲する也。「少壯」々々、思想に於て、感情に於て人間一代の傳記生命の絕頂なり。希望あり、回顧あり、煩悶あり、夢想あり、喜悅あり、悲愁あり、忽ち歌ひ、忽ち泣き、或る者は終に自殺を企て、或る者は遂に墮落の谷底に陷いる、大人、哲人、聖賢、英雄等の少壯時代を見よ、カーライルは如何、ルーテルは如何、而して嗣自ら如何、社會、宇宙、人間、生命、死、花、月、星、雨、悉く其の新面目を來たし、新解釋を求め來る、少壯時代は混沌時代也、光明と暗黑の戰ひ也、溶解時代也、大人も凡賢も、大宗教も大哲學も、大詩も大事業も、

悉く此時代に定まる、此時代は溶解されたる金屬の如し、如何樣にも鍛はれ如何樣にも鑄らるゝ也。一時一分尤も大切なる時間にして、時を經過し時を誤らば折角熱鑊せる金鐵も遂に冷却して、又如何ともし難きに歸す。

少壯時代とは十八九歲より廿四五歲迄を吾は指す也、人間必ずしも此時代に完備成熟せんや、只だ大體には此時代に定まる。

十八九歲頃までは大抵の人、只だ少年小兒時代の先入思想主となりて其のまゝ玆に到る、されど玆に到れば社會生活の門は前程數歩の中にあり、人世人情の神祕漸くに解せられ感情の焰は其の極度に達し、想像の力は其の縱橫の境に達し、先人の信仰は破れて、良心の大信仰ほ容易に來らず、所謂心緒の亂れて絲の如くなり勝の時代なり。

此の少壯の時代に十分の鍛練なくんば、何時の間にか宇宙人間としてよりも、社會的人間として變化發育して進む可し。

十二日。午後二時半左の記を書す。

昨十一日吾何事を爲せしか能く記憶せず、又た思ひ出し難し、以て近來思想精神の如何に紊亂せるかを知るに足るなり。昨朝バイブルを讀みしか之を知らず、今朝之を讀みしか否な、如何に靈の生命の衰へて、社會的俗情の盛なるかを知るに足る也。

昨日午後、少しく買物の用事を兼ねて上野の圖書館に行かんとて外出す。

こゝ迄で書し來れば豫ねて來訪の約束ありし中桐確太郎來たる、由て筆を擱く。午後十一時過ぎ左の記を書き續く。

買ひ物を了へて直ちに上野に行かず、水谷氏を訪ふ。談話少時、伴うて散歩に出づ、歸て牛肉を買ひ、且つ喰ひ且つ談ず、日暮る、談止まず、遂に水谷氏を辭去せしは夜の十一時過ぎなりしならん。本日午後教會堂に出席す、フルベッキ氏の說教あり、演題は提摩太後書第三章第七節「常に學べども眞理を識に至ること能はず」之れなり。聖晩餐式ありたり。歸宅後問も無く中桐確太郎氏來訪す、快談高論夕に及ぶ、共に出で吾は神田に至り、東明館でふ勸工場にて國元用の書翰紙(新意匠也)を購求す、教會の長老執事委員の集會に出席す、多田君去りし後教會に牧師を聘する事に付て、植村正久氏を依賴する事となり、其れ等の相談也、諸兄互に任務を讓るの風盛んにして、吾大に快からず。憤然歸宅す。憤然は蓋し後悔の事ども也、途に丁吉治氏を訪ひ談話。

歸宅後國元に書を裁す。

以上園より表面の事實、只だ後日の參考に並べしのみ。

水谷氏とは何を話談せしか、如何なる事の話柄に上ぼりしぞ。

フルベッキ氏は何を敎へしか、吾何を習ひしか。

中桐氏との談話は何事なりし乎。

丁吉治氏との談話は何なりしか。

內なる吾は凡て此等の問ひにすら看出し得ん。——睡魔襲來、頭腦過勞、以下は明十三日に讓らん。

十三日　回顧反省す。

果して直截なりし乎。果して主動的なりし乎。

昨夜、教會の集會に於ける吾が行爲は如何。

果して忍耐なりし乎、果して勞働的なりし乎、果して自信强かりしか、果して時間是れ生命の實踐ありし乎。

果して和平溫厚なりし乎。

果して理想の信仰確固眞實なりし乎。

クリスト曰く、神を信ぜよ、誠に我なんぢ

らに告ん、誰にても其心に疑ふ事なく、其のいふ所の言は必ず成るべしと信じ、此山に移て海に入といはゞ、其の言の如く成べし。

果して如斯信仰ある乎。

ア、爾、事の成り難きを悲み恨むこと勿れ、堅く信仰あれ、信仰は神の靈なり。

反省點檢し來て、首肯し能ふ者殆んどあるなし。

嗚呼堅志硬行の實、何處にかある。薄志弱行は衆人の病疾なり、ア、吾も亦た然るか、ア、只だ。

數々反省するよりも、直ちに靈の生命を思へ、吾は此の生命を何故に信するかの信仰あれ。

十五日。昨夜歌一首を得。曰く、

初春の花見る毎に父母の、
傾く年を獨り寢に泣く。

ア、天地悠々、歳月は逝いて止まず。明年は如何、明々年は如何、十年の後は如何、時た百年の後は如何、百年回顧すれば一夢の如く、千年回顧すれば一瞬のみ。人間の恩愛は萬古の情。

一日の事を點檢し來れば多くは之れ空の空、事は志と差ひ、志は俗情のために汚され、日々之れ迫る虚想の夢。

吾、十二日の夜より、日々夜々ひまを以て家書を作り、積んで十餘枚に達すれば之れを父母に送り、吾が思想感情、其他、日常の小事、東京の景況など書きつゞり、以てせめては父母をなぐさむるを得んとの企を立て、實行を始めたり、初めの一首は家書に認めし者なり、ア、之れ吾の事業の一なり、恩愛の至情は人間の眞事、人生の意味、愛情至情を除いて何かある。天地悠々、寂寞の色人間生を此の瞬間に寄す、期する所は至愛のみ。

吾に此時、彼時の時なく。吾に此時の吾、彼時の吾なく、吾に此の場合の吾、彼の場合の吾なきを期す、只だ理想の愛、誠、勞の理想のみ。

さり乍ら閑、人と語る時は如何、會に列なりし時は如何、書を讀む時は如何、友を訪ね、し時は如何、空談する時は如何。

昨日自由社に出席す。論文一ツ雜報四ツを書く。歸路阿部氏に立寄る。歸宅今井忠治氏來る、夜深けて家書及び吉見氏への書狀を認む、此日「罪と罰」を借る。

同書に『同時に數兎を逐ふ者は一兎をも獲ずして歸る』てふ魯西亞の俚諺を讀む、之れ二兎を追ふ者一兎を獲ずの諺と同意なれども吾之を讀み、切に身にあたるを覺えしは何ぞや、吾が多情多岐を悟れば也、吾固より勞作せざる可からず、只だ分と境遇に應じ一ツより二に進む可し。一事に全力をこむ可し。

牧二胃病保養のため昨日三上方に轉居す、此より吾一室一人、讀ず可き友もなき境遇となる、其の結果は如何。

十六日。昨日午前、東萊博義」を讀む、頭重く氣鬱し、天又た曇りて不快の念に堪へず、自由社には出席せまじと考へ、晝食後、「罪と罰」を讀む、窓外滴瀝靜なり、春雨蕭々、則ち愈々出席せざるに決し、「罪と罰」を讀み續け、四時頃讀み了はる、社會と犯罪てふ事に付き得る所少なからず、薄暮散歩。

七時、教會、祈禱會に列す。植村正久氏の舊約

聖書に就ての談話あり、舊約書の事は初めて聞きたるを以て大に益したり、又た研究の念起る、歸て讀書を試みしと雖も頭重うして堪へず、眠に就く。本日午前、只今無限の幽愁襲來し、情緒亂れて散む可からず、靜かに吾の生の意味を考ふ。政界の奔走は吾の好む所に非ず、人生の說明、人間の批評、宇宙の考察は吾望む可きなり、然れども吾れ之に適するや否や。

▽「自由黨と改進黨」の批評は如何、よしたか止めたる乎。

▽「人生を批評」する眼と筆法を以て政界現象は評す可からざる乎。

▽ア、吾に虚榮、虚名の念、内に燃ゆ、何んぞ靈の眼を有つを得んや。

▽ア、吾に養ふ可きの父母あり。ア、吾に境遇あり。

▽父母、故郷に吾の立身出世、乃ち社會的富貴光榮を祈りて待つ。之れ「吾」なる傳記に取りて如何に大なる事實ぞ。

此の事實は吾に如何なる煩悶苦痛を與ふるぞ、然れど吾學び得たり、父母を安んずるには至情至愛あり。

吾は餓るも何ぞ懼れん、父母は餓えしむ可からず、吾は愛憐幽思に沈むに何ぞ厭はん。父母をして泣かしむ可からず。

人は己れの欲する所、尤も適する所に適く能はず。

十七日。今朝丁吉治氏を氏の寓所に訪ひ、金森氏の吾に對する意嚮を尋問したるに、彼は明白ならず、彼は吾を試驗中の事とか。本日は出社することに決す、以後毎日出社致す可しと決心す。此の決心や極めて悲しき決心なり、吾は社會的地位を得ざる可からず、社會的地位は漸を以てせざるを得ず、然り吾は社會的に立つ足場は漸を期して築く可し。然らば内部の理想と衝突して煩悶を受くること少なかる可し。

昨日午後食後上野公園圖書館に行く、「自由黨及改進黨」の材料を得んが爲めなり。材料となりさうな書籍を寫して歸る。歸路水谷氏を訪ひ、同道して歸宅、牛肉を煮て共に食す。日暮れて共に外出す、吾は牛込に行く積りなりし也、途に水谷氏より九段寄席に誘はれ、遂に義太夫を聽く。

▽歸路幽愁悲思、煩悶悲哀措く能はず、天を仰いで哄嘆止む能はず、吾の力足らず、吾の天才の吾が希望にそぐはざるを覺え、吾の極めて脆弱にして爲すに足らざるを慨嘆して嗚咽す。ア、堅志硬行は徒然のみ。

歸宅後ウォルヴウォルスを讀み悽愴措く能はず、分を惜み秒を吞む、感情は消え、理想は立つ、浩然の猛氣は蓬ゆ、ア、如何にせば可ならんか、「爾に教ふ。」

▽爾は修養默學の時なり、外出する勿れ、談話する勿れ、多岐なる勿れ、籠居讀書せよ、然り沈思幽想、讀書筆硯の時を多くせよ。

今朝今井忠治氏の書狀者と社會生活」の一材料たる可し、彼れ曰く僕は漸く煩悶の氣に動かさる、是に於て僕は感謝す、幸にも此煩悶出來りたることを云々、少壯、

——理想——社會——煩悶——ア、其の後は如何、一年の後は如何、十年の後は如何、二十年の後の彼は如何、抑も吾自らは如何。

吾答書す、中に曰く、煩悶は心靈の鼓動也、良心の刺戟也、人間秘密の音樂也、人若し之を御すに健猛なる意志の力を以てし、精勵苦闘せば精神上一段の進歩を見ん云々。

吾を擾す者は何ぞや、吾を役する者は何ぞや、

周圍を見回はせ、思想感情の四邊上下を見回はせ。

十八日。吾は昨夜來今朝までに掛けて吾を攪だし、吾を失望せしめ、吾をして自暴自棄の念に到らしめ、吾をして叫びつ泣きつせしめたる原因を詳細に研究し置かざる可からず、以て二度と再びかゝる境に墮落せざる樣後を誡めざる可からず、然り極めて精密に昨今の吾を解剖し來れ。

昨夜自由社より歸宅して食をすまし家書を認め、讀書に取り掛りたり。吾は充分讀書する。意氣込を以て取掛りたり、吾は近來讀書の念勃々禁ず可からず、昨日の記を見よ、爾は修養或學の時なり云々と書しあり、然れども此の讀書の念や果して如何なる性質を有する者なる乎、先づ此の邊より探明し來らざる可からず。

一言以て云へば功名心の變形のみ、功名に急なる情の變形のみ。

吾は切に時間を惜むべきを感じ、人生の勞働なるを信ずるが故に、讀書の念も之れより出でし者なりと默認したりし也。然れども詳かに分析し來れば其の然らざるを見る也。吾は衷心實に功名に急なる也。吾は八日の記に堅く功名に急なるを誡め置けり。然れども吾は其の時何故に吾は功名に急なるに至りし乎、自ら理想に立つの外人生の空なるを信じ乎、然り「愛と信と勞作」の外に人生の意味なく、功名の果竟空の空なるを自ら發明し心悟自得し乎ら、猶ほ且つ炭々遑々安ずる能はずして功名に急なるは何故なるかの理を極めざりし也、乃ち吾は猶ほ「偉大」の信徒なりし也。境遇の奴隷なりし也、「境遇」は吾れをして「偉大」ならざれば滿足なる能はざらしめ、「偉大」を心醉するの念は「愛と信と勞作」の眞意を忘れしめたり。「愛と信と勞作」は夫れ只だ生命なり、其の外に偉大なく不凡なし、天禀自ら定まれるジニヤスあり、天命自ら命じたる命運あり、人は只だ分に應じて「愛と信と勞作」の生命を信じ、之れが實踐を務むるのみ、以て其の肉の瞬間の生命を了へて靈の永久の生命に入るのみ。嘗て吾の信仰は此の如くなりし、然れども昨今は不知不知の間に「偉大」の信者とはなりけり、之れ全く社會生活の大魔力の致す所なり。

「偉大」の信者、言ひ換ふれば功名宗の信徒。かく吾は功名信者となり、理想々々と叫ぶ間に、功名之れ急なる卑むべき犬とは化し居たる也、(然かれども吾れをして自ら責るに矯激なるなく、公平に判ぜしめよ、然り猶ほ何處にか理想の神は全く吾を見捨てざる所もありし也。

かゝる吾の讀書の念や知る可きのみ、されど兎も角も昨夜はやつきとなりて書に對したり。則ち「佛國革命史」(カーライル氏の)を讀み始めたり。かゝる處に今井忠治氏は來れり、談話せり。其の談話の中には吾は一ッの述懷を吐けり。曰く、『今朝君に與へたる書狀にある如く余は余のジニヤスを疑ふなり、余は到底何等の事もなし能はざる可し』と。やゝ暫くして余又た曰く、『余は眞に余のエナージーの乏しきを知るなり。』余は自ら一種の悲哀の情を以て此の語をもらせり。今井氏は去れり、吾は再び「革命史」の讀書に取りかゝれり、叱咤自らの精氣を鞭つて取りかゝれり、然れども「革命史」は余には餘りに難書也、余は「英雄論」を解せし如き易さを以て解する能はざりし也、解する能はず而も眠の神はしきりに襲來せり。余は肉體の疲勞せるを知らざるにあらざりしも是に於てか大に吾の志氣猛氣の衰へしを哀み、吾にエナージーの足らざるを痛恨せり。最初讀書の

念はかくの如く、而して其の讀書の結果や此の如し。余の心は失望と不平と怨恨とを以て滿たされたり、余は自暴自棄したり。暫らく眠るべしとて眠に就けり。起き上がれり。夜は已に深く四顧寂々たり。讀書を始めたり。頭腦は朦々昏々理解力を全く消滅し去れるに似たり。余は悲叫せり。瞑想に沈みたり、失望と共に眠に陷れり。今朝目醒し時は九時なりき。種々雜多の夢に襲はれて起き上りたり、頭は重くして病人の如く然り、然り吾は病人なり。

書に對したり、然れども心緒は亂れて書に意味なし。憤然立ち上れり。瞥然外出して心持を改む可しと衣服を着換へたり。再び悲叫して卒倒し聲を放て上帝を呼びたり、ア上帝の救を喚びたり。心搜一轉、吾は忽然として「偉大」信者の夢を破り、安心立命、嘗て築きなせる安心立命の光に觸れたり。吾の病は本復せり。机に對つて靜に〳〵瞑想せり。悟り得たり吾は偉大の信者、功名宗の信徒たりし也、我の煩悶は全く其の源茲に發したるを見出だせり。「愛と信と勞作」余は此の理想に還れり。否な導らざる可からず、然らずんば吾は狂死すべし。自誡の語を白紙に大書して榻端に掲げて曰く、『天命を信ぜよ、自らの力を知れ、能ふだけを爲せ、命に安ぜよ。』

吾、之を得たり、則ち吾が昨今の讀書の念は「讀書せざる可からず」てふ意志の命令に外ならざりき、然れど意志の命令は外形にのみ服從せらるゝと雖も、容易に感情までも支配する能はず、如かず讀書を樂まんには。然れども讀書を樂むてふ幸福は眞理善美の眞實忠誠なる探求者にあらざる以上は享くるを得ざる實なり。昨年の末、吾れ此の實を得たり、由りて以てカーライルの「英雄論」を讀むことを得、王陽明の詩を讀むを得、新約聖書を讀むを得、ウォルズウォルスを讀むを得たり、昨今は此の實を失ひたり、社會生活の大魔力は此の實を奪ひ去れり、吾は必ず之れを恢復せざる可からず。

十九日　昨日午後エマーソン「代表人論」を讀み始め大に面白味を覺えたり。薄暮引頭氏を訪ふ、水谷氏來り、今井忠治氏亦た來る、十時頃歸宅す。エマーソンを讀み續く。床中に在りてハムレットを讀む。萬感動もすれば胸を撼して來り、暗淚に堪へざるしば〳〵なり。

吾斷然文筆の人たる可きや、政治の人たる可きやの疑問は吾を五里霧中に迷はしむ。其何れに決するかは今にして斷ず可からずと雖も、何れに決するにせよ十分なる理由なかる可からず。十分研究解剖する所あらざる可からず。

▽見よ可憐の青年、如何に人生の暗黑に迷ふよ。然り人生は暗黑なり、見よ彼は迷へる羊の如し。

二十日。午後。薄暮青年文學社より歸り來りて此の記を書す。吾は教師を希望す。吾は出來る丈けの教師たる可し、人生の批評は吾が事業たる可し。

ア、吾は人情の爲めに此の生命を投ぜん、見よ土を堀て一生を終る者あり、絶海の孤島に一生を終る者あり。神よ助け給へ。

ア、爾の周邊を見よ、如何に悲しき世界よ！爾の友等を見よ、如何に悲しき人間の運命！

二十一日。白狀す、自白す、虛榮の妄想、傲慢の浮念は少壯者の常なる如く、吾にも亦た往往如此、之れ悉く社會生活の魔力なり、吾が思想は社會生活の爲めに動き、吾

が感情は社會生活の爲めに涌く、之れを以て虚榮僞善の妄想浮念より脱する能はず、哀い哉。

社會生活の爲めに心醉せんよりは、彼の浮世の夢をかこちて現世を捨てたる西行たる方、如何に高尚なる可き、如何に理想的なる可き、此の社會に居て吾の勞働せんと欲するは、社會生活の上に光榮富裕をつかみ取らんとに非らず、實に吾が理想の存在を信ずればなり。

人間心靈の叫聲を聽きて世を敎へんと希望する者は、爾自ら先づ靈の命を得べし。

昨夜は吾に取りて、極めて主要の夜なりけり。昨夜吾は斷然文學を以て世に立たんことを決心せり。則ち、人間の敎師」として吾が力に能ふだけを務めて此の世を終ることは最も吾が命運に適し、吾が生を値するを信じたり、吾政界を恐むに非ざるも、吾は政界に立つ以上はやゝもすれば權勢を愛し、虚榮を願ふ爲めに狂奔するを免ぬかれずと信ずればなり。

吾は自ら大なる名譽高き文學者を希望するに非ず、文筆を以て小學校敎師たるを得ばあゝシェクスピアー、ゲエテ、ユーゴー、新聞記者、大臣高官、グラッドストン、ビット、ナポレオン、クロムウエル、文學者、かゝる題目に由て築かれたる虚榮城中を脫して、かの三家村里、若しくは佐賀村若城山下の同胞人類の生命運を想へ、人生果して何の意ぞ。

甘ずべし、只だヒュマニティーの自然の聲を聞き、愛と誠と勞働の眞理を吾が能くするだけ世に敎ふるを得ば吾が望み足れり。

多くの歴史は虚榮の歴史なり。ヒュマニティーの記錄なり。人類眞の歴史は山林濱濱の小民に問へ、哲學史と文學史と政權史と文明史の外に小民史を加へよ、人類の歴史始めて全からん。

多くの歴史は歴史家の歴史なり。「人間心靈、ヒュマニティーの叫聲を記錄せよ」學者の歴史なり、政治家の歴史なり、彼等頭裡の樓閣のみ。傳記は斷じて歴史より貴し。

昨夜吾は左の章句を幾枚か紙に大書して吾の帷端、右壁にはり下げ以て思想感情の光となしたり。

其一に曰く、汝自身の思想を信ずる事、汝の内心に於て、之れ吾に眞理なりと思ふ者は、凡て人にも眞理なりと信ずる事――是れぞジュオス也。エメルソン自信論より

其一に曰く、熱心は生命なり。シルレル

其一に曰く、Every son of Adam can become a sincere man; an original-man, Son of Nature, original-man.

カーライル

其一に曰く、I wish to be considered as a teacher as nothing. ウォルズウオルス

其一に曰く……之れ二月十八日の自誡中に掲げたる、エメルソン「自信論」の編首に出でたる詩なり。

其一に曰く、The still, sad music of humanity ウオルズウオルス

其一に曰く、吾はシェクスピーアに非ず、吾はゲーテに非ず、吾はユーゴーに非ず、吾はカーライルに非ず、吾はウォールズウオースに非ず、孔子に非ず、佛に非ず、吾は吾也、吾を生む者は神、吾を育つる者は宇宙、吾を養ふ者は人情。

以上此の如し。吾は之れに由て吾自らの思

想感情の慟記を知る也。

只だ吾自ら吾に望む、願くは堅き信仰あらしめよ、倦まざる勞働あらしめよ、健猛なる意志の力あらしめよ、爾の行爲先づ理想に適はしめよ、然る後敎ふるの敎師たれ。

書て曰く、生死に對するヒュマニティーの聲、人生に對するヒュマニティーの聲、人性に對し、人世に對するヒュマニティーの叫聲、榮枯盛衰に對するヒュマニティーの聲、過去に對するヒュマニティーの聲、社會困厄の悲運に對する聲、戀愛に對する聲、山川花月等天然に對する人情の聲、故郷に對する聲、父母兄弟朋友に對する聲、妻子に對する聲。

天地悠々宇宙茫々に對する聲、自國に對する聲、人類進歩の大氣運に打たれて發する鬱勃痛烈なるヒュマニティーの壯調、理想に向て叫ばれたる悲壯慷慨なるヒュマニティーの聲、吾人は之を聽て之れを敎へん事を希望す。

諸の哲人詩人より之れを聞く可し、現實の日擊より之を聞く可し、聞て沔して之れを世に敎ふ、之れ吾の希望なり。

未だ何等病激なる社會生活の困厄の來たらぬ先に其の來る可きを慨れて、吾が心中動もすれば朋友に依頼せんと欲する根性あり、吾ジョンソンを學ぶ能はざる乎。

主動的なる能はず、故に此の卑屈心あり、堅く信仰に立たば笑て生をあらゆる困厄の中に送るを得ん、困厄は覺悟の前ならざる可からず。

德富健次郎君著平民叢書の一、「十九世紀の大勢」を讀む。

二十三日、午前。一昨夜來昨日にかけての事實を記載して、次ぐに思想史を以てす可し。

一昨夜丁吉治氏來訪せらる、丁の曰く君は學ろ文學者たれと。何を以てかく言ひしか、吾の言語や動もすれば胸中の決心を漏せばなる可し。丁吉治氏來るや、十九世紀の大勢」を讀み了り、廿一日の記、後半を書す。

廿二日午前敎二來る、晝飯を共にして歸宅す、中桐氏に一書を裁して之れを敎二に託し半圓借用を依頼す。午後自由社に出席す。

一室に閉ぢこもりて沈思默想して大に得る所ありたり。歸路今井忠治氏を訪ふ、氏今夜吾が宅に來るべしと約束せしかば直ちに歸宅す、晝すぎは灰色の天氣、今は薄暮と黑雲と共に鼠色の天氣に變じ物寂し、夢の如き志想にふけりて歸る。歸りて一番町敎會新禱會に出席し、植村正久氏の「路得記」を聽き、吾新禱す。吾が國民の家庭の幸福平和溫愛、神の光に由て作られんことを祈る、路得記に感じ鞭じて吾國民の家庭を懷ひ、深く感動する所ありたればなり。歸宅すれば已に今非忠治氏あり、快談して九時半頃歸らる、テイン文學史「カーライルの篇」を讀み始じむ。床に在りて近松門左の戯曲を讀む、十一時過ぎ眠る。

丁氏來るや、しきりに吾が前夜はり置きし自誡の警句を見る、昨朝吾悉くはぎとりて捨つ、自ら薄志を恥づれども亦た大におもはゆき限りなればなり、吾が心に銘し肝にはりつけ置くのゆかしきに如かず。

昨日自由社の一室に在り、冷靜なる理性に由りて一昨夜來昨朝迄での吾を研究して、大に吾の誤れるを發明したり、左に。

吾若し激越憤慨、悲叫せる節は吾の思想感情、極めて高尚勇快なれども、一度び平靜に復する時は忽ち肉情の志想に墜つ、由て吾の

決心の極めて健全ならざるを發見したり。
されば讀書の念も人情を聽き、眞理を探ぐるを第一の樂とするに非ずして、何にか早く一著述でもして見たきが先きだつを發見したり、之れ何等の不健全なる者ぞや。――蓋し吾の著述々々の慾情かく急なるも亦た故なきにあらず、生活の困厄後にせまればなり、されど吾大にあやまれり、生活の困厄來たらば來る可し、寧ろヒュマニティーの秘密を吾が心より聞くを得て却て妙ならん、吾が理想の信仰を試驗するを得て却て妙ならん、吾は只讀書するにも一心不亂、ヒュマニティーと眞理とを求むれば足る、天若し吾に力を添へ賜はゞ期せずして著述も出來ん。
ア、一に吾が日常の思想感情、妄想の薄弱にして不健全なるを嘆ず。
マ冷靜なる意志の力を健猛にして悠然として社會生活の困厄に當り、熱情以て讀書に從事せん、神は必ず助け給はん。
人情、眞理、探求的大精神に充たされん。

* * *

吾今井氏に語る、――吾等能ふ丈けなすてふ信仰あらまほし。
人多くは能ふ丈を爲さず、其の妄想は極めて高きも其の實蹟は却て其人の能ふ丈けよりも低く少なし。
能ふ丈とは能ふ丈けなり、固より其度は知れ難し、只だ之れ妄想となりて健全に一歩一歩の勞働的道念を指す者也。
人はクリストたる可く、又た孔孟たる可く、エマルソンたる可し、彼れ人間なればなり、然れども克リスト、孔、佛の類たるを得ずと雖も恥づる所なし、其人にして全心全力を注ぎて一生事業に當りしならば。何とならば巣は能ふ丈けをなしたればなり。
マ人間は内より成長して外に發達し、松は松丈け樟丈け、杉は杉丈の丈に成長す。妄想虛想は梅にして松の大を望むなり。其の着眼は外にあり、かゝる人は己を外よりぬり固めて大ならしめんと欲する也、己の本質は却て枯れ死して形體も亦た決して成長せざるなり。内より成長せしめよ、爾の培養を根より、葉より、天より、地より、默々の中に健全なる發育を遂げよ。神は梅にも松にも、否な草にも苗にも平等に見賜ふ、只だ成長も能ふ丈け成長せよ。

「路得記」を聽き、路得の母を懷うて吾が母を懷ふの情に堪へず、默然涙を呑む。ア、悲痛深絶の人情の華は爾の父母の中に聽かれん、道は近きに在り、人情は近きに在り、眞理は近きに在り。理想は近きに在り。吾が母の故郷、吾の生地「誠子」に旅行の念動く、悲しき深き人情の叫びを聽かんが爲めなり。

昨日自由社より歸るや、書を裁して國元に送る、敢て寄宿舍入舍の相談也。其の他色々。
中に一首、

今更らに此世の風の身に沁みて、
いとゞ愁しき父母のひざ。

あゝ『五年は經過せり』、十年は經過せり、二十年餘は經過せり、父老い母老い吾も亦た壯年に達して、尚ほ且つ父母を安ずる能はず、理想の責任徒らに重く、膝下の悲慟空しく深し、切に回顧して父母の膝下を懷ふ。

二十四日。此の記を書するに先きだちて左に一首、

弱ければ弱きに付けて猶ほ弱く、
吾は迷へる羊なるかな。

ア、昨朝は意志の冷靜健猛たらんことを自誡して、而も今は涙と共に此の歌を歌はざる可からざる吾の如何に弱きぞ。

若し斯の如くして日一日を送らば、狂死にあらずんば墮落なり。
狂死か墮落か、狂死猶ほ可、墮落して生を放樂に餘むに至ては、神明の罰終に如何。
思ふに精神靈性の弱きはたまゝ以て身體の衰弱を招き、狂死に非ず、墮落に非ず、元より事業成功に非ず、何事も成し能はず、以て命を殞さんとする如きに了らんも計る可からず。

二十六日、夜。
二十四日、二十五日は經過し二十六日も經過せんとす、文學者、教師たる希望を立てゝより以來已に若んど一週間は經過せんとして讀書も沈思も幾何も致さず、吾に進歩の見る可きなし。
吾今は情激し居らぬなり。
昨日も今日も平々の中に經過せり、別に思想史に筆す可きなし。
否！　筆す可きなきは則ち筆すべきある所以に非ずや、何となれば平々に經過されて思想史に特筆す可き者なきは、其の事實なるに於て變らざればなり。
昨日午前田口卯吉氏を訪へり、歸路舊友松崎壽三氏を訪ひ、午後、田口氏との問答を筆記して自由社に出席し、帰路今井忠治氏を訪ひ、一泊して今朝歸宅し、教會に出席して午後田村氏來り、今井氏來り、牧二來り、四人同伴上野公園に散歩す。今井と共に歸路水谷氏を訪ひ午後七時歸宅、長文の家書を書き了りて、二十六日の記を筆し始めたり。以上の事實、不可思議！　茫々空々として經過し ぬ、固より吾學び得たる事少なきに非ず、去り乍ら吾は交際の吾が思想に適せざるを發見したり、吾には沈思と讀書と最も適す。
事務的にはあらず、讀書的にもあらず、吾此頃の生命の時間程曖昧なる者はなし。或は其の一をとらざる可からず。
吾は讀書的を取る可し。「讀書論」を得たり。
左に、
（然れども疲れはてゝ、睡魔の襲來甚だし、眠る可し）

二十七日。臥床に入る前に此記を書す。
昨夜の記の最後に「讀書論」を左に記さんとありたれども別に書かざる可し。然れども、能く考ふれば是れも思想史の材料たる可ければ其大要を書す可し。曰く、
人は此の天、地、此の社會、其の境遇の裡に在る以上は何にか讀みつゝあるなり、何にか解釋しつゝあるなり、何にか習ひつゝあるなり、因より無意にして然る者多し。片時たりとも（睡眠時間を除き）讀まずしては居らぬなり、或人は盗賊となり、或人は乞食となり、或は敗徳の人となり、或は虛榮の人となり、或は僞善の人となる、皆讀みし結果なり。
昔しの人の中に高尚深大の思想感情を書とめ置きたる者あり、吾若し書を讀まば高尚深大の思想と感情を得ん。
萬物皆な吾に備はる、讀書する時は此等の者其の固有の發育をとゞ。
春風滋雨は草木を生育せしむる如く、高尚深大の思想書は我が靈を成長せしむ。

本日午前「バイブル」を讀み、「平家物語」を讀む。午後自由社に出席す。路、民友社に至り徳富猪一郎に會ふ、夜、家庭雜誌に寄送す可き「養子論」を作る、エマルスンの「大人論」を讀む。

述懷を書するの念勃々たり、必ず書く可し。

家庭雜誌社より原稿料として金壹圓を送りたりとのしらせ來たりしも現金は來らず。

文章は修練せざる可からず、之れ吾が目的の一なり。何となれば吾若し吾が數に人民の耳を傾けしめんと欲せば、必ず絶妙の文章を以てせざる可からざれば也。

二十八日。夜は更けぬ。四面寂として音なし、窓の外ソボ〳〵と雨降り始めたり。ウォルズウォルスの詩、「インデペンデンス」を讀了り、將に臥床に入らんとす。牧二眠りて傍にあり、吾心幽然として又た炎々の悲炉なし。

ア、ウォルズウォルスは吾が心を歌ひたり。吾が心は强し、然り吾が努力勉勵して天職を盡すが故に强し。

吾何を爲す可き、然り吾は敎ふ可きなり。

父より書狀來る、中に曰く、『自分共は悲は聊も無之、朝夕兩人の成長を樂しむが上戸に酒、下戸に牡丹餅の如し、御推察あれ』と。吾れ之を讀んで泣く、ア、父母、親子、何の意味ぞ、何の情ぞ、幽なる哉人生の愛、之を懷はゞ泣かざらんと欲するも得ず。

父母、牧二の病を憂ひて措かず、一先歸村をすゝむ、牧二歸村する事に決す。明朝伴うて德富猪一郎氏を訪ふ可しとて一宿す。

家庭雜誌社の爲め、「家庭小話」を書す。

吉見をば樣より書狀來る。

本日三上方を訪ふ、齋宮萬之助の死亡を聞く、彼れ憐れの少年は終に死せり。ア、死乎死乎、彼は後に不幸の母を殘して死せり。

回顧して、吾嘗て彼の家に下宿せし當年の事を思へば、花として夢に似たり。而して彼の家は夢の裡に零落より零落に陷り行くなり。

ウォルズウォルスの詩想と、吾が時々胸を衝きし感情と全く同一の形を有する者あり、さり乍ら其の性質に於ては多少異なるを見る、其の差異は如何。

三十日。

昨日より今日迄での二日の吾の生命を批評研究し置かざる可からず、以て反省の資と爲さざる可からず。

昨日午前雨を衝て牧二と共に德富猪一郎氏を氷川の宅に訪ふ、今日に至る迄で猶ほ氏を忘る能はず、氏は實に吾の偶像の如し、吾自らも實は怪しき程なり、今少しく氏と吾が思想感情との關係に就て考察する所あらんと欲す、何となれば之れまた吾が思想心靈の歷史に至大の關係あるを以てなり。其の讀む書籍、其の處する境遇が思想感情に至大の關係ありとすれば、其の長者として交はる朋友は又た極めて其の關係する所大ならざる可からず。

書て見たれど極めて淺薄にして見るに足らず、又た大にシンセリティーを缺くを以て他日大に公平無私に論究す可し、極めて面白き問題なり。（約束）

三十一日、朝。周圍の境遇と吾との關係亂れて、吾自ら反省するに苦しむ。周圍は吾を役したるに非ざる乎、反省せよ意氣の本月の初め頃に比して大に衰へたるを見ずや。和平靜念は卽ち之れ有り、然れども熱心の度に於て如何、假令ば一舉一動理想の上に働くてふ意氣の如きは、近日起らざる也。

一昨日德富氏より「ルーソー（モルレー氏著）傳」を借りて歸る、已に緒言を數回讀了して

大に得る所ありたり。左の句の如きは殊に吾を動かしたり。曰、

Faith in a divine power, devout obedience to its supposed will, hope of ecstatic, unassailable reward, there were the springs of the old movement. Undivided love of our followers, steadfast faith in human nature, steadfast search after justice, firm aspiration towards improvement, and generous contentment in the hope that others may reap whatever reward may be, there are the springs of the new.

中途に人性に對する信仰とふ句の如きは、吾が近日の感情を道破して一種の光を得たる心地す。

吾れ詩人の本分を考ふるに、此の人間の人性が人間胸臆の深底に於て發する幽音悲調を聞て之れを說明し、之れを敎ふるに在り、卽ち此の幽音悲調はクリストよりも、孔子よりも、ウォルズウォルスよりも、又たシェクスピーア、王陽明等よりも聞くを得べし、又た自らの靈よりも聞くを得べし、聞て而して之れを發揮する所以は則ち以て人間を敎ふる所以也。

「家庭小話」、「乞食」を起稿中也。之れ又た吾が文章の習練なるが故に、大に力を用ひて作るを要すと決心せり。

一昨夜今井忠治氏來る、大にウォルズウォルスを讀ず。

此頃インデペンデンス」を熟讀して得る所ありたり。

昨日自由社に到りて又たウォルズウォルス中の Influence of natural objects を讀み始めの Influence の字に就て大に得る所あり。社會生活の渦中にストラッグルする人間の感情、思想より人性自然の幽音悲調を聞かざる可からず。

吾自由社に出席して一室に衆と雜居す、衆喧笑し、談話し、紛雜にして混洞たり、吾傍より此の中の詩歌的眞理を見出し、人生人性の消息を得んことを努めんと欲する也。

人生の濱に立ちて茫として自失する勿れ、一個人の傳記を研究せよ、其の思想感情の變化轉移を研究せよ、然らば自ら光明と幽音悲調とを得む。

吾は如何にもして吾が耳、吾が心を以て人生、人性、自然、天地の新たなる、音樂に接せんことを希ふ、ウォルズウォルスよりも、ゲーテよりも、ミルトンよりも、王陽明よりも、ユーゴーよりも、カーライルよりも 別に遜歩せる說明を得ざる可からず、一層深遠高遠なる、ポエチカルツルースに悟入感得せんことを希ふ、何となれば、吾は之れ等の詩人哲人の說明解釋音調に接すると雖も、何となく物足らぬ心地して、人生、人情の意味の猶ほ一層深きを感ずればなり。

默せよ聽け、人情の音を。

人間とは自分の如き者なり、餘りに其の前に茫然たる勿れ、社會とは人間の集合せる所なり。

幽音悲調は聽く許りにては敎師たるを得ざる可し、宜しく說明法を修練考究す可し、ジョンソンが所謂ゆる「其の文致をして眞の思想

に相當せしめんが爲めに、不斷の修練によりて調のありとある妙と、風調のありとある精趣とに熟せざる可からず」との謂ひ之れなり、觀察は人事と自然とを問はず尤も精密ならざる可からず、則ち人事の内に自然の中に人情は偶出すれば也。故に人情を敎へんと欲する必ず人事と自然との精妙なる描寫を要す、之れを描寫せんと欲する則ち觀察を要す。

吾今年こそ十分春を觀察し、春を學ぶ可し。

先に曰く、人間とは自分の如き者なり、餘りに其の前に花然たる勿れと言ひしと雖も、自分の前にすら實に茫然として「吾とは何ぞ」と問ふことの屢なるを思へば、人間、人生、人性、人情、豈に知り易からんや。

本日午後自由社に出席したれども何事も爲さず、只だ出でしのみ、家信を認む、電話器の事など書す。

丁氏來りて自由社より吾に三圓を給料として送る、顧て機笑一番潸く能はず、嘗て四圓五十錢の小學敎員を嚙ひ、八圓五十錢の新聞記者を嘲りし者、今此の如し。三圓の新聞記者は寧ろ憐れむ可きかな、然れども亦た思へば吾の給料として他より金を受けしは實に此の三圓が嚆矢なる事を記憶し置く可し。三圓にては實に下宿料も拂ふ能はざる也、さり乍ら實を言へば吾は金を得る爲めに全力を注がざりしも、金を得る爲めに全力を注がずと雖も、生を價ひする丈けの義務を此の世に盡し、子孫に盡し、人間に盡し、神に盡すが爲めには實に全力を注いで努め居るなり。然かれども社會はかゝる全力には、金錢を拂はざる也。

然れども金錢は全く不道理には循環せざるなり。

社會は寧ろ不平子が想像するよりも公平にして其の富を分配する也。然れども吾は、肉體のみの人を憐まざるを得ず。然るに人間悉く肉體を離る能はず、即ちユーゴーの所謂ゆる、

Man has a body which is at once his burden and his temptation, he drags it along and yields to it.

名言なり。吾も亦た遂に肉體を有する也。否な吾より以外の肉體の負擔をも有する也。肉體にも全然從ふ能はず、さりとて精神にも全然從ふ能はざる者は不幸の人なり、寧ろ愚人なりとす。吾は勿論肉を捨てざる可からず、吾肉を捨てず何を以て世人を敎ふるを得ん。然れども『人は肉體を有す、』肉體を有する人の上に同情を以て見ざる可からず。人情とは、肉體と精神との持主なる剛音悲調なることを知らざるべからず。

三月も亦た逝きぬ。梅は散り初め櫻將に紛びんとす、日月逝て止まず三年の後如何、五年の後如何、十年の後如何、廿年の後如何、將た百年の後如何、吾此の世に在らず、否な！吾と同時代の人凡て此の世に在らず、ア、蜉蝣の如く生きて蜉蝣の如く消え逝く、人間の存在！此の存在を値ひする者實に只だ只だ愛のみ。

左の一首を以て三月を送る。

とつ〳〵とつとむる外に味もなく、
望もわざもせんすべもなし。

* * *
* * *

書翰

中桐確太郎氏に與へしもの（其一）

中桐君足下親愛愛慕極りなき友なる中桐君足下

自由の兒は半ば束縛の絆にかゝりぬ。希望の兒は半ば失望の鬼に捕はれぬ。平和の兒は半ば如闘の蛇に呑まれぬ。

自ら修養の足らざるを悔むこと幾度ぞ、頭上に天光依然たり。然れども顧みて心裡の暗黑なるを如何にせん。

天意實に漠々として測量すべくもあらず人間の事亦愈々茫玄不思議なり。

理想は語り易く信仰は語り易しされど人間は知り難し人間は絶對なり自然の最底なり

二十一日夜今井忠治氏に送られて獨影悄然京を發したる彼は三十日の正午滿腹の不平を殺して佐伯に入りぬ。

途に大久保氏を淺根に訪ふ氏伴うて彦根城に登臨す煙雨の湖水今猶目にのこる。

歸省三日の間、感慨何に由りてもらす可き天地のモノトニイを感じ殆んど自ら失ひし事あり、小生在京の間に死去せし老媼の墓と乙女の墓とを訪ひ死を思うて多感の小生幾度か泣きし。

遂に商估を見、漁夫を見、水夫を見、兵卒を見、官吏を見、小兒を見、鳥を見、海を見、山を見、村落を見る、漠々たり人生の事の小生は人生の事を思らて實に漠漠たるを感ずるものなり。

佐伯の事未だ語り易からず小生は何處までも忍耐でも神の愛を信ずる故に何處までも忍耐する積りなれども自由を奪はるゝ事其の度を過ぎなば斷然として去らん。

されど自由は心の自由なり心神の愛を懷はゞ自由は至る處に在らん之れ小生の信仰なり。

嗚呼親愛なる友よ相過ふや何れの時ぞ相語る何れの時ぞ、されど兩心相照らさば相隔離するも何の憾かあらん生も亦書を惜まざる可し、大兄生の孤獨をあはれまば金石の言を惜む勿れ、嗚呼天地に生る何の緣ぞ生まれて相遇ふ何の緣ぞ、相遇ひ相語り相信じ相愛し相知る實に何の緣ぞ小生が懷を貫うする者は實に友愛なり。

友あり遠方にあれども弟あり傍に在り之れせめてもの慰みなり早々

十月一日（二十六年）　哲夫

中桐確堂机下

中桐確太郎氏に與へしもの（其二）

中桐君足下

君の端書は昨日拜讀致しぬ君が上京せる事は已に之を德富氏より聞きたり實は君より何等の通知なきが故に怪しみ居るなり余は佐伯に着するや直に君に向て一書を飛ばし置きたるなり君は定て受取られたるなる可し而して君よりは何等の返事も來らず僕之を以て竊かに心配し居たるなり今端書に接し君も相變らず壯健なるを聞くを得、且つ君の住所も同じく元のまゝなるも知れて至極安心致しぬ君よ安ぜよ洪水は隨分甚だしかりしも吾等兄弟は只だ二回轉居して之を避けたるのみ別に一物の損害をも被らざりし也而し已に全く平日に復し又た洪水の跡さへも見るべからざる程に至りぬ大分縣

下にても佐伯は水害尤も輕かりし也。君が日下の事條は未だ詳細に君より聞くを得ずと雖も德富氏の手紙により多少は想像を描きぬ定めて御心配事ならん内に精神上の憂愁絶えず、外より色々の事條迫り來る、かゝる時ほど苦しき者なきは僕の已に經驗せる所なるが故に君の日下をも同情し得る也德富氏より聞けば君は民友社に入社致すとか僕甚だ喜ぶ也心からして祝する也民友社が他の一人を納るゝならば君ならんことを深し君が或る社に入るならば民友社ならんことを希ふ又た君は民友社に入るに付きて僕に對し遠慮する處ありとか君のあくまで厚き友情は僕實に謝する處を知らず君がかくまでに僕を思はるゝは僕の信に感謝致す處なりされど此遠慮に實に無用にして且つ寧ろ理に當らざる事也之れに付きて僕の考は德富に申し送りぬ德富君は信義を重んずるの士なり。僕は只だ彼を信ず、而して又た先進として彼に託しぬ故に彼が僕に關して爲す事は決して疑はざる也故に君をして入社せしめたるは僕の手を拍つて喜ぶ處たるに過ぎず。僕は只だ君が十分鼓に驥足を伸ばされんことを希ふのみ僕は只だ之を祈るのみ。

聞く家庭叢書の編輯に當らるゝとか之れ實に面白き趣向なり又た君の親切にして同情に富むの心は必ず此の重要なる事業に適することを信ず。されど一言の忠告を聞ヰ給へ。君笑ふ勿れ。——一言忠告申さん君の文章今少しく自在にして優しからざれば恐らく此點に於て此事業に成功を傷くる處あらん僕已に此事は自ら家庭雜誌を書きて多少感じ居るなり德富君は自ら得意の樣子なれども實は僕餘り感服せず。福地源一郎氏の文章恐らく尤も適せん。家庭の文章に民友社流は到底今しばらくは不適當なり。

僕目下の事條は至極安靜なり學校の教授は日々務め居るなり先方の人々の氣に入らねば其れまでなりと初めより無頓着にかまへ只だ僕が盡す可き職分と信ずる事を正直に盡すが故に案外自由にして心安らかなりされど殆んど三十名計りの壽年少年が全く小生の支配感化示教の下に在るを思へば責任の重きを感じ竊かに恐るゝ所あるなり、されど僕がすべては神に託し在るが故に事の成否、結果の如何感化の影響は只だ神のまにまに僕は只だ爲すべきことをなすの外はあらじ。

爾愛清神上の苦闘は少しも止まず神を信じ神の愛に一任すと雖も猶ほ存在、人性、自然等の疑問と煩悶は少しも止まず。山に登りて感じ、谷を歩して思ひ、夕陽を遠山に眺め、朝暉を曉雲に臨む時、他郷に在りて自然に親しく安はり人間を傍より觀、人性を特別に感ずるに從ひ大なる煩悶は心底最も微なる邊より涌き來りて暫も止まず。

されど余は此の煩悶を如何ともなす能はず、而して又決して之を避けず。之れ必ず神が人間、此の愚かなる人間を教へ導き給ふ法則にして人間は之によりて進歩し俗情を破り俗眼をくぢり俗習より脱して神を親しく明白に信じ且つ認め且つ愛し得るに至らしむる者なることを信ず

ればなり。

凡ての者は逝かん然り凡ての者は逝かん凡ての人は消えん已に逝きし者の如く吾等凡ても悉く逝かん羅馬は逝きぬ。江戸は逝きぬ。バビロンは逝きぬ。鎌倉は逝きぬ。明治も亦忽ち逝かん。余は只だ光明にゆき光明に歸らんことを希ふのみ。已に逝かねばならぬ然り、然らば互に相愛して而して共に逝く可き也余が友に對する信仰は之れ也余は相並びて寂寞の墓地に立つ墓を見る時は則ちかく感ず。愛は葬られざるが故なり。

今や余は大にして深き意味を保つ書籍の前に立つなり。自然は余が今の境遇ほど余を取剛みて其美と其變化とを示したることはあらず。山あるなり。煙其半腹より立ち靡るなり。夕影其頂にのこるなり。月其の上にかゝる也。泉其谷に流るゝ也、茅屋其の麓に村を爲すなり、河あるなり。孤帆漁夫を想はしめ漁歌は漁夫を思はしむ町あるなり。山上より瞰下するを得べし。然らば人間社會の活畫は目下に看らるべし。寂寞の谷ある也。以て沈思の場所たらしむ可し。海あるなり、煙波微茫吾をして一種の悠思と哀感とを惹起さしむ。天遠くして秋高し。

余は日々此書籍を繙きつゝあるなり。而して余の爲に時々詐偽の勞をとる者はウオーグウォース、カーライル、エマルソン等に外ならず。

金子馬治氏に一書を出さんことを期して未だ果さず甚だ心にかゝり居る也大兄御面談の節は小生の事條御傳言を乞ふイヅレ近日必らず一書を送らん吉田友吉氏にも其後無音に過ぎぬこれまた宜しく御傳言を乞ふ其他の知人皆宜しく願ふ也。敬二余が傍に在り無事なり大兄に宜しくとの事也草々頓首。

十月二十五日（二十六年）　哲　夫拜

中桐愛兄机下

中桐確太郎氏に與へしもの（其三）

中桐君足下

久しく御ぶさた仕り候

新年來り舊年去り日出度く存じ候

一昨夜熊本より歸り候大兄十二月二十七日御認めの玉章漸やく拜讀致し候舊年二十五日佐伯を發して歸省致し正月三日國元を發して熊本に參り高木正雄氏にも遇ふ事を得久しぶりに快談仕り候座上只だ大兄の在らざるを憾み候水谷氏を訪ひなど致し都合五日間の熊本滞在仕り十日歸路につき候九州の中央を横斷致し三十六里の山路、二十九里を徒歩して歸り候途中阿蘇の高峰をも攀ぢ噴火山の荒寥にして而も偉大崇高なる光景は僕をして少なからざる感懷を抱かしめ候

此度の旅行日數は二十日（十二月二十五日より正月三日に至る）なり

或は父母の膝下に笑ひもし泣きも致し或は小女等の家を訪うて久しぶりに情話し或は盧を圍みて村落の悲慘史を聽き或は一家零落の跡を弔うて舊壁老樹に哀悼の涙をそゝぎ或は屠蘇一杯の醉に乘じて村長たちと議會解散を論じ或は半夜燈前一欺かざるの記」をつゞり或は太宰府天滿宮を見物して端なく人生の流轉を感じ歴史の長流の煙波縹渺

に驚魂し或は噴火山等に乾坤の變移默轉の恐ろしき事實を今更の如く直感し、或は寥漠たる高原平野、四顧人なき處兄弟並びて且つ歩し且つ語り、且つ默し、日暮れ道遠き哀感に打たれ或は木賃宿に寂寥、天涯の故人を懷ひ、或は雪の如き大霜を蹈み破りて朝氣神を爽にしては高談濶歩し聞かざるに聞き見ざるに觀、二十日間の旅行回顧し來れば一卷の詩篇も啻ならず面白し旅行は實に活ける學問なり。

一面天來の鏡

廖がかんと欲して雄心轉た昂がる

僕今日の警句は

希望、愛情、義務、不死、確信自立、言葉は何時も同じ但し其の中の意味消息に至りては時と共に人と共と異なる幸に例の陳腐語となす勿れ

僕の今日希望あり雄心ありて失神なく苦惱なし只だ「シンセリティ」の量の足らざるを憾むのみ但しこれも勉めて止まずんば自から其境に到らんことを期す、人間凡て神の見なればなり吾はプラトーの

腦の所有者、基督の心の所有者なればなりこれ僕の自信なり。

『未來に伴ふの過去は愚癡なり。未來なきの過去は呪詛なり』此句則ち「不老」中の名言僕甚だ其の高想に感ず實は僕此旅行中に在りて甚だ强くこれを感じたれば也但し僕は更らに一轉して『愛は過去なり現在なり未來なり』と書しぬ僕旅行中、半夜燈前に認めたる狀かざるの記一節を抄記して君の同情深き心情に訴へんと欲す。

二日は早朝柳井を出でゝ麻郷村なる吉見氏を訪ふ。午後あや、繼、及び春蘿を伴うて平生町に寫眞を撮る。

少女の愛らしき、無邪氣なる實に吾をして此少女等が何時までも少女にして吾の何時までも青年なるを希ふの情に堪へざらしむ、哀哉老や、樂のしき罪なき時は過ぎねばならぬか吾をして只だ回想に泣かしむるか。

嗚呼現在は短かく回想の懷みは永き哉。待つ者は來ざる如くにして忽ち來り、來りし者は去りて永遠に歸らず、人生は悲哀なる哉。然り若し人間の前途に永久の

希望なくんば人生は呪詛なる哉吾をして只だ愛に生かしめよ、愛は過去なり。現在なり。未來なり。』

以上は五日の夜熊本市の旅宿に在りて寒燈の下哀思悄々禁ず可からざる者ありて認めし也

此は余が實驗の記なるが故に余が眞實の感なれども文は勿論出たらめ故思ひの半ばも他人に通はし難きを嘆ず僕近來の警句と稱するも實は此等の實驗より痛感し來りたる者に候『少女は老ねばならぬか』『言短かくして恨み永し。少女は美、愛、無邪の化身なればなり。

されど少女に注ぐ愛情を以て青苔の下に眠る老媼に注ぎ得べし。

多くの意味深き物語(實話)を聞き候へ共筆口上にて君に語る能はざるを如何にせん。

ゲーテ(十二文象の一つ)及び歴史研究法(平民叢書の一つ)

右御求め被下まじくや御郵送願上げ候代金は月末に送り申す可し御てかず乍らなる可く早く願候

敬二よりも宜しくとの事に候諸友に御逸ひの節は宜しく御傳言を乞ふ也早々

正月十五日正午十二時
認め了はる(廿七年)　哲夫

中桐大兄貴下

中桐確太郎氏に
與へしもの(其四)

中桐君足下

君其後御變もなき事と存候小生不相變壯健且つ幸福平和なり幸に御休念被下度候。久敷君の書にも接する能はず小生も亦無音に打過ぎ候段千萬心外の事に候されど小生は暫時も君を忘るる能はず、諸君より君が日下憫み苦みつつあるを傳聞することに悲み申候君は小生に打明けざるが故に果して如何なる煩悶に惱みつゝあるや知らずと雖も、煩悶とは無名の暗黑なるが故に、實は君に在りても報知說明の致し樣のなき事とは推察致し居候それに付けても小生は如何にもして早く君が神の光明希望慰安を認めらるゝに至らんことを時々敎

會にて新禱仕り候之れ小生が君に對する有りのまゝの心情に御座候神を認め信ずる能はずして此悠々の天地に對し此紛々の人界に立つ唯れか悲叫煩悶に沈まざるものぞ。

小生は剩々瞑想感想しつゝあること以前の如し、兼かざるの記も已に積んで三卷となり今は四冊目と相成候熟々自ら日下心情の傾向を察するに確かに大なる進歩發達の途に在ることを信じ候。日々心堺の進みゆくを覺え候小生は人性を信ず。故に何時か此の一個の吾も人として眞の人の域に達し得べしと確信希望致し居候。

小生は已に此世に於て吾何を爲す可きかを知りたれば只だ其れに向て進むのみに候小生今や全く美妙てふものに感想するを得るに至りたるが如く自から覺え、自から書して『嗚呼美妙！　余は爾の宗教を信ずる也』と認め申候小生今や自由なり、幸福なり、平和なり、而して悠然として爲すあらんことを欲するの猛氣日に益々昂る。只だ默契晴盟したる諸友の樣子に眼を轉ずる時に於て痛恨に堪へざることに候吾人は眼前に濟はざる可からざる世を控へ救はざる可からざる民を目擊し乍ら、薄志弱行、偏執自誇、却て徒らに彼の頑迷不靈の輩にのみ此國民を蹂躙するにまかす。小生思うて玆に至る毎に汪然と泣き衾を蹴て起つこと幾度ぞ、此事を大久保に告げて多少慰言を加へ候處彼れ却て小生を目して知己に非ずなど申し來る、而して又た更らに輒みに輒みたる兄に至りては今や自家の煩悶に忙がしくて又た其他を知らざるものゝ如し、小生の痛恨豈に故なしとせんや。兄の反省を希ふや切。天地悠々を思うて小我消滅して哀情起り、哀情起りて平等を感じて慈愛の念油然として心底より湧き來る。是に於て一種言ふ可からざる謬遜の念生じ來り、其間言ふ可からざる驕安を覺え滿足と平和とを感ず、是に於て奮勃として而も亡びざる美妙善德なるもの、天地に充つるあるを信じ遂に至聖唯一の眞神の大光を認むるに至る。小生の感想畧此の如し、されどこれ只だ讀書哲學を學びて製造したるものに非ずして只だ小生が魂の自然の作用

活動の結果のみ。

過ぐる三日(神武祭)學生七八名と共に黒澤と申す山奥に櫻見に遠行致したる節、遂々、用放題のこしをれ左の如し御一笑を乞ふ

鶯のなくなる方をふりさけば
　木の間がくれに花の散り行く。

櫻花名もなき山に咲き出でゝ
　ゆかしさまさる　鶯のこゑ。

苔の屋を見こしに山の花さきて
　春日のどかに翁眠れり。

黒澤の　櫻已に散り居たれば
　散りにけり、いざこと問はん村人よ
　　花のさかりをいかにながめし。

此黒澤の櫻と申すは只だ二株あるのみなれども非常の老樹にして　幾百年を經過せしとも知れず。其處をすこし離れたる路傍の草むらのうち　甚だしく古びて角角碎けたる古墳四五並び居たるを小生、見て學生諸子を顧みて曰く、墳と彼の老櫻と何れが古き。諸子の曰く、勿論老櫻なるべしと。小生歸宅して此事を懐ひ一首を得たり。

櫻花なれこそ知らめ此はかに
　眠りし人の花の　盛。

別に俗歌一つ

はるの日に獨りぶら〳〵山家を訪へば
　座邊の花まで迎へがほ。

兎も角も小生は大兄の言を待つこと一日に非ず　候　若し語り得べくんば君が日下の内部のすべてを明かされたし。

歴史研究法は大兄遂に逐らざるが故に虞鳥に立寄りたる節求め　候　一讀發見する處少なからずと雖實は理論なか〳〵高尚斬新なるが故に十分解する能はず、但しこれ勿論素見一遍したるまでの故なら　候　讀の上は小生の見る處をも申上げんと存じ　候

今夏は大兄西遊すべし此事は僕眞に君にすゝむ君は東北の人なり若し君にして大阪以西に一歩を踏み來らば蓋し發見する處必ず少からずと存　候　小生今夏は多分國元にて消光浴潮せんに、大兄來らば出來る丈け面白き趣向を以て迎へ申さん　候　僕は多少失望せり　僕は愚者のみ未熟なる人生の也人生の薄弱は僕に在りては肉の如く血の如く否な殆んど心の如く僕を支配す

されど實を言へば僕は未だ吾國に僕の如き賢なる人を見る不能。恐らくは僕の眼の暗き故ならん神獨り智なり嗚呼然り神獨り支配す早々

七月十五日（二十七年）　哲夫

確堂愛兄机下

地上の生命は幻のみ靈のみ天に光あり永遠あり是れ眞理なり僕は此眞理を信ぜんとす也

中桐確太郎氏に與へしもの（其六）

刻愛なる友、君は如何にして居給ふかこれ余の問はざらんと欲しても得ざる所なりこれを去久保に尋ねたり、不知と答へぬこれを里子に尋ねたり、亦た不知らずと答へぬ。

余は本月三日の夜、國元を出立して六日も又た風景凡て美なり。君未だ鳥の美を知らざるべし松島は嘗て君を感ぜしむるに足らざりしがこれ甚だ見易き道理あること也。其道理は君が來遊の節語らん。經費は決して多きを要せず。今日より君多少用意して置いて是非都合をつけて來遊せんことをすゝむ。以上早々頓首

二十七年四月六日　哲夫拜

中桐確堂盟兄机杖

中桐確太郎氏に與へしもの（其五）

拜啓

御清健の御事と奉賀　候　小生至極壯なり御安心被下度　候

小生が愛好して措かざる夏日は今將に其絶頂に達す小生日々海水に浴し面白くく消光致し居　候　但し心中の沈鬱は少しも加ふる不能カーライル、ウォーヴウオース、テニソン等かじり讀みして僅かに友を得たる心地に暮し　候　實は語るに足る程の友、生きたる人間は居らざれば也。

「八井君に與ふ」てふ題にて筆にまかして已に三十枚程書きたるものあり、要するに、小生胸中の虹蜺を無頓着にもらしたるものに　候　大兄の如き哲學者先生にはノンセンスとして一笑を値ひするに過ぎざる可しとは知れども二枚三枚づゝ送るが故に試みに御一笑被下度　候

君は僕の親友にして知己なり、君僕を氣の毒と思ひ給へ僕は此の秋上京して又もや生活の解兒となり地上の街に迷はざるを得ず已ぬる哉地上は束縛なり俗者の蛮毒也。但し此輩の言は不信の徒の言には相違なし只だ僕は事實を言ふのみ。面白ろし面白ろし、カレージー僕は戰はん

僕と共に上京する青年佐伯に三人若しくは四人あり皆れクリスチャン也此のうちには實に氣の毒の人もあり、僕は出來る丈け此の人々の爲め盡力する積りに　候

大兄の上京は何時ぞや、上京せよ。秋までには上京せよ。東京は沙漠なり只だ友ありて暮すに堪ふ。御互も相成るべくは相接近して暮したきものに　候　僕に在りては大兄の如きは力なり情なり僕も亦大兄の力となり情となるべし友なくば此の世は暮すに不堪。人は知らず僕には然り

僕は多少失望せり　僕は愚者のみ未熟なる人生の也人生の薄弱は僕に在りては肉の如く血の如く否な殆んど心の如く僕を支配す

されど實を言へば僕は未だ吾國に僕の如き賢なる人を見る不能。恐らくは僕の眼の暗き故ならん神獨り智なり嗚呼然り神獨り支配す早々

七月十五日（二十七年）　哲夫

確堂愛兄机下

地上の生命は幻のみ影のみ天に光あり永遠あり是れ眞理なり僕は此眞理を信ぜんとす也

中桐確太郎氏に與へしもの（其六）

刻愛なる友、君は如何にして居給ふかこれ余の問はざらんと欲しても得ざる所なりこれを去久保に尋ねたり、不知と答へぬこれを里子に尋ねたり、亦た不知らずと答へぬ。

余は本月三日の夜、國元を出立して六日の夜着京致したり、途に大久保を訪うたり。本日金子來りぬ、相携へて彼の家に到りぬ。みちすがら君の事を尋ねたり。君は實に如何にして居るか。

余が上京して先づ失望したるものは君の歸郷中なる事なり。殊にひそかに何故に上京せざるかに就て吾が心を痛めぬ。余は君の心からの詳細なる手紙に接せんことを欲するや實に切なり。

余も再び都に逢ひ出でぬ、教師の職は自から退きたり。余に取りては驚かなりし俸給も自から好みてなげうちぬ。上京したり。うき世の波の荒きを知りつつも。

樂は眞友との快談なりき。手とりて、涙もて語り得る友なりき。而して其の最初の一人なる君は不レ在。

人生の不思議は余に愈々其の不思議の度をますのみ。余は樣々の圖偏に迫まられて、此の不思議の黒暗をのみ視るに至らんとす。植村、德富、かゝる人々は吾が靈魂の力を添へ得る人としも不覺。

余の爲すべきは何ぞ。余は筆の力によ

りて、天に泣かんことを願す。されど余が、根柢の大信念は一日もゆるぐことなし。備に余をさゝへぬ。

余は小説を書くべきか、詩を作るべきか、馬にのりて人を殺すべきか、講壇に立ちて演呼すべきか。

只だ尤も自然に生活せんと思ふ也。

余は有體に言へば恆産ありて山林に一良民として過し得れば足るが如し。余に恆産なし、故に生活の方法にあこがれ逢ふ。人間は蜂よりも憐れむべきが如く見ゆ。

友なる哉。苦るしき生活のうちの樂みは友の愛なる哉。余は無人の愛をのぞむ。

これ余にとりて恐らくは目下唯一の救世主ならん。されど、これ余には出來可からざる處也。友愛は余が特權なりと信ず。故に君の上京を待つ。來狀を待つ。

自然の山河の美、夕陽の美、草木の美は余より遠ざかりたるが如し。都會は山林の生活を憾せしむ。早々

九月十日（二十七年）

哲夫

中桐確堂愛兄座右

鯛島榮川氏に與へしもの

拝啓

貴著病感錄を讀み得たる幸福を謝する爲め敢へて此書を呈し且つ拙著獨歩集一冊を座右に獻じ候

獨歩集中「牛肉と馬鈴薯」と題する一篇は貴下に一讀の榮を賜はらんことを願ふものに候。小生の作物につき諸友の批評紛々たりと雖も未だ彼の一篇につきては何人も小生の意を得たる批評を與へられしものなし蓋し心の經驗の異なるが故かと存候然るに貴下の高著中篇いと宗教の一篇こそ實に小生が心靈の經驗と符合するやに愚考仕り候間午失禮御一讀を煩し度く願ふ次第に御座候

貴著に巻き所感少からず候へ共未だ拜肩の榮を得ざる未知の人として多言するも禮なしと存じさし控へ候切に唐突の言說を許し玉はんことを謹言

十月十九日（三十八年）

國木田獨歩生

因に申し上げ候小生は金子馬治中桐確太郎等の諸氏と同窓に御座候

「牛肉と馬鈴薯」は四五年前の作にて、大阪の小天地と申す雜誌に出したるものに候

著作年表

標題		掲載書目	發表年月
愛弟通信		國民新聞	二七年一〇月
星忘れえぬ人々		國民之友	一九年一一月
獨歩吟		國民之友	三〇年二月
源をぢ		「抒情詩」の内	三〇年二月
火		文藝倶樂部	三〇年五月
たきび		國民之友	三〇年一一月
おとづれ		國民之友	三〇年一二月
菊		家庭雜誌	三一年一月
野の武藏野		國民之友	三一年一月
今の武藏野		「山高水長」の内	三一年一月
第二獨歩吟			三一年三月
絲くづ			三一年四月
詩想			三一年五月
まぼろし		國民之友	三一年六月
死			三一年八月
鹿狩			三一年八月
河霧		文藝倶樂部	三一年八月
わかれ		太陽	三一年一〇月
郊外		同	三一年一〇月
小春			三三年一〇月
鉛土			三三年一一月
武藏野			三三年一二月
歸去來		單行本	三四年三月
獨語（後の「欺かざるの記」）		新小説	三四年五月
牛肉と馬鈴薯		明星	三四年九、10、二月
		小天地	三四年一一月
巡査		小天地	三五年二月
鎌倉日記		明星	三五年三月
非凡人		小天地	三五年六月
少年の悲哀		同	三五年八月
畫の悲み		青年界	三五年一〇月
鎌倉夫人		太平洋	三五年一〇月
酒中日記		文藝界	三五年一一月
指環の物語		婦人界	三五年一一月
園遊會		園遊會	三五年一一月
神子太平洋		園遊會	三五年一二月
運命論者		山比古	三五年一二月
從軍記者		軍事界	三六年一月
日出の教育		教育界	三六年一月
非凡なる凡人		中學世界	三六年三月
惡魔		文藝界	三六年五月
馬上の女		青年界	三六年五月
第三者		文藝倶樂部	三六年一〇月
西寺侯陶庵隨筆		單行本	三六年一〇月
女難		文藝倶樂部	三六年一二月
一家内の珍聞		婦人界	三七年一月
決闘		文藝倶樂部	三七年一月
愛國者		戰爭文學	三七年五月
夫婦		太陽	三七年七月
獨歩集		單行本	三八年七月
田舍教師		新古文林	三九年三月
運命		單行本	三九年四月
岡本の手紙		中央公論	三九年六月
あの時分		早稲田文學	三九年六月
號外		新古文林	三九年八月

入郷記	中央公論	三九年一〇月
武蔵野（集録）	新古文林	三九年一〇月
波の香	文章世界	四〇年一月
戀を戀する人	中央公論	四〇年一月
泣き笑ひ	新古文林	四〇年三月
彼	青年	四〇年四月
濤	單行本	四〇年五月
疲勞	趣味	四〇年六月
都の友へ、B生より	同	四〇年七月
窮死	文藝倶樂部	四〇年七月
暴風（未完）	日本新聞	四〇年八月
都の友へ、S生より	中央公論	四〇年八月
節操	太陽	四〇年九月
渚	文章世界	四〇年一二月
竹の木戸	中央公論	四一年一月
二人老	文章世界	四一年一月
驟雨	趣味	四一年八月
無窮	同	四一年八月
空知川の岸邊	不詳	
春鳥	同	
遺言	同	
初孫	同	
湯ヶ原より	同	
正直者	同	
富岡先生	同	
二少女	同	
別嬪子	同	
初地天	同	
湯ヶ原ゆき	同	
貶の侮辱	同	
山の力	同	
親子	同	
獨歩集第二	單行本	四一年八月
欺かざるの記	同	四一年一〇月
獨歩全集前	同	四三年六月
獨歩全集後	同	四三年八月
渚	同	四三年九月
獨歩遺文	同	四四年一〇月

以上の外、明治三十年前後に「少年傳記叢書」の内、「フランクリンの少壯時代」「兩ケート」「リンコルン」「ネルソン」（二冊）「ウェリントン」「吉田松陰文」「讃井小梅文」等がある。又、大正期に入つて幾多の書販の改竄本あり、「獨歩書翰」「戀愛日記」「病牀録」等もあつたことを附記して置く。（S）

昭和六年二月二十三日印刷
昭和六年二月二十八日發行

現代日本文學全集　第十五篇

著者　國木田獨歩

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

版權所有

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
振替東京八四〇二番
電話芝（四三）一一一一番
二二一一番
二三二一番
四三二一番

株式會社秀英舍印刷

918.6
G349
(9)

落